宮丸遺跡・村井北遺跡・北出遺跡
村井キヒダ遺跡・米永古屋敷遺跡

県営ほ場整備事業松任市一木地区
関係埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

石川県立埋蔵文化財センター

宮丸遺跡・村井北遺跡・北出遺跡
村井キヒダ遺跡・米永古屋敷遺跡

1991

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は石川県松任市に所在する宮丸遺跡・村井北遺跡・村井キヒダ遺跡・米永古屋敷遺跡・北出遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．これらの遺跡の発掘調査は、県農林水産部耕地整備課施行の県営ほ場整備事業一木地区に関係して同課の依頼により県立埋蔵文化財センターが事前の発掘調査を実施したものである。事前協議および調査の実施に際して、県耕地整備課、県松任土地改良事務所、地元工区長などから協力を得た。感謝したい。

3．遺跡の発掘調査は、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の保存に影響が生じる工事箇所に限定してその対象とした。排水路設置箇所、幹線用水路設置箇所および舗装を前提とした幹線農道を対象としたが、田面部に存在する遺跡については、県立埋蔵文化財センターが実施した事前の分布調査結果をもとに盛土工法の措置をとって水田下に現状での保存をはかっている。

4．各遺跡の調査期間、面積および担当者は次の通りである。

宮丸遺跡　昭和62年5月19日～同年7月27日　1,410㎡　三浦純夫、湯尻修平

村井北遺跡　昭和63年5月18日～同年7月13日　420㎡　鳥越　浩

村井キヒダ遺跡　平成元年5月1～同年10月13日　1,180㎡　鳥越　浩

米永古屋敷遺跡・北出遺跡　平成元年7月6日～同年10月6日　1,570㎡　鳥越　浩

5．各遺跡の発掘調査費および出土遺物整理、報告書刊行にかかる費用は、県教育委員会・県立埋蔵文化財センターとの協議にもとづく県耕地整備課の費用負担と文化庁の補助金により、県立埋蔵文化財センターが実施した。

6．事前協議および調査の実施に際しては、県耕地整備課、県松任土地改良事務所、地元各工区長はもとより、各地元民から協力を得た。感謝したい。また、広岡吉紀氏には発掘調査、資料整理の作業にあたり、多大な協力を得ている。

7．出土遺物の整理作業は、平成2年度にセンターが社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。

8．本書の編集は川畑　誠が担当し、次のように分担して執筆した。本書の作成にあたり県立飯田高校教諭鳥越　浩氏には多大な協力を得た。

第1章　小坂　大、第2・3章　湯尻修平、第4章　浜崎悟司、第5章　川畑、
第6章　川畑、安　英樹、第7章第1節　安、第2節　川畑

9．本書の遺構等の挿図の方位は第2章のみは磁北で表示し、他章は真北で表示してある。水平基準は海抜高で表示してある。また、分担執筆のため用語等の統一は図っていない。

目　次

第１章　位置と環境……（小坂　大）　1
　第１節　地理的環境……　1
　第２節　歴史的環境……　1
第２章　調査に至る経緯と経過 ……（湯尻修平）　5
　第１節　調査に至る経緯……　5
　第２節　宮丸遺跡……　5
　第３節　村井北遺跡……　6
　第４節　村井キヒダ遺跡……　7
　第５節　北出遺跡・米永古屋敷遺跡……　8
第３章　宮丸遺跡……（湯尻）　9
　第１節　調査区の設定と概要……　9
　第２節　出土遺物……　18
第４章　村井北遺跡……（浜崎悟司）　31
　第１節　調査区と遺構……　31
　第２節　出土遺物……　44
　第３節　小結……　44
第５章　村井キヒダ遺跡 ……（川畑　誠）　45
　第１節　周辺の環境と調査概要……　45
　第２節　遺構……　47
　第３節　出土遺物……　57
　第４節　小結……　67
第６章　北出遺跡・米永古屋敷遺跡……（川畑、安　英樹）　70
　第１節　調査の概要 ……（川畑）　70
　第２節　北出遺跡　遺構・遺物 ……（川畑、安）　73
　第３節　米永古屋敷遺跡　遺構……（川畑）　93
　第４節　米永古屋敷遺跡　遺物……　107
　第５節　小結……　125
第７章　まとめにかえて ……（安、川畑）　126
　第１節　北出遺跡の古墳時代初頭の土器について ……（安）　126
　第２節　米永古屋敷遺跡の土器組成 ……（川畑）　131

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境

県下最大規模でその源を霊峰白山に発する手取川は、山間を抜けて鶴来より扇径約 12 km の手取川扇状地を形成する。手取川扇状地は、扇頂を鶴来町あたりの標高約 90 m地点におき、北西方向に 110°開き、扇端を日本海に接する。扇状地内には松任市を中心とする１市７町を含む。今回報告する遺跡は、近世以降の呼び名で一木（いつき）村と呼ばれる地域で現在の松任市米永町・宮丸町・村井町に位置する。この辺りは手取川扇状地の扇央部であり、扇頂で伏流水となった水が湧き出す湧水帯である。

手取川扇状地を形成する手取川は、集水地帯が貯水力に乏しく古来から暴れ川であった。手取川は南遷してきたと考えられており、七ケ用水は南遷した手取川の河道を示すと言われている。[1]

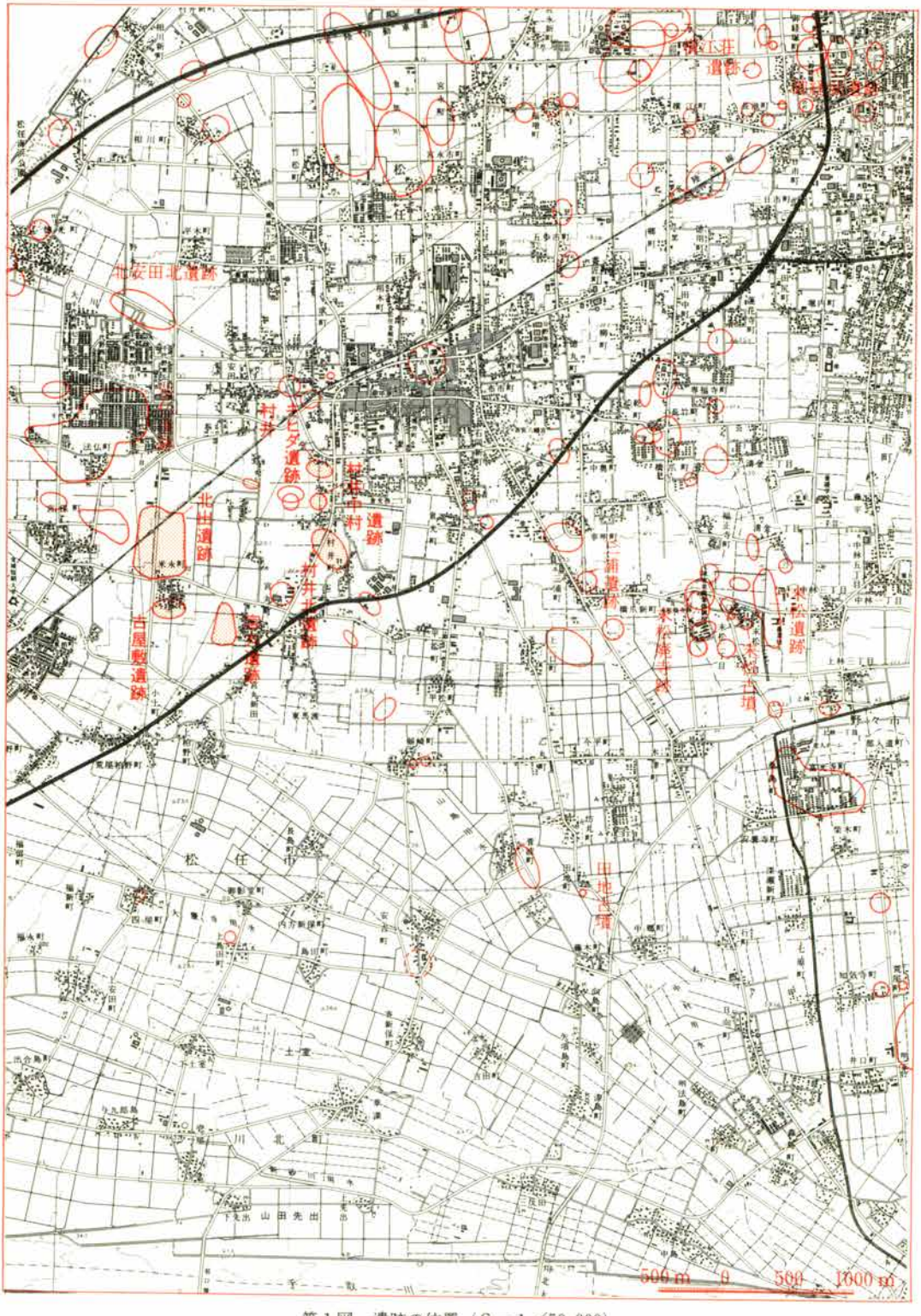
南遷してきた手取川の流路の歴史を辿って見ることにする。まず、弥生～古墳時代においては「古手取川」と呼ばれ、現在の手取川の流路とほぼ同じであると考えられる。古墳～平安時代は「比楽河（ひらかわ）」と呼ばれる鶴来駅と徳光町を結ぶライン、つまり扇央稜線のあたりを流れていたと考えられる。平安～鎌倉時代頃には、少し南側の「大行事（だいぎょうじ）川」（大慶事川）が手取川の本流であったと考えられている。南北朝、室町前期頃から、北川（中島用水）を流れ下流で比良瀬川となり、徐々に比良瀬川が本流となる。戦国期は、さらに南へ分流して行き、中期以降は「北川」「今湊川」（古手取川）を本流とする。「今湊川」は別名「南川」と呼ばれ、南北二流を成していた時代は藩政前期頃まで続く。そして流れは徐々に「南川」へ主流を移して行く。これが現在の「手取川」である。現在の流路に落ち着くのは、寛文～天和年間頃である。[2]

このように南遷を続けてきた手取川によって、扇状地上に川の土砂が推積してできた帆立貝の甲殻状の細長い微高地地形＝「島（しま）」を形成する。手取川扇状地上に古来より存在する集落は、「島」地形上に数軒程度のグループが散在する散村的形態を示していたようである。[3] 現在の宮丸、村井、米永町からなる旧一木村は、「島」としてのまとまりを不鮮明ながら残している。[4]

第２節　歴史的環境

現在は早場米の産地として穀倉地帯である手取川扇状地の歴史は「暴れ川」であった手取川に非常に影響されてきた。浅香年木氏は、現在のような穀倉地帯の景観ができあがるのは中世も末期のことであり、平安時代から中世にかけて扇状地の大部分は、未開の原野、氾濫による荒廃田、耕作力の不足による休耕地によって占められていたとしている。[5]

手取川扇状地の歴史を遺跡の分布によって辿って見る。手取川扇状地において遺跡の分布は、中世以降の時代を除くと扇央稜線よりほぼ北側に限られる。



第1図　遺跡の位置（S＝1／50,000）

縄文時代は前期頃まで気候が温暖で汀線が内陸に入り込んでおり、海水面は現海水準により約2～6m高かったらしい。縄文時代中期以降、海岸線は現汀線以下に降下する。[6] 遺跡も後晩期のものが多く発見されている。遺跡は、やや川の流れが安定している扇状地の北東側に広範囲で分布している。具体例をあげると扇端では、縄文時代晩期における標式土器が出土した中屋遺跡、巨大環状木柱列を検出した新保本町チカモリ遺跡、御経塚遺跡が立地している。また扇央では、橋爪、乾、長滝、末松遺跡等が立地している。弥生時代に入ると、遺跡は扇状地一帯に分散している。縄文時代と大きく異なる点は農耕をするため水利を考え扇央の湧水の自噴地帯から扇端にかけて主に集落遺跡が存在している。一木村周辺では、弥生時代後期の標式土器である法仏式土器を出土した法仏遺跡が北西に立地している。法仏遺跡では現在までに、弥生時代後期の竪穴式住居址15棟、奈良・平安時代の竪穴住居址61棟、掘立柱建物が87棟検出されている。また、法仏遺跡のさらに北側には北安田北遺跡が立地しており、弥生時代、古墳時代後期から奈良・平安時代の竪穴住居址、掘立柱建物跡を検出している。弥生時代後期から古墳時代初期にかけては、遺跡が扇状地上に多く散在し集落を検出した例も多いことから、この頃に扇状地開発の一つの画期があると考えうる。

次に古墳の立地を見ると、実体は不明瞭であるが扇央部に円墳の末松古墳、河原石積横穴式石室を持った田地古墳が存在している。氾濫原で開発が難しいと考えられていた手取川扇状地の扇央部に立地している意味でかなり異質的な存在である。

手取川扇状地において末松廃寺周辺の遺跡密度の濃さはかなり意味合いがあると考えられている。浅香氏は扇状地において本格的な人口灌漑を伴った面的開発が開始されたのは郡領層の在地領主の力と国衛の力によると仮定し、豪族で後に在地領主になる林氏の本領が『和名類聚抄』[7]にいう加賀の国の拝師郷、つまり現在の石川郡野々市町の上林・中林・下林のあたりにあると推定している。末松廃寺跡も8世紀の群領クラスの私寺であったと推測されている。『和名類聚抄』によると、弘仁十四年（823年）の加賀国立国当時の石川郡内では、中村・富樫・掠部（くらべ）・三馬・拝師・井手・味知の八郷に分かれていた。本調査地が含まれる一木地域は、現在の村井町に「中村」という字名が現存していることから中村郷と考えられている。村井町の東方に位置する三浦遺跡では、平安時代前期～中期を主体とした遺構を検出し、掘立柱建物とそれに平行する人工的な灌漑施設と考えられる溝、鍛治生産の痕跡が発見されており扇央から扇頂に向かっての開発において注目すべき遺跡である。[8] また桓式天皇の皇女である朝原内親王の賜田として8世紀末頃に成立した横江荘は、弘仁9年（818年）に東大寺に施入され東大寺領となる。横江荘遺跡の北東方向に近接して位置している上荒屋遺跡では、松任市の調査で明らかとなった横江荘遺跡倉庫群と同じ時期の掘立柱建物等の遺構を検出している。注目すべきことは、「東庄」「西庄」「北庄」「南庄」と書かれた墨書土器が出土しており、中でも「東庄」「庄」と書かれたものが大部分を占めていることから、東大寺領横江荘の一部の「東庄（東庄家）」である可能性が高い。東庄家及び付属棟は、条里制に則して方一町（約109m）四方内に立っている。[9] 扇状地のこの頃の開発を裏づける意味において重要な遺跡である。その他、手取川扇状地において条里制施行の痕跡は、『和名類聚抄』にいう中村・拝師郷に相当する野々市町上林、鶴来町荒屋付近、松任市三浦地内において部分的

に確認されている。[8] 村井町の中にも「一丁坪」と呼ばれる小字名が残っており、条里制に関するものではないかと考えられている。[10] 開発が困難な手取川扇状地で全面的ではないものの部分的に計画に則した条里制の施行による開発がされたことは、扇状地開発における一つの転機である。

平安時代の後半期になると貴族の支配圏が縮小し、社会的状況から在地領主が地主的な権利を自衛・拡張するため同族的な武力組織へと強化していった。その中で、在地領主が小武士団と同じような成長を遂げた白山宮検校職（神主職）重代の上道（かみつみち）氏も免田、社領において重要な意味合いを持ってくる。上道氏は、その本拠を宮保におき、[11] 笠間・粕野・米丸・宮丸に開発を進める分派をおいた。宮丸協の中に「免田（めんてん）」という小字名が現存しているが、おそらく白山宮へ燈油用菜種を納めた後に作る米に税がかけられなかった田として「免田」という字名が後世に伝わったと思われる。

中世に入ると、10世紀より200年余続いた上道氏の分派の米永氏の宮丸・粕野の荘園支配も、社会的状況の変化より嘉禄三年（1227年）その職を大桑撫岐に譲った。米永には「館」という字名が残っているが、上道氏の分派の米永太郎氏澄館ではないかと考えられている。

その後の時代では村井町に村井備中守館跡とされる場所があり、村井神九郎の子として生まれた備中守が住んでいたと伝わるが、詳細なことはわかっていない。

以上、歴史的環境を時代ごとに見て来たが、手取川扇状地の開発は氾濫原であるという地形的要因が歴史に大きく影響してきたと言える。現在でも集落の立地は、微高地地形上に数軒の家がかたまって扇状地上に散在している景観が残っており、地理学的見地から見ても特異なケースである。今後、手取川扇状地の扇央部分など不明瞭な部分の開発について研究がされることを期待したい。

註

（1）　『七ケ用水誌―下巻』1981　手取川七ケ用水土地改良区
（2）　『川北村誌』1970
（3）　木田　清『松任市中村ゴウデン遺跡』1989　松任市教育委員会
（4）　木田　清『松任市源波遺跡』1990　松任教育委員会
（5）　浅香年木『百万石の光と影―新しい地域史と構築』1988　能登印刷出版
（6）　藤　則雄「北陸における新石器時代の海水面変動と気候変化」『石川考古学研究会々誌』第26号1983
（7）　『和名類聚抄』承年年間（931～937年）に書かれる。
（8）　『三浦遺跡の研究』1967　石川考古学研究会
（9）　「上荒屋跡発掘調査中間報告」1990　金沢市教育委員会
（10）　『石川県一木村誌』1975　一木村誌編纂委員会
（11）　10世紀頃に至るまで、註（10）文献より。

第２章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

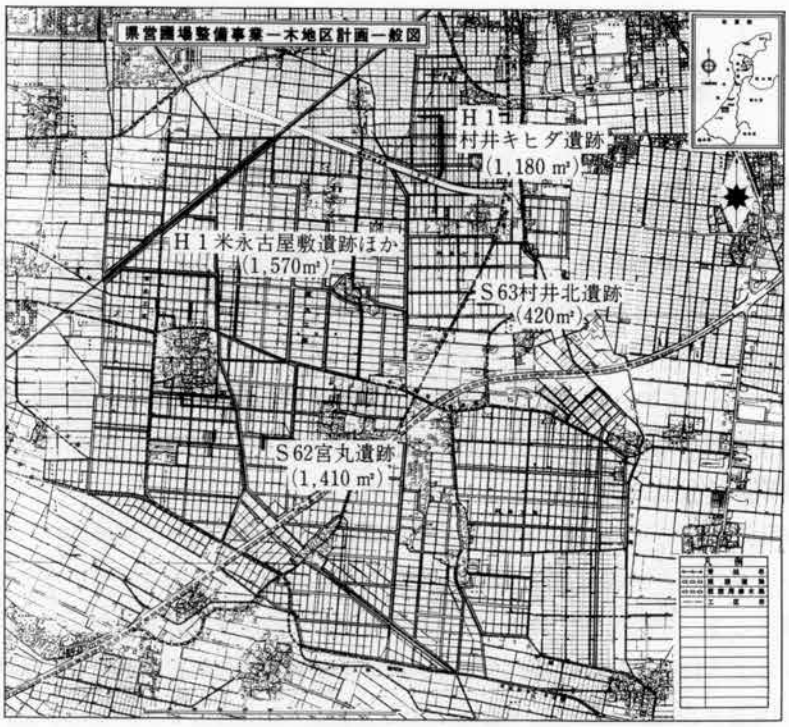
県営は場整備事業一木地区は、松任市域の中央部からやや南に下がった旧石川郡一木村のうち受益面積243ha を対象として計画策定がなされた。事業の主管は県農林水産部耕地整備課であり、担当は県松任土地改良事務所である。事業の要旨はそれまでの水田は大正年代に整備された６～８ａの区画であったものを、一筆30a に大型化し用排水路を分離し、農道を整備して農地の集団化をはかり大型機械の導入により労力の節減をはかるとともに農業経営の近代化を行うことにあった。工事期間は昭和59年度から平成２年度である。

県立埋蔵文化財センターは、県内の県営ほ場整備事業と埋蔵文化財の保護について分布調査の結果に基づいて事業課と協議を進め、遺跡が所在する区域では基本的に田面を盛土施工として遺跡の保護措置をとり、やむを得ず影響を受ける排水路部分等に限って原則として２ｍの幅で発掘調査を実施するように対応してきた。一木地区のほ場整備事業も昭和62年度からは周知の遺跡が多く所在する国道８号線から北西側の地域に事業が進捗することになり、それまで村井や西馬渡地内などでとられた田面盛土施工だけではなく、排水路等にかかる事前の発掘調査が必要になってきた結果、本書に報告する各遺跡の発掘調査を実施した。

第２節　宮丸遺跡

昭和62年度に事業計画がたてられた宮丸工区では、昭和30年代に行われた用水改修の際に遺物の出土によって遺跡の存在が明らかとなった「宮丸遺跡」が知られていた。昭和49年版石川県遺跡地図によれば、宮丸遺跡は通称中屋敷と呼ばれるところにある平安時代の遺跡で、中世の「岡本四位館跡」と複合してあると記されている。県立埋蔵文化センターでは昭和61年の秋に分布調査を実施し、遺跡の状況と範囲を推定する資料を作成した。調査の所見では、宮丸遺跡は宮丸集落の西に位置する遺存状態の良好な奈良・平安時代の集落遺跡であると推定された。分布調査の結果をもとに県松任土地改良事務所と協議を進め、田面は盛土施工をとり、排水路・幹線用水路および幹線農道など全体で1,410㎡を対象に事前の発掘調査を実施することになった。以下に調査経過概要を記しておく。

昭和62年５月19日	調査に着手。現場事務所設置。重機による調査区の表土除去作業。
５月21日～５月28日	水路Ｉ調査区１～４区を人力により遺物包含層の発掘。遺構面が２面あることが判明したため、上層の発掘・記録作成作業を行う。29日からは下層の調査を行う。
６月４日～６月12日	水路Ｉ調査区５～10区の調査を行い、12日に県松任土地改良事務所、地元工区長、施工業者と打ち合せ。水路の構造が変更となり遺跡に影響を及ぼすことになったため、合わせて調査を追加することになった。



第2図　県営ほ場整備事業関係埋蔵文化財調査位置図

6月18日～6月24日	水路II、道路予定地の麦刈りが終了したので、調査再開。重機で表土除去し、水路Iに並走する水路部分の調査を行う。水路I調査区全体の幅は4mとなる。
6月18日～6月25日	水路Iの調査の間に適宜、水路II調査区の発掘・遺構検出作業を行う。柱穴と推定される穴など密度は高い。
6月26日～6月30日	道路調査区の排土に着手。発掘作業と並行して実測、写真撮影などの作業を継続する。
7月1日～7月9日	水路Iの下層包含層を掘り下げ、遺構発掘、記録作成作業を行う。
7月10日～7月13日	本格的に道路調査区の調査を進める。遺構検出の結果、掘立柱建物3棟と竪穴住居跡1棟検出。11日には竪穴の横にある小穴から銅銭9枚出土。和同開珎、神功開宝の文字が読める。
7月14日～7月18日	遺構の発掘と合わせ実測作業を進める。銅銭は10数枚となる。
7月21日～7月23日	実測など記録作成を行い、各調査区立ち割りを行う。
7月27日	機材撤収、事務所解体作業を行い、調査を完了する。

第3節　村井北遺跡

村井北遺跡は、松任市村井町樋爪の北西に位置する平安時代から中世に至る集落遺跡で、昭和62年度に実施した分布調査によってその広がりが明らかとなった遺跡である。県道三日市・松任

線と樋爪町に挟まれた水田一帯が遺跡の所在地であり、分布調査の結果をもとに県松任土地改良事務所と協議を進めて田面は盛土工法とし、遺跡が影響を受ける排水路の予定箇所約420m²を発掘調査の対象とした。以下に調査経過概要を記しておく。

昭和63年５月18日	調査予定地の確認。現場での打ち合せ。
５月24日～５月26日	現場事務所設置。調査機材の搬入等の準備作業。重機による調査区の表土除去作業。調査の設定。
６月６日～６月20日	第１トレンチ（１～10区）の発掘・遺構検出作業。
６月21日～６月23日	第２トレンチの発掘・遺構検出作業。
６月28日～７月１日	第３・４・５トレンチの発掘・遺構検出作業。
７月５日～７月13日	第２トレンチの拡幅作業および実測、写真撮影等記録作業。 第１・３・４・５トレンチの実測、写真撮影等記録作成作業。

第４節　村井キヒダ遺跡

村井キヒダ遺跡は、松任市村井町中村の北西に位置する中世の火葬場で、調査当初は近接する村井備中守館跡に関係する遺跡としてとらえられた遺跡である。本報告書をまとめるにあたり、資料や遺物整理を進めたところ、遺跡の性格が火葬場であってその分布範囲が狭く限定できること、調査箇所が村井備中守館跡と推定されている場所から離れていたこともあって、これが備中守館跡とは別の遺跡であると見る方が妥当であるという結論に至った。本書では『石川県一木村誌』にある字名をとり、村井キヒダ遺跡として報告することとしたい。遺跡の中心は村井町中村の北を通る都市計画道路に近接しているが、そこまでは広がっていない。発掘調査は排水路予定箇所1,180m²を対象に実施していたが、遺跡は調査区の南側（中村集落より）に限定される。以下に調査経過概要を記しておく。

平成元年５月１日	調査機材の調達、梱包等準備。
５月２日～５月６日	現場事務所設置。調査機材の搬入等の準備作業。重機による調査区の表土除去作業。100mを一区画とする調査区の設定。
５月２日～５月31日	１・２調査区の遺物包含層発掘、遺構検出作業。実測・写真撮影等の記録作成作業を継続して実施。
６月１日～６月７日	１・２調査区の記録作成作業と並行して３調査区の発掘作業を進める。
６月９日～６月14日	４調査区の表土除去、発掘作業開始。２・３調査区の遺構を発掘し、実測等の作業を行う。
６月15日～６月22日	３～６調査区の発掘・記録作成作業を行う。
６月23日～７月３日	７～10調査区の発掘・記録作成作業を行う。６月28日に県松任土地改良事務所担当者と発掘調査の進行状況、成果等について打ち合せ。
７月４日～７月５日	記録資料の整理、機材等の整理を行い現場作業完了。
10月９日～10月13日	米永古屋敷遺跡の調査完了後、工事の関係で遅れていた11調査区の調査を実施する。

第5節　北出遺跡・米永古屋敷遺跡

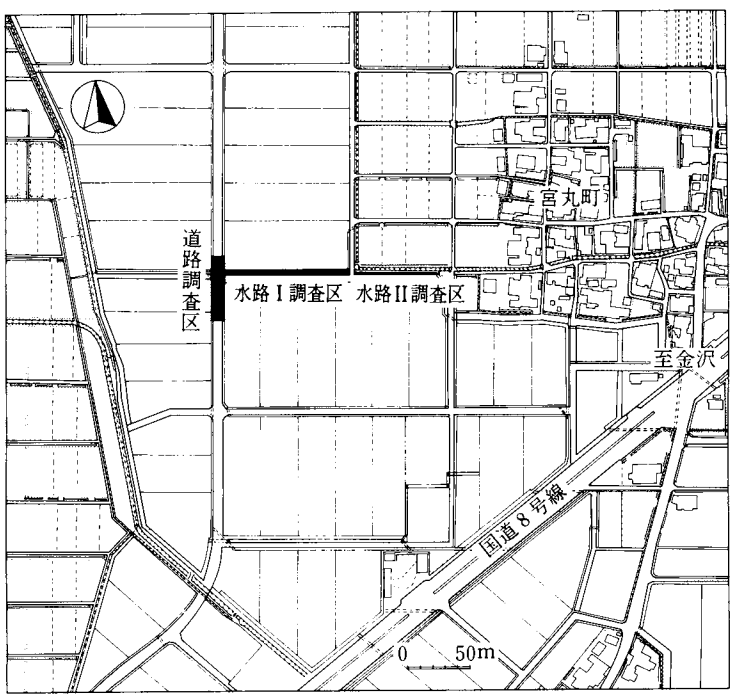
平成元年度に事業計画があてられた米永工区では、米永集落の北側に「北出遺跡」、南側に「米永古屋敷遺跡」と「高山遺跡」所在が知られていた。これらの遺跡は県教育委員会が昭和49年に作成した『石川県遺跡地図』に掲載されているから、昭和40年代後半には遺跡の所在が明らかになっていたようである。北出遺跡は通称城の後に所在する平安時代と中世の遺跡であると記され、米永古屋敷遺跡は通称古屋敷で平安時代の須恵器の甕が単独で出土したとあり、隣接する高山遺跡も平安時代の遺跡であると記されている。県立埋蔵文化財センターでは昭和63年の秋に分布調査を実施し、遺跡の状況と範囲推定する資料を作成した。調査の所見では出土遺物から、北出遺跡は米永集落の北から現集落に重複して存在する古墳時代前期と中世の集落遺跡であり、米永古屋敷遺跡は古墳時代後期～奈良時代の集落遺跡であると判断された。特に米永古屋敷遺跡は遺存状態が良好な遺跡で、遺跡地図の高山遺跡とは一体の遺跡として扱うことが妥当である。排水路予定地を対象に発掘調査を実施したが、北出遺跡では6箇所の排水路を1～6調査区とし、米永古屋敷遺跡では7調査区を設定し、全体で約1,570㎡の発掘調査を実施した。以下に調査経過概要を記しておく。

平成元年7月6日～8日	現場事務所設置。調査機材の搬入等の準備作業。重機による調査区の表土除去作業（北出遺跡1～5区）。
7月9日～7月18日	北出遺跡1～3区の発掘作業。100mを1区画とする調査区の設定。
7月19日～7月21日	北出遺跡1～3区の遺構発掘、実測作業。
7月24日～8月8日	北出遺跡5区の遺構検出・発掘作業。遺構の密度が高く遺物の出土量も多い。古墳時代前期の遺構検出作業に時間がかかる。
8月9日～8月22日	北出遺跡4・6区の表土除去。遺構検出・発掘作業。5区の遺構発掘、実測作業を行う。
8月23日～8月30日	米永古屋敷遺跡7区表土除去、遺構検出作業。並行して北出遺跡5区の精査、実測・写真撮影等の記録作成作業を行う。
8月31日～9月13日	米永古屋敷遺跡7区遺構検出作業を進める。遺構の密度は高く、しかも錯綜した状態にある。調査区内を10m単位の区画に区切り1～3トレンチの遺物包含層を掘り下げる。須恵器・土師器等の遺物量も多い。
9月14日～9月22日	米永古屋敷遺跡7区4トレンチの発掘・遺構検出作業を進め、土坑や竪穴住居跡などを発掘する。
9月25日～10月2日	米永古屋敷遺跡7区1～3トレンチの遺構の掘り下げと実測・写真撮影の記録作成を行う。
10月3日～10月6日	米永古屋敷遺跡7区3～6トレンチの遺構を掘り下げと実測・写真撮影を行う。記録作成作業を完了し、現地からの撤収作業を行い全ての発掘作業を完了する。

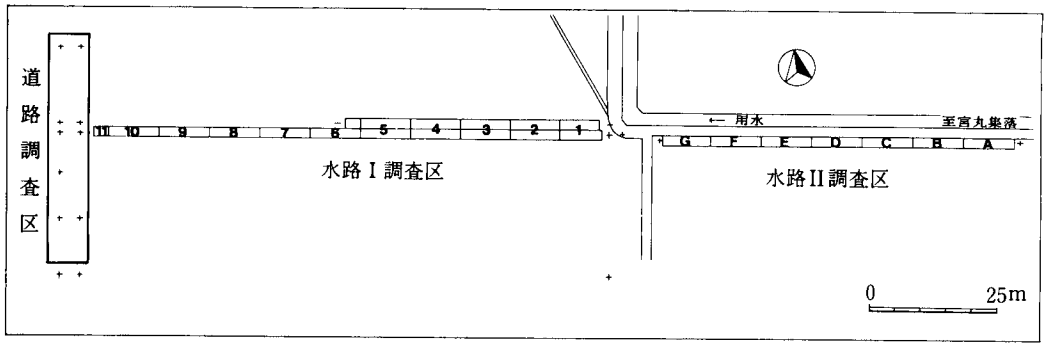
第３章　宮丸遺跡

第１節　調査区の設定と概要

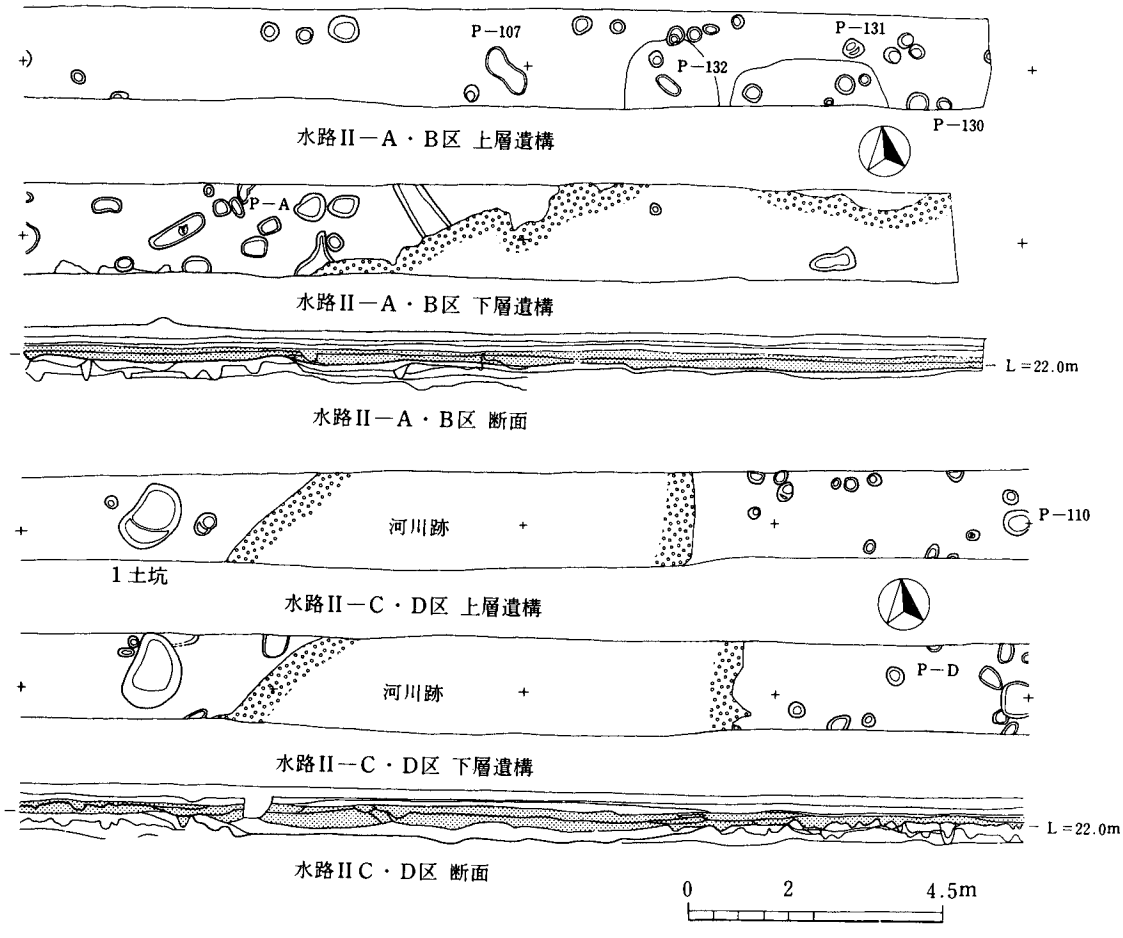
宮丸遺跡は平安時代前期頃と奈良時代後期頃それに弥生時代終末期の集落遺跡である。但し、これらの遺跡は少しづつずれて重複しながら存在しており、どの調査区でも全ての時代の遺構・遺物が確認されたわけではない。水路Ｉの５区より西側や道路調査区の北側では河川の影響や凹地であったためか遺跡の分布は希薄であった。調査区の設定は、排水路に伴う水路Ｉ（幅４ｍ×延長約105m）と水路II（幅２ｍ×延長約70m）それに幹線農道建設に伴う道路調査区（幅８ｍ×延長約30m）とした。水路II調査区は宮丸集落の東に東西方向に設置される排水路にかかる調査区で、東端は農道を挟んで水路Ｉにつながる。水路II調査区の層序は、①18cm 前後の耕作土、②約10cm の黄色砂質粘土、③灰色砂質粘土、④鉄分の沈着層、⑥黒褐色砂質粘土――上層遺物包含層、⑦灰褐色砂質粘土――下層遺物包含層、⑧黄灰色砂質粘土（地山）となっており、土質が異なる③と④層の間には厚い鉄分の沈着層が認められた。第５・６図にスクリントーンで示した上層は、出土遺物から平安時代前期の遺物包含層であり、その下で地山の上に堆積した下層は奈良時代後期の遺物を主体とした層である。地表面から40cm で上層遺物包含層、60cm の深さ、標高22mあたりで下層包含層の上面となっている。下層包含層上面は上層の遺構検出面でもあり、遺



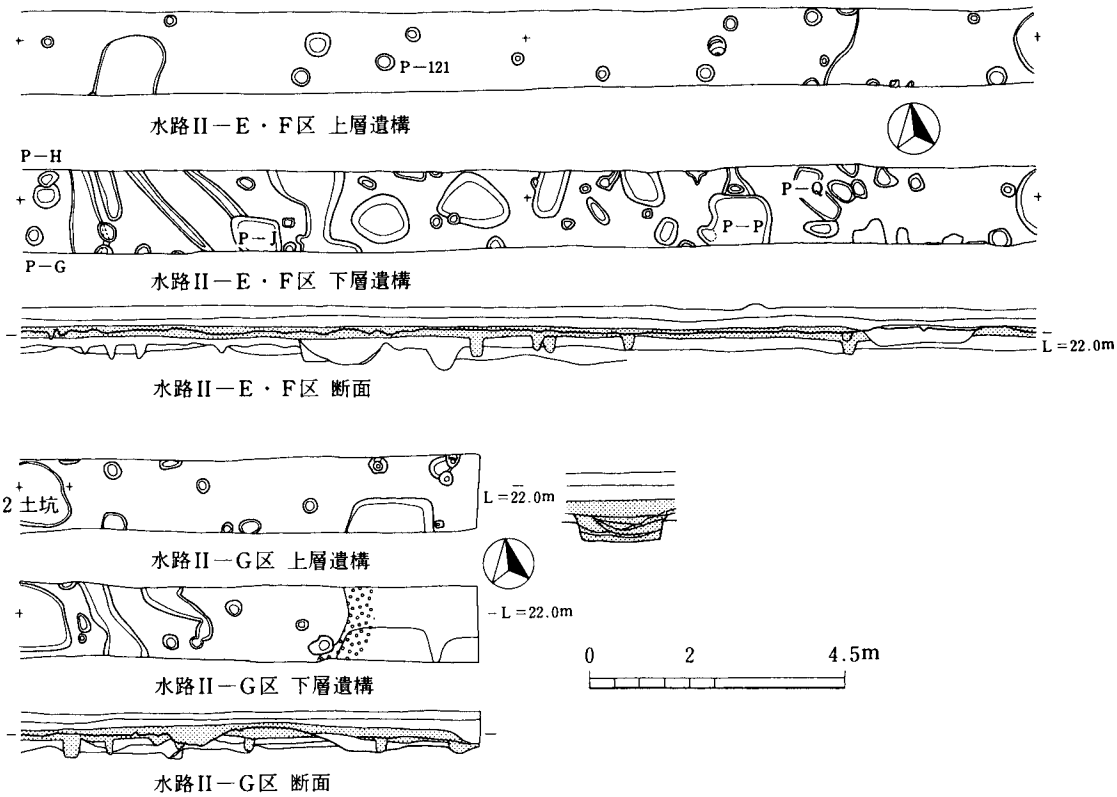
第３図　宮丸遺跡調査位置図



第4図　宮丸遺跡水路調査区区割り図



第5図　宮丸遺跡水路Ⅱ遺構実測図1



第6図　宮丸遺跡水路II遺構実測図2

構の確認は難しいところがあった。

水路II調査区の設定は、宮丸集落の西端から東へ全長70mとし、10m単位に区切って西から東へA～G区とした(第5図参照)。水路II調査区の北側を東西に流れる用水は、七カ用水の一つである中村用水の支線で、昭和30年代に行われた改修工事の際に土器が出土して宮丸遺跡の存在が明らかになったといわれている。水路IIの遺構の分布はE・F区に高く、これは東の水路I調査区へと続いている。上下の遺構面での識別は河川の攪乱により困難な部分もあったが、上層より先行する下層のほうが遺構の密度が高いように思われた。上、下層ともに、柱穴とみられる直径20～30cmのピット群と1m内外の規模をもつ不整形な楕円を呈したり、方形のプランをなす土坑群が高い密度で存在している。しかし、幅2mという調査区域の制約から土坑や掘立柱建物の柱穴を含むと推定されるピット群も、その全形や構成を把握するに至っていない。上下の層遺物包含層を切る河川跡と、下層のみを切る河川の痕跡が確認されたが、水路II−A・B区にあるような前者の河川跡では、上層遺物包含層およびそれ以降の堆積層から溶出した鉄分の沈着が厚く認められた。

水路I調査区の状況も水路II調査区と同様な土層堆積状況を示す。水路I 1～6区辺りまでは高い遺構分布密度を示すが、6区東半から西では急激に遺構の分布状況が減少し、7区から西では遺物包含層すら確認できなくなっている。7区から西、道路調査区までの約50mの間の堆積層は灰褐色粘土層となって、おそらく中世以降の河川の氾濫によって遺跡そのものが失われてし

まった箇所であると推定された。水路Ⅰ調査区の層序は、①18cm 前後の耕作土、②約10cm の黄色砂質粘土、③黒褐色砂質粘土――上層遺物包含層、④黄灰褐色粘質土（間層）、⑤暗（灰）褐色砂質粘土――下層遺物包含層、⑧黄灰色砂質粘土（地山）となっていた。基本的に水路Ⅰ調査区の層序と変化はないが、上層包含層の遺物量が増え、遺構の密度も高くなっている。

発掘作業は、最初に２m幅で調査対象としたのであるが、調査の過程で排水路に平行して、北側に幹線用水路が設置されることが明らかとなり、これによって遺跡が影響を受けることが判明したため、急遽、北側に２m拡幅して調査を行うという結果となった。このため、第７・８図に示した土坑、溝やピットの中には、それが完結しない状態で検出されたり、部分的に発掘することになってしまった遺構が存在する。上下二層の遺物包含層と二面の遺構検出面での区別は、西にいくほど間層（黄灰褐色粘質土層）が薄くなることもあって、次第に識別ができなくなる状況であった。それでも第７図に示したように、上下の遺構分布状況にはかなりの違いが認められ、発掘した遺構の大半が上層に含まれる遺構であると判断された。

遺構の種類は水路Ⅱ調査区と同様、土坑、溝と多くのピット群である。第７・８図に示したように上層面での遺構分布が極めて高いにもかかわらず、全形を把握したり、建物規模を捕まえられるようなピットのまとまりを押さえることができなかった。遺構は各々の遺構面で重複して作られたようで、複雑な状況を示していた。出土遺物は第12～22図に示したが、土師器、須恵器でもその形態から最低２時期には分割が可能であるし、第16図にある中世土器も考慮すると３期以上の遺構が重複して存在するものと推定される。

道路調査区は幹線農道予定地を調査対象とした。試掘調査の結果から幅７m、延長45mを発掘したが、北側は水路Ⅰ調査区からつながる河川跡となり、遺跡はその結果より南側に広がって分布していた。道路調査区での発掘作業は７月上旬になって本格的に着手したが、すでに試掘調査で示した遺跡の分布範囲外の土木工事は進行は早く、道路調査区で遺構を検出し、発掘作業を進めた頃にはすでに南側の工事もすぐ脇まで進行している状態であった。道路調査区での遺物包含層の南側への広がりはあと10数mまで確認したが、それより南はまた河川跡の礫層となっていた。

道路調査区の設定場所が、河川の痕跡に挟まれた安定した地形のところに当たったようで、第９図に示したように竪穴住居跡２棟、掘立柱建物２棟、畑の畝溝と推定される平行する細い溝等が良好な状態で検出された。ただ、調査区の南北地域および中央部に河川の痕跡があり、２号竪穴などは寸断されていた。道路調査区での層序は①18～20cm の耕作土、②０から数 cm の黄色砂質粘土、③灰褐色粘質土、④暗茶褐色砂質粘土、⑧黄灰色砂質粘土（地山）となっており、水路調査区でみられたような上下２層の包含層は認められない。しかし、後述するように１号竪穴と２号掘立柱建物は前後する関係にあり、少なくとも二時期あるいはそれ以上の時期の遺構が存在することは確実である。なお、掘立柱建物の柱穴であるＰ－８の柱穴を掘りぬいた時、第17図１～３に図示した弥生時代後期の土器が出土しており、近辺にその時代の遺跡が存在していることを窺わせている。

１号竪穴住居跡　東側が調査区の外に延びており、全体を発掘することはできなかった。西側の辺で3.3m、北側の辺で2.5m、検出面から床まで25～30cm を測る。一辺3.3m程度とすれば奈

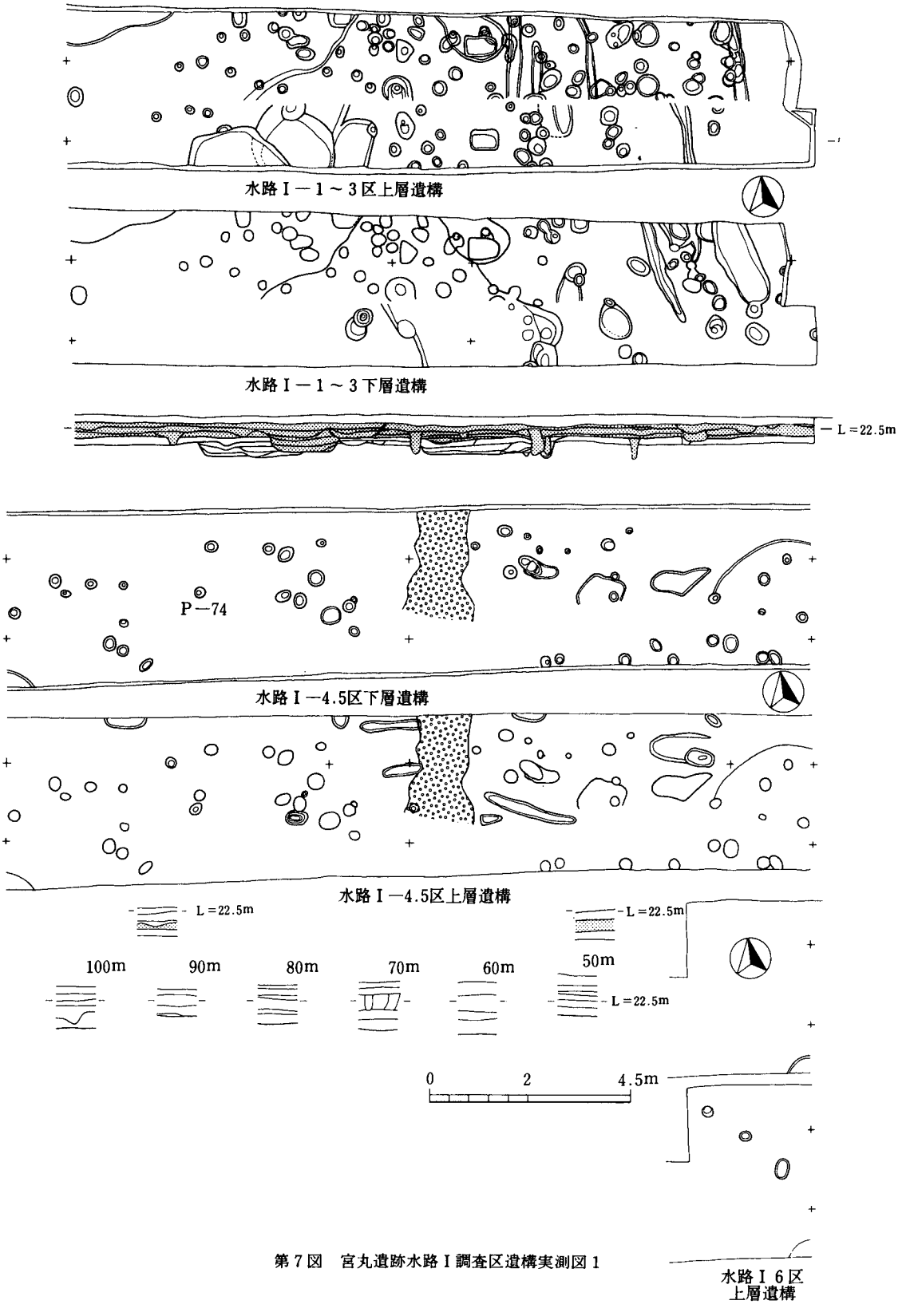
良・平安時代の竪穴としては、普通規模か、若干小型の部類に含まれよう。北辺中央の壁が脹らんでおり床が焼けて薄く焼土が堆積していた。ここで火が燃されたことを示しているが、焼土の堆積が7cm程度とそれ程厚くはなく、焼け具合も強いものとは言えなかった。竈とも考えたが2号竪穴の事例のように焼けが強いとは見えなかった。暗褐色から黒褐色をする竪穴内部の覆土中には、炭粒を多く含んでおり、屋内で燃やされた木々が炭化したものと思われる。北西隅のコーナー部分に2号掘立柱建物の柱穴の一つであるP－11が重複しており、竪穴を切って掘立柱建物が作られたことを確認した。しかし、竪穴と完全に重複する掘立柱建物の角柱柱穴はプランを押さえることができなかった。本竪穴からは第17図4・8・14・15の土師器、須恵器が出土している。

2号竪穴住居跡　中世あるいはそれ以降の旧河川によってその大半は削られていた。しかも1号掘立柱建物の柱穴とも重複していて、その把握には不明瞭なところを残している。位置的には竪穴の南辺と竈を確認した。辺の押さえが十分でないが竈から西へ約1.9mで西のコーナーとなるようで、竈から東への壁の伸びは、うまくつかめなかった。厚い焼土が堆積して袋状となった竈の西側の脇に第18図に示した土師器の甕がまとまって出土した。竈に据えられていたのであろうか。

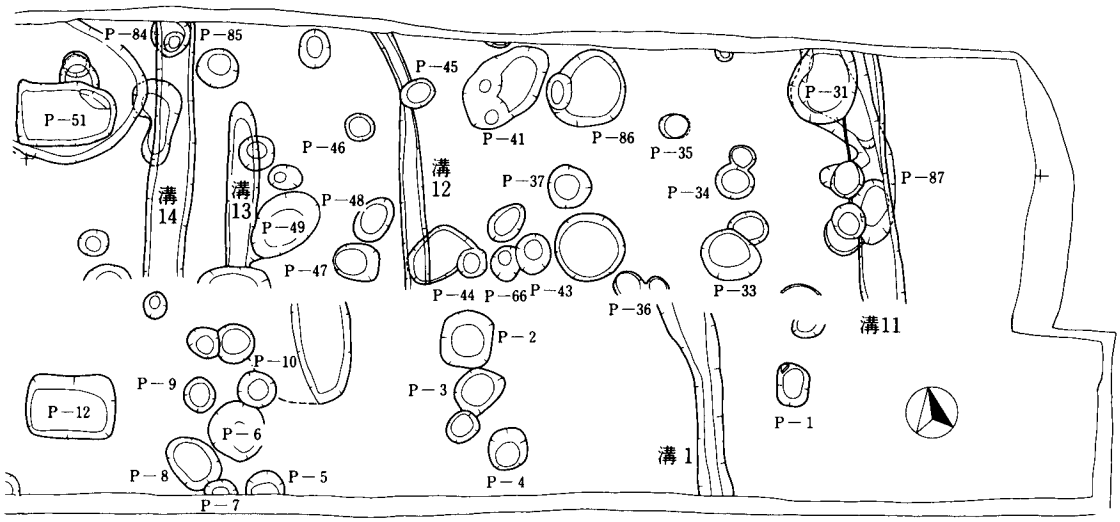
1号掘立柱建物　2号掘立柱建物、2号竪穴と重複する。桁行三間ないしはそれ以上、梁行二間の建物で北側を旧河川で削られている。建物主軸の方向はN－12°－Eである。柱穴の掘り方は一辺70～80cmの略方形で、覆土は黒褐色粘質土をしていた。重複関係にあるP－17と1号掘立のP－18では、暗茶褐色をした覆土のP－18がP－17を切っていることが明瞭であり、1号掘立は2号掘立柱建物に先行する建物である。1号掘立柱建物は桁行の柱間がやや不揃いであるものの桁行1.8m等間×梁行2.3m等間の規模をもつものであり、三間×二間であるとすると、桁行5.4m×梁行4.8mとなる。

2号掘立柱建物　1号掘立柱建物、1・2号竪穴と重複する。桁行三間ないしはそれ以上、梁行三間の建物で1号掘立と同じく北側を旧河川で削られている。建物主軸の方向はN－4°－Eである。柱穴の掘り方は径80cmの略円形で、覆土は茶褐色の砂質粘土である。先述のように重複関係から1号竪穴と1号掘立に後出する建物である。2号掘立柱建物は桁行2.1m等間となるが、梁行が1.9m＋1.4m＋1.9mの柱間となる。桁行6.3m以上×梁行5.2mとなる。（他の遺跡の調査を参考にして2号掘立柱建物が桁行四間、梁行三間であったとすると8.4m×5.2m、平面積約43.7m²の建物となる。）

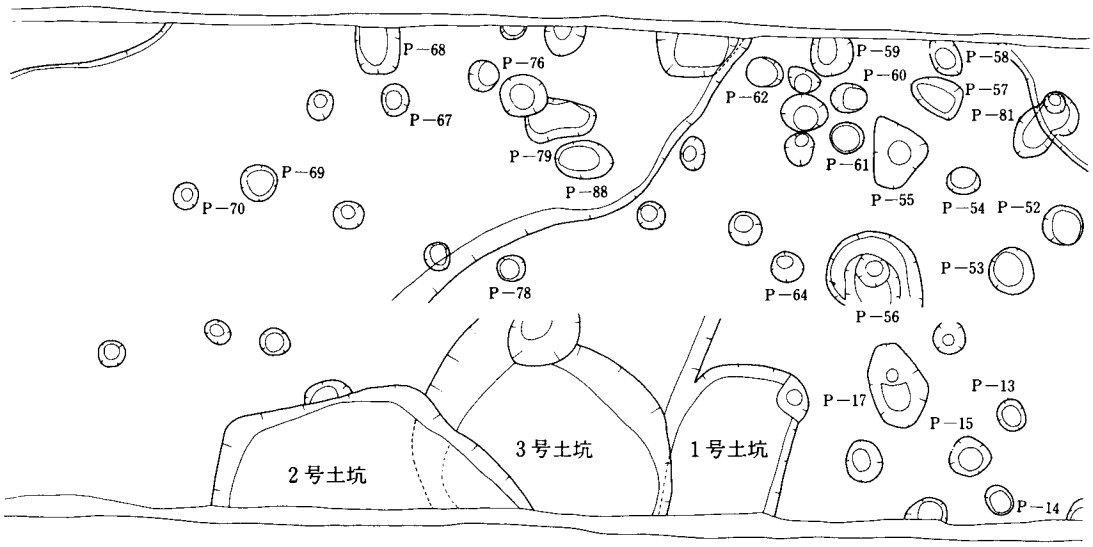
埋納ピット　1号竪穴住居跡南辺に接して検出された直径約30cm、深さ約25cmの小さなピットである。発掘にかかってしばらくした段階で銅銭が2枚出土し、その1枚に和銅開珎とあって驚いたものである。慎重に掘り進めた結果、第11図、図版5にあるように小さな穴の中に、和銅開珎と神功開宝を数枚ずつ入れ、須恵器甕の体部を打ち割った破片の間に銅銭を挟み込むようにして入れ、穴に詰め込んだ状態であった。銅銭は錆着したり、崩壊したものもあるが第13図に示した13枚は数えられよう。割られた須恵器甕体部破片は、第22図のように接合され、一個体の甕体部を壊したことが判明している。古代の地鎮に関係した祭祀行為の事例として興味深く、出土



第7図　宮丸遺跡水路Ⅰ調査区遺構実測図1



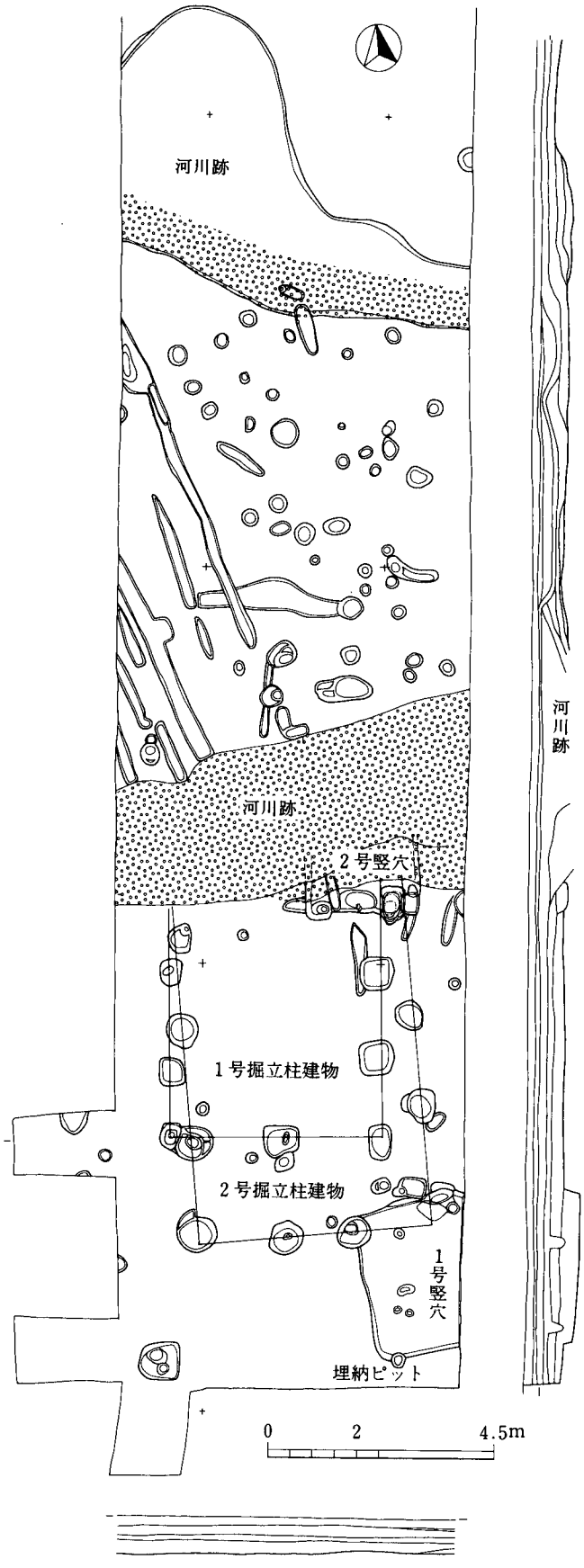
1～2区



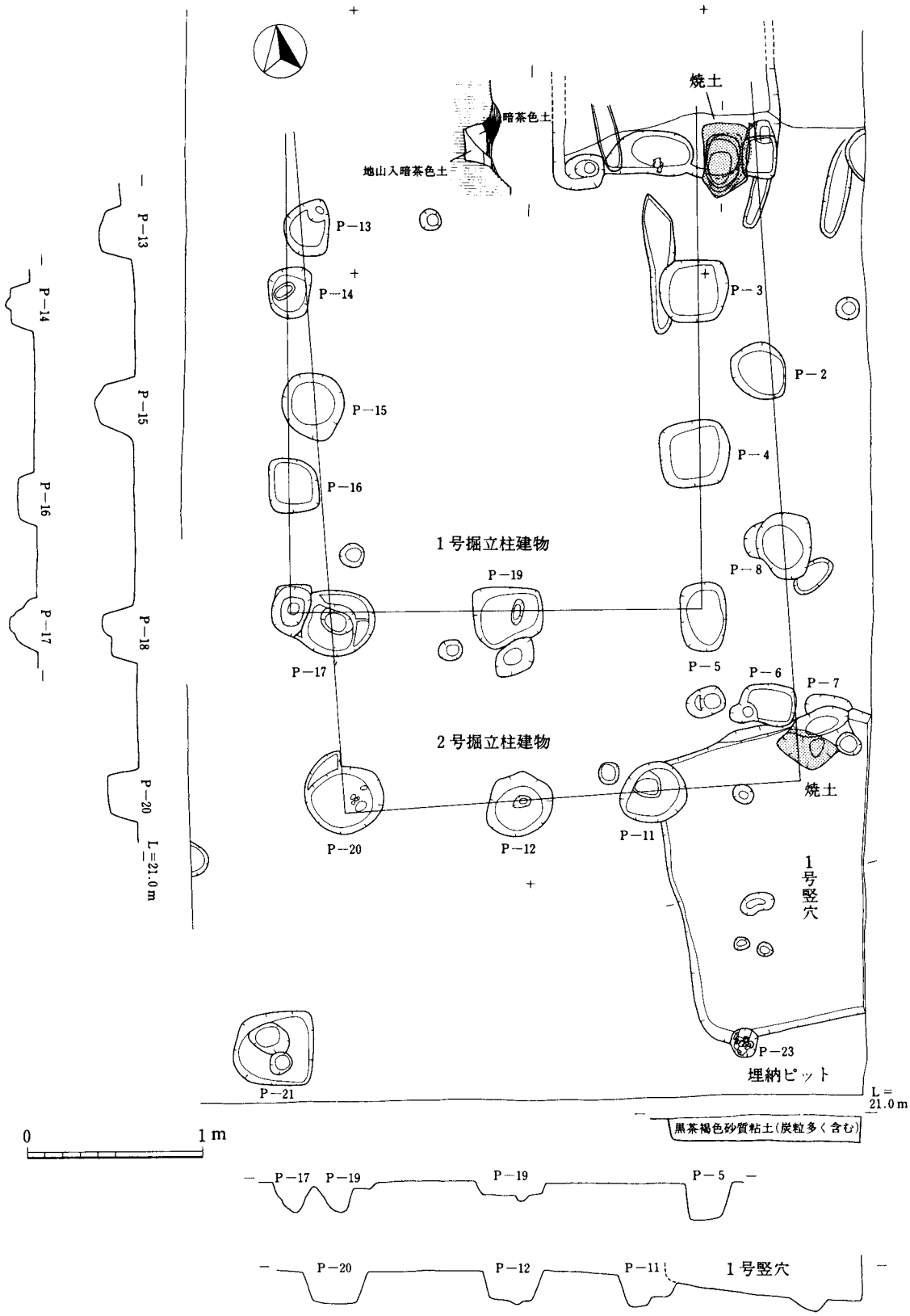
3区

0　　1 m

第8図　宮丸遺跡水路Ⅰ調査区上層主体遺構実測図2

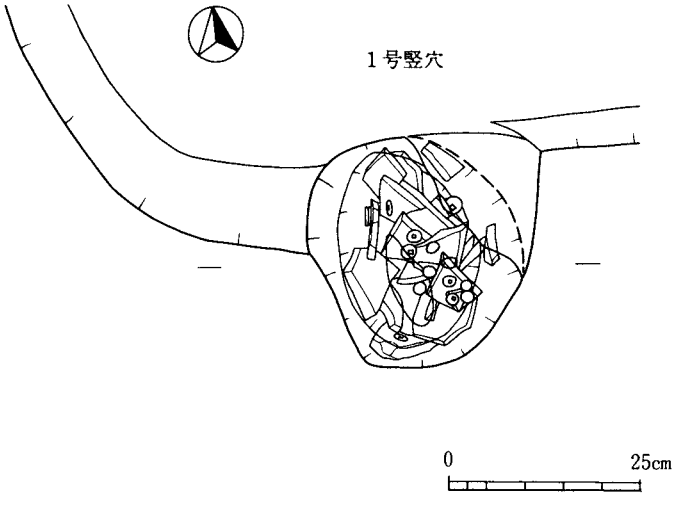


第9図　宮丸遺跡道路調査区遺構実測図1



第10図　宮丸遺跡道路調査区実測図 2

土器の比較から後述することとしたいが、おそらく2号掘立柱建物に伴う遺構であると考えられる。



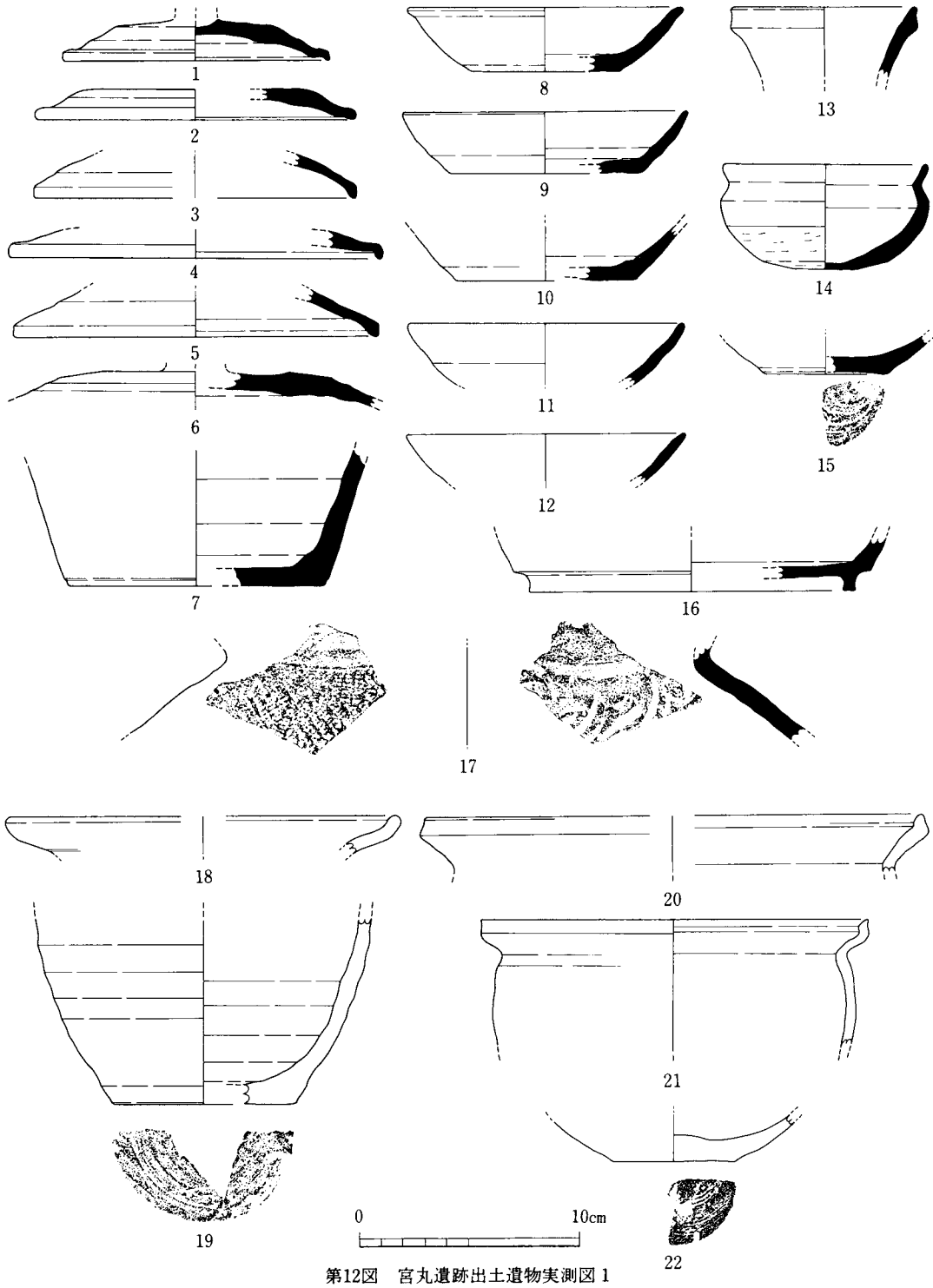
第11図　宮丸遺跡道路調査区遺構実測図3
（埋納ピット）

第2節　出土遺物

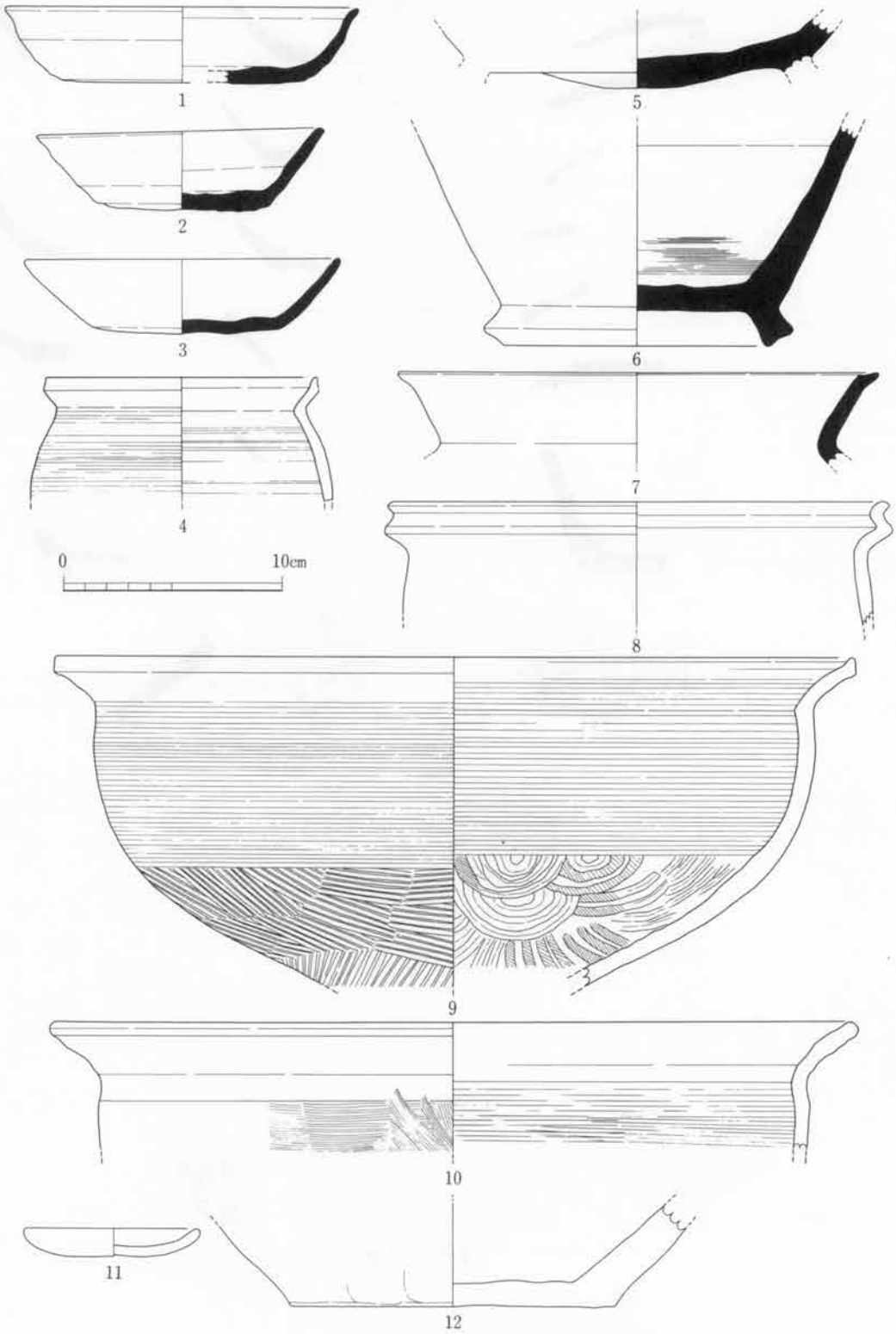
宮丸遺跡の発掘調査によって出土した遺物は、須恵器、土師器等奈良・平安時代の土器がそのほとんどを占め、若干の弥生土器および金属・石製遺物が出土した。本節では水路II調査区、水路I調査区、道路調査区の順に出土遺物を概観したい。

第12・13図は水路II調査区からの出土土器である。上層で確認した遺構は数字で数え、上層または下層で確認した遺構はアルファベットで遺構を順に押さえていったので、実測図に掲載した土器の出土遺構を挙げておく。上層遺構からの出土土器のうち図示したのは第12図1・10がD区1号土坑、第12図2・6がC区pit110、第12図7・第13図5がA区pit132、8がF区2号土坑、12がA区pit131、14がE区pit121である。下層遺構から出土土器としてが第12図15・17がG区2号土坑、第12図20がB区pit107、第12図22がA区pit130、第12図3がF区pit Q、第12図4がF区pit H、第12図9・13がE区pit G、第12図16がE区pit J、第12図11・18がF区下層pit P、第12図19がB区pit A、第12図21がC区pit Dがある。

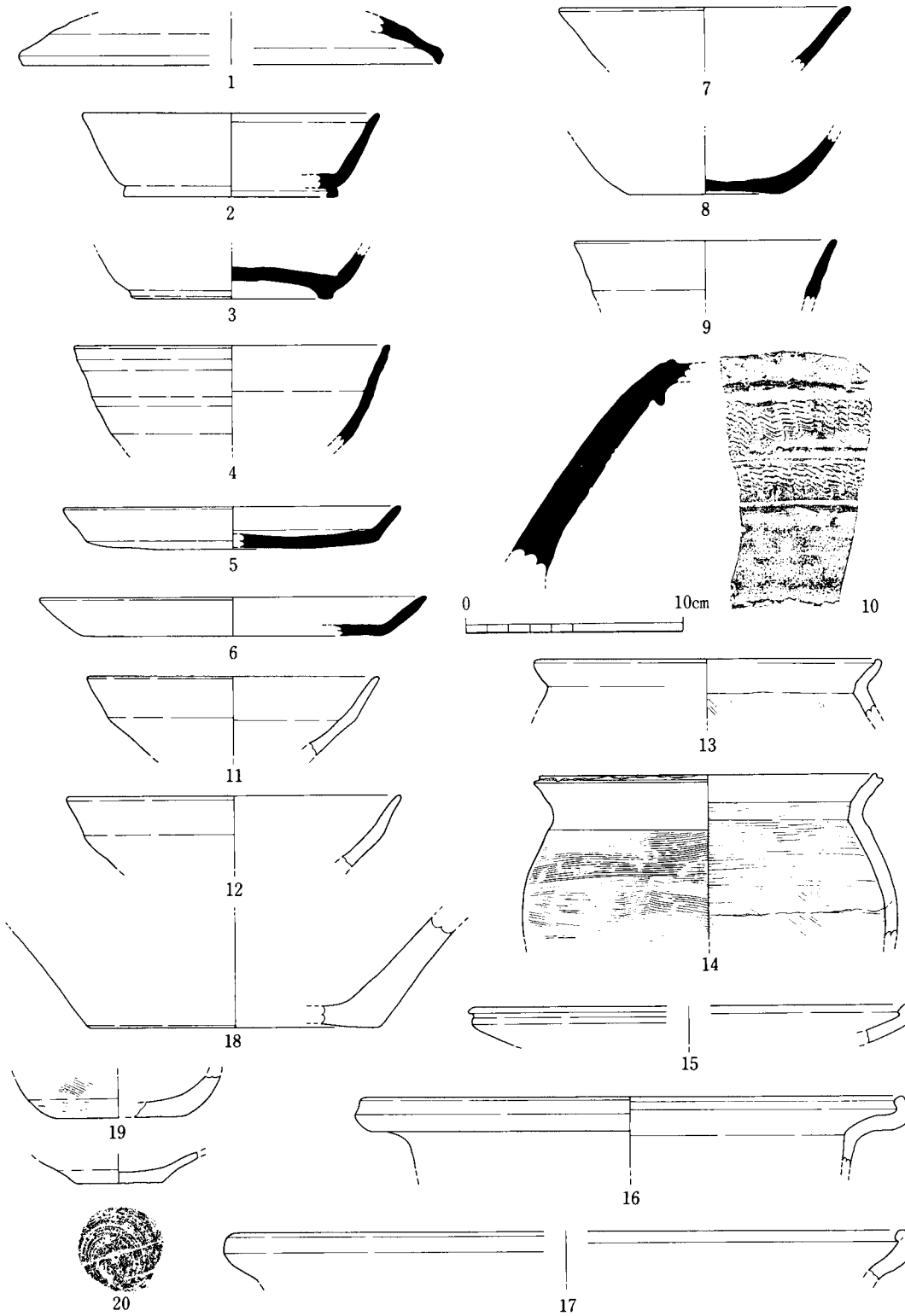
第12図1～6は須恵器杯蓋である。第12図7は須恵器瓶の底部で双耳瓶となろうか。第12図8～12は須恵器杯。8で口径12.4cm、器高2.9cmを測る。9も口径12.8cm、器高2.9cmと口径の割に器高が低く、口縁が斜め上方に立ち上がるタイプの杯である。この杯の胎土は精良でおそらく辰口産と推定される。これに対し、第12図11・12の杯は胎土に砂粒を含む小松産の須恵器であると思われ、すでに指摘されていることではあるが、手取扇状地に位置する松任市域の奈良・平安時代の集落遺跡での土器生産供給地が複数であることを、この宮丸遺跡にも適用できるようである。第12図13は須恵器瓶の口縁部。14の小型広口瓶は口径9cm、器高4.8cmを測る。ヘラ切りの底部には板上に置いた際の木目圧痕を残す。第12図15は須恵器杯の底部と思われ、底に回転糸切り痕を残す。胎土から小松産の製品と思われる。第12図18～22は土師器の甕で20の中型品と19・21の小型品がある。19・22は底に回転糸切り痕がある。第13図のうち5を除く土器は水路II調査区包含層からの出土である。1・4・9はC・Dの河川跡とした攪乱土の中でまとまった状態で出土した土器である。1は口径16cm、器高3.5cmの須恵器杯で、丁寧な調整やゆるくカーブを描いて立ち上がる口縁部の形態は古い様相を示しており、奈良時代後半の時期に含まれよう。これ



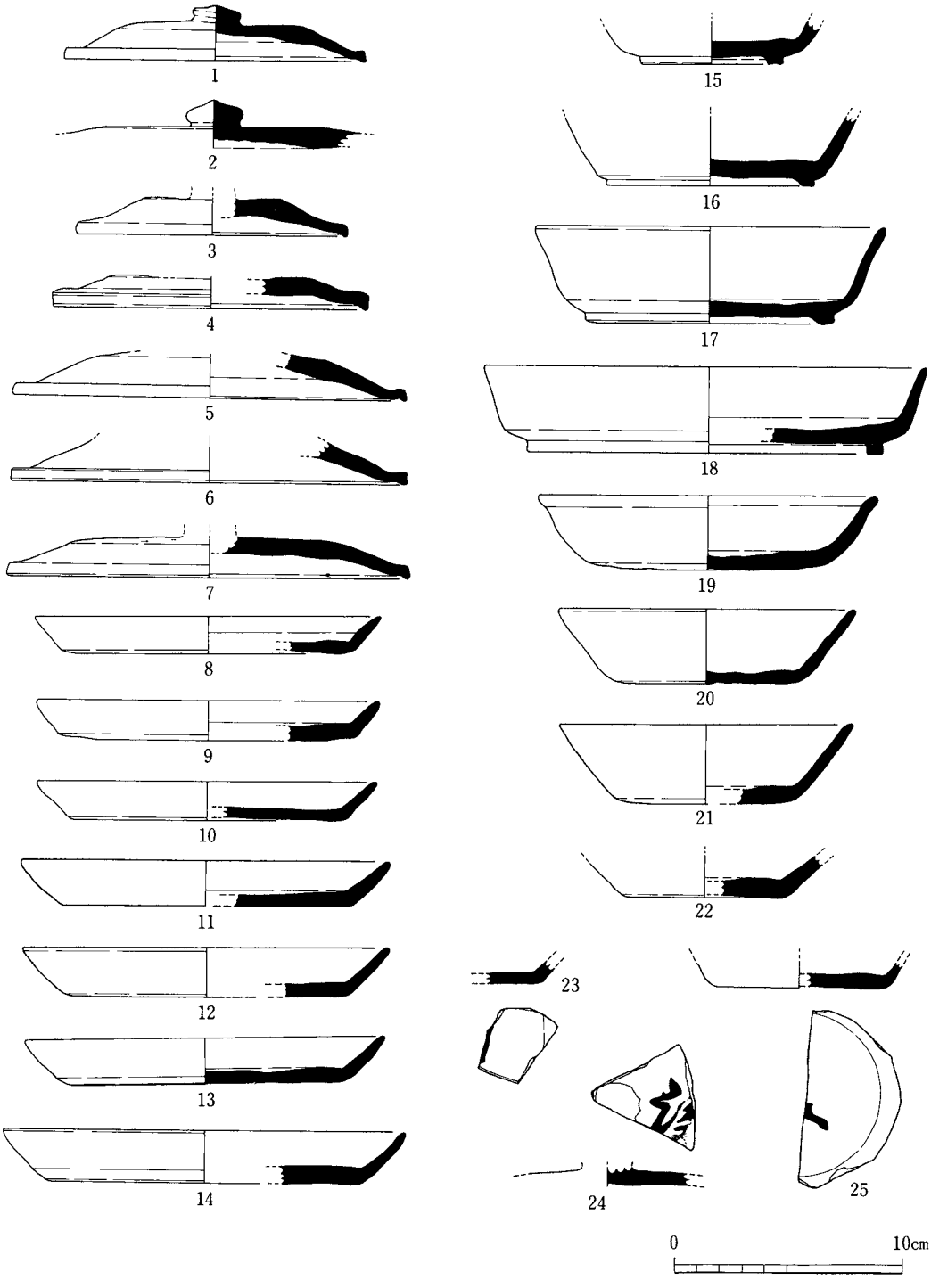
第12図　宮丸遺跡出土遺物実測図 1



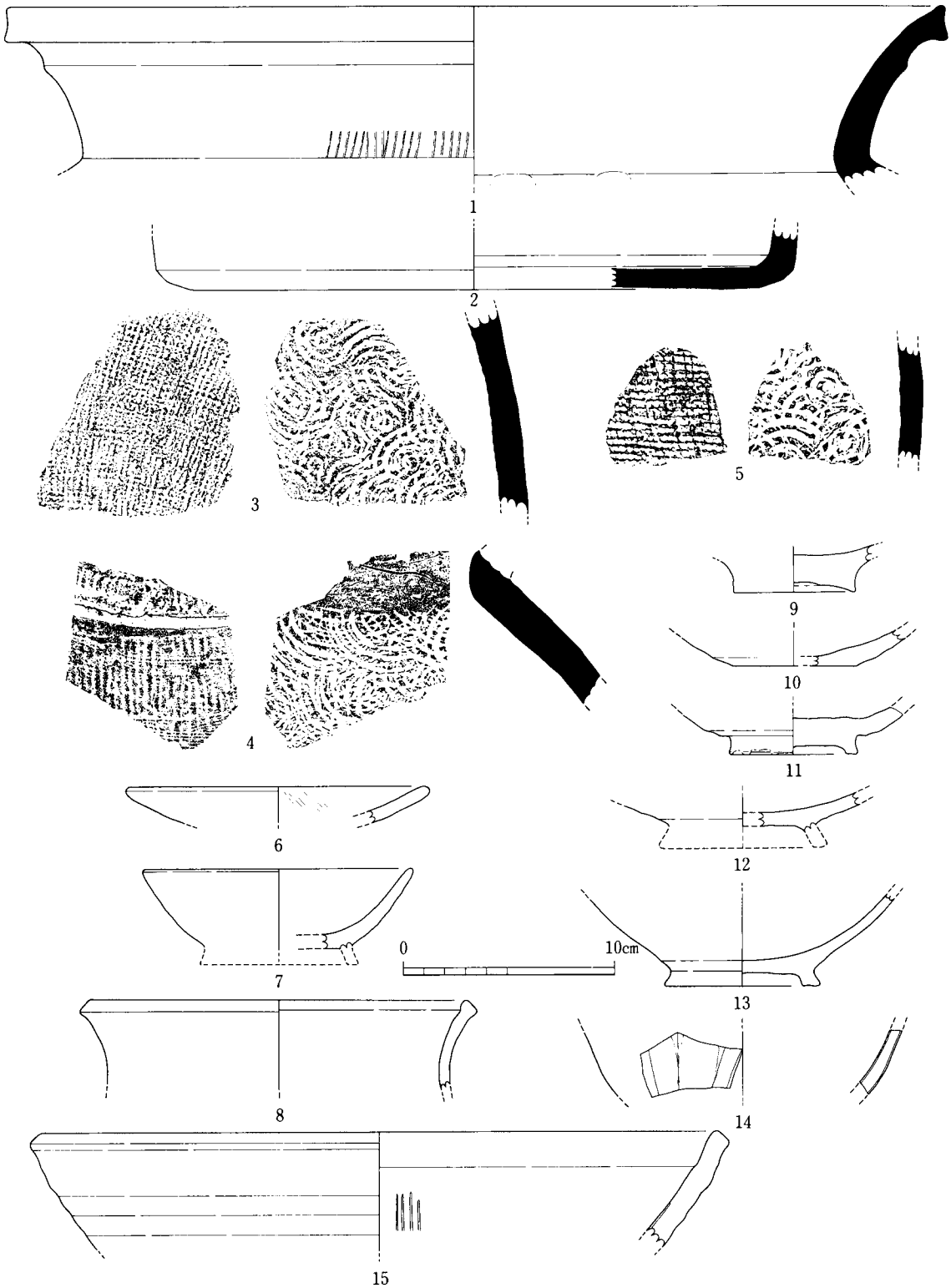
第13図　宮丸遺跡出土遺物実測図 2



第14図　宮丸遺跡出土遺物実測図３



第15図　宮丸遺跡出土遺物実測図 4



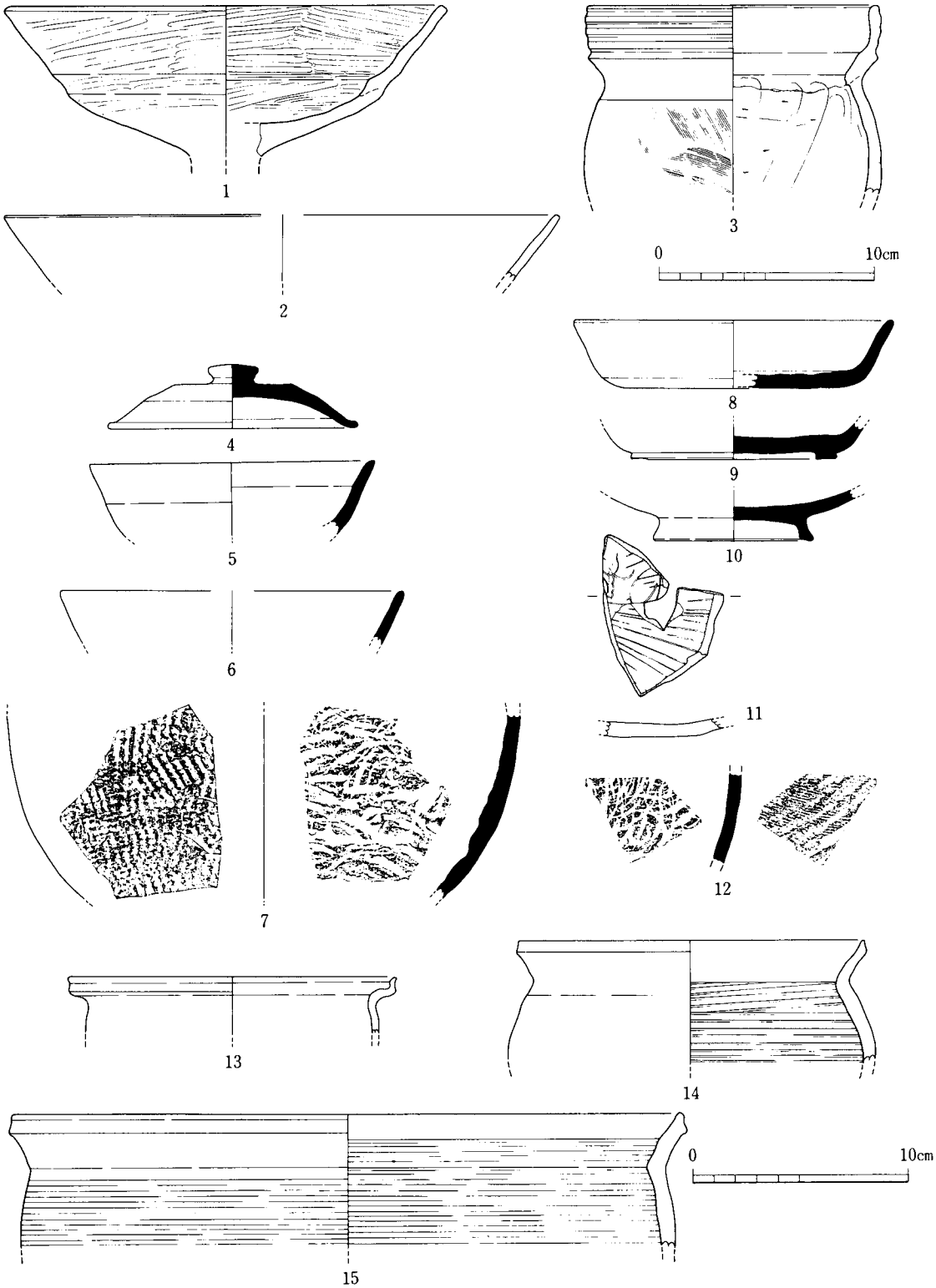
第16図　宮丸遺跡出土遺物実測図５

に対し、第13図２・３は口縁が斜め上方に開くように立ち上がり器壁も薄い。平安時代前期まで降る土器であろう。G包含層から出土した完形品の３は口径13.1cm、器高3.9cm を測る。４は小型の土師器甕でカキメを施す。５・６の高台をもつ須恵器瓶の底部。９の土師器鍋は口径36.7cm を測り、底部を欠くが器高は16cm 程度となろう。頸部から体部上半をカキメ、体部下半を叩き目調整する。外面は煤が付着し、煮沸に使われている。11は土師質の小皿、12は加賀焼の甕底部である。この２点は中世段階にまで降る遺物である。

第14図は水路Ⅰ調査区遺構からの出土土器で、須恵器は断面図を黒く塗ってあるのは他の挿図と同様である。水路Ⅰ調査区の出土土器は、水路Ⅱ調査区の土器と比較して古い段階（下層包含層の段階）の遺物が目につくようで、遺跡の動態が水路Ⅰから水路Ⅱへと（西から東へと）移動、ないしは拡大したことを示している。Ⅰ調査区の遺構の分布状況はすでに述べたように、１～５区に集中しており、中でも１～３区の密度は高いものがあった。第14図に示した遺物は上層で確認したピットからの遺物が殆どであったが、結果的に遺構と出土遺物の時期比定が一致しない場合が多い。第14図１が pit８、３・６・12が溝14、４が pit20、５が pit32、７が pit31、11・12が pit36、13が pit６、14が pit２、15が pit97、16が１号土坑、17が pit40、18が pit51、19が pit31からの出土である。３は高台のある杯底部、４のような口縁部の杯となろう。口径14.5cm を測る。５・６は器高が２cm 前後の盤で、口縁のたち上がりは５で約50度、６で約40度を測る。８は須恵器の椀底部と思われ底径は6.8cm である。10の須恵器甕は６条１単位の波状櫛描文を２段巡らせている。11と12は土師器有台椀の１タイプに含まれるであろう。斜め上方にたち上がる体部がやや内屈することが特徴的である。13～17は土師器甕の口縮部でくの字のタイプと口縁が内湾または湾曲するタイプがある。18は中世の越前焼の甕の底部である。

第15・16図は水路Ⅰ・Ⅱ調査区遺物包含層からの出土土器である。第15図１の杯蓋は、水路Ⅰ－２区で出土した完形品で口径13.4cm、器高2.5cm を測る。２～６の須恵器蓋は径12cm の３、径14cm に近い４、径17cm 代の５～７の大、中、小があるようで、第12図の杯蓋とに近似する口径分布となっている。８～14の器高が２cm 前後に集中する盤が多くみられるのが、宮丸遺跡での土器組成の特長でもあり、９世紀前葉から中葉に主体をおく組成の一端を示している。有台杯も杯蓋の分布と関係して15～17の三つのタイプがあるようである。18は口径19.6cm 有台盤で宮丸遺跡の古代の土器では、８世紀中葉から後葉の古い段階に含まれよう。19の杯も同様に古い時期の所産であり、20～23・25の９世紀に降る新しい段階の杯とは形態的に異なっている。23・25は杯底部外面に墨書が一部認められるものの判読できない。24の杯蓋外面にも墨書があって、「庠」のようにも見えるが判然とはしない。第16図２は須恵器大型鉢の底部破片であろうか。直径は約30cm を測り底部から垂直気味にたち上がっている。６は土師器の皿、７・10・12・13は土師器の椀である。６・10・12は内面黒色、７と13は外面赤彩、内面黒色の処理が行われている。11と14は青磁の椀。15の珠洲焼摺り鉢とともに中世の遺物である。

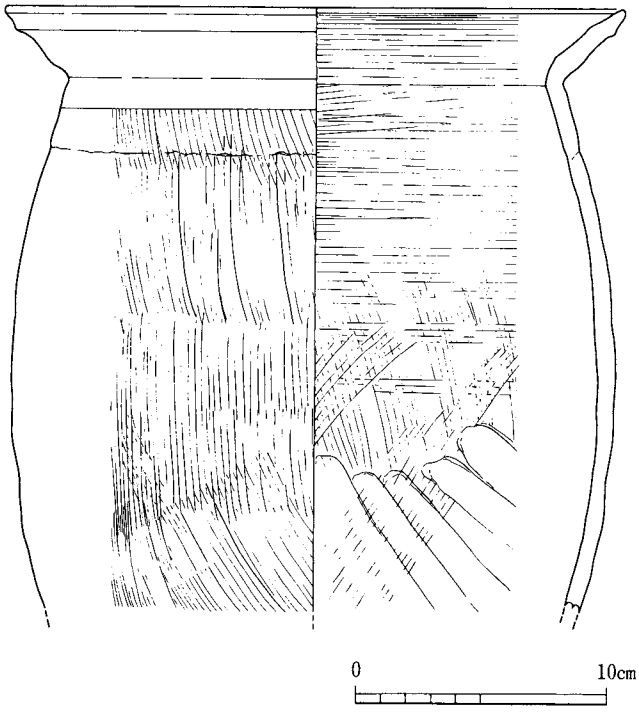
第17図４～15と第18図の土師器甕は、道路調査区の遺構から出土した土器であり、第19図は道路調査区の包含層から出土した土器である。第17図１～３は弥生時代後期の土器で２号掘立柱建物Ｐ－８を掘り下げた際に出土している。１は口径20.4cm の高杯の杯部で、内外面を研磨、赤彩



第17図　宮丸遺跡出土遺物実測図 6

する。2も高杯口縁部の破片で赤彩している。3の小型甕は有段の口縁部に4条の擬凹線を施す。

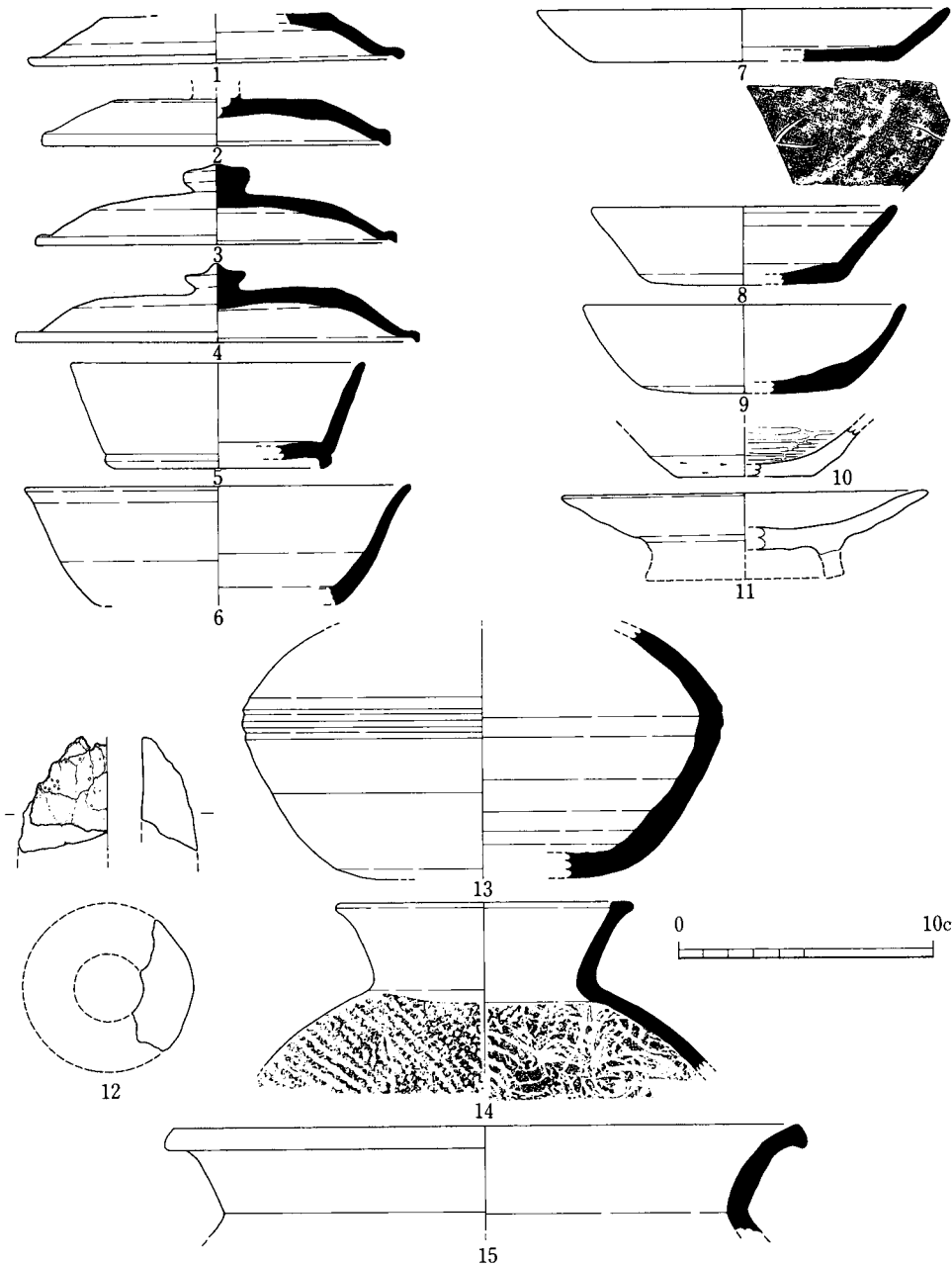
第17図4・8・14・15は1号竪穴、13は1号掘立柱建物pit 5、5は2号掘立柱建物pit 8、6は調査区北側にあるpit40、10はpit33、12はpit35、7・9は溝3、11は調査区北側の浅い落ち込みからの出土である。出土した土器から1号竪穴は、図示できた土器は少ないものの須恵器、土師器破片の出土量は多かった。1号竪穴は出土土器からみて8世紀中葉から後葉にかけての遺構である。4の杯蓋内面は中央が研かれてツルツルしており、赤色顔料（朱墨？）を潰すのに使用した痕跡が認められる。8の杯は口径14.7cm、器高3.3cmを測り、口縁はゆるくたち上がる。14・15の土師器甕はカキメ調整を施す。13の土師器甕が1号掘立柱建物の上限を示すとすれば、切り合い関係からみた1号掘立→2号掘立となる順序を考慮して、9世紀でも中頃に1号から2号への立て替えが行われたという推定が成立する。銭貨を埋没納したピットに見る地鎮行為はまさしくこの立て替えに伴って行われた可能性が高いと考えたい。11は内面に暗文をもつ赤彩の土師器椀破片。精良な胎土を用いた8世紀代の土器である。調査区北側のピットや溝からは10のように10世紀代にまで降るような土器も存在する。第18図の土師器甕は2号竪穴の竈の脇にまとまって出土した。口縁はくの字に外反し、口径24.4cmを測る。他に図示できる遺物も少ないため厳密さを欠くが、この甕は8世紀中頃の時期の土器と見ており、1・2号の竪穴が同時に存在して、集落の一角を構成していた可能性が高い。



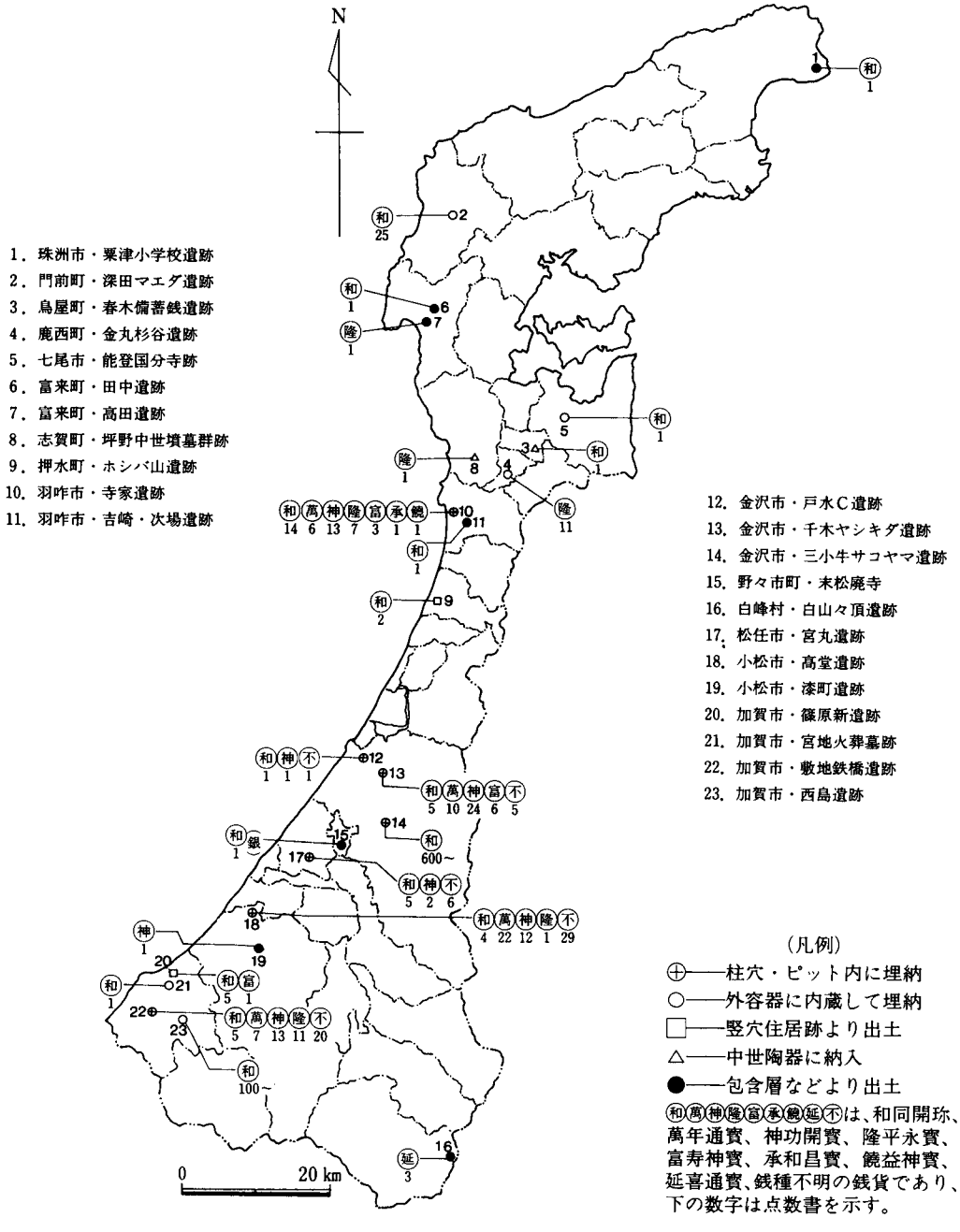
第18図　宮丸遺跡出土遺物実測図7

第19図は道路調査区の包含層から出土した須恵器や土師器であるが、先に説明したように八世紀から10世紀に渡る時期の土器が含まれている。9世紀代の須恵器杯蓋や杯が目に付く。11の土師器有台皿は外面赤彩、内面黒色処理を施している。12はフイゴの羽口破片で調査区北側から出土した。時期の特定はできないが古代の宮丸遺跡のある段階に鍛冶が行われていたことを示すものであり、注目したい。

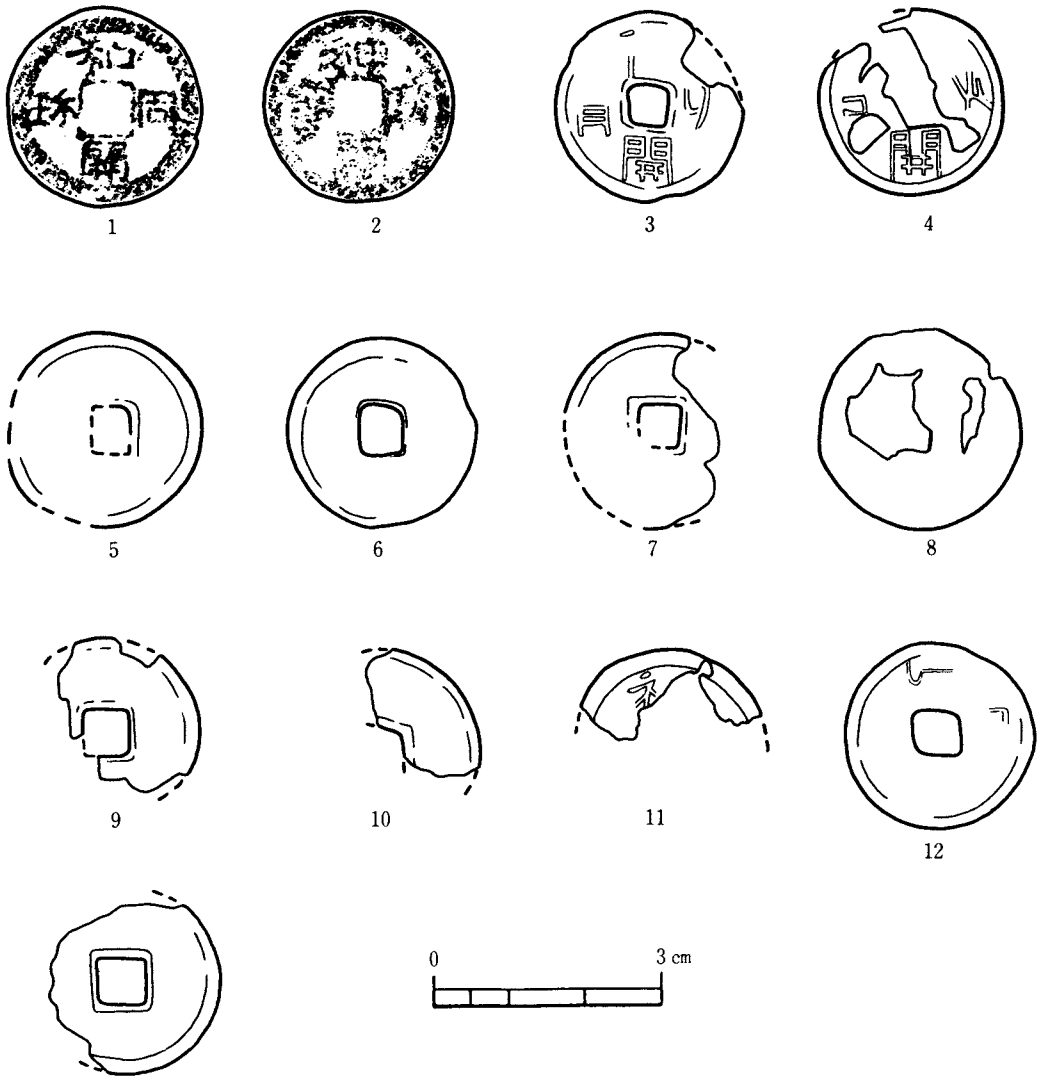
第20図に道路調査区の埋納ピットから出土した銭貨を、第21図に同ピットから破砕した状態で出土した須恵器甕を接合して図示した。先にこの埋納ピットが遺構の切り合い関係や出土した土



第19図　宮丸遺跡出土遺物実測図 8



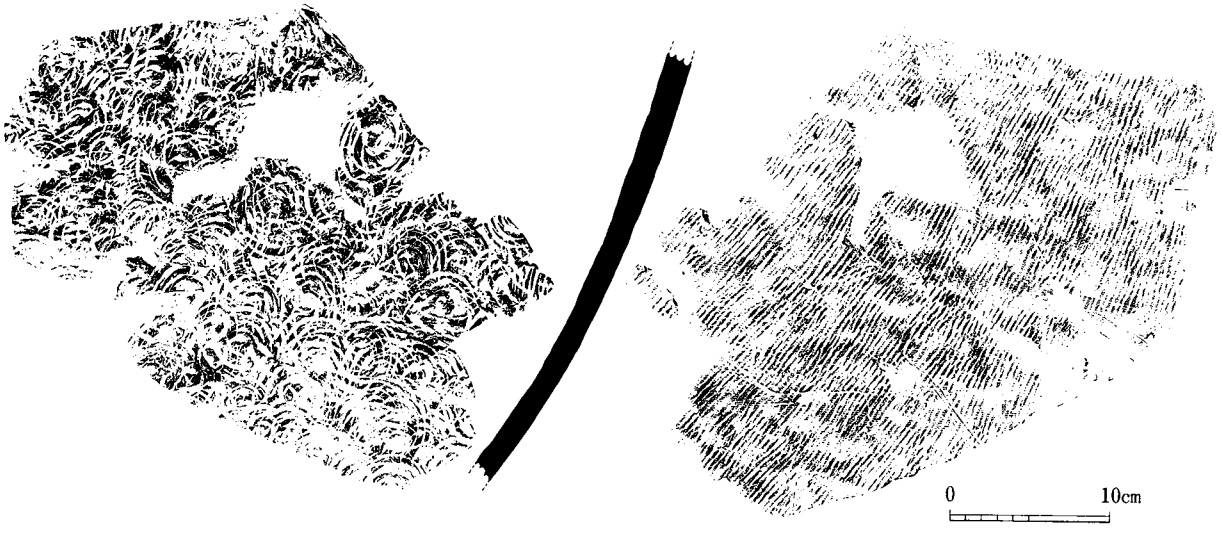
第20図　能登・加賀における皇朝十二銭の出土分布図（芝田作成　1990年３月現在）



第21図　宮丸遺跡出土遺物実測図９（埋納ピット出土銅銭）

器から、９世紀の中頃に１号から２号への立て替えが行われ、これに伴って銭貨を埋没納する地鎮行為が行われたと推定した。宮丸遺跡の出土の銭を見ると判読できたのは、全体13枚のうち、和同開珎が５枚(第20図１、３、４、11それに第21図５、７、10のうちの最低１枚)、神功開宝が２枚（第21図２、６であり、他の６枚は錆着激しく加えて遺存状態が悪いため、その種類を特定できなかった。和同開珎の開は文字の門構えの上が切れる隷開和同である。

古代におけるこのような地鎮行為を示す例は、最近県内でも事例が増えてきており、和同開珎をはじめとする皇朝十二銭を埋めた例が知られている。第20図に芝田悟氏が作成してくれた県内の皇朝十二銭の出土分布図を掲げたので参照願いたい。芝田氏によれば、次のように分類される。（『加賀市敷地鉄橋遺跡』石川県埋蔵文化財センター1980）



第22図　宮丸遺跡出土遺物実測図10（埋納ピット出土須恵器）

Ⅰ類　掘立柱建物の柱穴内に埋納するもの、Ⅱ類　掘立柱建物の敷地内に埋納するもの、Ⅲ類　掘立柱建物の敷地外に埋納するもの、Ⅳ類　金堂・講堂・塔・伽藍に埋納するもの、Ⅴ類　建物がともなわず多量の銅銭を一括埋納するもの、に大別し、さらに位置や遺構の性格によって15に区分し小分類されている。宮丸遺跡の事例はⅢ－ａ類に該当するようである。

金沢市の千木ヤキシダ遺跡の報告書をまとめられた出越茂和氏によると、千木ヤシキダ遺跡にみられた古代の地鎮祭祀を中心に県内の調査例を類型化すると各遺構の遺物構成によりＡ～Ｄ類、さらに埋納位置によりⅠ～Ⅳ類に分類されたという。（『金沢市千木ヤシキダ遺跡』金沢市教育委員会　1981）

遺物＝Ａ類：皇朝銭のみ　　Ｂ類：皇朝銭と土器
　　Ｃ類：土師器のみ　　Ｄ類：墨書土器
場所＝Ⅰ類：柱穴内に埋納する　　Ⅱ類：敷地内に埋納する
　　Ⅲ類：敷地外に埋納する　　Ⅳ類：特定建物を対象としない

この分類に従えば宮丸遺跡の事例はＢⅢ類の変則事例ということになろうか。出越氏のＢ類は土器を容器として用いる場合で、杯や甕の中に皇朝銭を納めている。宮丸では破砕した須恵器甕の破片の間に皇朝銭を挟みこむようにしてあったから、Ｂ類とは異なるといえるが、他に例もないので、取り合えずＢ類の変則事例として扱っておく。また、埋納ピットの位置からすると宮丸遺跡の場合はⅢ類の敷地外に埋納する分類に含まれる。出越氏によれば県下では奈良時代～平安時代前期（８・９世紀）までは皇朝銭の埋納が地鎮の主要な祭物となっており、千木ヤシキダ遺跡では、10世紀に入ると完形の土師器椀を埋納する祭式に変化する。また大型と小型の二類型の土坑に完形の供膳器を大量に埋納している。宮丸遺跡の銭貨埋納事例は類例が少ないものの、古代の地鎮行為を示すものとして注目したい。

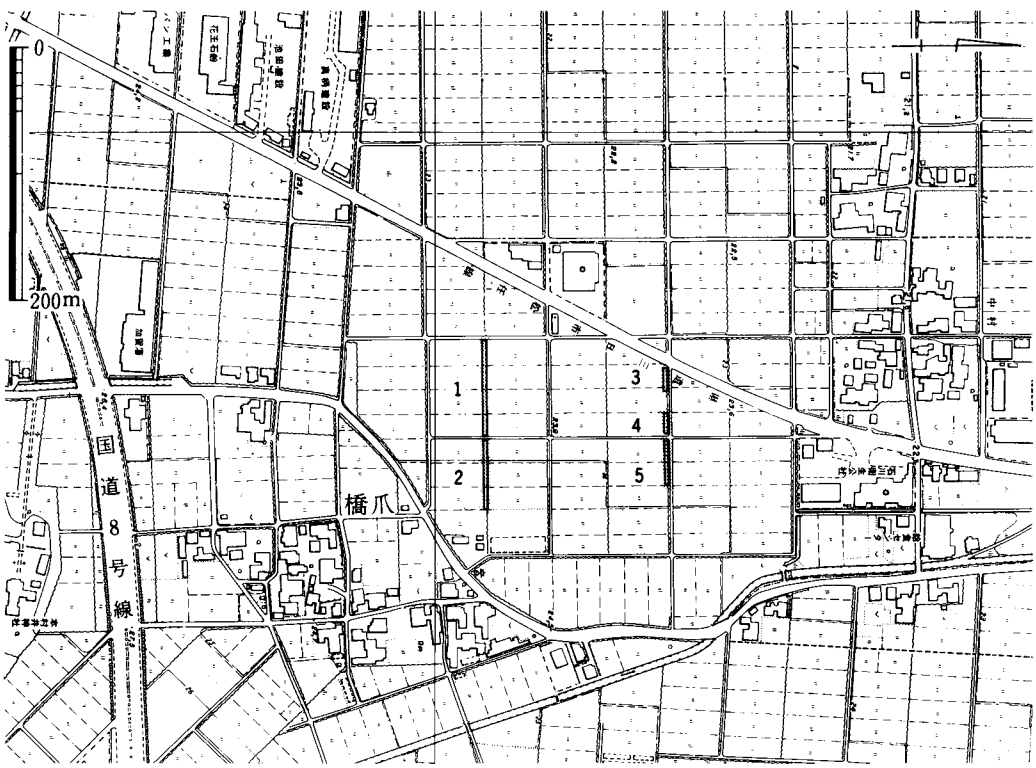
第４章　村井北遺跡

第１節　調査区と遺構

今回調査を実施した箇所は、村井町中村・樋爪両集落に挟まれた田圃内で、東西方向に計画された２本の排水路について幅２ｍの調査区を設定して発掘を行った。調査に際しては農道の通行確保などのために掘り残した部分があり、それによって分割された帯状の区画について１～５トレンチと呼称した（第24図）。１・２トレンチが南の樋爪集落寄りの排水路部分、３～５トレンチが北側の排水路部分にあたる。この南北それぞれの路線主軸上に起点（０ｍ）を設け、東方へ10ｍ毎に区画を設定して調査にあたった。区画名は１・２トレンチ、３～５トレンチについてそれぞれ連番になっている。なお、２トレンチの東端部において拡張を行った箇所があり、それらについては「試掘トレンチ」１～５と呼んでいる。以下トレンチ毎に調査結果を記す。

１　１トレンチ（第25・28図）

基本的な層序は上から、耕作土（20cm）、黄灰褐色シルト（10～20cm）で、遺構はそれらを除



第23図　村井北遺跡調査区の位置（網掛部分）

去した黄(灰)褐色シルト層上面において検出された。起点から30cmの間では東西方向に走る溝・ピット等、39～55m付近にかけては大きな落込み、60m付近において小ピット多数を確認している。遺構検出面の標高は1トレンチ西端で22.8m程度を測り、東側へ徐々に上昇していく。

1・9号溝　39m地点付近から東方に向かって検出した落込み。第28図にみる床土の落ちに相当するものが1号溝、下位のより広い落ちに当たるものが9号溝である。1号溝は出土遺物に近世以降のものを含む。9号溝については完掘しておらず、規模・時期ともに判然としないが、得られた範囲の情報からは、旧河川とみることができる。

5・7・8号溝　N60°E前後の走向をもつ溝である。それぞれ幅70～100cm、深さ30～50cmを測る。なお7号溝は、2条の溝が重複しているものとみられる。

その他　溝状遺構の中には幅20～40cm・深さ10cmに満たない畝溝状のものがある。これらの内には近世以降の陶磁片を埋土に含むもの（3号溝など）もある。

2　2トレンチ（第26～28図）

基本層序は上から耕作土（20cm）、濁青灰褐色シルト（10～30cm）、濁黄褐色シルト（15cm）、黄褐色シルト（やや砂っぽい）（25cm）、黄褐色砂層（15cm）で以下は礫層である。遺構は第2層を除去した面において検出される。検出面の標高は西端で23.05m、東端で23.5m程度を測る。2トレンチにおいては85m以東において土坑・ピット・溝などの検出があった。

5号土坑　長軸520cm、幅100cmの東西に長い溝状の土坑。検出面からの深さは40cmを測る。

3号土坑　検出面で460cm×180cm以上を測る隅丸長方形プランを呈する。坑底には南東隅に寄せて360cm×125cm、深さ20cmの長方形の掘り込みがあり、上面からの深さは65cmに達する。

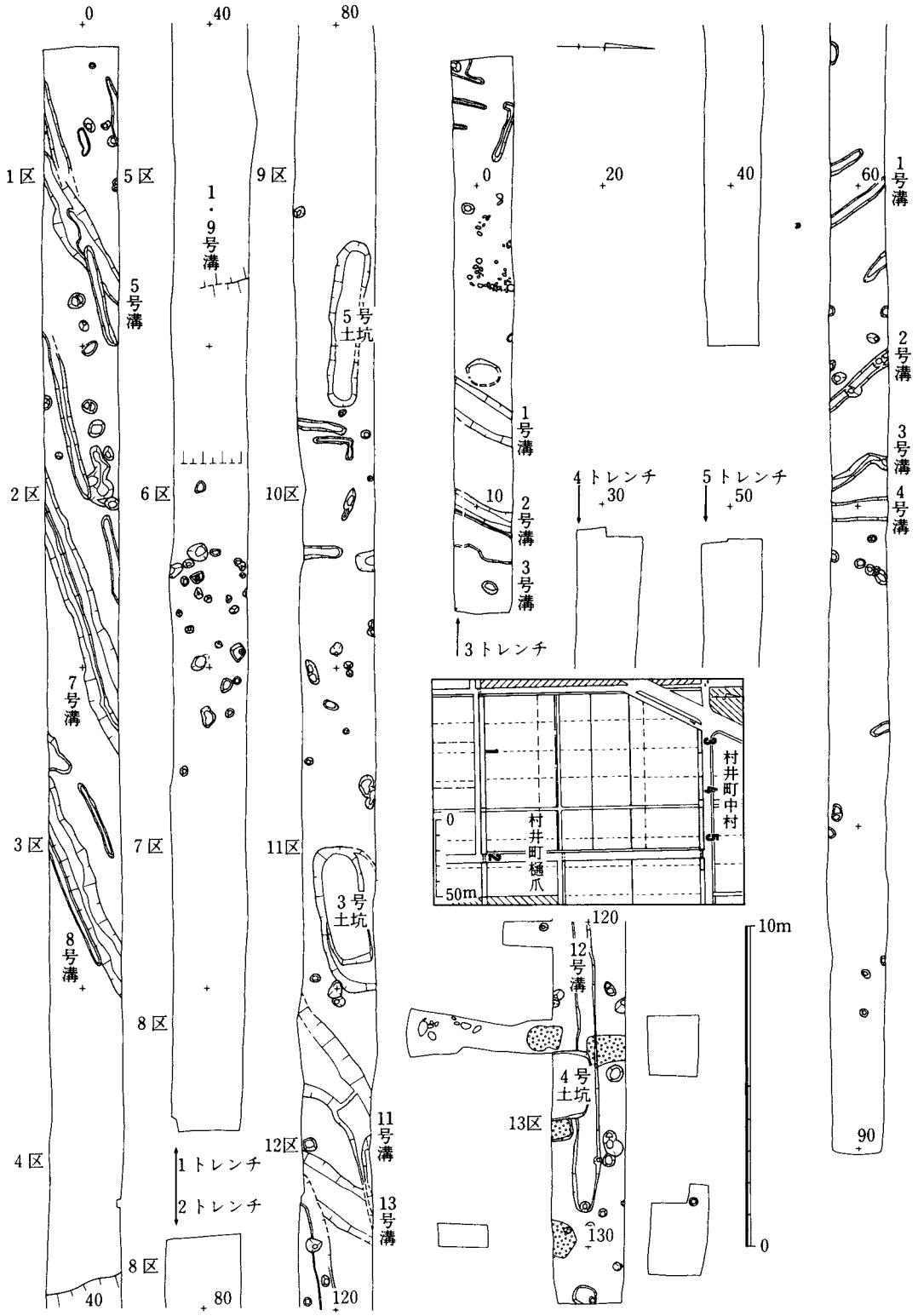
11号溝　110m地点付近で検出した幅150cm、深さ30cmを測る溝。調査区内で大きく湾曲し、南及び東方へ延びる。検出部分南半の溝底は30cm程度の段をもって低くなる。北壁際で後世(おそらく近世以降）の土坑による攪乱をうけている。

13号溝　幅150cm、深さ80cmを測る溝。12号溝によって切り込まれる。

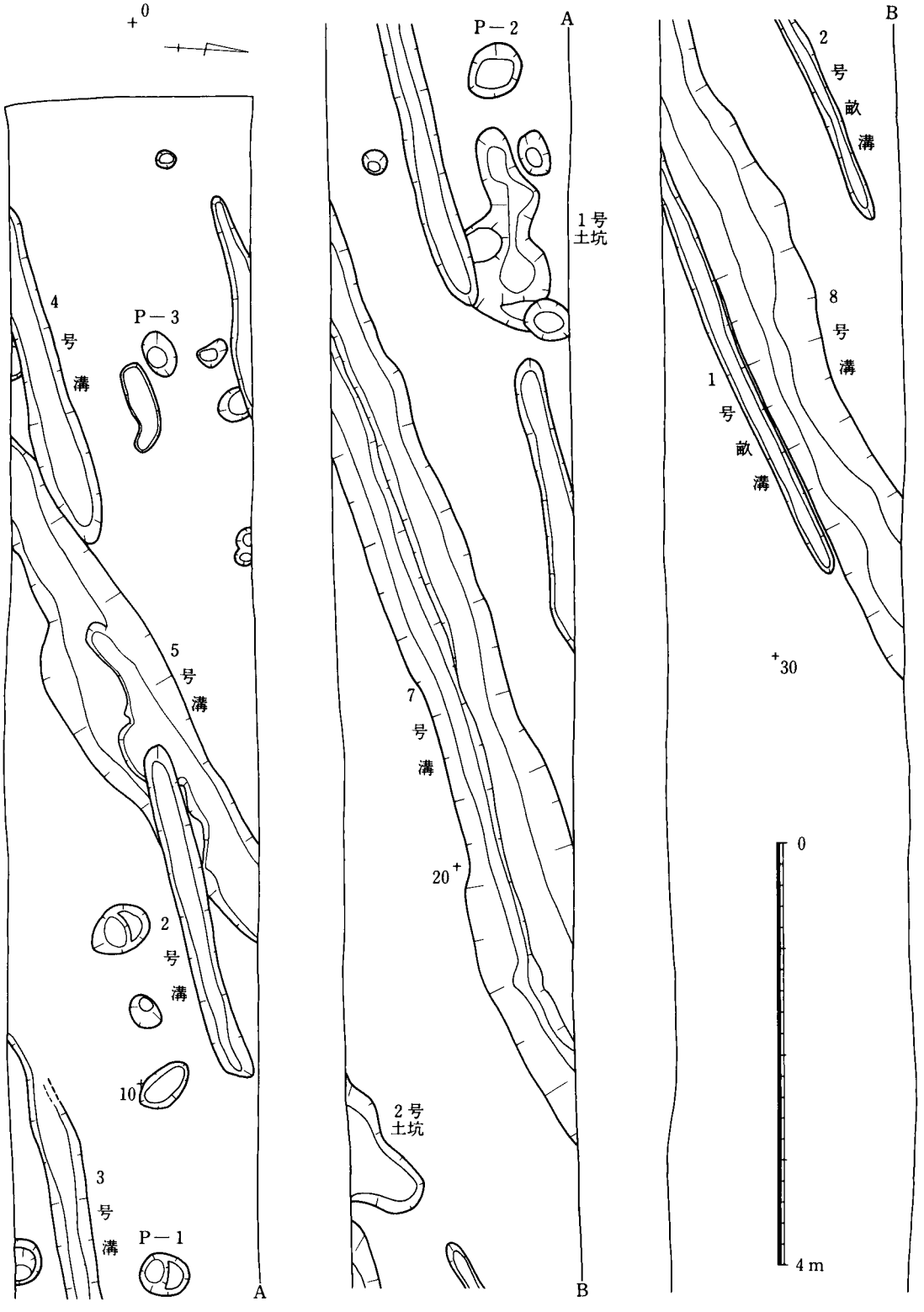
12号溝　116m地点から調査区を縦走するように検出された溝で、129m付近に溝端を持つ。深さは10cm程度である。

4号土坑　210cm×120cm以上、深さ50cmを測る隅丸長方形プランの土坑。坑壁は直に近く、礫群2・4を切り込むものである。

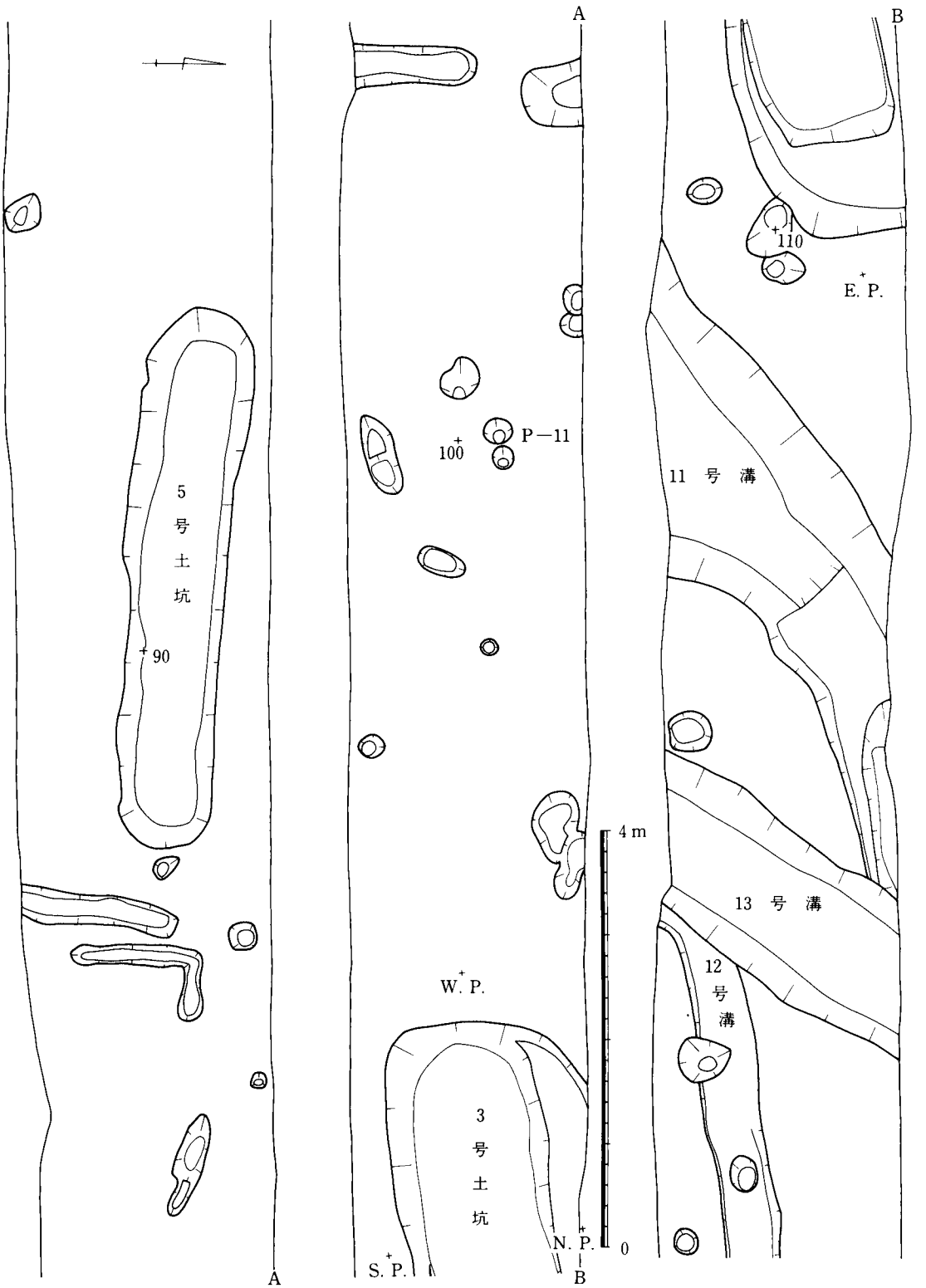
礫群　2トレンチの東端近くで拳大～小児頭大の河原石の平面的集中が4箇所検出された。これらを礫群1～4と呼んだ。全形のわかる礫群3の例では、110cm×60cm程度の不整方形の範囲に礫の集中が認められ、他のものについても規模に差はあるものの、長方形に近いプランを有するもののようである。これらは下位に掘り込みをともなっており、礫群2の場合、礫敷は坑底から5cm程度浮き上がった状況であった。検出当初は建物の礫石をうける根石かと想定しトレンチを南北に拡張したが、建物の存在を裏付ける証左は得られなかった。



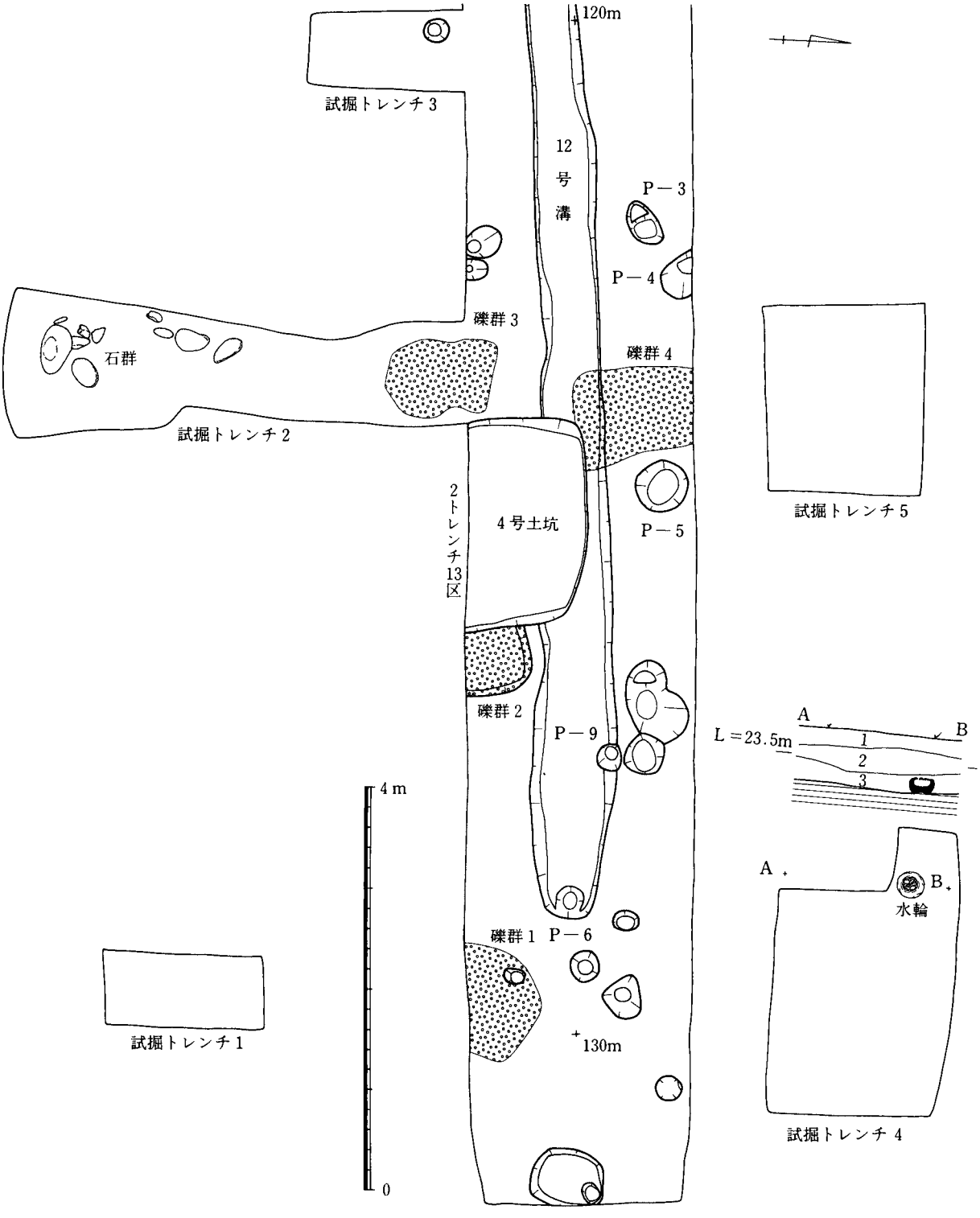
第24図　村井北遺跡調査区全体図（1/200）



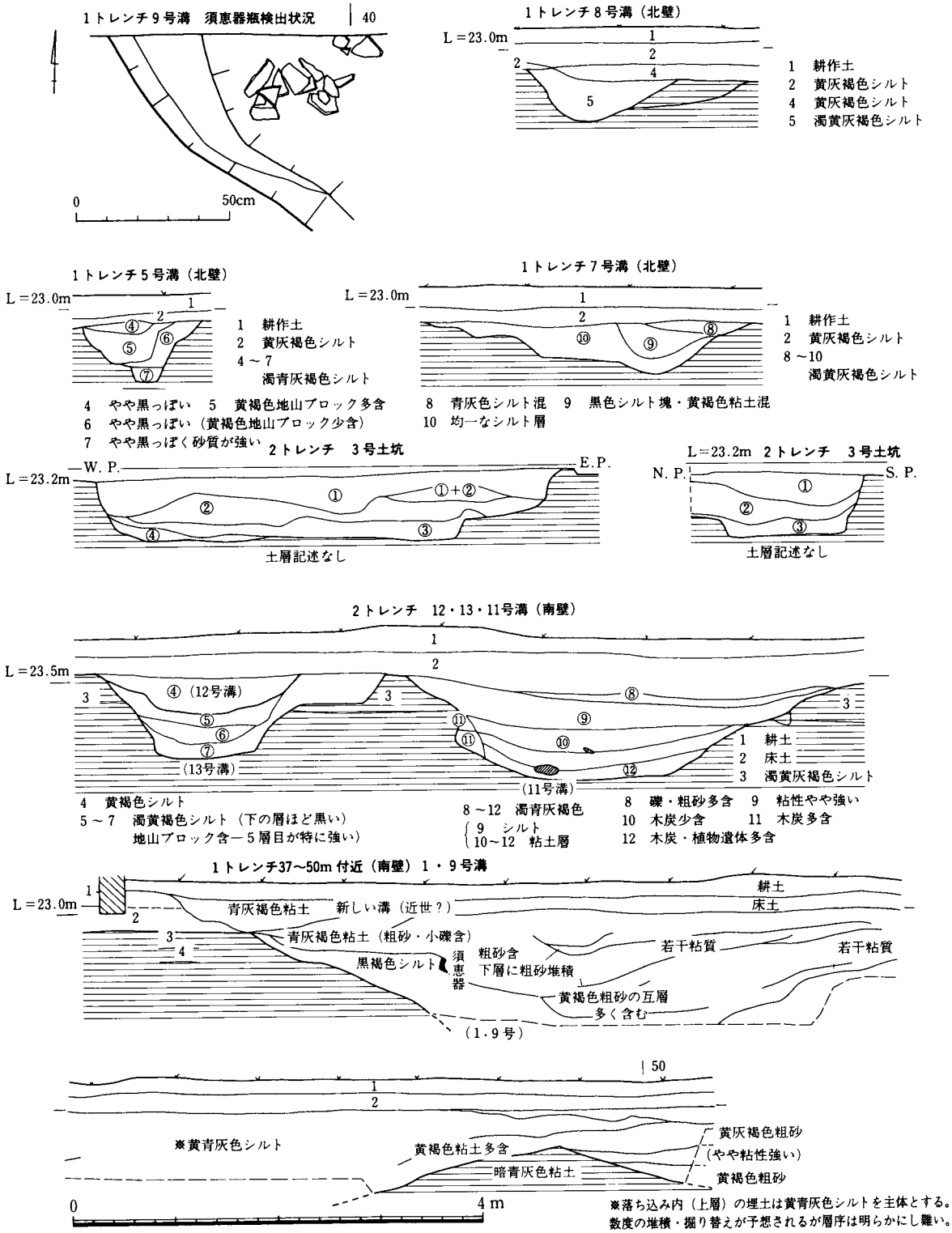
第25図　村井北遺跡１トレンチ遺構実測図（S＝1/60）



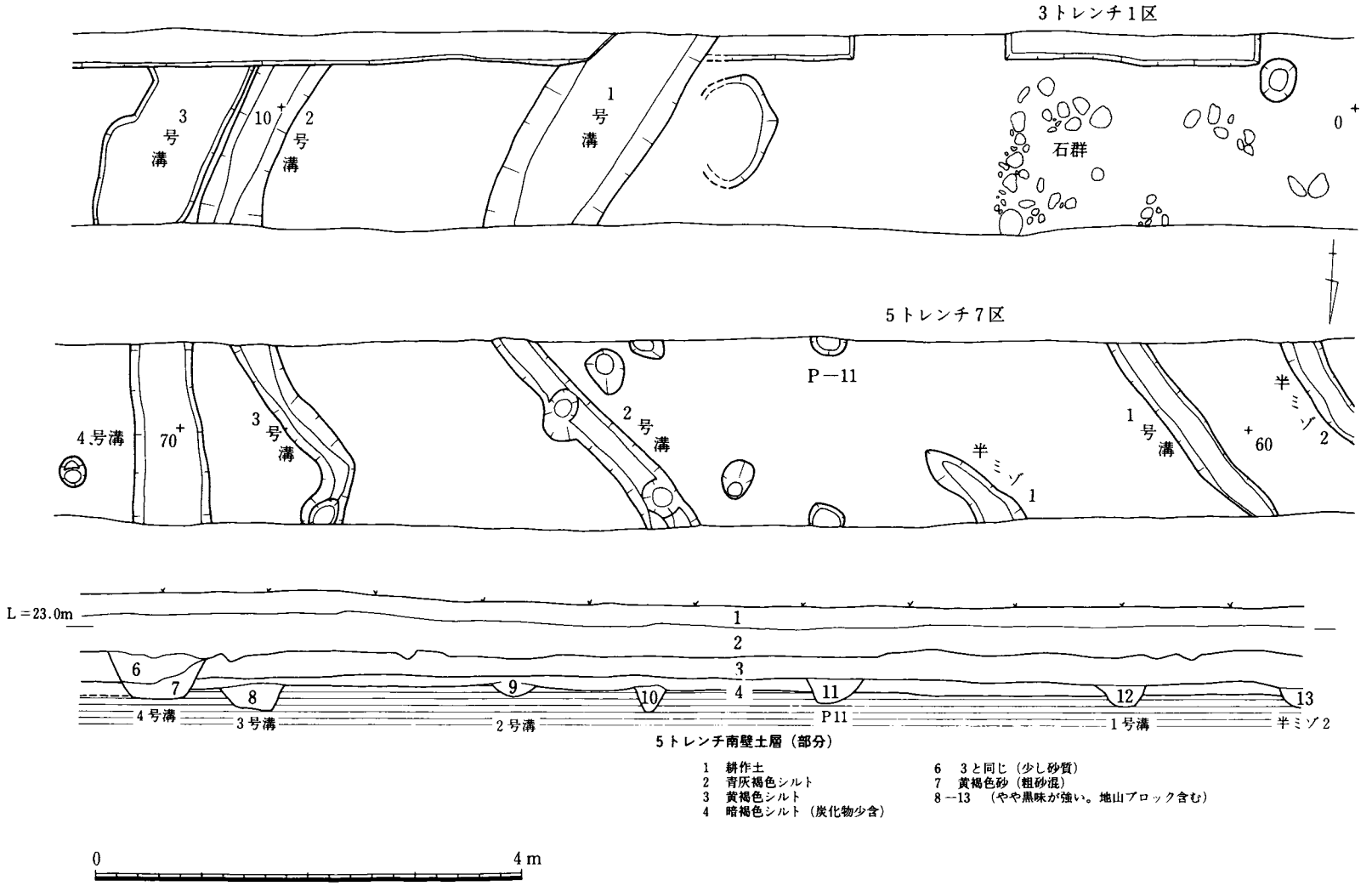
第 26 図　村井北遺跡 2 トレンチ遺構実測図 1 （S＝1/60）



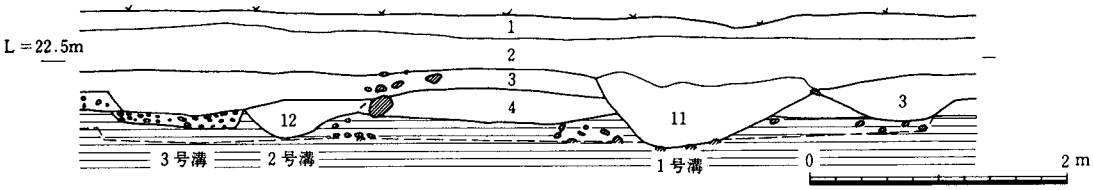
第27図　村井北遺跡2トレンチ遺構実測図2（S＝1/60）



第28図　村井北遺跡1・2トレンチ遺構実測図（S＝1/60）



第29図　村井北遺跡3・5トレンチ遺構実測図（S＝1/60）



1　耕作土　2　青灰褐色シルト　3　黄褐色シルト　4　暗褐色シルト　11　3に同じ（粘土塊含）　12　4に同じ

第30図　村井北遺跡3トレンチ南壁土層実測図（S＝1/60）

転用水輪（の埋置坑）　五輪塔の水輪の上面をえぐり、容器状に仕上げたもの（第33図34）が試掘トレンチ4から正置状態で出土している。土層断面において「第3層」出土であることが確認でき、また検出状況の写真から上面に上記の礫群に類似した施設をともなっていたと判断できることから、調査時には検出できなかったが、掘り込みをともなっていたものと解しておきたい。

その他　検出の状況は明らかでないが、2トレンチ12区の11号溝と13号溝の間からはややまとまって弥生時代後期に属する遺物の出土があった。

3　3トレンチ（第29図）

基本層序は耕作土（20cm）、青灰褐色シルト（35cm）、黄褐色シルト（10～15cm）、暗褐色シルトである。遺構には黄褐色シルト層を切り込むもの（1号溝）と暗褐色シルト層から切り込むもの（2・3号溝）がある。暗褐色シルト層除去後のレベルは3トレンチ西端で21.9mを測る。

1号溝　東西一北東方向にのびる溝で幅110cm、深さ55cmを測る。鉄釉陶器片出土。

2号溝　幅50cm、深さ30cmを測る溝。

3号溝　幅80～100cm、深さ10cmを測る溝で、多量の礫を含む埋土を持つ。

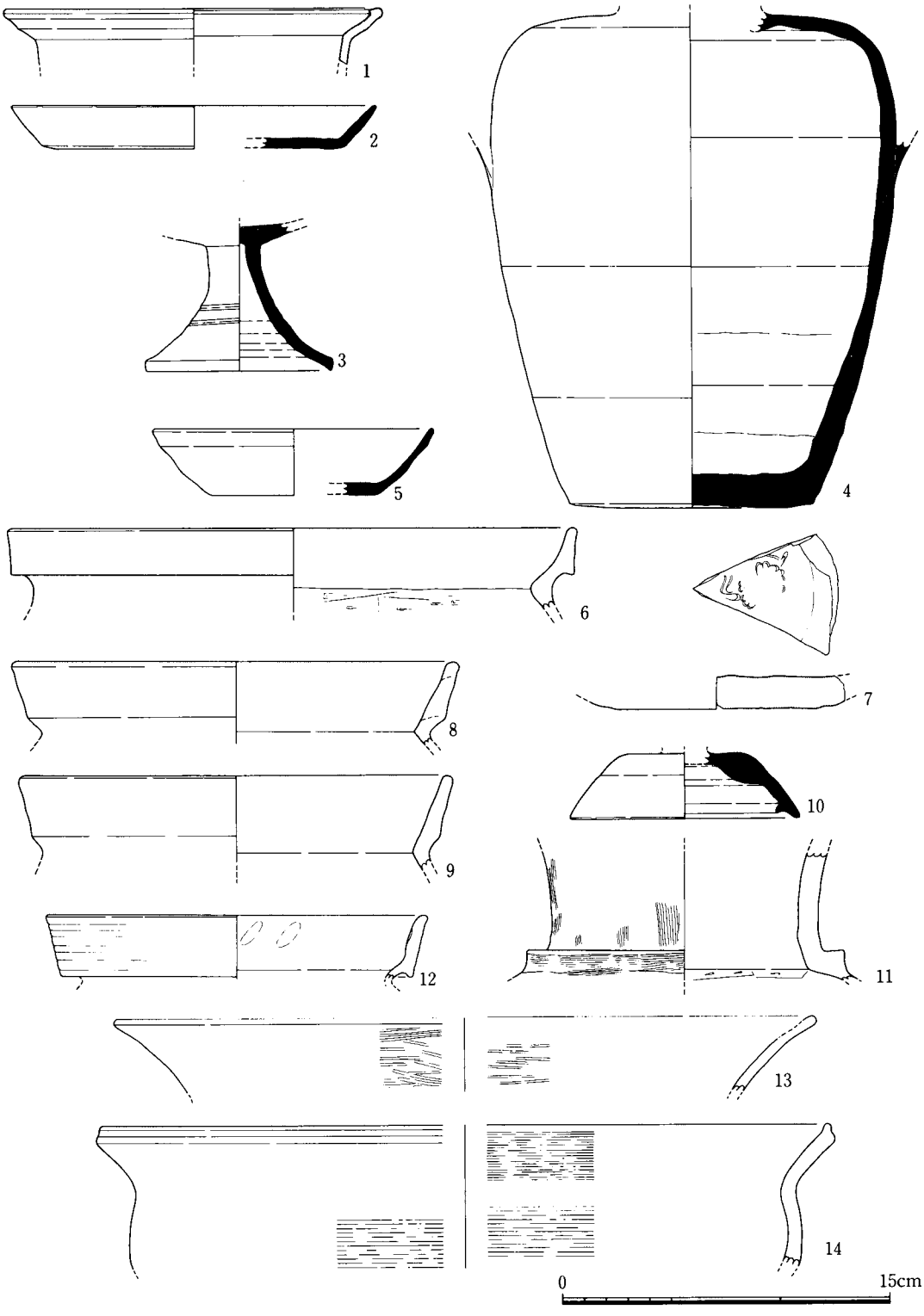
その他　3トレンチ西部においては遺構検出面に多量の礫が検出された箇所がある（5m付近）。現地調査においては当初、遺構かと考え精査したが、自然の営力に因るものと判断されるにいたった。

4　4トレンチ

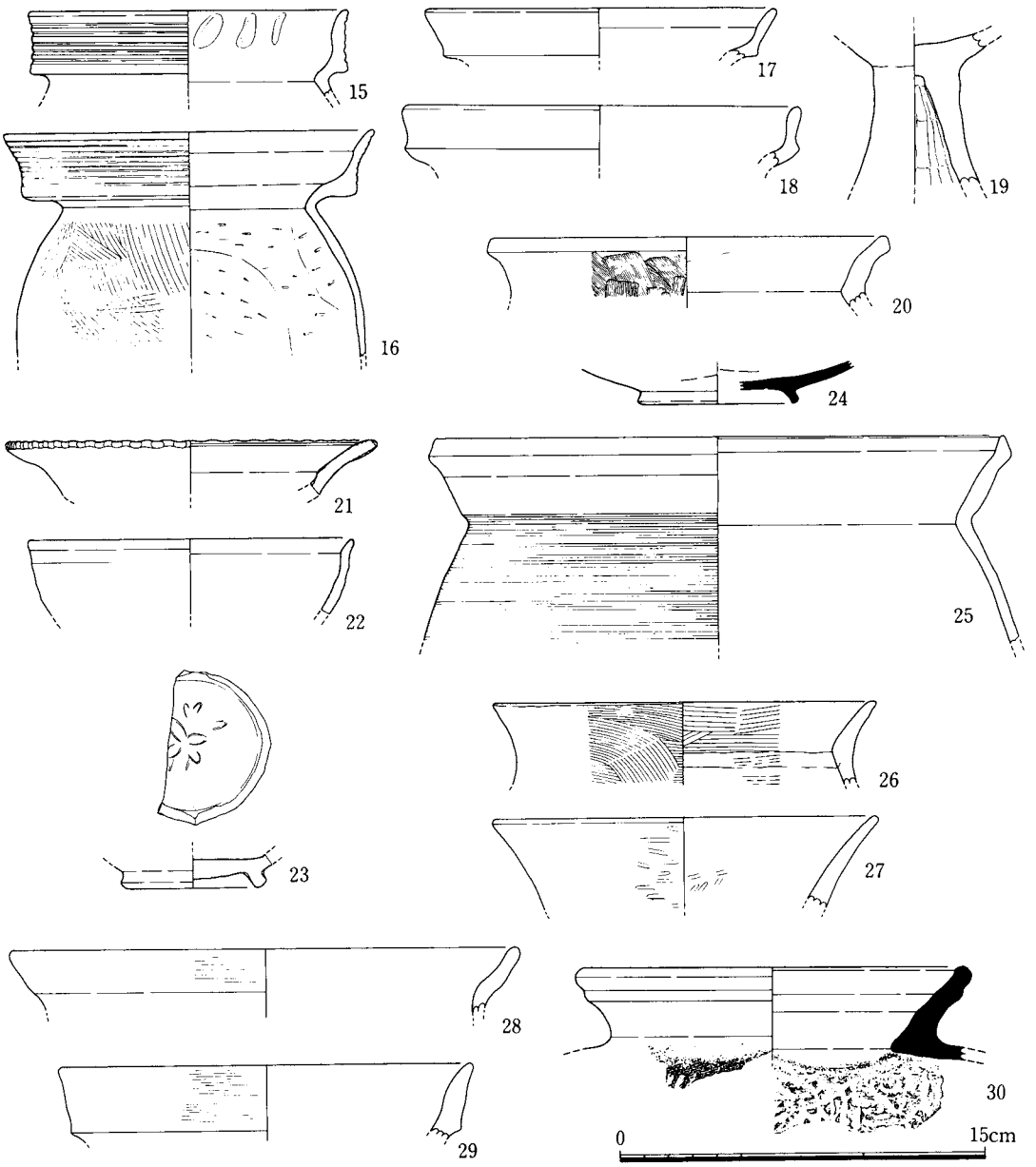
4トレンチでは遺構・遺物の検出はない。検出面相当と考えた土層面の標高は22.2m前後である。

5　5トレンチ（第29図）

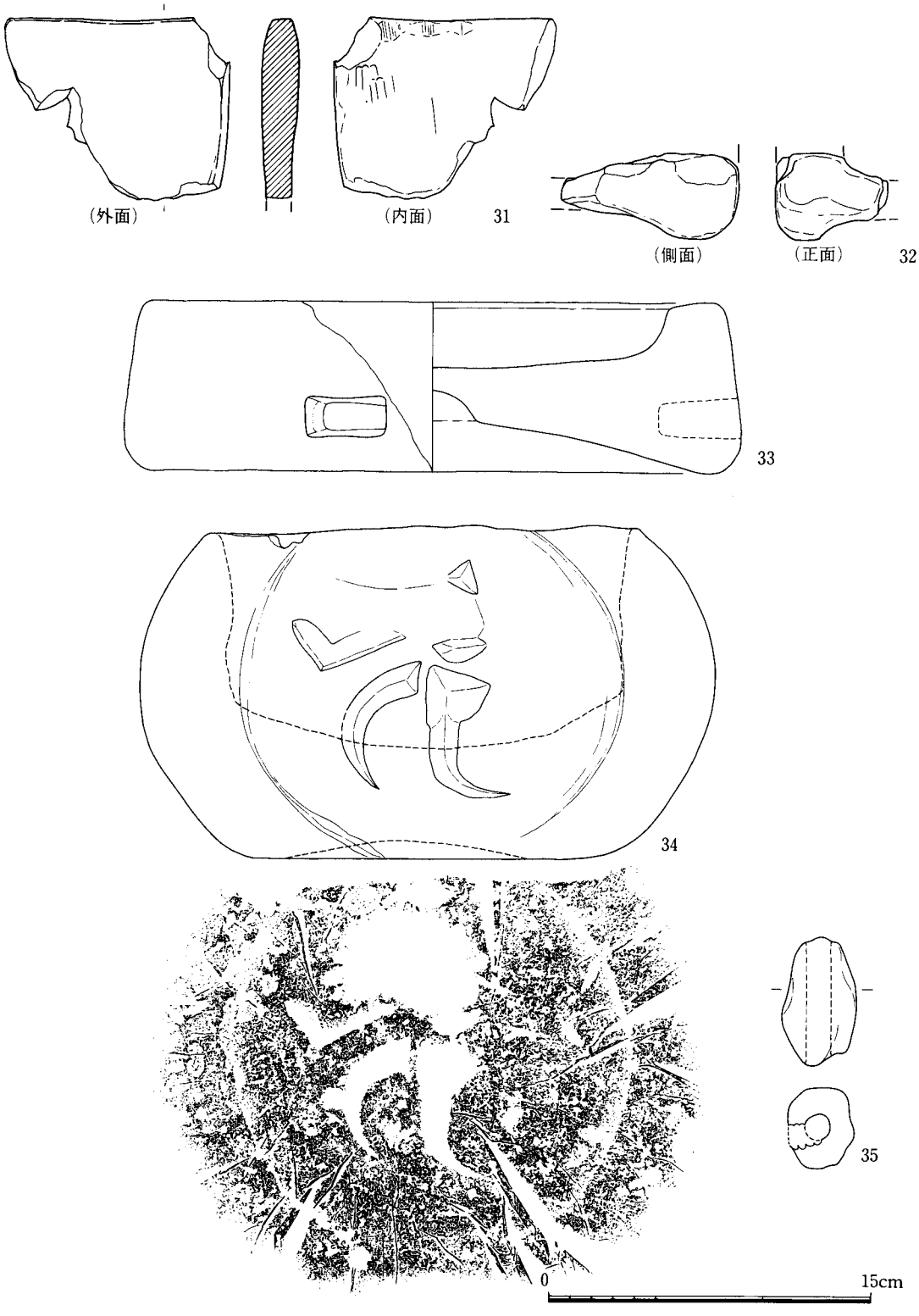
層序は第1層耕作土（20cm）、第2層青灰褐色シルト（40cm）、第3層黄褐色シルト（30～40cm）、第4層暗褐色シルトである。なお、3トレンチの起点から82m以東においては第3層と第4層の間に濁青灰褐色シルトの堆積（最大厚5cm程度）が認められる。土層断面図によれば、第3層上面に小溝状の起状（幅15～30cm程度）が認められる他、遺構の切込み面が複数あったものとみら



第31図　村井北遺跡出土遺物実測図１（S＝1/3）



第32図　村井北遺跡出土遺物実測図２（S＝1/3）



第33図　村井北遺跡出土遺物実測図３（Ｓ＝1/3）

第1表　村井北遺跡出土遺物観察表

No.	出土地(遺構)	種別	器種	口径／底径／器高(cm)	調整	胎土	色調	備考
1	1トレ1号溝	陶器	鉢か	(17.2) ／……／……		素地灰白色	釉は淡黄緑色	
2	1トレ1号溝	須恵器	皿	(16.7) ／(12.6) ／2.0	ロクロナデ	白色砂粒含	淡青灰色	
3	1トレ8号溝	須恵器	高杯	……／8.4／……	ロクロナデ	白色砂粒含　黒色吹出物	淡灰色	降灰
4	1トレ9号溝	須恵器	瓶	……／11.1／……	ロクロナデ	白色砂粒含	淡青灰色	外面・内底面に降灰
5	1トレ5号溝	須恵器	杯	(12.8) ／(7.7) ／(3.1)	ロクロナデ	白色砂粒含	セピア色	
6	1トレ5号溝	弥生	甕		ヨコナデ	0.2マデ	淡灰褐色	
7	2トレ11号溝	青磁	(底部)	……／ (9.1) ／……	外底面釉掻き取り	灰白色	釉は厚く緑灰色	漆継ぎ痕・見込に陰刻文
8	2トレ11号溝	弥生	甕	(20) ／……／……	ヨコナデ	0.3マデ	灰褐色	外面スス
9	2トレ11号溝上面	弥生	甕		ヨコナデ	0.3マデ	灰褐色	
10	2トレ13号溝	須恵器	杯甕	(10.4) ／……／……	ロクロナデ	白色砂粒含　黒色吹出物	灰白色	外面降灰・試トレ4出土分と接合
11	2トレ13号溝	弥生	壺	(頸部12.2) ／……／……	内ナデ・ケズリ　外タテハケメ（＋ヘラミガキか）	0.2マデ	明灰茶色	立上がり部に突帯
12	2トレP6	弥生	甕		ヨコナデ	0.2マデ	明灰茶色	有段擬凹線
13	2トレP3	弥生	高杯		ヨコヘラミガキ	0.1マデ少含	明灰茶色	肥厚帯剝落
14	2トレP9	土師器	鍋		内カキメ　外ヨコナデ・カキメ	0.3マデ	浅黄橙色	
15	2トレ12区	弥生	甕	(13) ／……／……	ヨコナデ	0.3マデ少含	明灰茶色	外面スス
16	2トレ12区	弥生	甕	15.4／……／……	口縁部ヨコナデ　体部内ケズリ　外ハケメ	0.3マデ	明灰茶色	外面スス
17	2トレ12区	弥生	甕		ヨコナデ	0.2マデ	灰茶色	外面スス
18	2トレ12区	弥生	甕		ヨコナデ	0.3マデ	明灰茶色	外面スス
19	2トレ12区	弥生	高杯		脚内シボリメ　他ヘラミガキか	0.2マデ	明灰茶色	
20	2トレ不明	弥生	甕		内ヨコ方向ナデ　外ナナメ～タテハケメ	0.2マデ	淡赤茶色	
21	2トレ試堀5	青磁	稜花皿	(15) ／……／……	口縁内面に沈線三条	素地白色	釉は淡青緑色	粗い貫入あり
22	2トレ試堀5	鉄釉	椀	(13.4) ／……／……		素地灰白色	釉は淡茶色～漆黒色	
23	2トレ試堀5	灰釉	(底部)	……／5.6 ／……	外底面釉掻き取り	素地灰白色	釉は淡緑灰色	見込に陰刻文
24	2トレ試堀4	灰釉	皿	……／ (6.1) ／……	ロクロナデ	精良　灰白色	釉は淡黄緑色	三日月高台　釉ツケガケ
25	2トレ試堀4	土師器	甕		口縁部ヨコナデ　体内ヨコハケメ　外カキメ	0.3マデ	内面橙灰色　外面明灰茶色	
26	5トレ3号溝	弥生	甕		内ヨコハケメ　外ヨコ～タテハケメ	0.2マデ	灰褐色	外面スス
27	5トレ3号溝	弥生	器台	……／ (15.6) ／……	ヘラミガキ	0.2マデ	橙茶色	
28	5トレ包含層	弥生	甕		ヨコナデ	0.2マデ	橙茶色	外面スス
29	不明	弥生	甕		ヨコナデ	0.1マデ	黄橙色	
30	表面採集	須恵器	横瓶	(15.6) ／……／……	口縁部ロクロナデ	黒色微粒多含	灰白色	降灰
31	2トレ試堀5	凝灰岩製	鉢か		内工具痕			
32	1トレ1号溝	凝灰岩製	行火か					被熱
33	2トレ11号溝	凝灰岩製	石臼(上臼)	径27.4／高15.6	(風化著しい)			挽き木礼長方形 (4.3*1.9)
34	2トレ試堀4	凝灰岩製	水輪	径26.9／高15.6	抉り込み径19.5／深10.5			種子［パン］再加工品
35	2トレ土坑3	土師質	土錘	長6.2／幅3.4／現存重35.5g	棒巻成形（孔径1.2）	精良	橙茶色	1/4を欠

れる。ここで報告するものは現地調査の最終面（第4層除去後）において記録されたデータを基にしている。

1号溝　第4層から切り込むもので南東一北西方向に直線的に延びる。幅30cm、深さ20cmを測る。

2号溝　第4層下から切り込む溝で、幅35cm前後、深さ15cm程度。

3号溝　第4層下から切り込む。調査区内で屈折して南東及び北東に延びるもので、幅35cm、深さ10cmを測る。遺物は少量ながら、弥生時代後期のものに限られる。

4号溝　第3層から切り込むもので南北方向に延びる。土層断面から幅90cm、深さ40cm程度の規模を有していたものとみられる。

その他　「半ミゾ」とした幅20cm、深さ5cm内外の畝溝状遺構、若干のピットの検出があった。

第2節　出土遺物

出土した遺物（第31～33図、第1表）は弥生時代～近代にかけての広い時期幅に及ぶ。土器類の量は収納ケースにして(37×59×13cm) 2箱に納まる程度である。土器類以外のものには石臼・水輪などの石製品もある。

図化可能なものについては殆ど全てを本章に記載することができた。詳細は観察表に譲る。

第3節　小　　結

今回の調査では複雑多岐にわたるであろう村井北遺跡の複合遺跡としての実態の一端をかいま見ることとなった。遺構の切込み面が複数認められた地点もあり、扇状地における調査の難しさを示す事例でもあった。検出された遺構についてはその性格・年代についておさえることが困難と思われるものが多い。その中で2トレンチ東端で検出された礫群（及び再加工水輪埋置遺構）については骨片などの出土は確認できなかったものの、墓の可能性が高いものと考えている。年代は中世後半期以降に位置づけられようが、今回の調査結果からは明確にし得なかった。今後他の類例と比較検討される機会があれば幸いである。

本章は調査地を見たこともない者がピンチヒッターとして行った報告であり、当時の調査関係者の教示を仰いではいるものの、調査の内容を十分に伝えたものになったか心許ない点もある。至らぬ点については御賢察をお願いするとともに、当センターに保管される資料の永続的なご利用によって補っていただければ幸いである。

第５章　村井キヒダ遺跡

第１節　周辺の環境と調査概要

1　周辺の環境

村井キヒダ遺跡[1]（以下、本遺跡と呼称）は松任市村井町に位置する。周辺の地形は同心円状に拡がる扇状地が大きく東から西にゆるやかに傾斜し、現水田面で標高19.6～20.2mを測る。現在、武衛、中村の集落が「島」と呼ばれる微高地上に立地し、両集落の間、都市計画道路倉光・北安田線に沿って谷部が走る。本遺跡は武衛の集落からのびる微高地上先端付近に位置している。

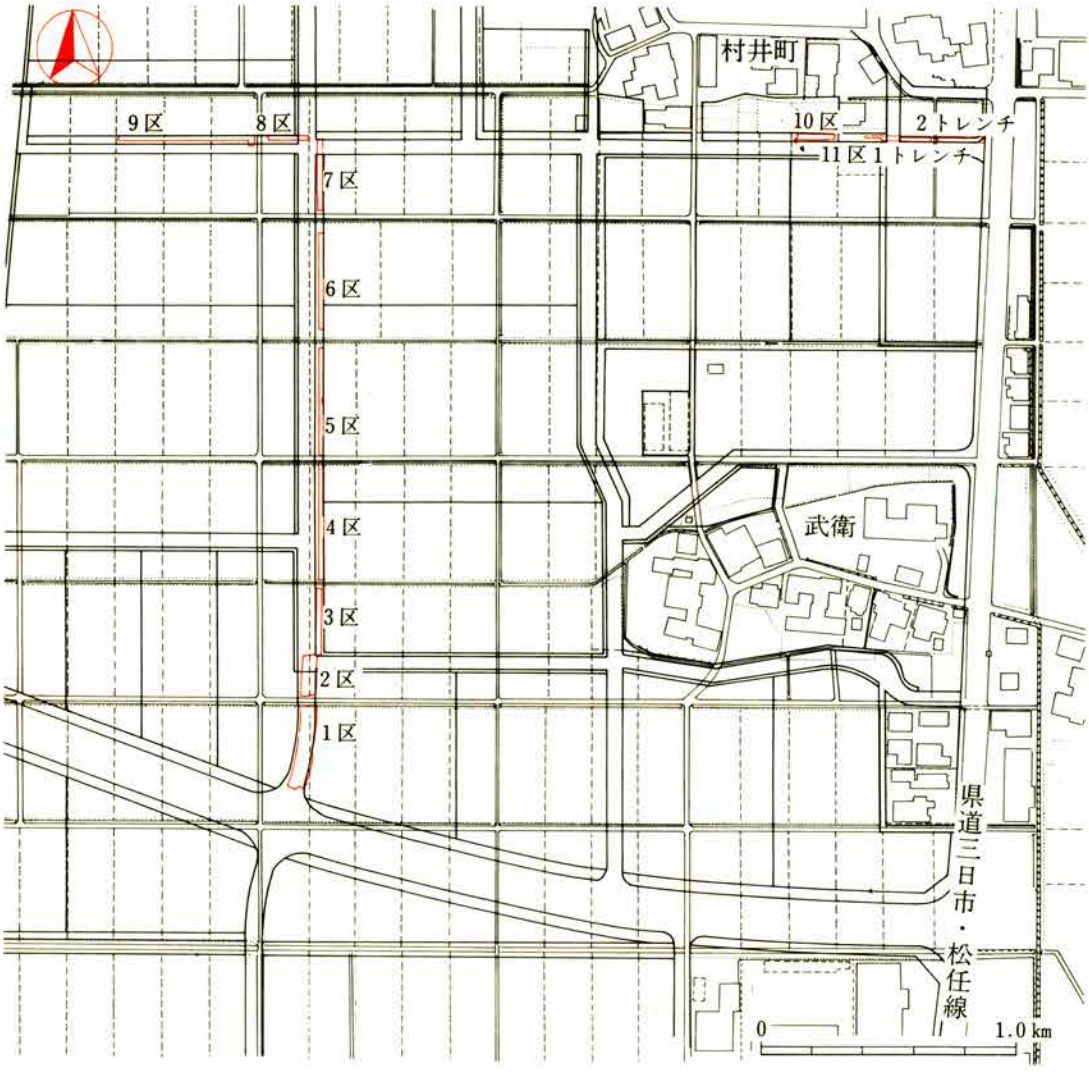
次に周辺の遺跡についてだが、本遺跡の南西側約100mの都市計画道路倉光･北安田線を中心として中村ゴウデン遺跡(弥生後期、奈良、平安末～鎌倉)、南側約150mに村井備中守館跡(室町)、東側約150mに中村遺跡（奈良)、今回の調査区10、11区を含んで北川遺跡が存在する。また、分布調査の結果から工区西側を中心として広い範囲に包含層、遺物が確認されている。各時代の比較的規模の小さい遺跡が近接して点在するものと考えられる。

既応の調査としては、先述した中村ゴウデン遺跡が松任市教育委員会により発掘調査が実施されている[2]。12世紀前半を中心とする土坑群(うち１基は漆で囲めた烏帽子を埋納した木棺墓)、３棟の掘立柱建物が検出され、本遺跡との関係で注目される。同時に検出された弥生時代後期の遺構は今回の発掘調査区までのびていないようである。

2　調査概要

発掘調査対象箇所は農道部分と排水路設置箇所であり（第34図)、総面積は約1,180m²を測る。排水路設置箇所では幅２mの調査区を設定している。調査区は農道、排水路等でトレンチの途切れる箇所を目安とし、１～11区に分けた。また11区を１、２トレンチに細分した。３～７区の主軸は排水路の中心線（N－O）の延長線上にある。その基点は、その延長線が都市計画道路と交差する地点より北側10.30mに設定している。３～７区は基点より47～225mまでである。次に１、２区の主軸線は３～７区の主軸線を西側に3.80m平行移動して求めている。基点は３～７区のものをやはり西側に平行移動した。８、９区の基点は、２～７区の主軸線上、基点より北側255.40mの地点から3.17m西に折れた排水路中心線上（N－90－E）に設定した。10区は、ほ場整備前の畦畔ブロック西端を基点とし、排水路中心線上に主軸を設定している。11区は県道三日市・松任線西側の既設の用水路西側肩部を基点に、排水路中心線上に主軸を設定している。

次に発掘調査の概要について述べる。１区北側～３区南側にかけては室町時代(15世紀後半～16世紀前半)を中心とする火葬施設と思われる土坑群が検出されている。いわゆる〝火葬場〟〝三昧〟といわれるものである。近世以降に焼却炉が共同使用される以前の形態をとどめており、県内ではあまり類例を見ない性格の遺跡といえる。南側の境界は先に述べた地形の傾斜により画され、



第34図　村井キヒダ遺跡調査区配置図

北側の境界は3区3～5号溝で人工的に画されている。東西の遺跡の範囲は不明である。また、自然によるものか否かはわからないものの、10～30cm大の円石が多数散乱し、〝賽の河原〟を思わせる様相を呈する。埋葬施設は確認されておらず、他の場所で行われたと考えられる。

また、3区で東西方向に走る溝や土坑を検出している。出土遺物より11世紀末～12世紀前半を中心とした時期に位置付けられ、中村ゴウデン遺跡の一部と考えられる。なお、1～7区で検出された溝の大部分は主軸を東西にとっている。本地域は条里制の施行が想定されており[(3)]、注目される。

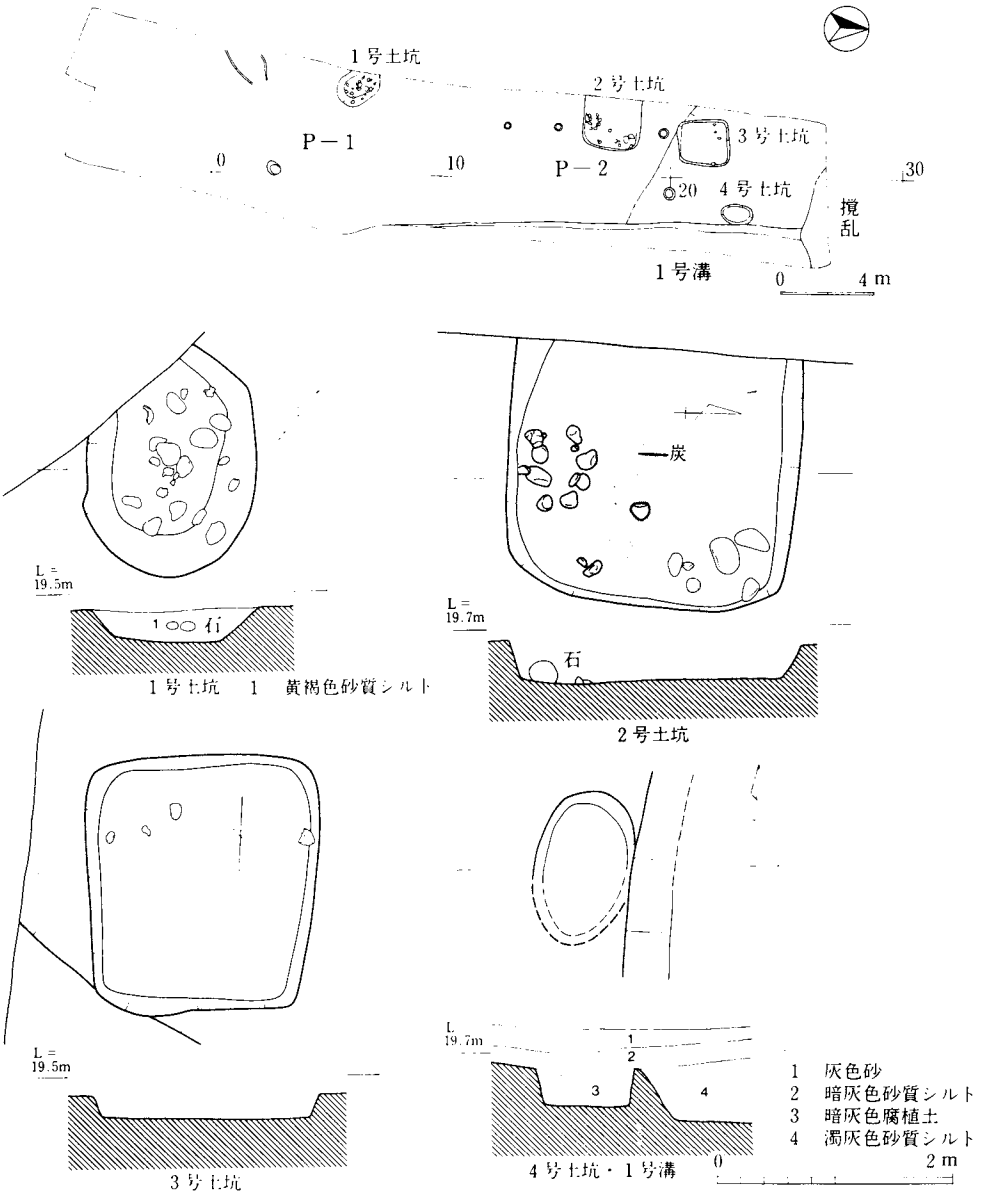
4～9区では、溝や土坑、ピット等の遺構を検出しているが、比較的遺構が稀薄な印象を受ける。周辺に点在する遺跡の縁辺部と思われる。出土遺物も少なく、時期を特定できる遺構もほとんどない。9区で古墳時代前期の遺物を含む灰色シルトの土層が確認されており、付近に同時代の遺跡が存在する可能性が高い。

10、11区は北川遺跡の一部である。溝、土坑若干を検出したが遺構の分布は疎であり、遺跡の縁辺部と思われる。平安時代の遺物が出土している。

第2節　遺　　構

1　1区（第35・36図）

検出面で標高19.4m前後を測り、ゆるやかに南側に傾斜する。基本土層層序は耕土、床土、黄灰色～灰褐色系砂質シルト、包含層(黄褐色砂質シルト)、地山となる。2区以北も基本的には同じである。遺構は調査区北側で土坑4基、溝1条が検出された。土層断面から3時期に分類でき

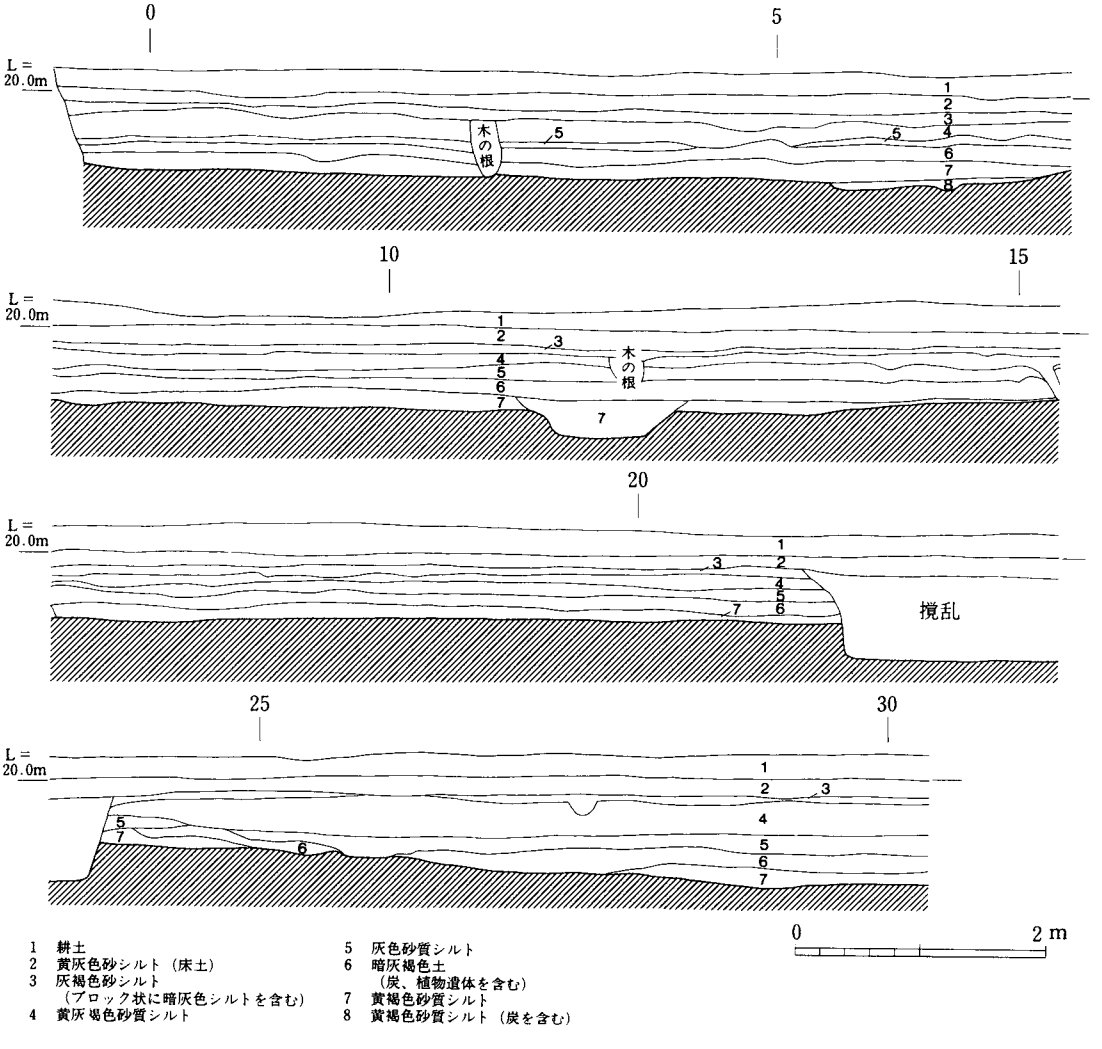


第35図　村井キヒダ遺跡1区遺構実測図

る。まず、第36図の黄灰色砂質土の地山をベースとする時期(3号土坑他)、同7をベースとする時期(1号土坑他)がある。出土遺物は15世紀後半～16世紀前半を中心とし、時期幅はそれ程大きくないようだ。次に同3をベースとする時期(2号土坑)があり、近世以降の可能性をもつ。

土坑

1号土坑は楕円形を呈し146×200cm以上、深さ約30cmを測る。覆土は黄褐色砂質シルトで10～20cm大の円石が床面に残る。一度に埋め込まれたと思われる。2号土坑は方形を呈し250×220cm以上、深さ約60cmを測る。やはり床面に10～30cm大の円石が残る。床面に薄く炭・灰層が残っており、何らかの焼成が行われている。ただし壁面はほとんど焼けていない。土層の記述なし。3号土坑は方形で223×193cm、深さ約20cmを測る。壁はまっすぐ立ち上がる。土層の記述なし。4号土坑は楕円形を呈するものと思われ、1号溝に切られている。覆土は暗灰色腐植土で、壁はまっすぐ立ち上がる。



第36図　村井キヒダ遺跡1区西壁土層実測図(S=1/60)

溝

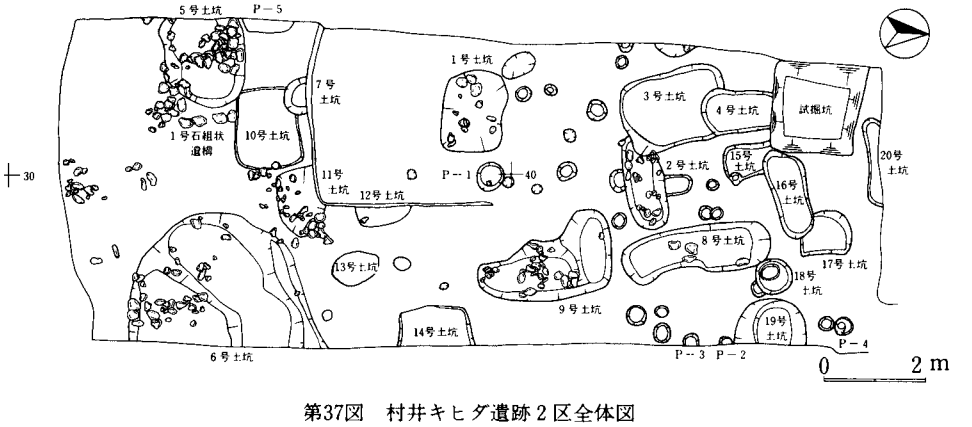
1号溝は主軸をほぼ南北方向にとり、北側に向かい流れていたと考えられる。深さ約40cmを測る。溝としての機能を失った後、濁灰色砂質シルトが自然堆積。その後、10～30cm大の円石を含む土で一度に埋め込まれている。須恵器、中世陶磁器、石製品等の出土遺物の大部分は同時に廃棄されたものと考えられる。〝火葬場〟の西側の境を画する可能性をもつが現状では不明である。

2　2区

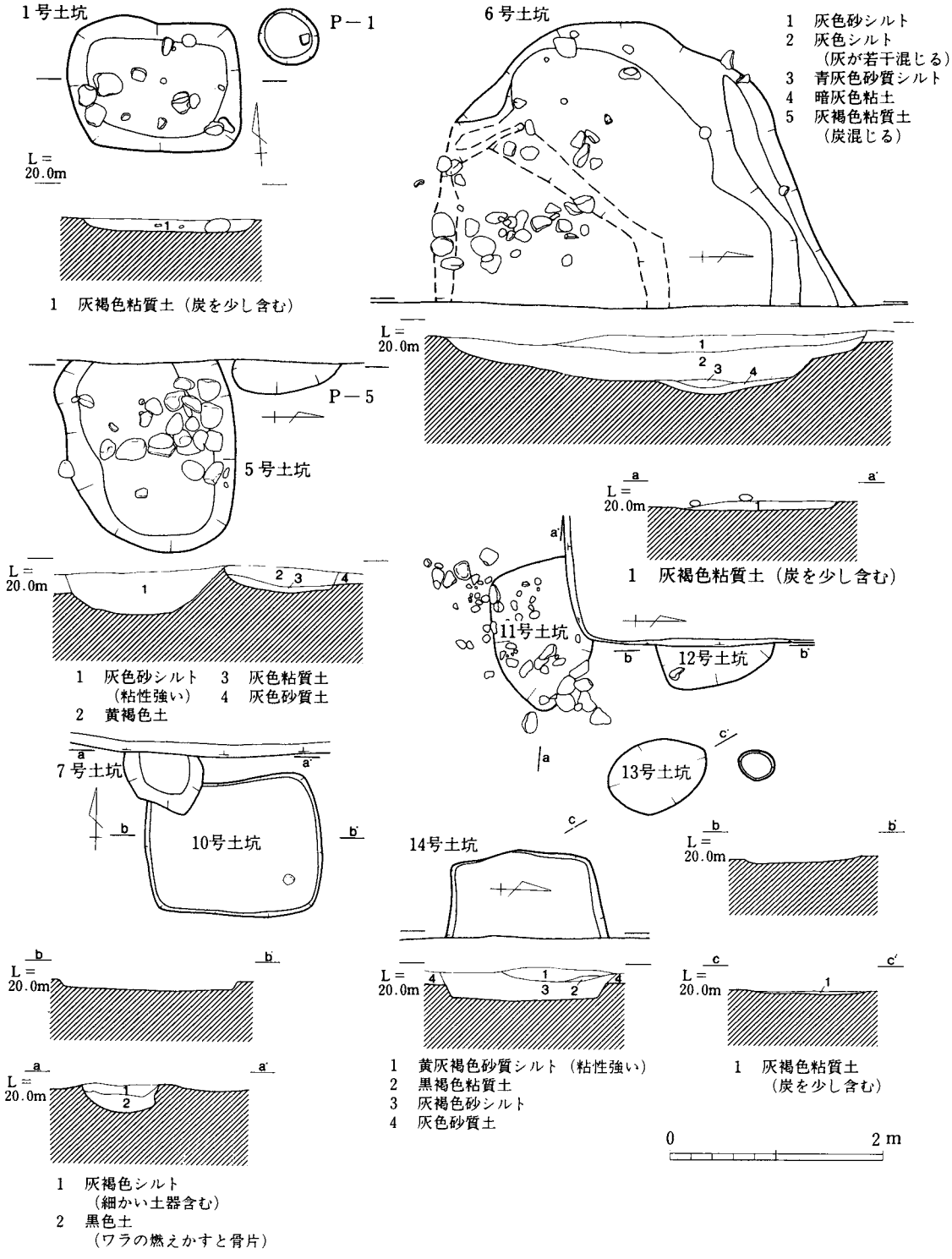
1区北側で確認された遺構群の続きが検出され、本遺跡の中心域と思われる。室町時代後期、15世紀前半～16世紀前半を中心にする火葬施設と考えられる土坑20基、石組状遺構1基、ピット多数が黄褐色砂質シルトをベース面として確認された。土坑全体の配置には何らかの規制は認めにくいものの、土坑自体の切りあいはそれ程多くない。また、個々の土坑は東西もしくは南北方向を主軸としている。6号土坑を除く土坑は平面形態から方形、長方形、楕円形、円形に分類でき、楕円形および円形の土坑が比較的小さい傾向をもつ。また、5～7、9号土坑を除く土坑の床面は平坦で、壁はまっすぐに立つ。大半の土坑は激しい熱による赤く変色した壁面は認められないものの、床面に炭、灰などの炭化物、焼けた石、細かい骨片が残り、火葬の痕跡が認められる。また、土坑出土遺物は意図的に設置された痕跡は認めにくく、火葬後の土坑埋め戻しまたはその後の自然堆積により混入したものと思われる。多数のピットのうち、火葬の行為などにともなう掘立柱建物の柱穴の可能性をもつものもあるが、明確にできなかった。なお、前述のとおり調査区全体に10～30cm大の円石が散在する。

土坑（第37～39図）

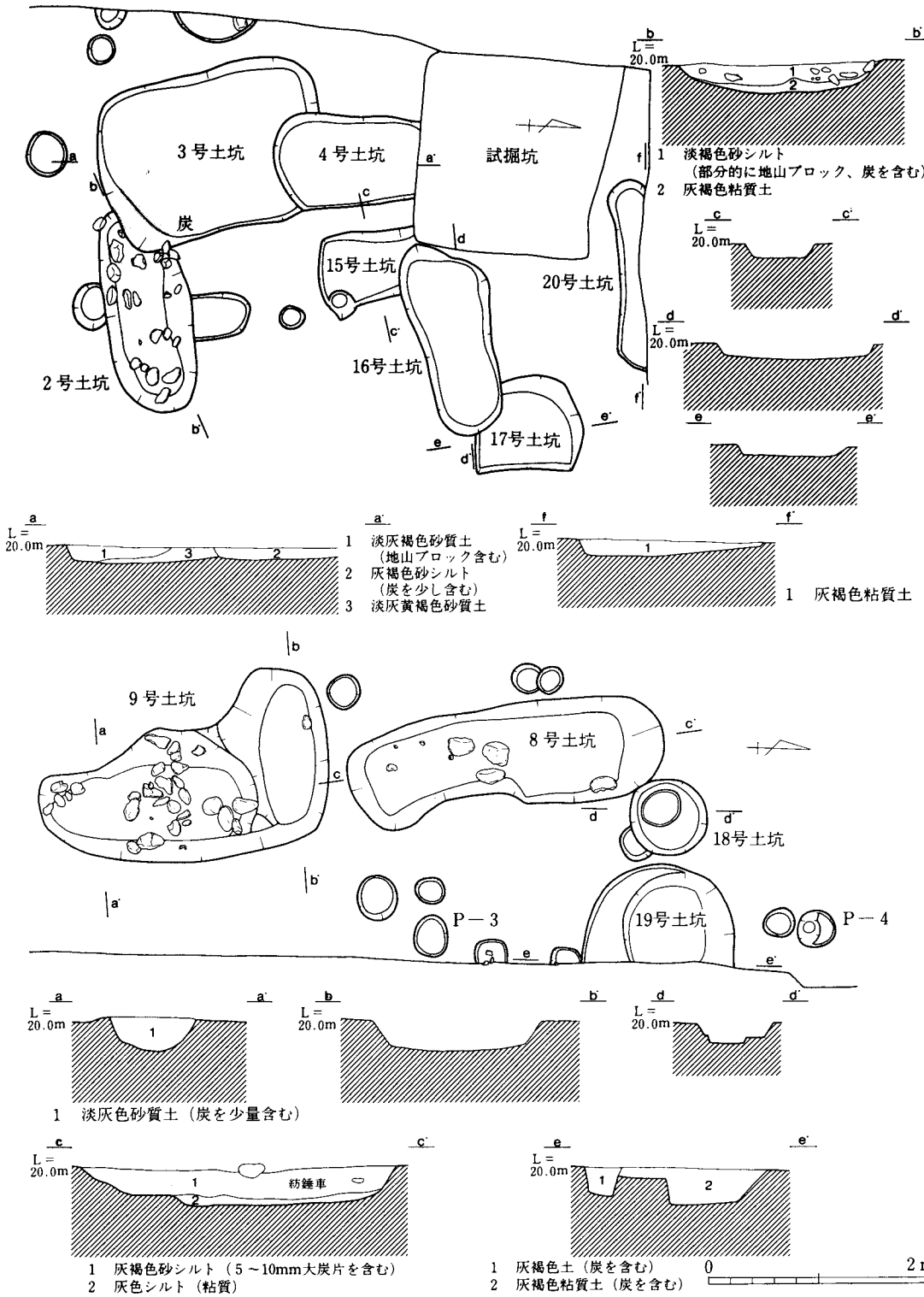
1号土坑は方形を呈し、160×122cmを測る。覆土は灰褐色粘質土で炭を含む。床面に円石が認められる。覆土中より越前焼甕片、青磁碗が出土している。2号土坑は隅丸長方形を呈し、194×78cmを測る。床面に円石が多く見受けられる。覆土中より熱を受けた越前焼甕片、青磁碗が出土している。3号土坑は210×146cmを測る。床面に薄い灰層が認められる。青磁碗が出土している。4号土坑はやや崩れた長方形を呈し、82×140cm以上を測る。3号土坑を切っている。5号土坑は楕円形を呈し、179×159cm以上、深さ約40cmを測る。平安時代の土師器椀、越前焼甕片が出土している。覆土は粘性の強い灰色砂シルトで、埋没後1号石組状遺構がつくられている。6号土坑



第37図　村井キヒダ遺跡2区全体図

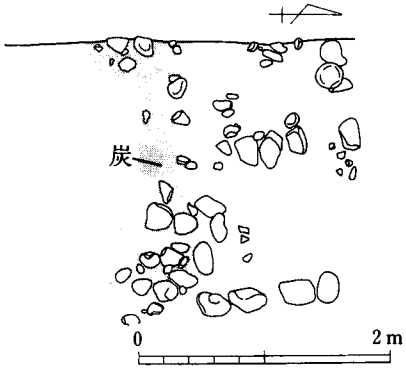


第38図　村井キヒダ遺跡２区遺構実測図１（S＝1/60）



第39図　村井キヒダ遺跡2区遺構実測図2（S＝1/60）

は他の土坑と規模、性格等が大きく異なる。覆土に20～30cm大の円石を多く含むことから明治以降の耕地整理時の石捨て用の穴とも考えられる。また凹状を呈した底部に炭層が認められることから、何らかの焼成がおこなわれたか、灰等の投棄が考えられる。7号土坑は写真図版17でみるように細かい骨片、焼け残りの藁等が検出されている。火葬施設としてもっとも残りがよい。8号土坑は294×93cmを測り、やや崩れた長方形を呈する。炭層を含む覆土中より碧玉製石製品が出土している。9号土坑は2つの土坑がL字状に切りあっている。いずれも隅丸の長方形であり、床面に炭、円石が認められる。10号土坑は方形を呈するのに対して、11号土坑は崩れた五角形状を呈する。12、13、15、17号土坑は長軸で1m前後を測る。残存状況はあまりよくない。14号土坑は灰色砂質土をベース面とし、方形を呈するものと思われる。規模不明。16号土坑は183×81cmを測り、やや崩れた長方形を呈する。18号土坑は径約70cm、深さ18cmを測り、円形を呈する。二段掘りがなされている。19号土坑も円形を呈し、深さ32cmを測る。覆土は炭を含む灰褐色粘質土である。20号土坑は長軸178cmを測る。床面はしっかりとしている。



第40図　2区1号石組状遺構実測図（S＝1/60）

1号石組状遺構（第40図）

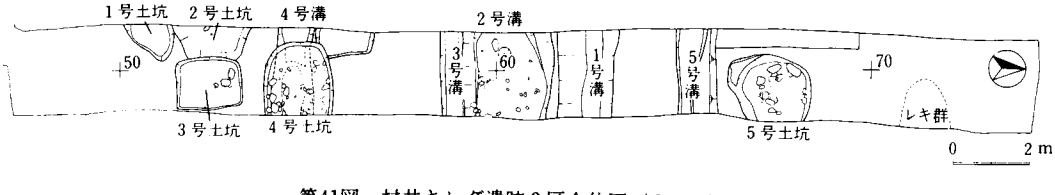
5号土坑が埋まった後につくられている。主軸を東西方向に取り、長軸210cm以上、短軸200～210cmを測る。20～30cm大の円石を組んである。方形に組まれた2つの火葬施設が連接している可能性が高い。東側の石組状遺構は北方向に開口しているようだ。遺構南側に炭層が認められる。

3　3区（第41・42図）

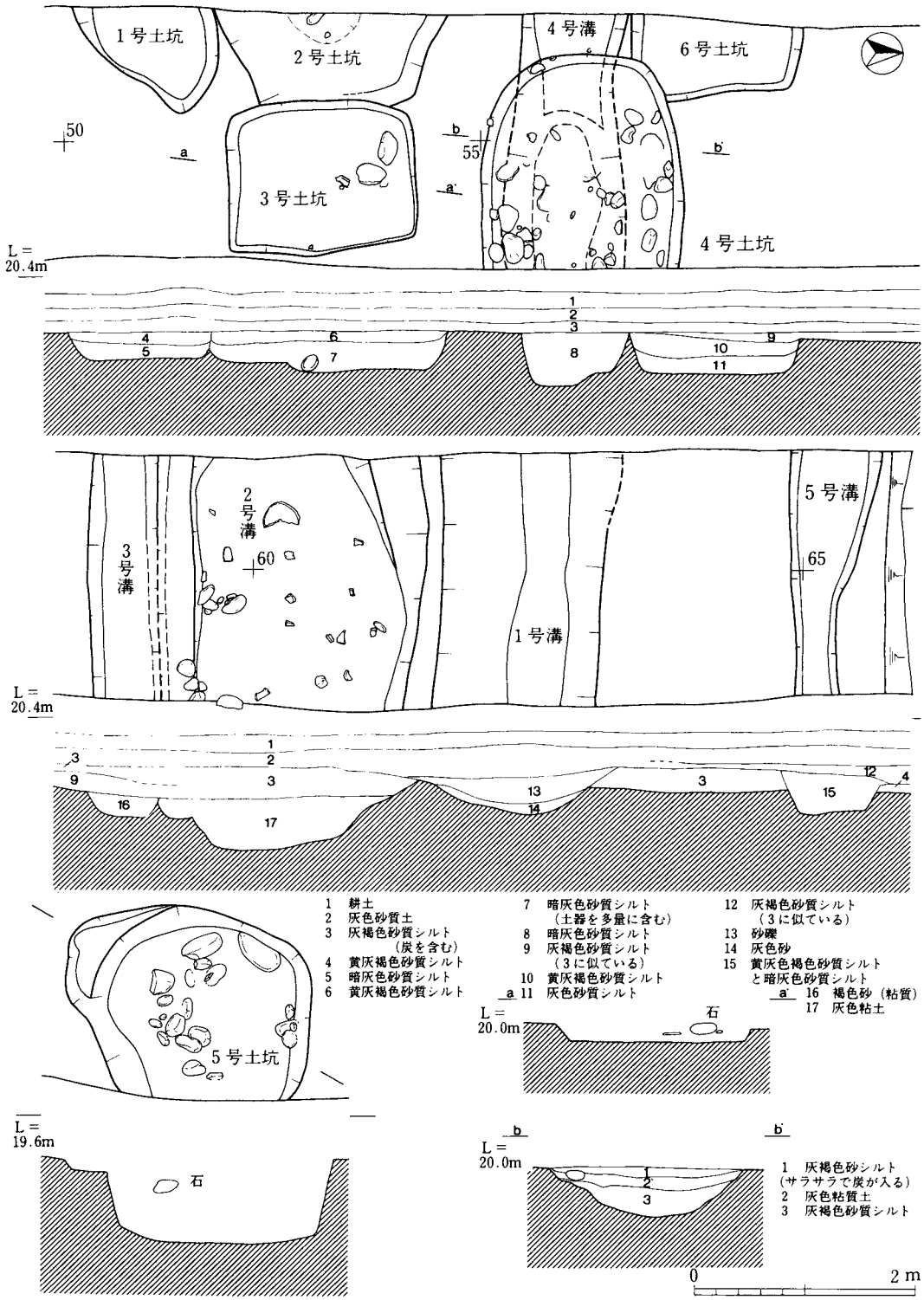
3区では土坑5基、溝5条が確認された。溝は全て東西方向に走る。出土遺物より大きく2時期に分けられる。1、2号土坑および4号溝は平安時代後期、12世紀前半を中心にする時期と考えられる。この時期の遺構は他の調査区では検出されていない。南西側に位置する中村ゴウデン遺跡の存続時期と重復し、関係が注目される。3～5号土坑および1～3、5号溝は2区の火葬場遺構の続きと考えられ、3区中央付近を東西に走る2、3号溝で画されている。その以北には火葬施設は検出されていない。また、1、5号溝は2、3号溝廃絶後に灰褐色砂質シルトをベースにして掘られており、若干の時期差をもつものと思われる。

土坑

1、2号土坑は深さ26～30cmを測る。いずれも糸切り痕の残る土師器椀が出土している。3号土坑は方形を呈し、170×140cm、深さ12cmを測る。床面に20cm大の円石が置かれ、壁はまっすぐ



第41図　村井キヒダ遺跡3区全体図（S＝1/200）



5号土坑

第42図　村井キヒダ遺跡3区遺構実測図（S＝1/60）

立ち上がる。図化しなかったが中世陶器片が出土している。4号土坑とともに火葬施設の可能性が高い。覆土不明。4号土坑は隅丸長方形を呈し、長軸200cm以上を測る。4号溝を切ってつくられている。覆土中に円石を多く含む。覆土はいわゆるレンズ状堆積である。珠洲焼片が出土。土層の記載なし。5号土坑はやや崩れた円形を呈し、南西側がやや張り出す。径約200cm、深さ約80cmを測る。底面は平坦で、壁はまっすぐ立ち上る。覆土中に投棄されたと思われる円石を多量に含む。出土遺物もその際に混入したものと思われる。発掘担当者は井戸との見解を示している。

溝

1号溝は幅150～170cm、深さ40～50cmを測る。覆土はいわゆるレンズ状堆積である。中世陶磁器片、石製品等が出土している。2号溝は幅240cm、深さ約60cmを測り、2段に掘りこまれている。覆土は灰色粘質土の単層で、20cm大の円石を多量に含む。珠洲焼、加賀焼等の中世陶器片、石臼などの石製品が出土している。1区1号溝とよく似た印象を受ける。3号溝は2号溝に接し、同じ方向に走る。2号溝と何らかの関連をもつと思われる。幅約70cm、深さ約20cmを測る。出土遺物なし。4号溝は幅約100cm、深さ約50cmを測り、肩部はしっかりとしている。覆土は暗灰色砂質シルトの単層。平安時代後期に位置づけられる糸切り痕の残る土師器椀が出土している。5号溝は1号溝とほぼ同じ時期に掘削されたと考えられる。幅40～80cm、深さ30～40cmを測る。覆土は黄灰褐色砂質シルトと暗灰色砂質シルトである。出土遺物なし。

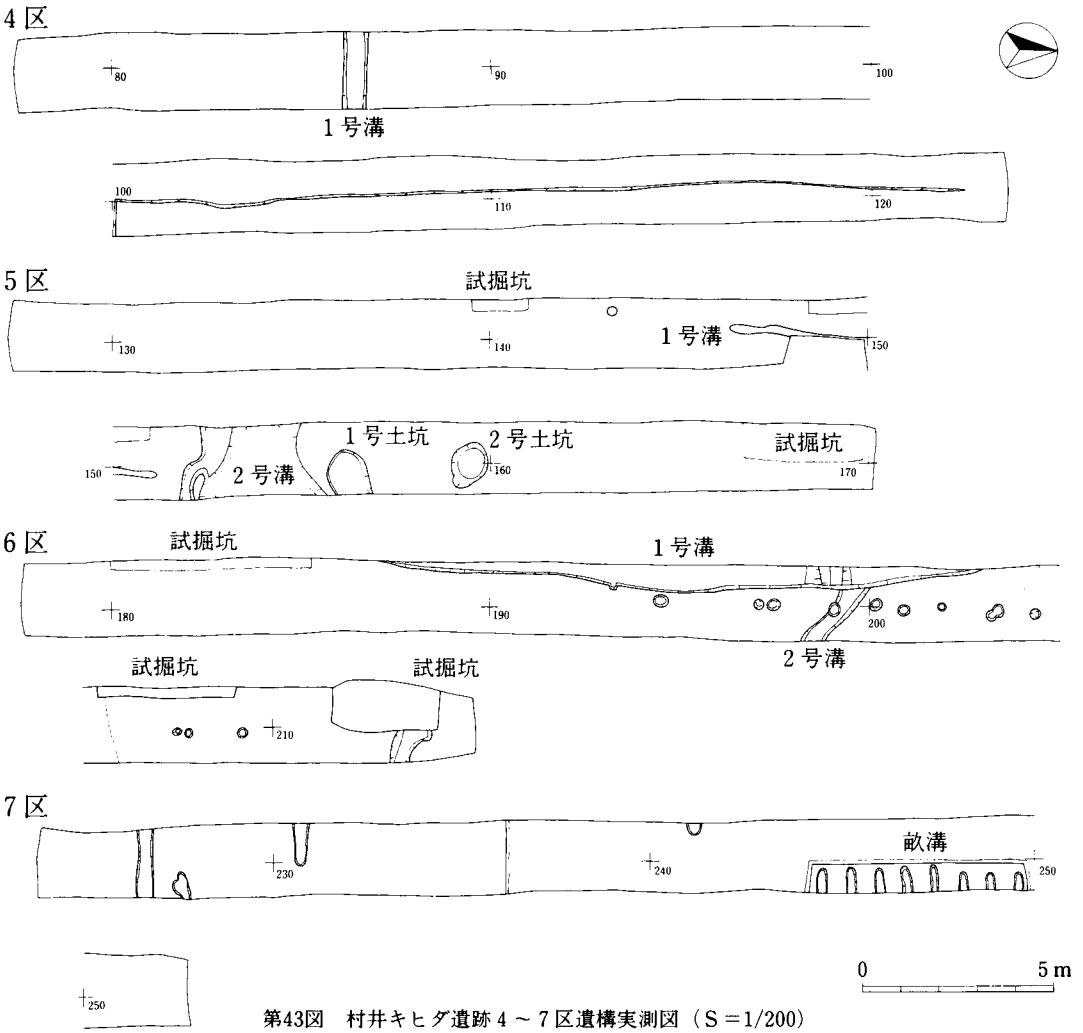
4　4～7区（第43・44図）

検出面で標高19.40～19.80mを測り、5区以北は北側にゆるやかに傾斜する。

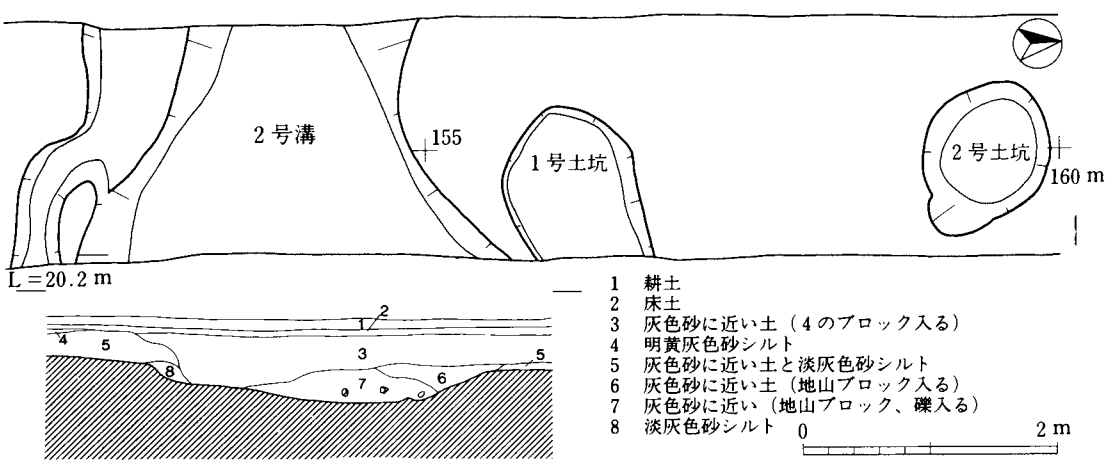
4区　1号溝は東西方向に走り、幅約70cm、深さ約20cmを測る。覆土は淡灰色砂シルトで、北側肩部に10～15cm大の円石が確認できる。時期不明。また、基点より100～120mにかけては遺構検出作業を灰色シルトと淡灰色シルトの2面（標高差約20cm）でおこなった。いずれからも明瞭な遺構は確認できず、包含層より弥生土器、中世陶磁器、中世土師質土器が少量出土したにとどまる。

5区　調査区中央付近で遺構を検出した。1号溝は幅約20cm、深さ3～5cmを測り、畝溝と考えられる。2号溝は幅240～400cm、深さ26cmを測る。東側で扇状に拡がり、南側肩部に平坦面をもつ。覆土は灰色砂で、底部近くでは地山ブロックが混じる。肩部立ち上がりは床土直下までのび、図化してないが近世以降の陶磁器が出土している。比較的新しい時期に属すると考えられる。1号土坑は深さ約15cmを測り、出土遺物なし。2号土坑は円形を呈し、径95～110cm、深さ約20cmを測る。出土遺物なし。

6区　1号溝は屈曲しながら南北に走ると考えられる。幅は不明で、深さは20～25cmを測る。壁はまっすぐ立ち上がり、底面は基点より199m付近で一度上がる。また、覆土は灰褐色砂質シルト～灰色砂である。図化しなかったが中世土師皿が出土している。2号溝は基点より199m付近で1号溝に合流する。幅約40cm、深さ10～20cmを測り、覆土は灰色砂である。また、1号溝と平行するピット列が検出された。径20～30cm、深さ20cm前後を測る。ハサ穴もしくは、1号溝と何らかの関連をもつと思われる。



第43図　村井キヒダ遺跡４～７区遺構実測図（S＝1/200）



第44図　村井キヒダ遺跡５区遺構実測図（S＝1/60）

7区　基点より245～250mにかけ、上面の検出面で東西方向に走る畝溝を検出した。幅約20cm、深さ約5cm、畝間隔70～80cmを測る。出土遺物はない。また、基点より235～253mの間は掘削面を下げ、遺構検出をおこなった。若干の弥生土器片が出土したが明確な遺構は検出できなかった。

5　8～11区（第45図）

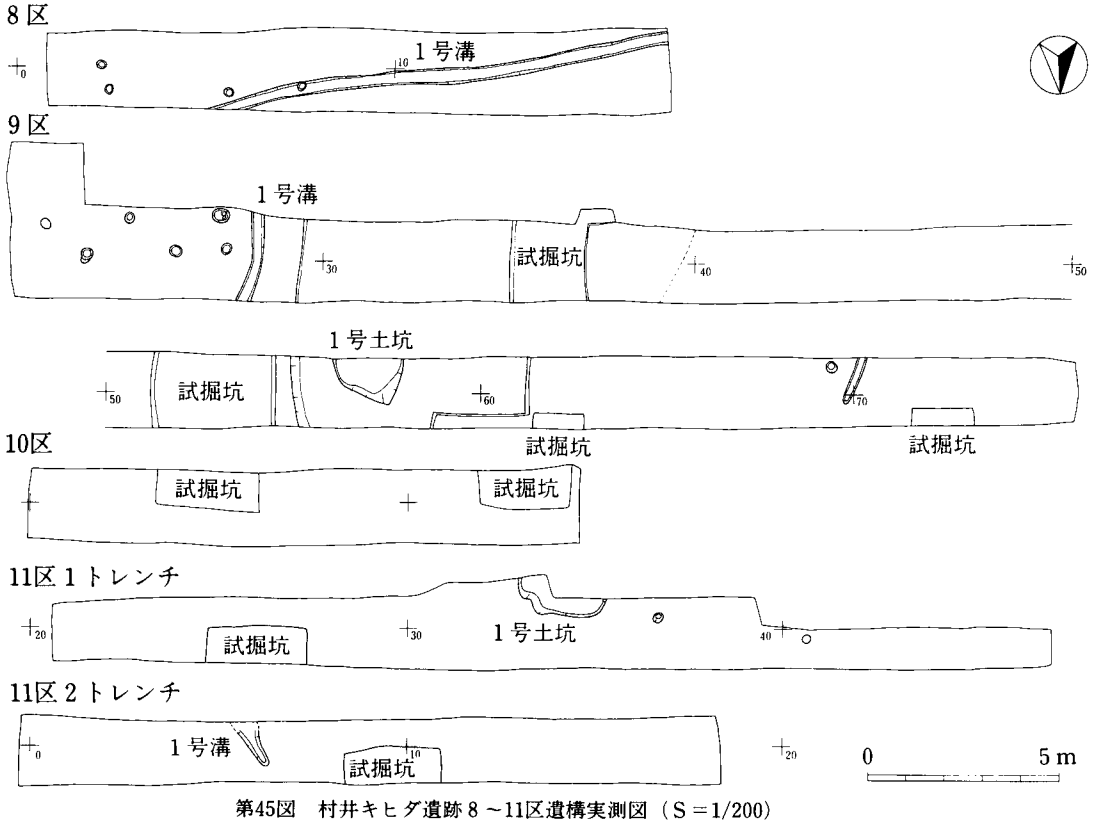
8・9区は検出面で標高19.40～19.50m、11区東端で20.3m、12区西端で20.2mを測る。灰褐色砂質シルトをベースとする。

8区　1号溝は屈曲しながら東西方向に走り、幅約40cm、深さ約30cmを測る。覆土は灰色砂シルトに地山ブロックが混じる。出土遺物なし。他に、径約10～20cmのピットを検出した。

9区　土坑1基、溝1条等を検出した。1号土坑はやや崩れた方形を呈し、径約190cm、深さ24cmを測る。覆土は淡灰黄色砂質土で、上の方は赤味が強い。出土遺物なし。1号溝は屈曲しながら南北方向に走る。幅約30cm、深さ12cmを測る。覆土は灰褐色砂質シルトである。出土遺物なし。包含層より中世陶磁器片が出土している。なお、所々で試掘をおこなった。7区からの続きと思われる灰色シルトの土層より古墳時代前期の遺物が若干出土しているが、明瞭な遺構は存在しなかった。

10区　遺構、遺物とも検出されなかった。

11区　1トレンチ1号土坑はやや崩れた隅丸長方形を呈する。長軸240cm以上、深さ約20cmを測る。覆土の記載なし。近世以降と思われる陶磁器が出土している。2トレンチでは不明瞭ながら溝1



第45図　村井キヒダ遺跡8～11区遺構実測図（S＝1/200）

条を確認した。幅約70cm、深さ15cmを測る。平安時代に属する土師器長甕が出土している。

第3節　出土遺物

1　1区出土遺物

1号土坑（第46図）

覆土中より出土している。1は弥生土器甕である。口径15.0cmを測る。暗茶褐色を呈し、口縁内部に指頭圧痕が残る。月影II期に位置づけられる。2は把手付石鉢で内面にノミ痕が顕著に残る。淡灰緑色の火山礫凝灰岩で作られている。小松市滝ヶ原石に似ている。外面に火を受けた痕跡が残る。

1号溝（第46図～47図）

覆土上層（第35図土層4）より出土している。3は伊万里焼瓶類で徳利形を呈すると思われる。台径7.2cmを測り、近世前半に位置づけられる。4は珠洲焼鉢で内面は磨滅している。5はフイゴの羽口片。黒色のタール状付着物が認められる。6は須恵器甕類口縁部で口縁部外端を外側に肥厚させる。外面に波状文がめぐる。7は越前焼鉢。内面に14条1単位の櫛歯によるおろし目が施されている。第47図1～3は、覆土上層から出土した上臼である。いずれも淡緑灰色の火山礫凝灰岩であり、同一個体の可能性を持つ。1は上縁径、臼面径ともに29.0cm、高さ8.1cmを測り、1/4残存。2は、臼面径29.0cmを測り、1/4弱残存。3は上縁径27.0cm、臼面径29.0cm、高さ9.6cm、供給口径約3cmを測る。また、挽き木の挿入口も一部残っており、縦幅1.6cm、横幅3.5cm、深さ3.7cmを測る。臼面の磨耗が著しい。3/8強残存している。また、図化しえなかったが、加賀焼、越前焼等の中世陶磁器片が多く出土している。

包含層（第46図）

8は越前焼壺で底径16.2cmを測る。9は珠洲焼壺で色調は青灰色。底径13.2cmを測る。胴部は屈曲しながらたちあがる。

2　2区出土遺物

1号土坑（第46図）

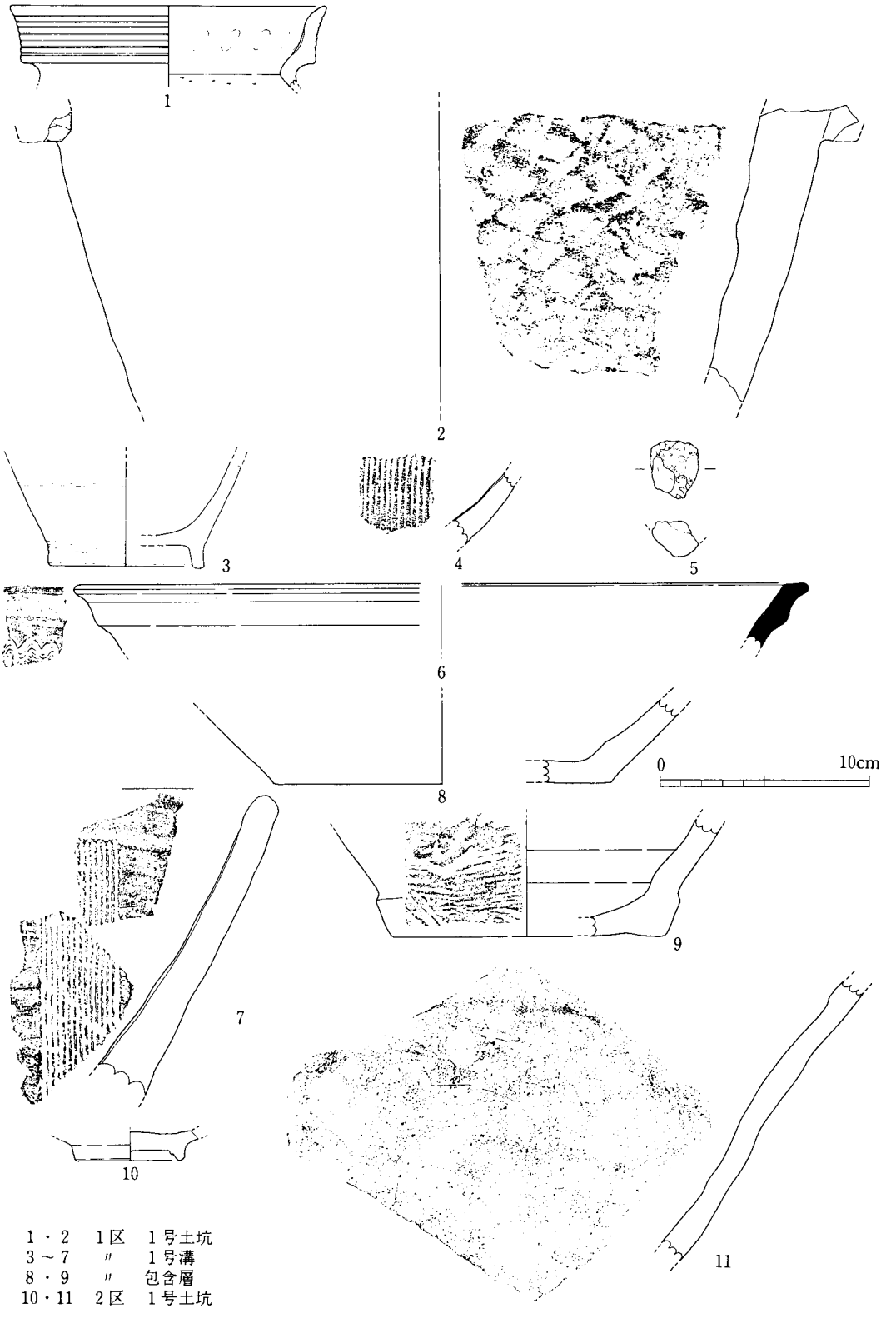
10は龍泉窯系の青磁碗である。底径15.2cmを測り、漆による補修が認められる。15世紀中葉から後半に位置づけられる。11は越前焼甕胴部である。暗茶褐色を呈する。

2号土坑（第48図）

1は越前焼鉢で底径14.2cmを測る。2は青磁碗で口径11.0cmを測る。内外面とも熱により白緑色に変色している。15世紀中葉から後半に位置づけられる。

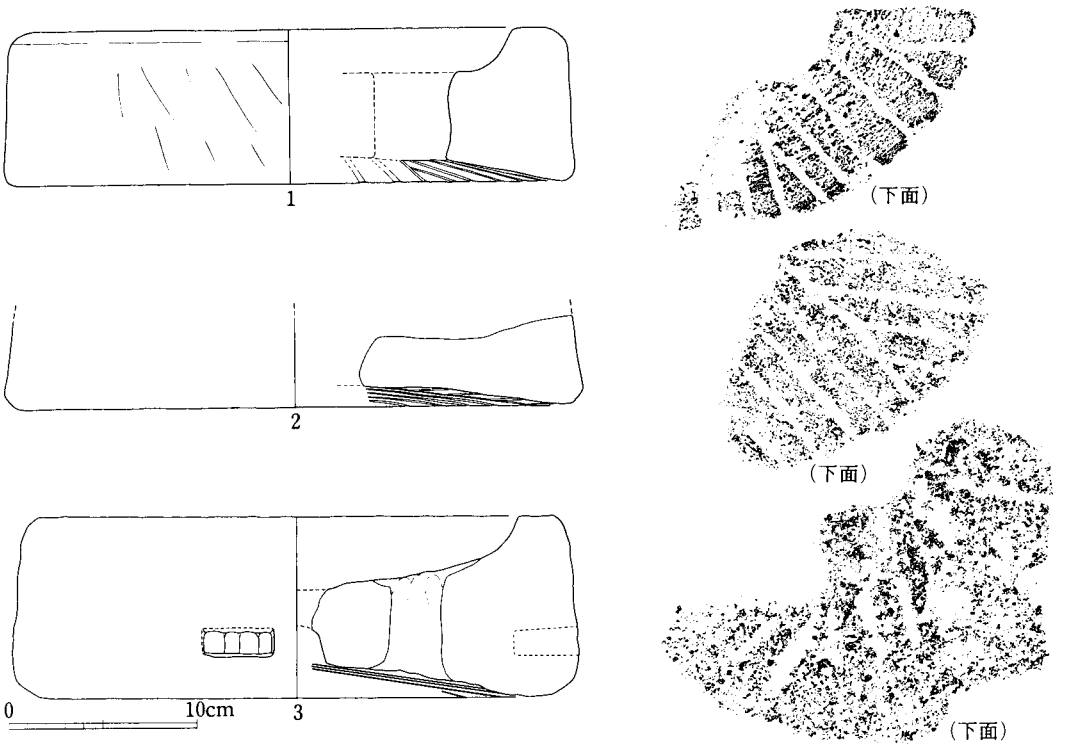
3号土坑（第48図）

3は青磁碗で口径12.8cmを測る。素地は暗灰色、施釉は濃緑色を呈する。4は平安時代の土師器皿で底部外面に糸切り痕が残る。底部は台状を呈する。5は越前焼甕胴部片で、外面に格子目状の押印が認められる。灰白色を呈し、第49図3と同一個体と思われる。



1・2　1区　1号土坑
3～7　〃　1号溝
8・9　〃　包含層
10・11　2区　1号土坑

第46図　村井キヒダ遺跡1、2区出土遺物実測図（S＝1/3）



第47図　村井キヒダ遺跡１区１号溝出土遺物実測図（S＝1/4）

6号土坑（第48図）

6は硬質の火山礫凝灰岩で作られた石製品である。径11.7cm、最大厚4.6cm、重量552ｇを測り、一辺2.7cm程度の方形の差し込み口が刳り抜かれている。側縁部の磨滅が目立つことから薬研の車の可能性をもつ。[4] 7は珠洲焼鉢である。内面全体に7本一単位の櫛歯によるおろし目が認められる。

8号土坑（第48図）

8は平安時代の土師器高杯である。磨耗が激しい。10は碧玉製石製品製作の際に出来る刳り貫き円板[5]と思われる。上面径4.4cm、下面径4.6cm、厚さ1.4～1.5cm、重量42ｇを測る。また、径6.5～7.0mm、深さ約5mmの軸孔が両面に認められる。刳り貫き円板を再利用し、紡錘車をつくる際に穿孔の軸棒回転により生じたものと思われる。石質は淡緑色を呈する緑色凝灰岩で、片面を三分割する線刻がなされている。

9号土坑（第48図）

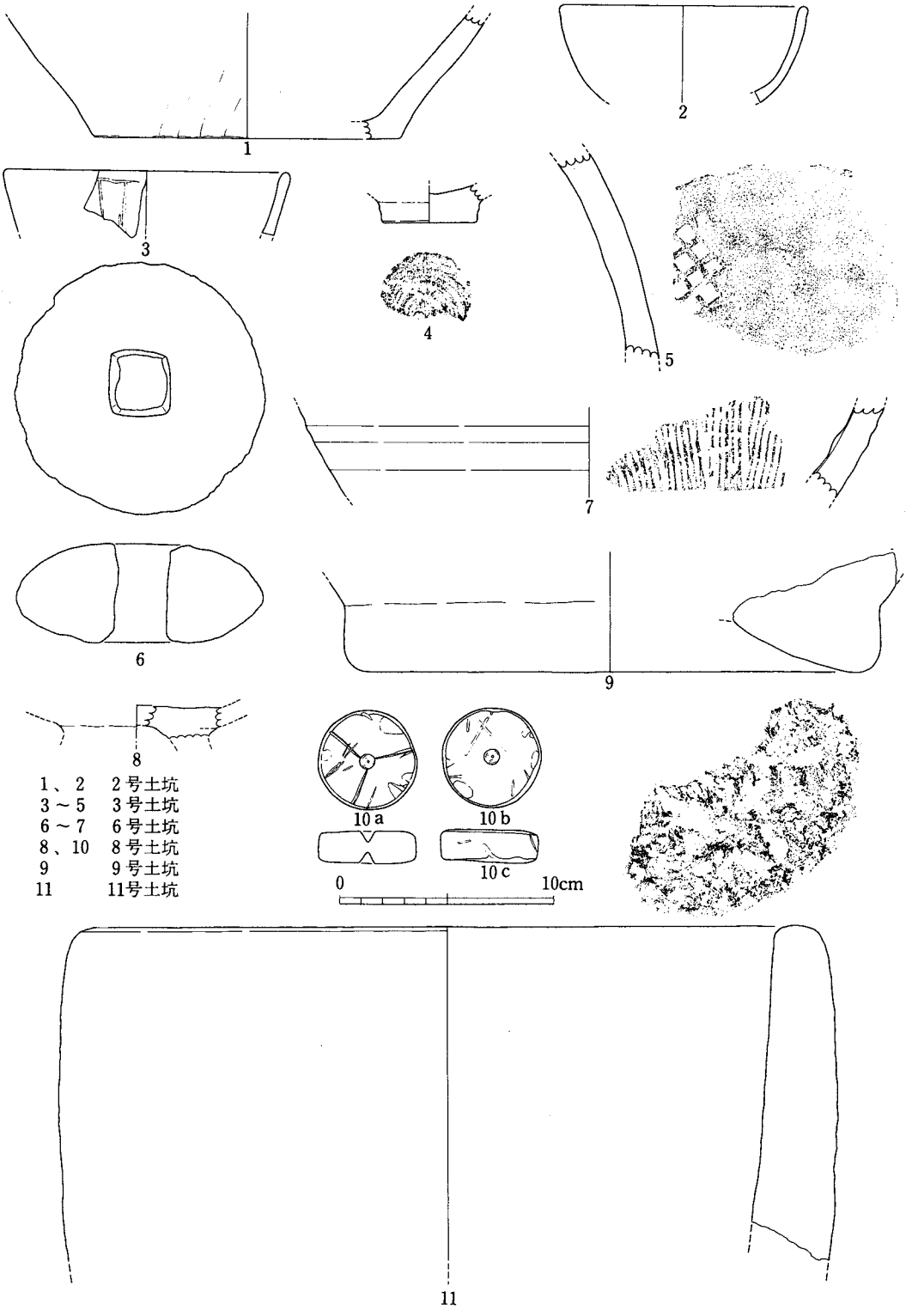
9は火山礫凝灰岩で造られた石製品。台付鉢または茶臼の底部と思われる。

11号土坑（第48図）

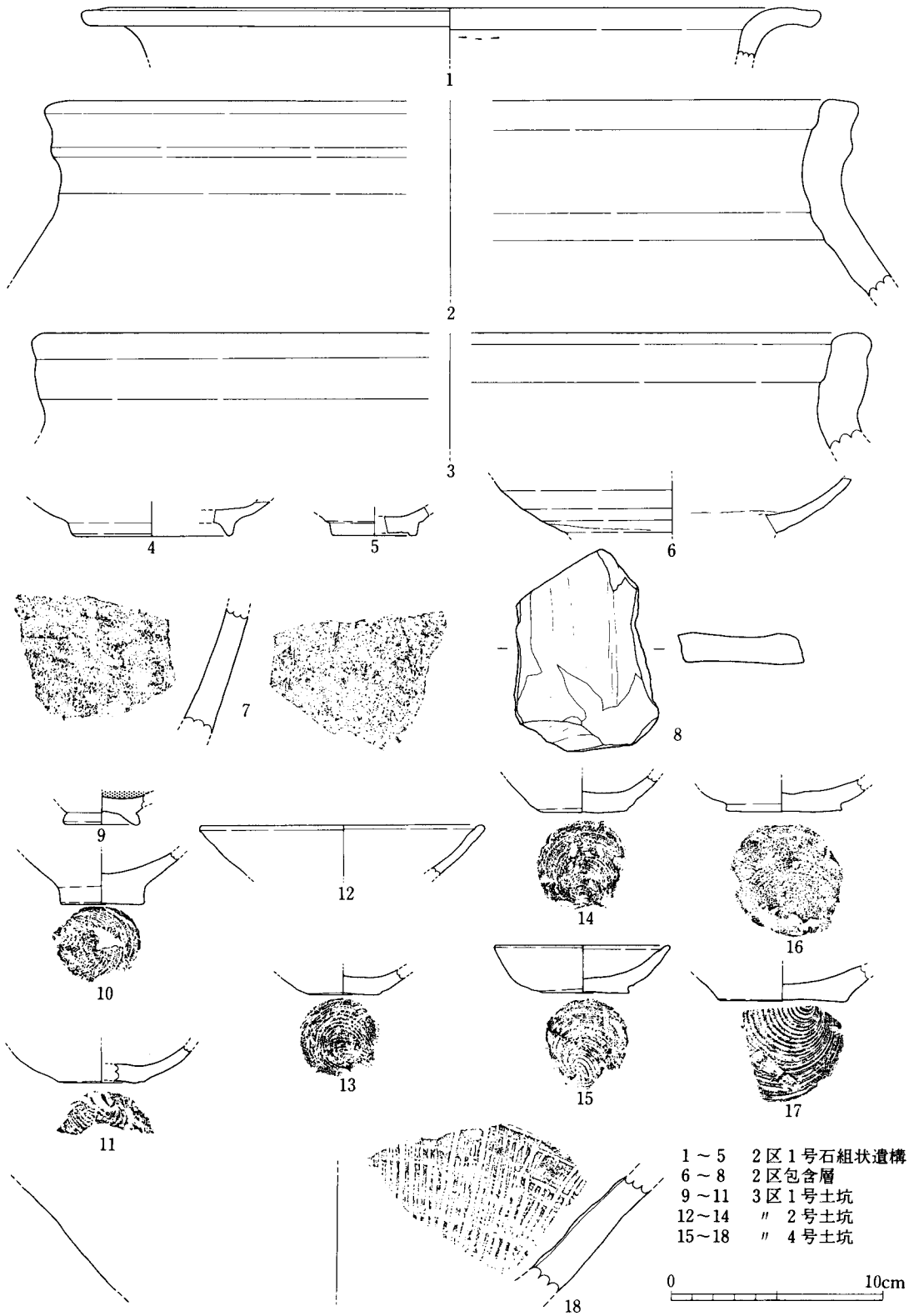
11は口径32.6cmを測る石鉢である。体部は直立し、やや内湾気味に立ちあがる。石材は灰緑色火山礫凝灰岩であり、体部中位に不明瞭ながらノミ痕が残る。

1号石組状遺構（第49図）

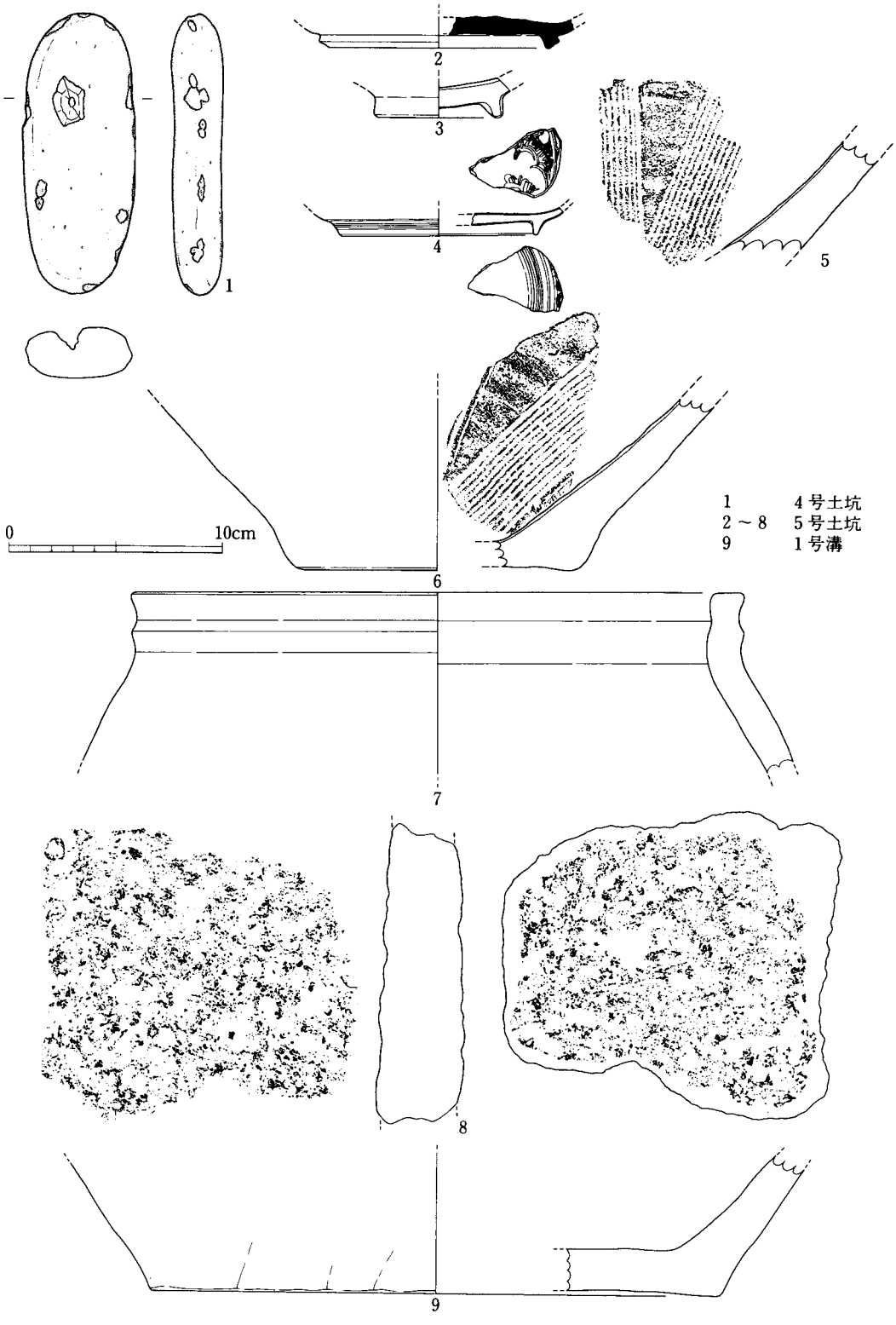
1は土師器鍋で口径約35cmを測る。口縁部は大きく外に開き、端部を丸く仕上げる。2は越前焼甕で色調は灰白色。口径60cm前後を測る。3も越前焼甕である。口径約40cmを測る。ともに口



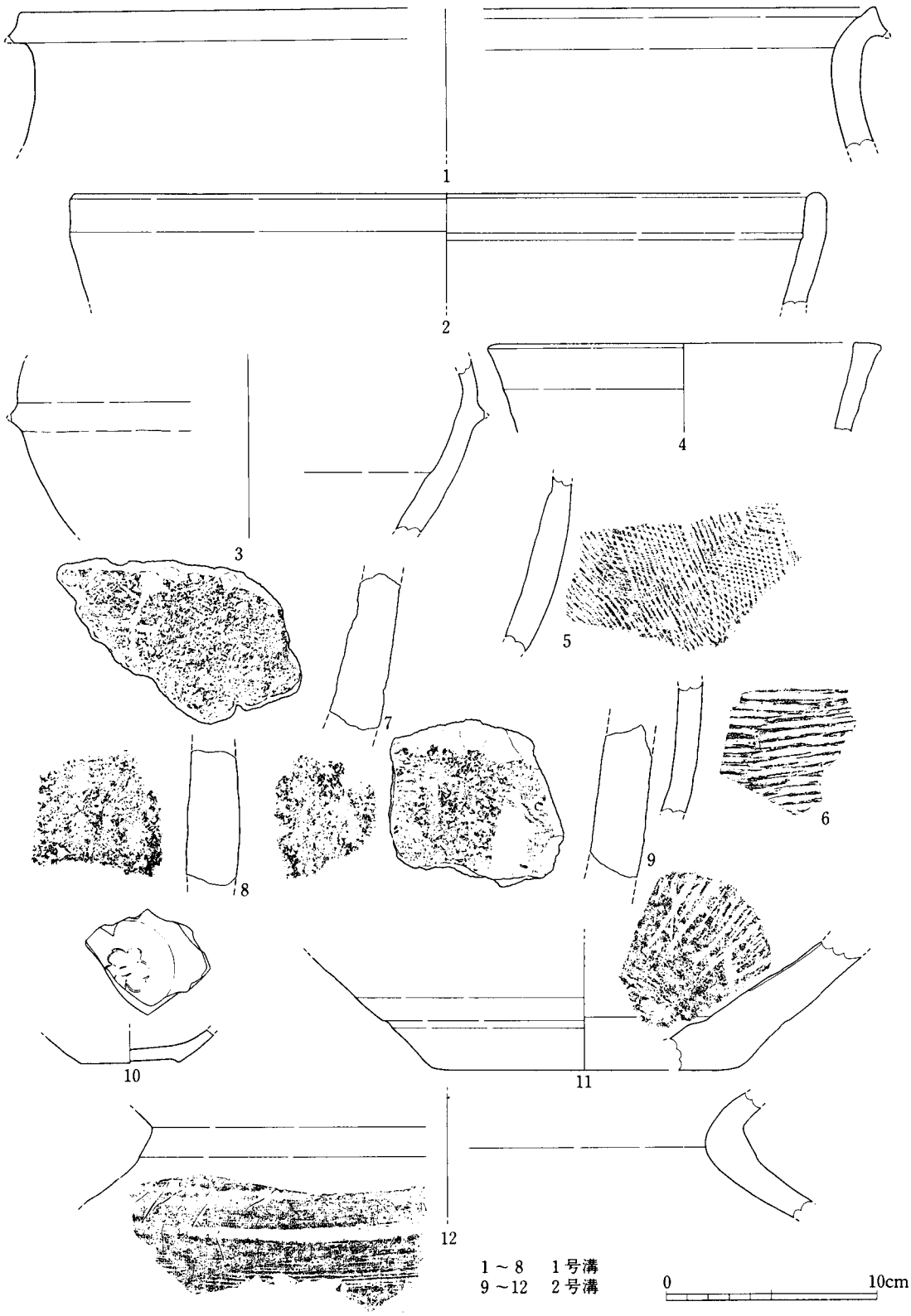
第48図　村井キヒダ遺跡２区出土遺物実測図（S＝1/3）



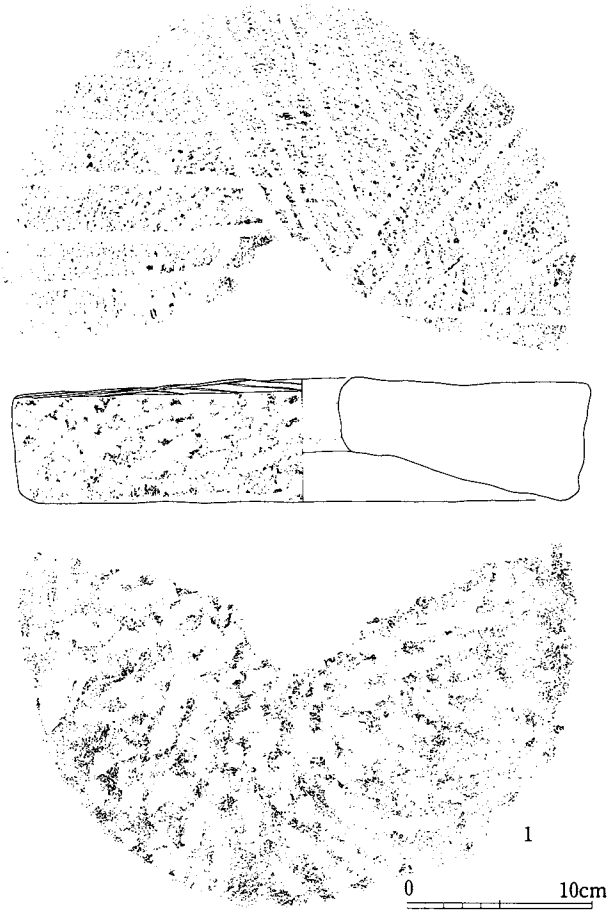
第49図　村井キヒダ遺跡2・3区出土遺物実測図（S＝1/3）



第50図　村井キヒダ遺跡3区出土遺物実測図1（S＝1/3）



第51図　村井キヒダ遺跡3区出土遺物実測図2（S＝1/3）



第52図　3区2号溝出土遺物実測図（S＝1/4）

縁端部を平坦に仕上げる。4は青磁碗で底径7.2cmを測る。15世紀前半代に位置づけられる。5は瀬戸の天目茶碗で、黒色の釉がかけられている。底径4.0cmを測り、漆による補修痕が残る。

包含層（第49図）

6は灰釉椀である。内外面ともツケがけである。7は越前焼甕で赤褐色を呈する。二次加熱を受けている。8は灰色粗粒砂岩の砥石で、粗砥ぎに使用したものと思われる。ほとんど全ての面に使用痕が残る。

3　3区出土遺物

1号土坑（第49図）

9～11は土師器椀である。9は内面黒色に仕上げる。やや崩れた小さな台部が外側にふんばる。10は底部台状を呈する。11の体部は内湾しながら立ち上がる。

2号土坑（第49図）

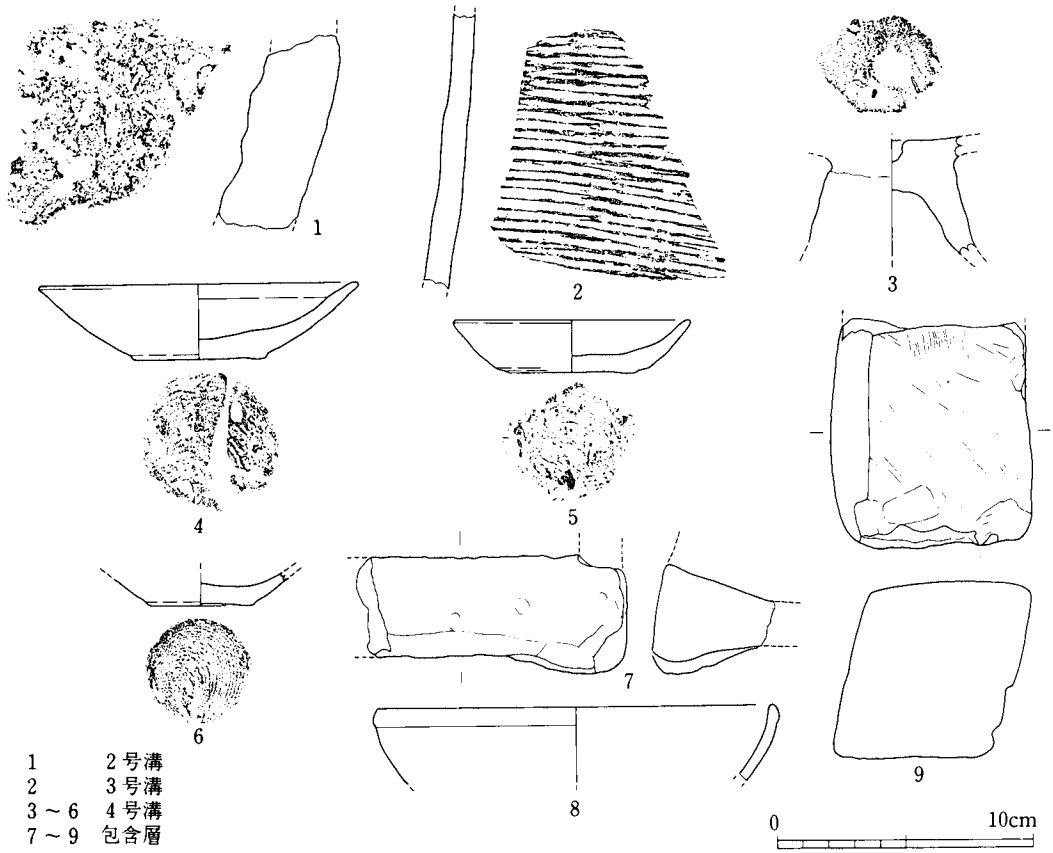
12～14は土師器椀皿類である。12は口径12.2cmを測る。13、14は底部外面に回転糸切り痕が残る。

4号土坑（第49図～50図）

4号溝の遺物を含んでいると考えられる。第49図15、16は土師器皿である。15は口径8.1cm、器高1.3cmを測る。肉厚で体部内湾気味に立ち上がる。底部やや台状を呈する。16は底径5.4cmを測る。底部の成形は15と似ている。17は土師器椀で底径6.0cmを測る。体部は外側に開くと考えられる。第49図18は珠洲焼鉢で内面全体におろし目が施されている。第50図1は長軸13.1cm、短軸4.9cm、厚さ3.4cm、重量243gを測る。側縁部が破損していることからたたき石もしくは石錘と思われる。また片面から穿いたような穴が認められるが用途等は不明である。

5号土坑（第50図）

2は須恵器有台杯で台径10.3cmを測る。底部外面に丁寧なナデ調整を加え、外展する断面方形の台部をつける。3は瀬戸・美濃の灰釉碗である。全面に光沢のあるオリーブ色の厚い釉がかけられている。4は伊万里染付碗で底径9.4cmを測る。5、6は越前焼鉢で浅黄橙色を呈する。5は二次加熱を受けている。6は底径12.6cmを測る。7は越前焼甕で口径28.6cmを測る。口縁部は直



第53図　村井キヒダ遺跡3区出土遺物実測図（S＝1/3）

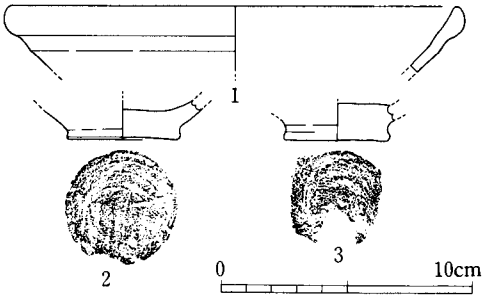
立し、端部を平坦につくる。漆による補修痕が残る。8は軽石凝灰岩の石製品である。外面に焼け痕が残る。

1号溝（第50図～51図）

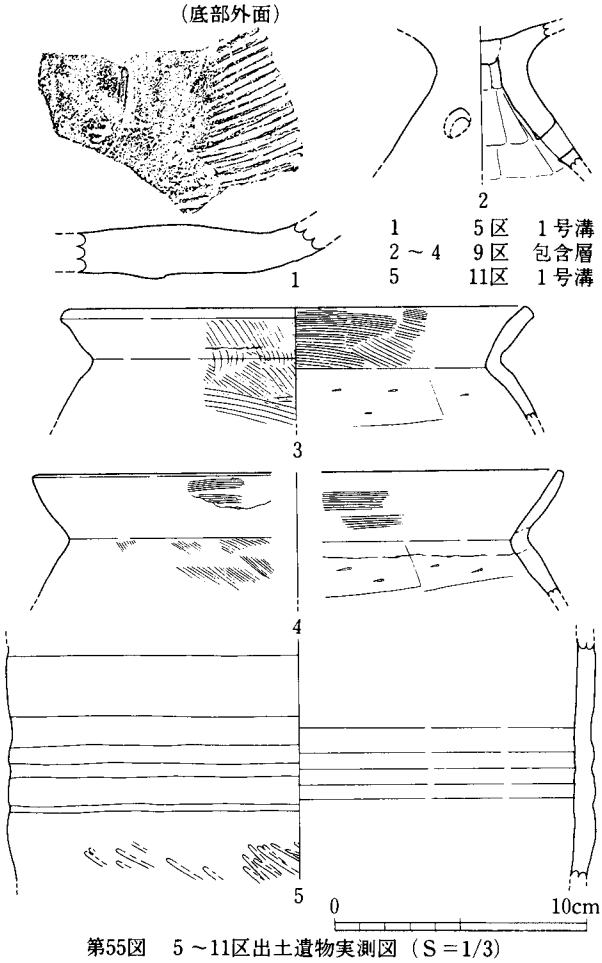
第50図9は越前焼甕で底部外面に板状工具による成形痕が残る。第51図1は加賀焼甕である。暗灰褐色を呈し、口縁部外端を下方に引きのばす。那谷ダイテンノウダニ窯に類似形態が認められる。2は越前焼鉢で赤褐色を呈する。口縁部やや内屈する。3は越前焼壺である。胴中央部に断面三角形の突帯を貼りつける。径不明。4～6は珠洲焼である。4は壺類で口径17.7cmを測る。5、6は甕胴部片である。6の内面は磨耗が著しく、別用途に使用された可能性を持つ。7、8は石製品。7は火山礫凝灰岩の石鉢と思われる。二次加熱を受けている。8は軽石凝灰岩で造られ、灰白色を呈する。やはり二次加熱を受けている。

2・3号溝（第51図～53図）

第51図9は石鉢と思われ、火山礫凝灰岩で造られている。10は瀬戸・美濃の灰釉皿で、底径4.6cmを測る。内面に花紋が入る。11は珠洲焼鉢で断面に漆による補修が認められる。12は加賀焼甕類頸部で、外面にカキメ状の調整が施されている。第52図1は下臼である。臼面径30.7cm、厚さ6.6cm、芯径3.8cmを測る。火山礫凝灰岩で造られ、ふぞろいな6分割がなされている。さらに各分割に3～4本の刻みを入れている。外面にノミ痕が残り、二次加熱を受けている。第53図1は



第54図　4区出土遺物実測図（S＝1/3）



第55図　5～11区出土遺物実測図（S＝1/3）

軽石凝灰岩の石製品である。二次加熱を受けている。2は珠洲焼甕である。なお、図化しなかったが鉄滓が出土している。

4号溝（第53図）

3は土師器高杯脚部であり、浅黄橙色を呈する。4～6は底部外面に糸切り痕の残る土師器皿である。4は口径12.5cm、器高3.0cmを測り、体部は大きく外側に開く。5は口径9.3cm、器高2.1cmを測る。

包含層（第53図）

7は行火で、前面と側面形が台形を呈する横口タイプと思われる。軽石凝灰岩で作られ、二次加熱によりススけている。8は白磁碗II類と考えられる。口径15.6cmを測る。9は断面平行四辺形の砥石である。四面とも使用され、乳白色軟質の泥岩により作られている。中砥ぎ用と考えられる。

4　4～11区包含層出土遺物

4区包含層（第54図）

1は白磁碗IV類で口径17.6cmを測る。2、3は土師器椀である。底部台状を呈し、底部外面に回転糸切り痕が残る。2は底径4.5cmを測り、暗灰褐色を呈する。3は底径4.1cmを測り、黄橙色を呈する。

5区1号溝（第55図）

1は加賀焼甕底部である。底部外面に離れ砂が付着している。また、図化しなかったが、フイゴの羽口の破片が出土している。

9区包含層（第55図）

2は小型高杯である。浅黄橙色を呈し、脚部三方に穿孔が入る。3、4は甕で内外面ハケ調整を施す。3は口径18cmを測り、赤橙色を呈する。口縁端部を平坦に仕上げる。4は薄手で口縁部

やや内湾する。2～4は弥生時代終末から古墳時代に位置づけられる。

11区2トレンチ1号溝（第55図）

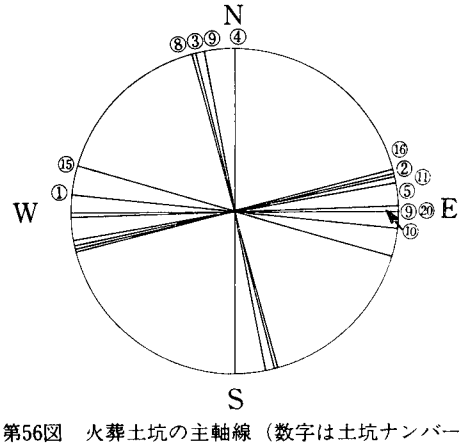
5は平安時代の土師器長甕胴部で外面に平行叩きが認められる。

第4節　小　　結

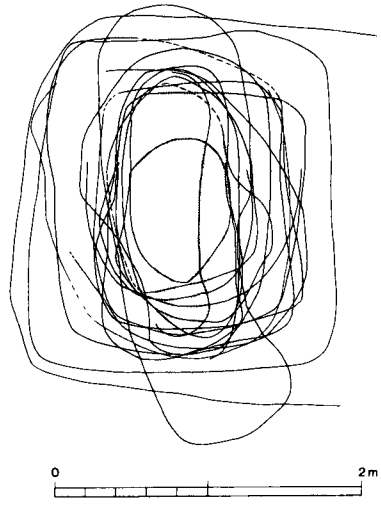
調査区1～3区で検出された土坑群（火葬施設）から、本遺跡は15世紀後半～16世紀前半を中心に営まれた火葬場と考えられる。火葬という葬法は、文献上、『続日本紀』文武天皇四年（700）に僧道昭を遺言により大和の粟原で火葬したとの記述が初源とされる。そして仏教の定着・浸透にともない従来よりの土葬と併行しておこなわれ、鎌倉時代以降は庶民一般に受容されていく。特に北陸や和歌山、大分などの浄土真宗の気風の強い地域や都市部で多くみられる葬法といわれる。

民俗学の研究によれば[6]、火葬という葬法は、人の死にともない葬式・茶毗・納骨という行為を順次おこなうとされる。その中で茶毗についていえば一般に野天を多少掘りくぼめ、薪・藁などを敷く。その上に遺体を安置し、更に薪・藁を積み上げ、焼成をおこなう行為である。そして翌朝に骨拾いをおこない、次の納骨の行為に移るとされる。本遺跡で検出された火葬施設は、この茶毗に伴う遺構（掘りくぼめ焼却をおこなった穴）と考えられる。

県内でこのような火葬施設の調査例はあまり多くなく、敷地天神山遺跡F区[7]で江戸後末期の共同火葬場が検出された他は、奥原遺跡、竹生野遺跡で単独して確認された程度にとどまる。いずれも、本遺跡と同様に1基の簡単な火葬施設をつくって個人を火葬する形態を取り、近年まで県内一般にみられた固定化した1基の火葬施設で継続的に多人数を火葬する形態ではない。前者は後者に先行すると考えられる。敷地天神山遺跡の近世火葬場では、溝状と土壙状の2タイプの火葬施設が検出されている。それに対して本遺跡では平面形態にバライティーをもつものの、溝状タイプはなく、基本的には土坑状タイプに属する。その意味では〝等質的〟といえる。また、12

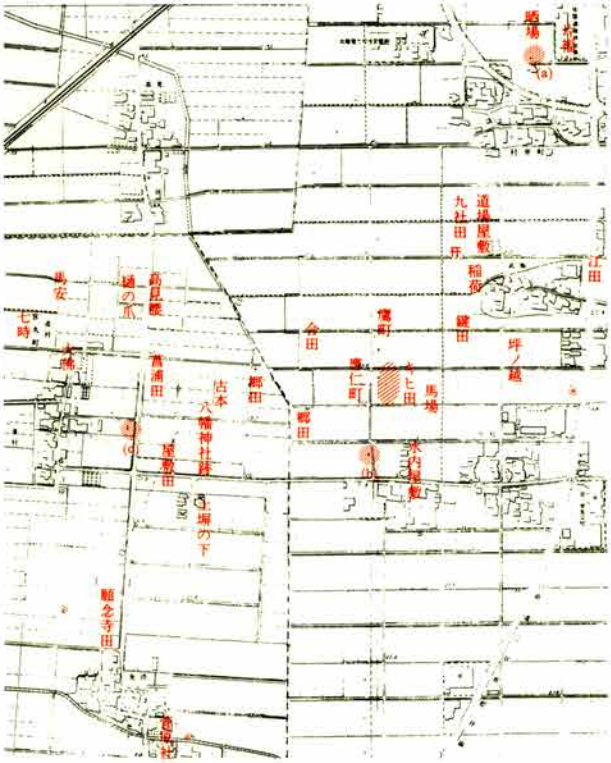


第56図　火葬土坑の主軸線（数字は土坑ナンバー）



第57図　火葬土坑面模式図
（スクリーントーンは、身長160cm）

世紀後半～13世紀初頭の福井県下河端遺跡などで確認された土坑底部から両端に煙道の機能を果す通風溝をもつタイプも検出されていない。床面に敷きつめられた10～30cm 大の円石が風を通す役割を果すものと考えられる。次に火葬施設の主軸線は第56図のように東西方向もしくは南北方向を強く意識しており、大きくズレるものはほとんどない。宗教上の何らかの規制が働いていたと考えられる。なお、敷地天神山遺跡や下河端遺跡では大部分が南北方向に主軸を取っており、本遺跡のような東西方向に取るものは認められない。この相違は何に起因するものか不明であり、今後の課題のひとつである。また、平面規模は第57図のように整理できる。荼毗に際しては寝棺、座棺が考えられるが、そのいずれとも判断しかねる。ちなみに、第57図では身長160cmの人間をスクリーントーンで表現している。なお、出土遺物の中に釘が認められないことから棺の使用を考える積極的根拠は今のところない。単に板に乗せた場合もあろう。



第58図　遺跡周辺の小字名と墓地
（『石川県一木村誌』より転載、一部加筆）

2区南西側で検出された石組状遺構については、遺構南側を中心に炭層が認められることから、やはり火葬施設と考えられる。地上に設営されるこのタイプの火葬施設は残存しにくい性質もあり、北陸での類例は福井県吉田郡松岡町の帝王三昧や敷地天神山遺跡が知られているだけである。地面を掘りくぼめるタイプの火葬施設とどのような性格差、機能差をもつかということも今後の課題のひとつである。

先にも述べたように本遺跡の火葬施設の特徴として〝等質性〟があり、溝で囲まれた一定地域内で無秩序・継続的に火葬が営まれたことがある。これは、火葬対象者層を考える上で重要なポイントである。

本遺跡の存在した時期の大きな歴史的背景については一向一揆が考えられる。一向一揆についていえば文明三年（1461）に浄土真宗本願寺派の蓮如が加賀・越前国境の吉崎に下向、布教をはじめ、急速にその勢力を伸ばす。長享二年（1488）、加賀守護富樫政親が本願寺派の坊主・門徒を含む国人・土豪らに攻められ、自害するいわゆる「長享の一揆」が起きる。そしてその後、16世紀、天正年間に柴田勝家に攻撃されるまでの約100年間、同胞精神（念仏者は、弥陀の前では全て平等であるという考え）を唱える本願寺一門による政治支配が続いた。その中で、一向一揆の門徒組織として「郡」「組」「講」が編成され、松任近辺では、「松任組」「松本組」の存在が知られ

ている。本遺跡で火葬された人々は、「組」を組織し、この体制を支えた被支配者層と考えられる。第58図のように本遺跡周辺には屋敷地の存在を示唆する小字名が残っている。[8] この屋敷地か周辺村落に居住した人々を荼毗にふす〝共同火葬場〟が本遺跡だったと考えられる。そして、本調査区内で墓地が検出されなかったことから、第58図(a)～(c)のような居住地域からやや離れた場所で埋葬されたものと思われる。

註

(1) 1989年度の発掘調査以降、「村井備中守館跡」を遺跡名として使ってきた。しかし、発掘調査から遺跡の性格が館跡とは異なること、『石川県一木村誌』中、「村井備中守館跡」は「備中第」と呼ばれる中村、武衛、道村の三叉点306番地に相当する旨記述されていることから、本遺跡とは、地理的に離れることが明らかとなった。そこで遺跡名を付近の小字名を冠して「村井キヒダ遺跡」としたい。なお、『石川県立埋蔵文化財センター年報』第11号（1991）等の記載は旧名称である。留意されたい。

(2) 木田　清他　『松任市中村ゴウデン遺跡』1989　松任市教育委員会

(3) 吉岡康暢　「加賀における条里制をめぐる問題」『北陸史学』8号1959　北陸史学会

(4) 垣内光次郎氏より御教示いただいた。

(5) 河村好光氏より詳しく御教示いただいたところ、刳り貫き円板の外面を研磨し、円柱形に成形がなされていること。紡錘車として再利用するための穿孔は2段でなされており、太い穿孔と細い穿孔を組み合わし、同時に2種類の穿孔がおこなわれていることが判明した。

(6) 上井久義・佐藤米司編　『葬送墓制研究集成』第1巻1979　名著出版

(7) 藤田邦雄　『近世火葬場地区（F区）』『敷地天神山遺跡群』1987　石川県立埋蔵文化財センター

(8) 『石川県一木村誌』1975　一木村誌編纂委員会より転載、一部加筆

参考文献

斎藤　優・青木豊昭　『下河端遺跡』1973　福井県教育委員会
『仏教考古学講座』第7巻1975　雄山閣
『図説　石川県の歴史』1988　河出書房新社

第６章　北出遺跡・米永古屋敷遺跡

第１節　調査の概要

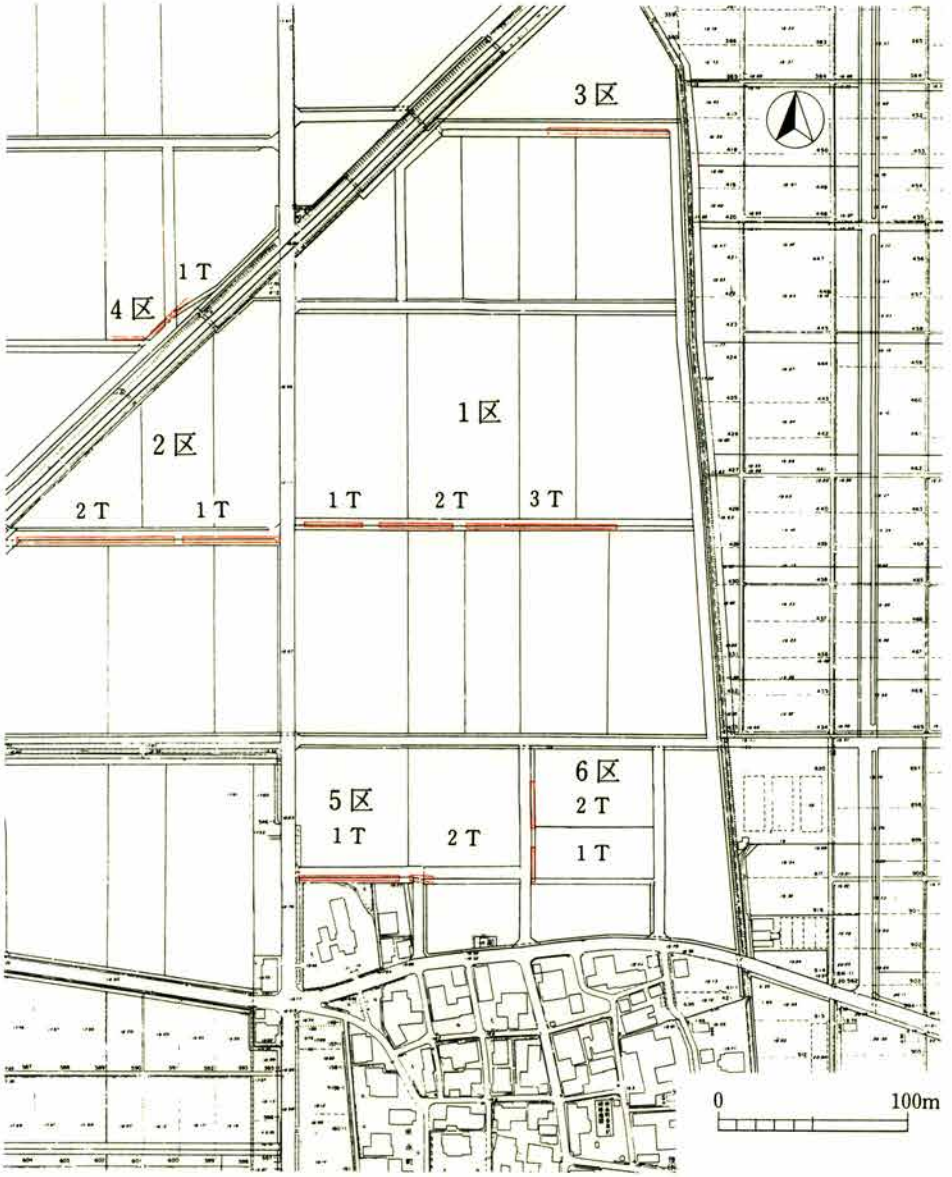
本調査は松任市米永町地内、県営ほ場整備事業一木地区米永工区に係る事前の緊急発掘調査であり、事業実施により遺跡が損壊を受ける排水路施設予定部分（幅約２m、計約1,570m²）を対象として平成元年７月６日～10月６日にかけて実施した。

北出遺跡、米永古屋敷遺跡[1]（以下、本遺跡群）は手取川の形成した同心円状に拡がる扇状地の扇央部扇端寄りに位置し、土砂の堆積による微高地、いわゆる「島」上にある。現在、標高は水田面で18～20mを測る。周辺は米永の集落付近が最も高く、海岸に向う西側および千代野ニュータウンに向う北側にゆるやかに傾斜している。また、微地形の起伏については調査でほとんど確認されておらずほぼ平坦で、過去の耕地整備等による地形変化はあまりないと考えられる。なお、現在の海岸線まで約3.2kmを測る。基本土層層序は調査が広範囲におよび、若干の差異はあるものの、おおむね耕土、中世以後の堆積と思われる黄灰色砂質土、暗灰～暗灰褐色を呈する包含層、黄灰～黄褐色砂質土の地山となり、遺構面まで30cm以上の深さを測る。調査区ごとの土層層序については後述する。

次に本遺跡群周辺の遺跡について奈良時代を中心に概観したい。本遺跡群周辺には古墳時代に溯る遺跡はほとんど確認されておらず、遺跡の希薄な地域といえる。古墳時代の集落はより扇端部に近い北側約４kmの竹松～相川町付近、現在の北陸自道車道に沿うように存在する。奈良時代に入ると、本遺跡群を含む扇央部に近い地域で急激に集落が増加する。本遺跡群の北東約1.2kmに中村ゴウデン遺跡、道村遺跡、北西約１～２kmに法仏遺跡、北安田北遺跡、北東約３kmに相木源波遺跡、南東約0.5kmに宮丸遺跡などが現在までに確認されている。中でも法仏、北安田北の両遺跡は本遺跡群と近接し、密接な関連をもつものと推測される。両遺跡は広大な範囲に奈良～平安時代まで継続的に存続し、本地域の中核的な集落遺跡と考えられる。北安田北遺跡では奈良～平安時代の竪穴住居趾、掘立柱建物が100棟近く、また法仏遺跡では奈良時代の竪穴住居趾約40棟、平安時代の掘立柱建物約60棟がそれぞれ確認されている。本遺跡群もこの中核的な集落と周辺の比較的短期間存続する小規模な集落との関連の中で位置づけられるべきであろう。個々の遺跡の様相・消長及び相互の関連は今後の課題のひとつといえる。また８～９世紀の様相を伝えるとされる『和名抄』では石川郡に属する郷として八郷を挙げている。本遺跡群周辺では中村、椋部、笠間の各郷が比定されており、本遺跡群は中村郷に属するように考えられる。

さて、今回の調査の概要についてだが、調査区は第59図のとおり１～７区に分かれ、かなり広範囲にわたる。１～６区は従来北出遺跡とされた範囲内にある。調査では遺構、遺物ともそれ程多く確認できず、遺跡の縁辺部にあたると考えられる。比較的規模の小さい集落遺跡が点在する可能性をもつ。なお、出土遺跡は平安時代、中世、近世を中心にしており、北出遺跡の存続時期

第59図　調査区全体図



第60図　北出遺跡１～６区全体図

をある程度示しているように思われる。

５区１トレンチでは、13世紀中頃～14世紀の遺構、遺物が確認されている。調査範囲が限られているため、明確ではないものの現在の米永の集落北側に重複して集落遺跡が存在すると考えられる。５区２トレンチでは、しっかりとした遺構は検出できなかったが、弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる一括遺物が出土している。５区１トレンチおよび６区では、この遺構ののびが確認できないことから、やはり米永の集落と一部集複して小規模な集落遺跡が存在したと思われる。

７区は米永古屋敷遺跡であり、８世紀を相前後する時期の良好な集落遺跡が検出された。調査区は集落遺跡の中心部と思われ、竪穴住居趾、掘立柱建物などの遺構が東西方向約120m以上、南

北方向約50mにわたり確認されている。また遺物が多数出土しており当該期の土器組成を伺い知ることができる。他に沿岸部より運ばれてきた製塩土器、鍛冶精錬工房の存在を示す椀形滓、漆作業の痕跡等も確認されており、本遺跡の性格のみならず、当該期の集落の様相を考える上で大変興味深い。

以下、各トレンチごとに述べたいが、例言にもあるとおり、調査担当と執筆担当が異なっており、必ずしも発掘担当者の意にそぐわなず遺構等の記述であいまいな点、不明な点が多々あるものとなってしまった。記して謝るとともに、諒としていただきたい。

第2節　北出遺跡　遺構・遺物

1　1～4区

1区（第60～64図）

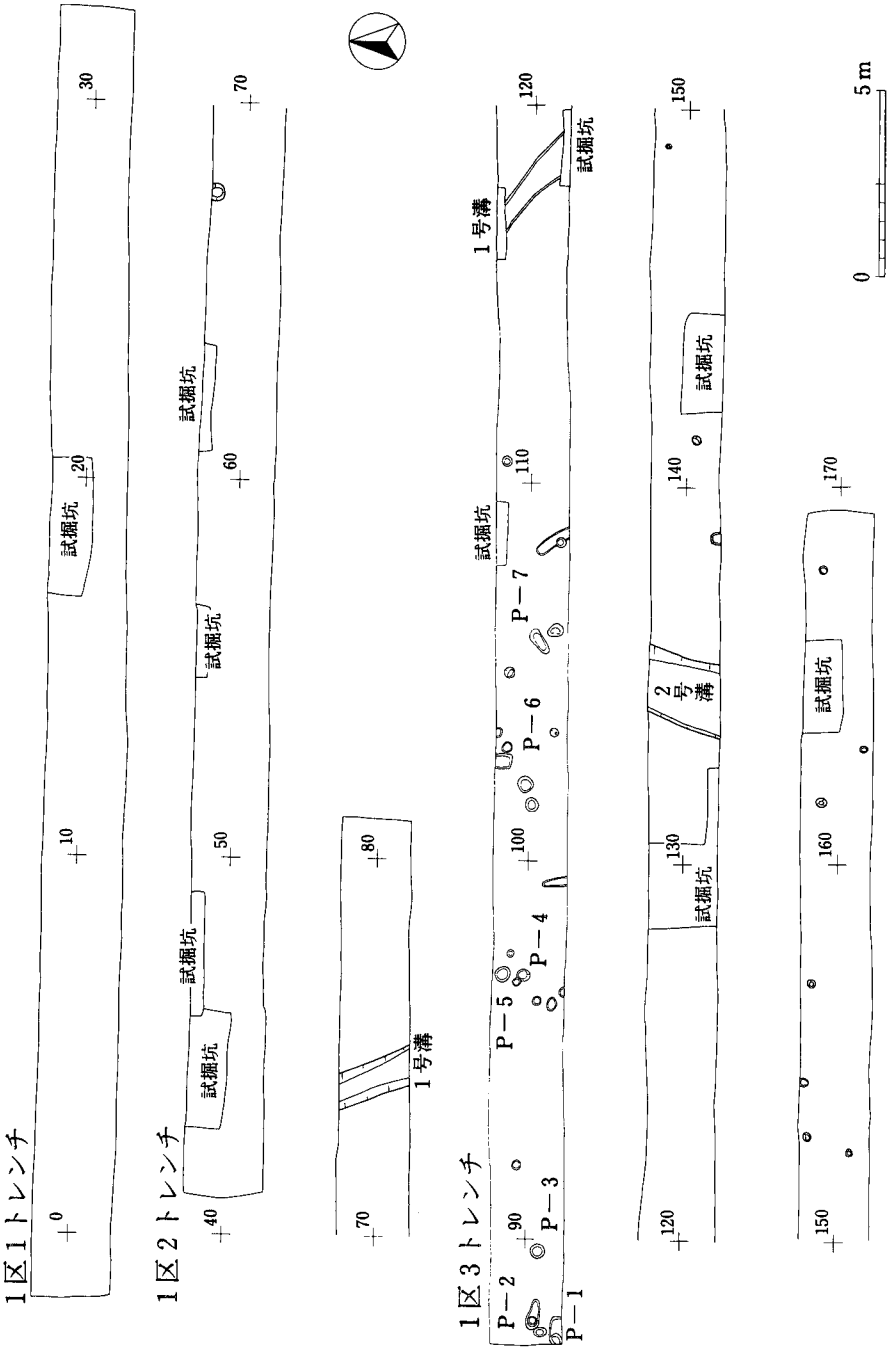
遺構

米永の集落西側を千代野ニュータウンにむけて走る道路の東側につくられる排水路予定部分を幅約2m、延長約170mにわたり調査を実施した。基点は排水路主軸線上、上記道路東側肩部より5.60m東側に設定し、第60図のとおり、西側から順に1～3トレンチに細分している。また、各トレンチ主軸線は排水路主軸線に一致する。標高は現水田面で18.4～18.0mを測り、西側にゆるやかに傾斜する。基本土層層序は、上層より耕土、床土、包含層（灰黄褐色砂質土）、地山（黄灰褐色砂質土）となり、地山面まで0.3～0.6mの深さを測る。また東側ほど堆積が厚いようだ。各トレンチとも、周辺に存在する遺跡の縁辺部にあたると思われ、遺構はあまり多く検出できず、遺跡の性格まで言及できない。遺物についていえば、古代～近世・近代に至る遺物が包含層より出土している。以下、各トレンチごとに述べる。

1トレンチでは、遺構は確認できなかった。包含層より須恵器、中近世陶磁器が少量出土している。

2トレンチでは溝1条を検出した。1号溝は幅約100cm、深さ36cmを測る。覆土は上層より包含層とよく似た黄灰褐色砂シルトと地山質の灰黄褐色砂シルトが堆積している。出土遺物はなく時期不明。包含層より平安時代前期を中心とする須恵器、土師器が出土している。

3トレンチでは、溝2条および多数のピットを検出した。1号溝は幅90～120cm、深さ28cmを測る。2段掘りに近い掘り込みがなされており、底面近くで水の流れによる灰色粗砂、その上に灰色土が自然堆積している。覆土中より9～10世紀代の遺物が出土している。2号溝は断面観察より床土直下まで立ち上がることが確認され、比較的新しい時代と考えられる。第64図の土層6を地山面とし掘り込まれてのち自然廃絶している。そして土層5および13を地山面とし、再び掘り込まれ、溝として機能している。その後、近代の耕地整備の際に小石まじりの粘質土で埋め込まれている。平安時代及び近世の遺物が覆土中より出土している。最初の使用段階は1号溝とよく似た時期と考えられる。ピットは径20～40cm、深さ10～20cm程度を測るが、掘立柱建物の柱穴等に復元できるものはない。覆土中より遺物が出土しているピットにのみナンバーを付してい

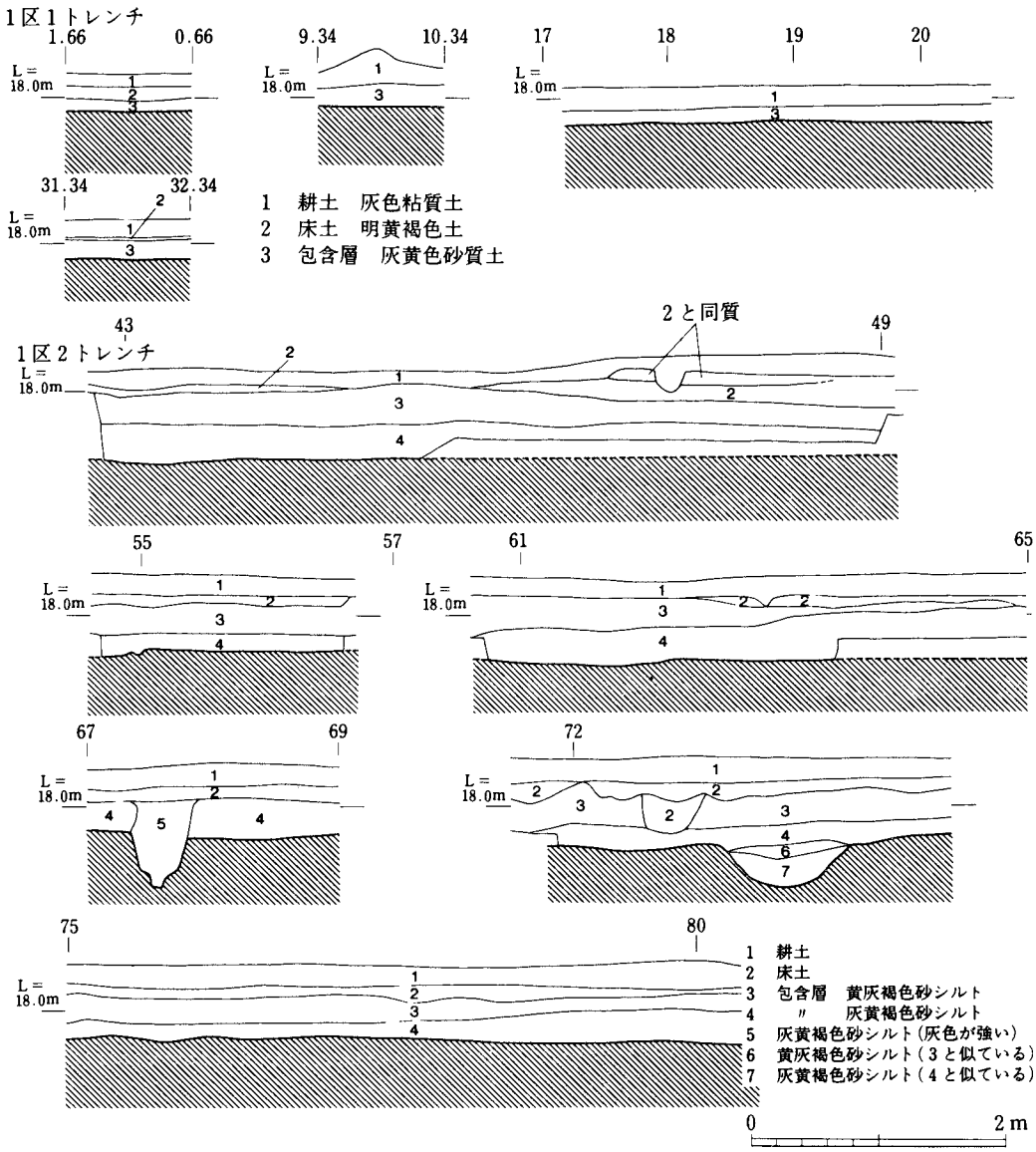


第61図　北出遺跡１区遺構実測図（S＝1/200）

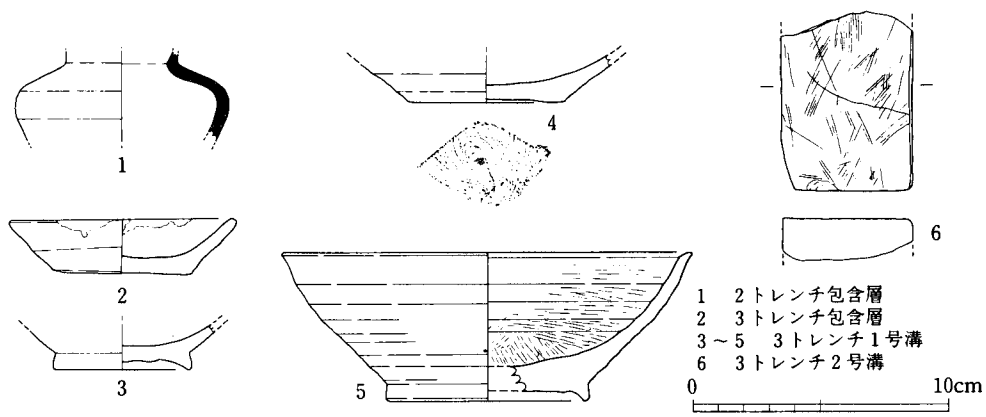
る。いずれも小片ではあるが１、３、４、７号ピットからは奈良・平安時代の、５、６号ピットからは中世土師質皿がそれぞれ出土している。なお、包含層より平安時代前中期および近世を中心とした遺物が出土している。

遺物　（第63図）

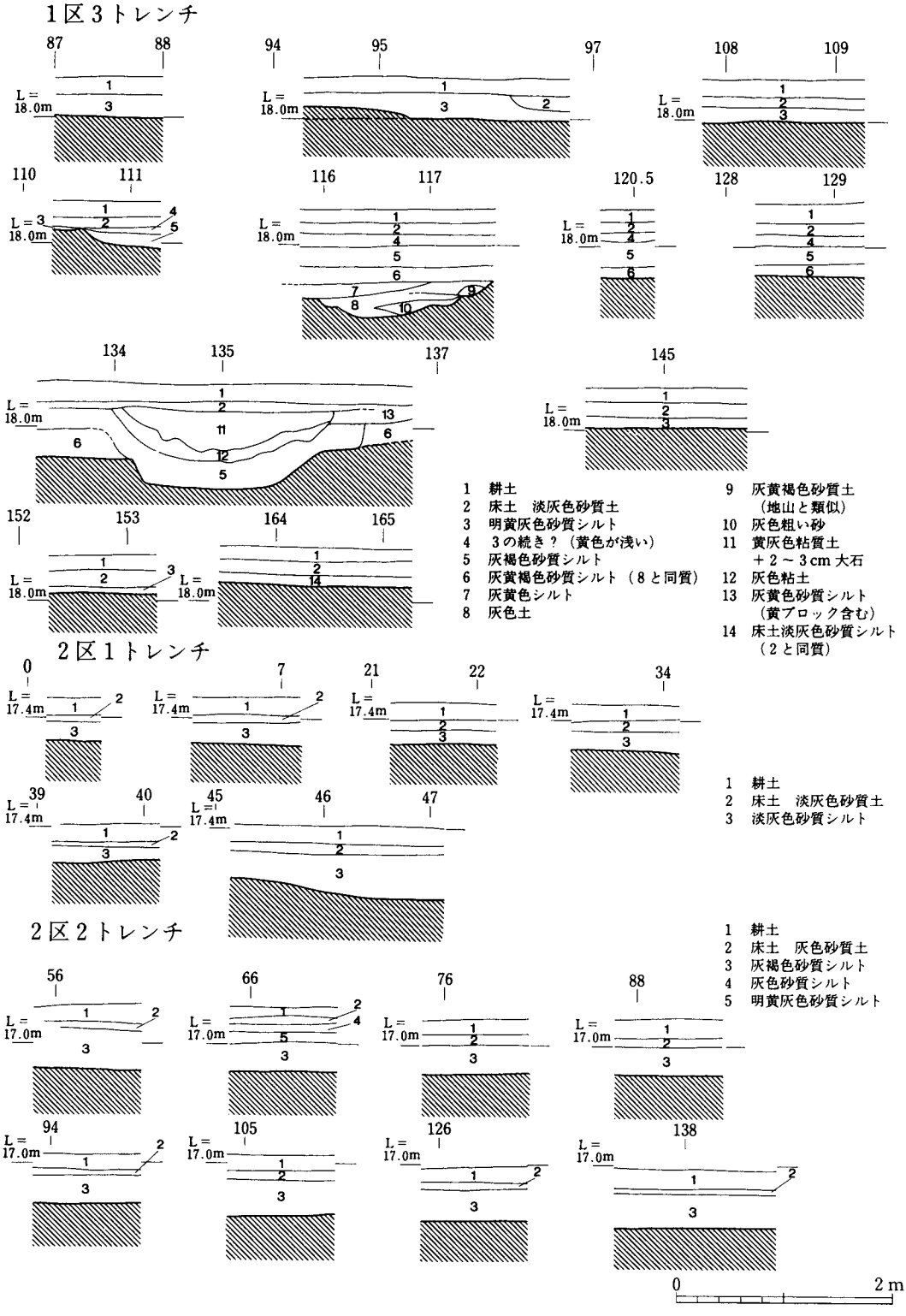
１、２は１区包含層より出土したものである。１は須恵器小型壺でやや肩が張る。２は中世土



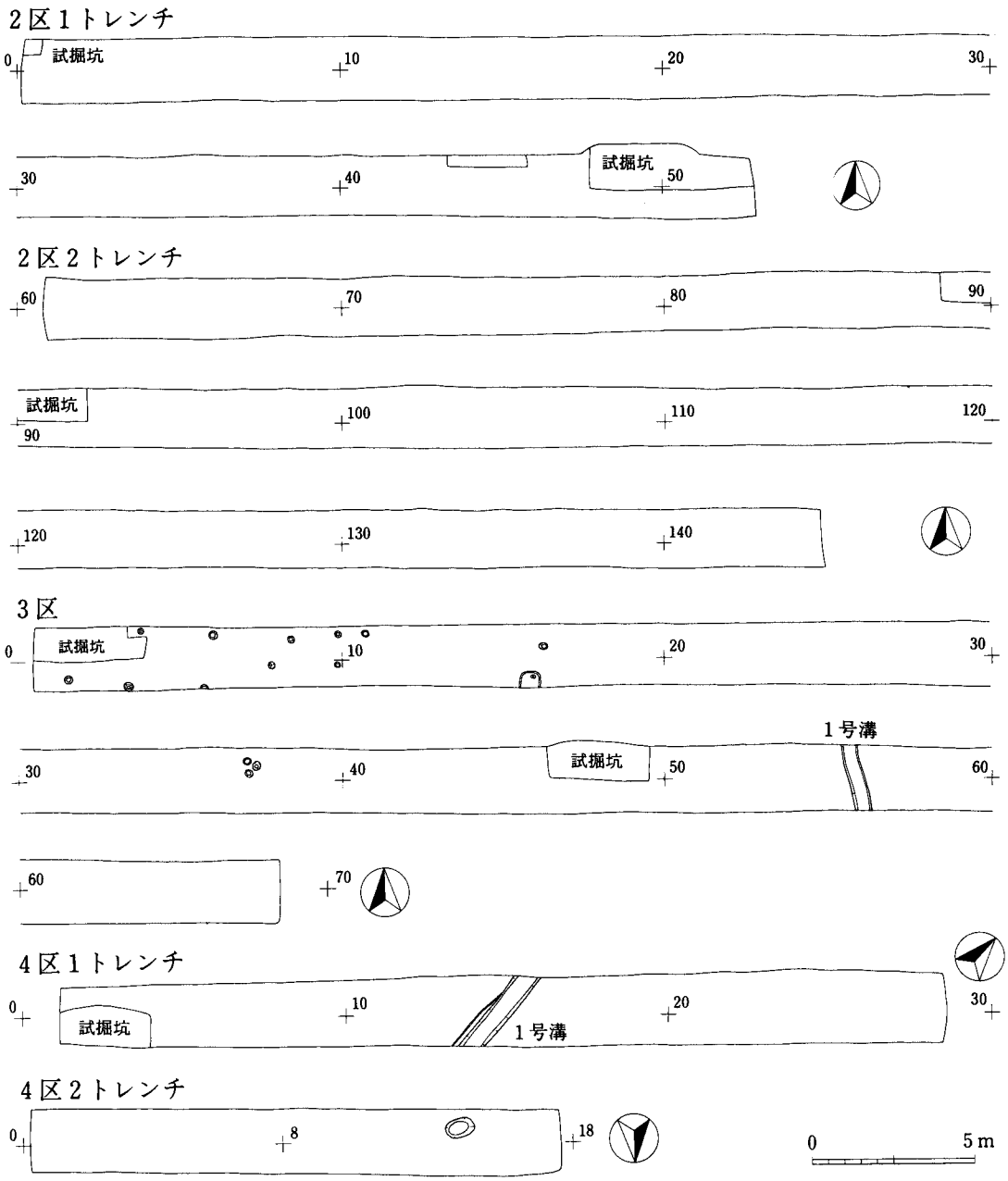
第62図 北出遺跡1区1・2トレンチ北壁土層実測図（S＝1/60）



第63図 北出遺跡1区2・3トレンチ出土遺物実測図（S＝1/3）



第64図　北出遺跡1・2区北壁土層実測図（S＝1/60）



第65図　北出遺跡2～4区遺構実測図

師質皿である。浅黄燈色を呈し、底部外面に糸切り痕を残す。口縁部にタールと煤が付着している。3～5は3トレンチ1号溝覆土より出土している。3,5は内面黒色の土師器有台椀で、内面に粗いミガキ、底部外面は若干のナデが施されている。4は土師器椀で底径約6.2cmを測る。6は3トレンチ2号溝覆土より出土した仕上げ砥石で横幅約5cmを測る。材質は粘板岩で淡灰緑色を呈する。残存する全ての面が使用により磨耗する。中世以降のものと考えられる。

2区　(第64・65図)

1区西側の道路を挾んだ排水路予定部分に設定し、延長約140mを測る。基点は排水路主軸線上、道路肩部西端とした。東側から1、2トレンチに細分している。また各トレンチ主軸線は排水路主軸線と一致する。標高は現水田面で17.6～17.0mを測り、西側に傾斜する。基本土層層序は1区に準じており、地山面まで40～60cmの深さを測る。1区1トレンチから引き続き、明確な遺構は検出されず、遺跡の中心部より離れていく印象を受ける。図化しえなかったが平安時代の須恵器、内黒土師器や中世陶磁器、非ロクロの土師質皿等が出土している。

3区　(第65・66図)

1区北側に平行する排水路予定部分を延長約68mにわたり調査した。基点は排水路主軸線と東側に隣接する農道肩部が接する地点より65cm西側に設定した。トレンチの主軸線は排水路主軸線に一致する。標高は現水田面で17.8～18.2mを測り、西側にゆるやかに傾斜する。基本土層層序は1区に準じており、上層より耕土、床土、包含層(灰褐色砂質シルト)、地山となる。調査区西側では包含層が分層していくようだ。地山面までの深さは30～60cmを測り、西側ほど厚く堆積している。

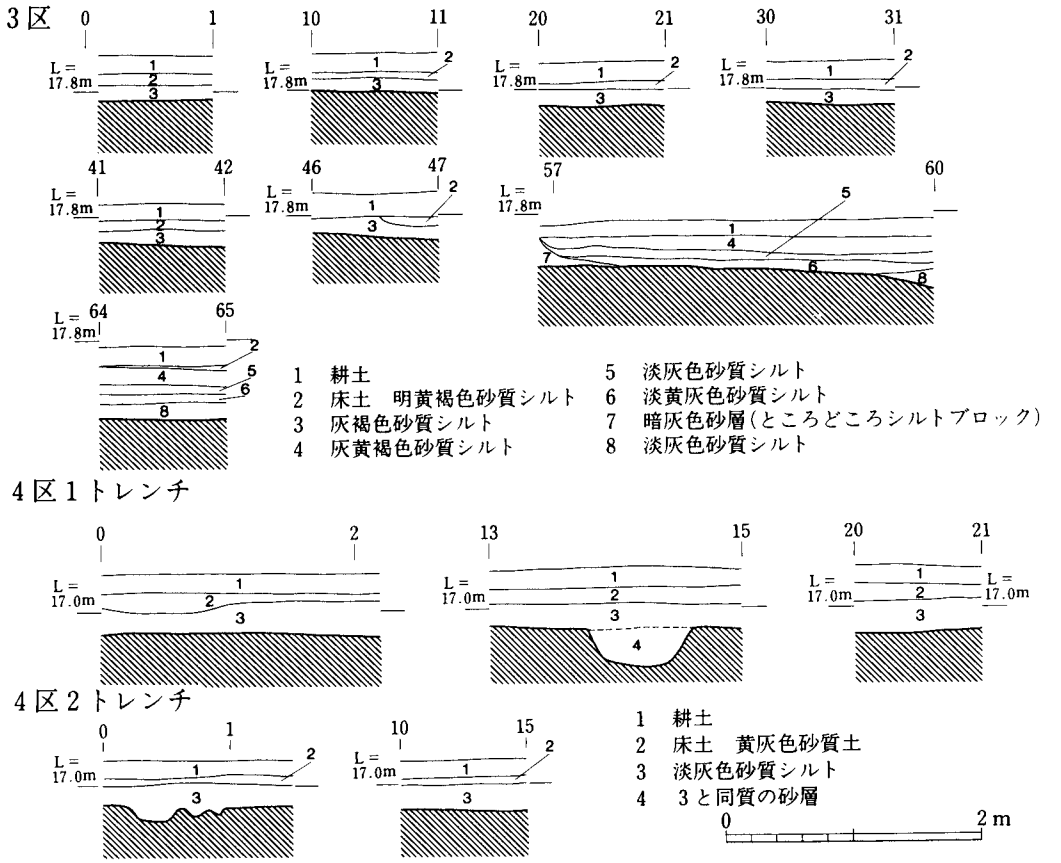
調査の結果、遺構密度はあまり高くなく、遺跡の縁辺部にあたると考えられる。検出された1号溝は屈曲しながら南北方向に走る。幅70cm、深さ約12cmを測り、覆土はブロック状の地山質土を含む灰黄色砂シルトである。出土遺物はない。また、調査区東側で径15～20cm、深さ5～20cmのピット多数を検出しているが、掘立柱建物の柱穴等に復元できるものはなかった。いずれのピットも出土遺物なし。なお、包含層より須恵器、中世陶磁器が少量出土している。

4区　(第65・66図)

JR北陸本線に沿う排水路予定部分を調査し、延長約49mを測る。第65図のように、1、2トレンチに細分した。1トレンチの基点は、北東方向に走る排水路主軸線が西側に138度折れまがる地点より北東側32.76mに、2トレンチの基点は、その折れまがる地点に設定されている。また、各トレンチ主軸線は排水路主軸線に一致する。標高は現水田面で17.2～17.3mを測る。基本土層層序は1区に準じており、上層より耕土、床土、包含層(淡灰色砂質シルト)、地山となる。地山面までの深さは40～50cmを測る。遺構密度は低く、遺跡の縁辺部にあたると思われる。

1トレンチでは溝1条を検出した。幅60～80cm、深さ約30cmを測る。覆土は包含層と同質の淡灰色砂質シルトである。時期不明。

2トレンチでは楕円形を呈した土坑1基を検出した。長軸約90cm、短軸約60cm、深さ32cmを測る。土層の記載なし。出土遺物もない。包含層より須恵器がごく少量出土している。



第66図 北出遺跡3・4区北壁土層実測図（S＝1/60）

2 5区

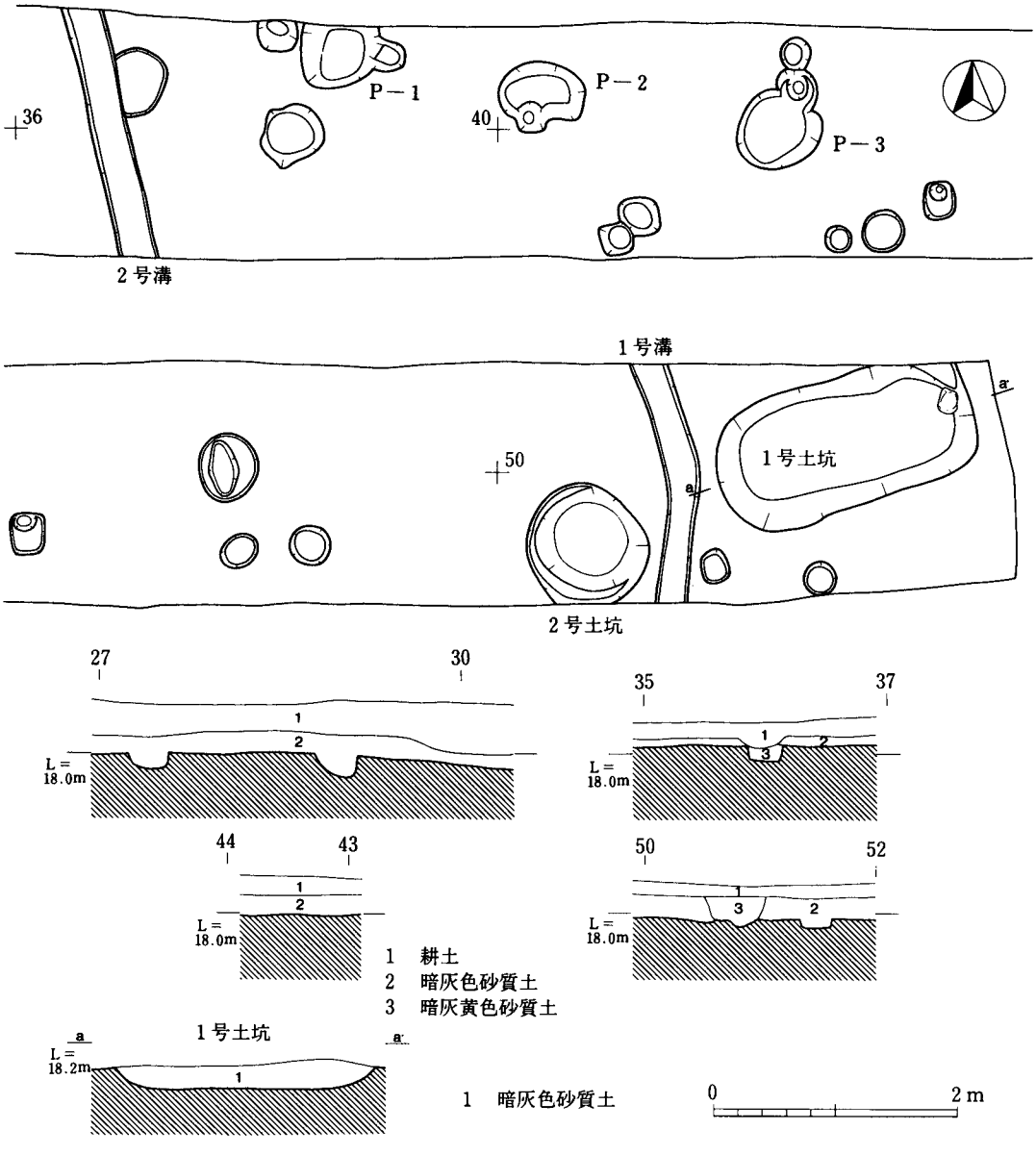
米永の集落北西端に鎮座する菅原神社裏手の排水路予定部分を延長約73mにわたり調査した。基点は、米永の集落東側を南北に走る道路の東側肩部より2.93m東側の排水路主軸線上に設定した。また第78図のとおり西から1、2トレンチに細分している。各トレンチ主軸線は排水路主軸線と一致する。標高は水田面で18.1～18.4mを測り、西側にゆるやかに傾斜する。

1トレンチ （第67～69・78図）

遺構

調査区全域で13世紀中頃～14世紀に位置づけられる溝、土坑、ピット等の遺構多数を検出した。調査区幅が狭いことに加え、一部攪乱を受けていることから、遺構検出は容易ではなかった。第68図のように調査担当者の判断では基点より7～15m付近では遺構面が2面存在していたとされるが、①土層断面では上面遺構と下面遺構のレベル差があまりないこと、②上面遺構と下面遺構の形状が似通っていること、③出土遺物には、大きな時期差がないこと、④下面遺構の範囲が限られていること、などの理由により、同一遺構を分けた可能性が高いと判断される。本文ではそのような考えにより記述したい。また、遺構の基本土層層序は上層より、耕土、床土、包含層(暗灰色砂質土)、地山（黄褐色砂質土）となり、遺構面まで20～50cmの深さを測る。

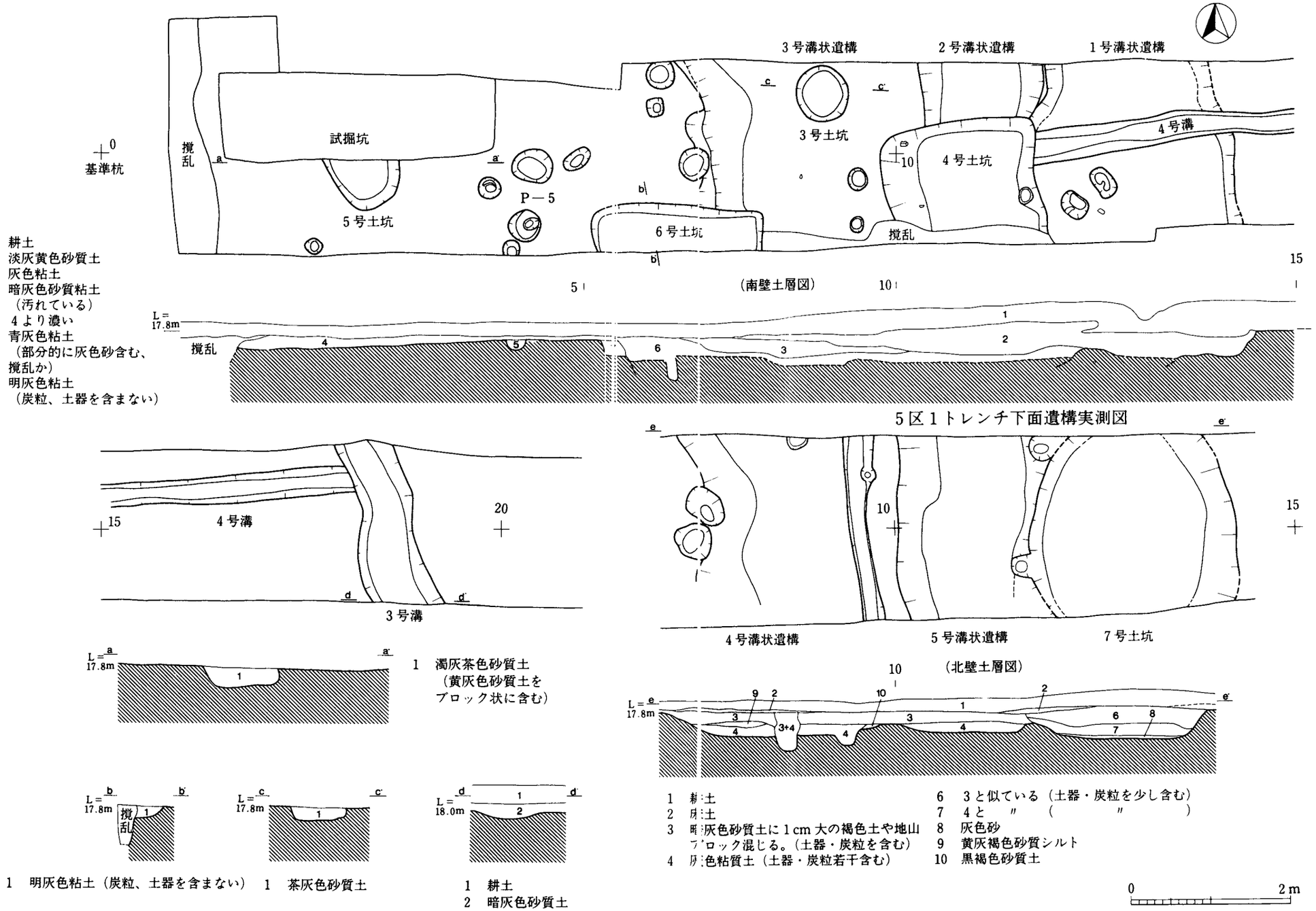
（上面遺構）



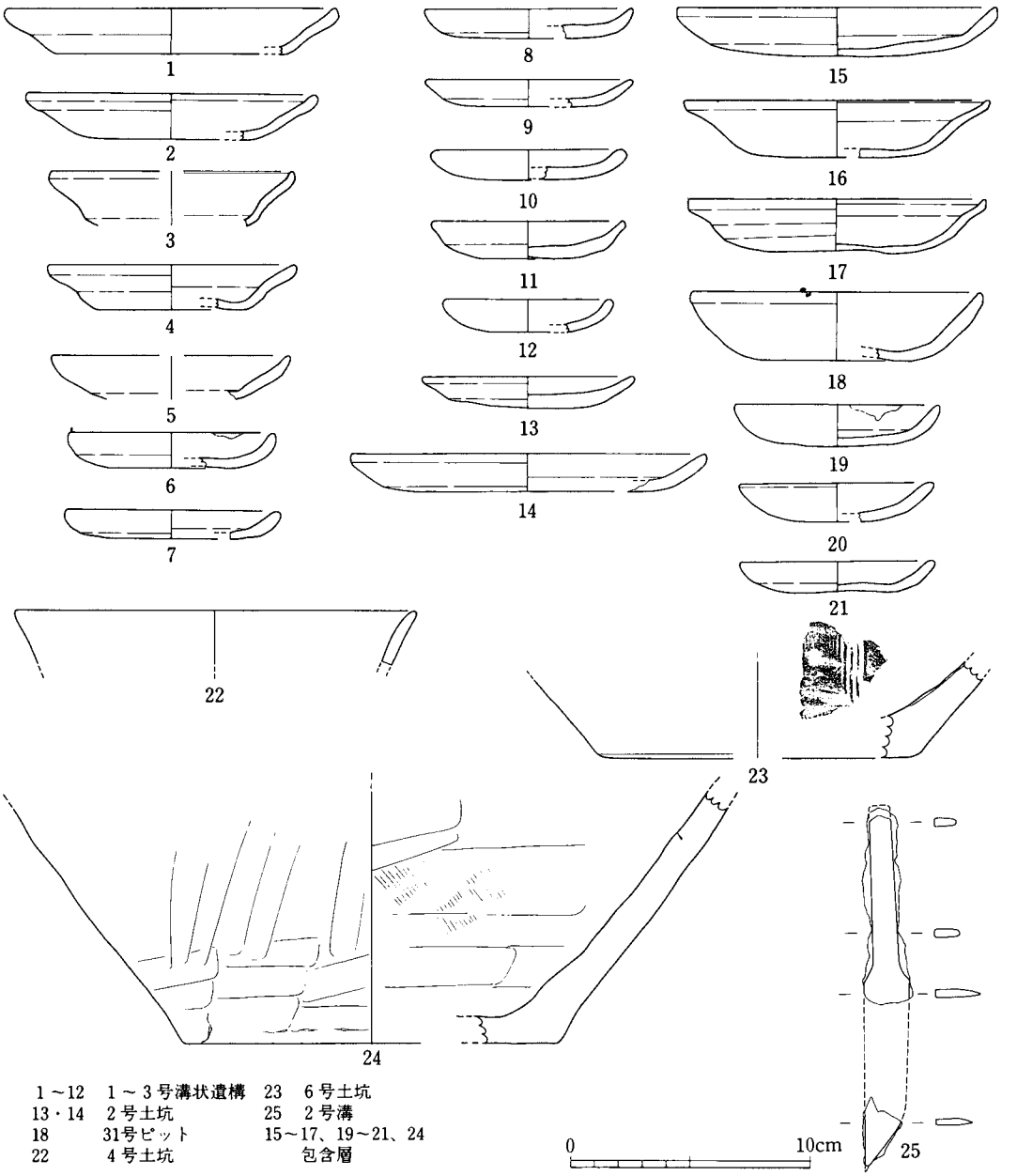
第67図　北出遺跡5区1トレンチ遺構実測図1（断面図は南壁）（S＝1/60）

土坑

6基の土坑を検出した。1号土坑は楕円形を呈し、長軸216cm、短軸108cm、深さ約20cmを測る。覆土は包含層とよく似た暗灰色砂質土で、底面は平坦である。覆土中より須恵器、中世陶器、砥石などが出土している。2号土坑は円形を呈する。径約100cm、深さ約50cmを測る。覆土は暗灰黄色砂質土である。中世土師質皿が出土している。包含層を切って掘りこまれていることから、他の土坑と時期差をもつと考えられる。3号土坑は3号溝状遺構が埋まった段階で掘り込まれている。径66～70cm、深さ約17cmを測る。覆土は茶灰色砂質土。出土遺物なし。4号土坑は1～3号溝状遺構が埋まった後、掘られている。攪乱により全形は不明だが、やや崩れた方形を呈する



第68図　北出遺跡5区1トレンチ遺構実測図2（S＝1/60）



1～12	1～3号溝状遺構	23	6号土坑
13・14	2号土坑	25	2号溝
18	31号ピット	15～17、19～21、24	包含層
22	4号土坑		

第69図　北出遺跡5区1トレンチ出土遺物実測図（S＝1/3）

と思われる。東西方向で幅約190cm、深さ16～20cm を測る。覆土は淡灰黄色砂質土で、青磁碗が出土している。5号土坑は試掘により損壊を受けており、規模不明。深さ25cm を測る。覆土はブロック状の黄灰色砂質土を含む濁灰茶色砂質土である。出土遺物なし。6号土坑は4号土坑と規模が似通っており、何らかの関連をもつ可能性がある。方形を呈すると思われ、東西方向で幅約220cm、深さ16cm を測る。断面図では若干混乱があるものの、明灰色粘土の覆土をもつ。須恵器、珠洲焼すり鉢が出土している。

溝状遺構

平行して南北方向に走る1～3号溝状遺構を検出した。先述のように下面の遺構と同一の可能性をもつため、後に説明を加えたい。覆土は汚れた暗灰色砂質土で、多数の中世土師質土器が出土している。

溝

4条の溝を検出した。1号溝は屈曲しながら南北方向に走る。幅約30cm、深さ7cmを測る。覆土は暗灰色砂質土で出土遺物はない。2号溝は幅30cm、深さ5～10cmを測る。覆土は暗灰色粘質土。3号溝は4号溝を切って掘られている。屈曲しながら南北方向に走る。幅70～90cm、深さ7cmを測る。覆土は暗灰色砂質土。4号溝は屈曲しながら東西方向に走る。幅約40cm、深さは東端で10cm、西端で15cmを測る。覆土は暗灰色砂質土で砂質が強い。刀子の破片が出土している。

ピット

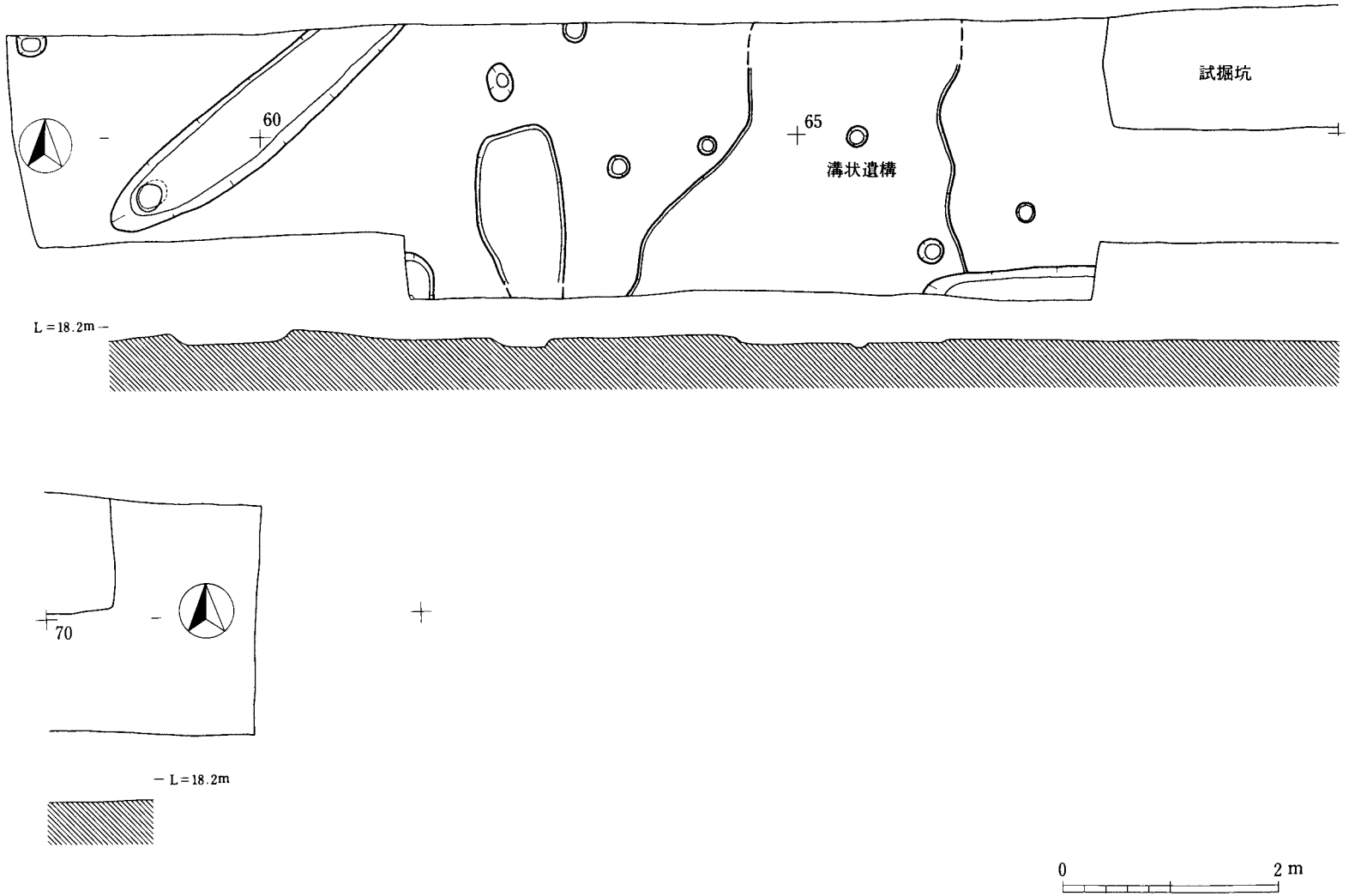
調査区0～10mおよび35～55m付近で多数のピットを検出した。そのうち、遺物の出土したピットにのみナンバーを付けている。P－1～3は径60cm前後、深さ20～30cmを測る。2間以上の掘立柱建物に復元できる可能性が高い。柱間寸法は180cm前後を測る。

（下面遺構）

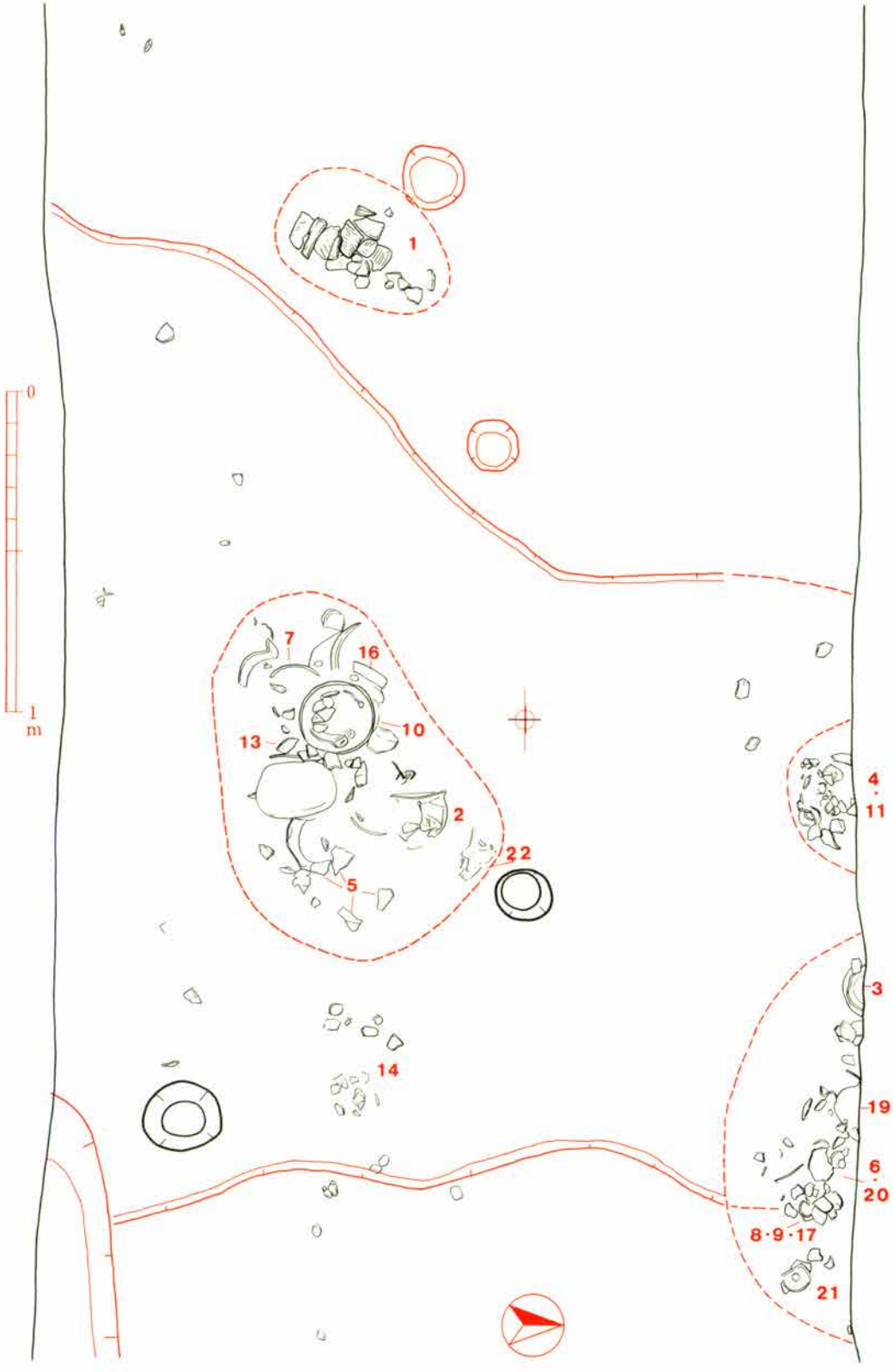
先に述べたとおり上面遺構の1～3号溝状遺構は、下面遺構の一部であり、上面遺構覆土は下面構覆土3および6（暗灰色砂質土で1cm大の褐色土や地山ブロックを含む土層）に対応するものと思われる。すなわち上面遺構は覆土3および6を取り除いた状態と考えたい。4号溝状遺構は南北方向に走り、更に東端で一段深くなる。東側肩部は不明だが、西側肩部はゆるやかに立ち上がる。本来30cm前後の深さをもつと考えられる。また幅は240cmを測る。覆土は灰色粘質土である。5号溝状遺構は4号溝状遺構に平行し、ほぼ同じ時期と思われる。幅158cm、深さ12cmを測る。覆土は灰色粘質土。7号土坑は4、5号溝状遺構が暗灰色砂質土で埋め込まれた後に、掘られ、壁は耕土直下まで立ち上がる。明らかに4、5号溝状遺構より新しく、時期差をもつものと考えられる。やや崩れた楕円形を呈し、東西方向で最大幅258cm、深さ約40cmを測る。覆土は上層より暗灰色砂質土、灰色粘質土、灰色砂となる。

遺物（第69図）

1～21は非ロクロの中世土師質皿である。口径法量より8～9cm、10cm前後、12～14cm、15cm前後に中心が求められる。1～5、8及び16、17は薄手で体部が屈曲し、口縁端部をつまみ上げる。6～12、19～21は体部が緩く内湾、口縁部で一段の横ナデを施し、端部を丸くおさめる。口径は8～9cm大に限られる。6は灯明痕が残る。10は厚手で他とは異なる印象を受ける。11は底部と体部の境に稜を持つ。13は明茶褐色で海綿骨片を含み、他の胎土とは大きく異なる。14は口径15.0cmを測る。15、18は口縁部に2段の横ナデを施し、端部は断面三角形を呈する。18は深身である。以上の形態、製作技法の相違から5タイプ以上に分類が可能であろう。色調については10を除き、浅黄色～橙色系を呈するが形態、製作技法の分類との対応は不明瞭である。なお、黄灰色系の土師質土器は確認できない。藤田氏編[(2)]年を参考にすれば、13世紀後半～14世紀前半に



第70図　北出遺跡５区２トレンチ遺構遺構実測図（S＝1/60）



第71図　北出遺跡５区２トレンチ溝状遺構実測図（S＝1/20）

位置づけられる。22は青磁碗で口径16.8cmを測る。23は珠洲焼壺で使用による磨耗が激しい。24は加賀焼壺で底径15.6cmを測る。25は刀子である。錆による腐蝕が激しい。全長不明。

2トレンチ

第70図に示した全体図の通り、幅2m、総延長約14mのトレンチ調査区である。ただし、62～68mの区間は南側を0.5m拡張している。

遺構

溝状遺構（第70図）

65m付近に存在し、トレンチに直交するかたちで南北方向に走り、調査区外へ伸びているものと推定される。規模は最小幅1.8m、最大幅3m、深さ0.05mを測る。遺構内に数穴の小ピットを有する。きわめて浅く不明確な掘り込みであるが、第71図の如く遺構内とその周辺から完形品を含む土器がかなりまとまった状態で出土している。

遺構は他に溝・小ピット・落ちこみ等が存在するが、掘り込みが浅く遺物は出土していない。

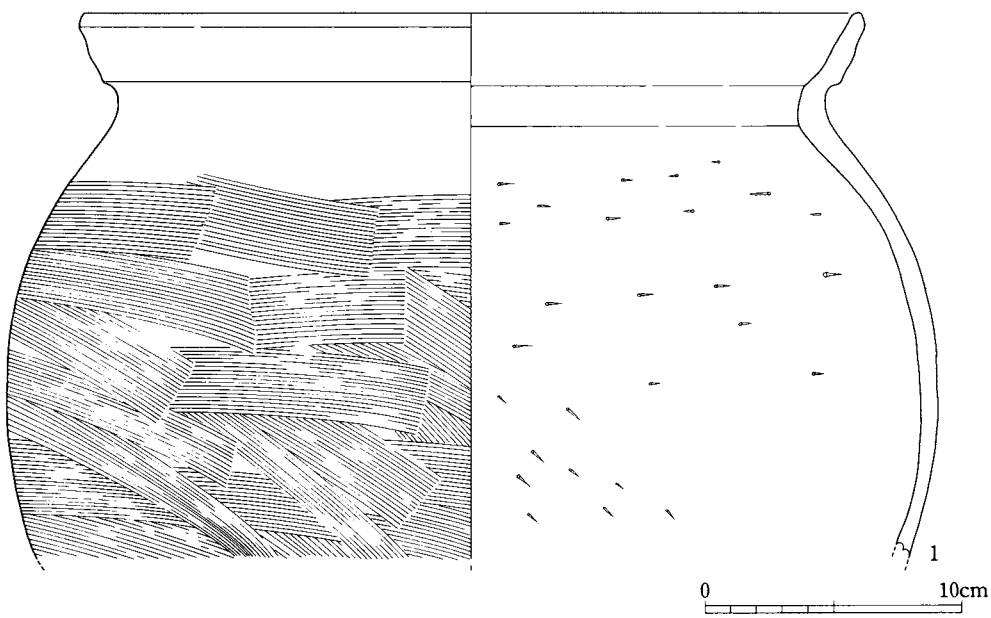
遺物

溝状遺構出土土器（第72図～第74図）

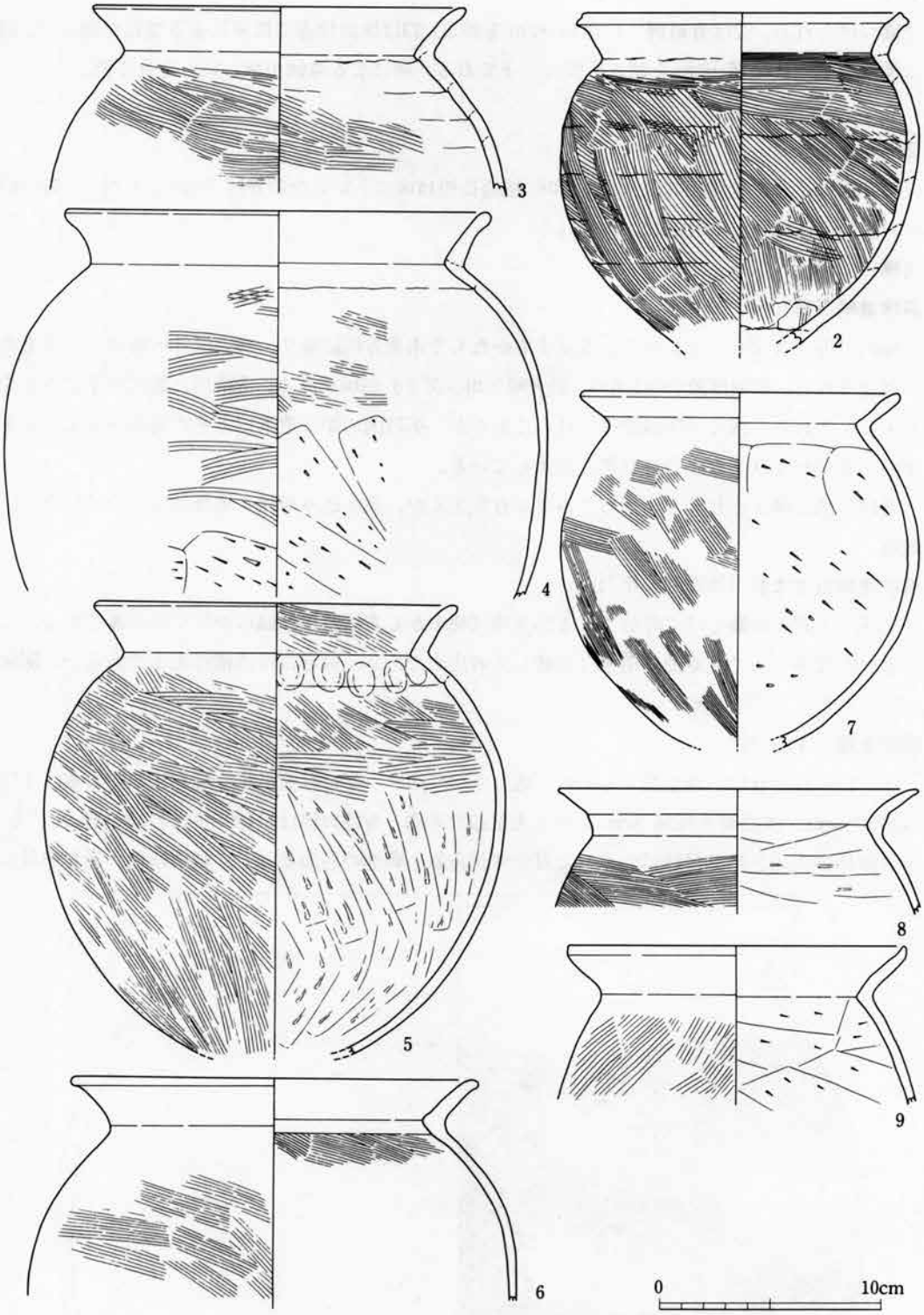
すべて古式土師器と汎く呼称される弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器である。1および21は第71図で見る通り遺構に近接しての出土であり、厳密には遺構外出土であるが、関係の深いものとしてまとめた。

甕形土器（1～12）

1・11・12は有段口縁を呈するもの、他はすべて「く」字口縁を呈する甕形土器である。1は口径30.6cm、胴部最大径36.8cmを測る大型品である。有段口縁は口縁帯下端の段が弱く、「く」字口縁に粘土紐を貼り付けてつくった可能性がある。頸部の屈曲は弱く、胴部は最大径を中位に

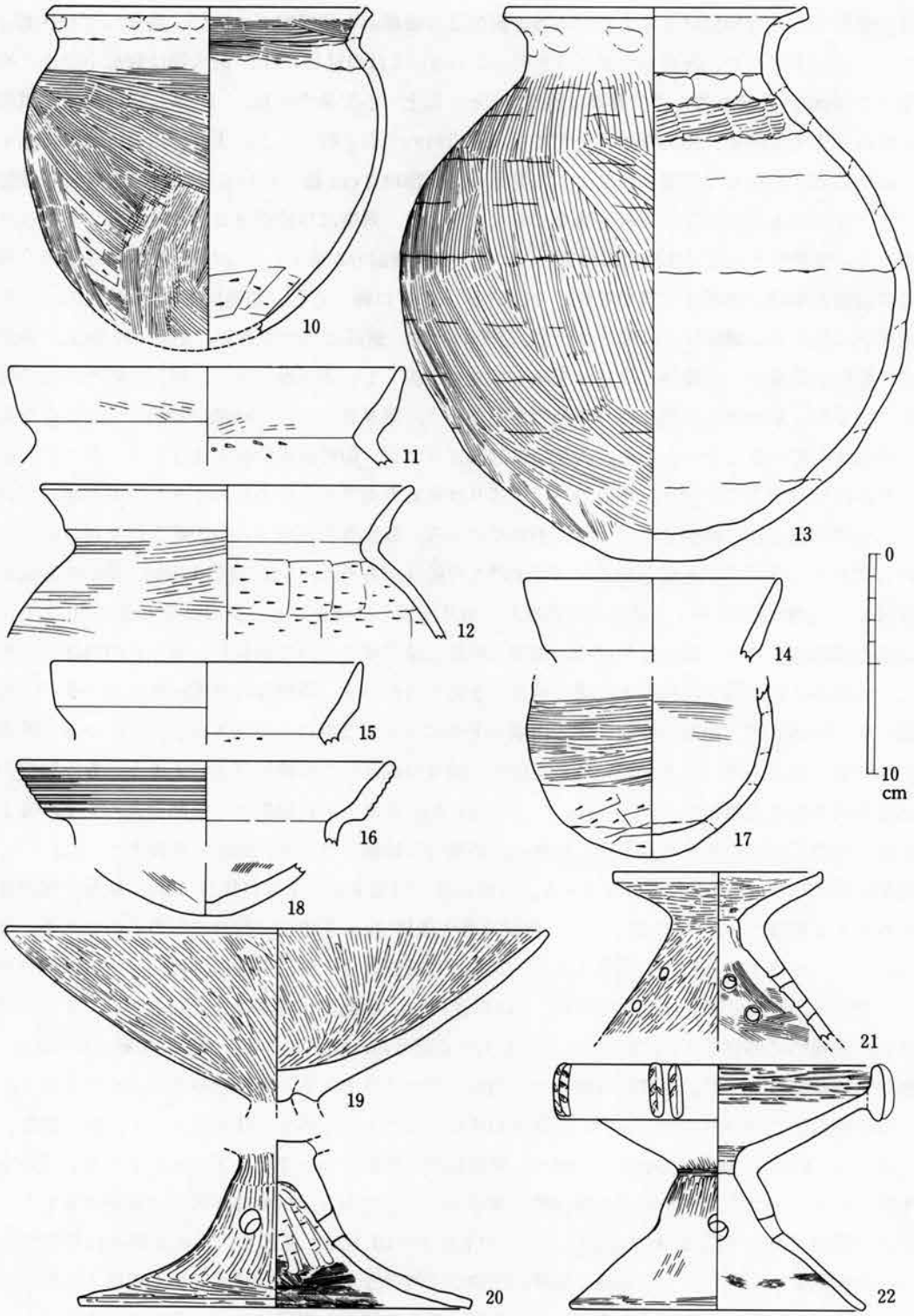


第72図　北出遺跡5区2トレンチ出土遺物実測図1（S＝1/3）



第73図　北出遺跡５区２トレンチ出土遺物実測図２（S＝1/3）

持つ球型もしくは卵型になるものだろう。調整は口縁部から頸部がヨコナデ、胴部以下が外面ヨコハケかナナメハケ、内面へラケズリを行っている。2は口径14.3cm、最大径は胴部中位よりやや上で16cm、底部を欠くので器高は推定で15cm以上の小型品である。「く」字口縁は明確に屈曲して外反するもので、端部を強くナデて中凹みの斜めの面を取ることにより、内面は余った粘土が端部に盛り上がって肥厚されたように見える。胴部は2cm毎ぐらいに成形時の継ぎ目が確認でき、横断面も真円でなく比較的雑なつくりと言える。調整は口縁部ヨコナデ、頸部以下はハケである。使用痕として、外面の煤付着と、ピット状剥離部分がある。3は口径16.8cmを測り、頸部の屈曲が明確で端部まで自然な感じで伸びる「く」字口縁である。頸部以下の継ぎ目は2cm毎ぐらいにはいる。調整は口縁部ヨコナデ、頸部はナデ、胴部はハケである。4は口径19cm、頸部での屈曲が明確で、口縁端部は粘土を貼って丸くする「く」字口縁である。胴部は破片からの復元であるが、最大径を中位に持つ卵型の器型だろう。継ぎ目から、口縁部は頸部にのせるかたちで接合されていることがわかる。調整は口縁部ヨコナデ、頸部から胴部上半はハケ一部ナデ、胴部下半はへラケズリを行う。外面のへラケズリは斜め方向であるが上から下へケズリが走っており。土器を正立して調整したとすれば不自然である。製作者の視点ぐらいの高さに土器をもっていってケズリ下ろすが逆転させてケズリ上げた可能性があろう。5は口径16.2cm、頸部の屈曲が明確な「く」字口縁であり、端部を角の取れた自然な感じに仕上げる。胴部は最大径21cmを中位に持つ球形のもので、底部は欠ける。頸部と胴部上位の境ぐらいに継ぎ目が走り、内面はその直上に指押さえ痕を残す。胴部との接合時にできたものだろう。調整は口縁部が外面ヨコナデ・内面ハケ、頸部ナデ、胴部は外面ハケ・内面を上半にハケと下半にへラケズリを行っている。外面の煤付着、内面の焦げつきと思われる炭化物、擦り切れたハケが使用痕といえよう。6は頸部の屈曲が内外面とも明確な「く」字口縁で、口径18.2cmを測る。口縁部は、端部は丸めてその直下を強くなでているのでそり返る感じが強い。調整は口縁部ヨコナデ、頸部は外面ナデ・内面ハケ、胴部は外面ハケ・内面ナデを行っている。外面に煤が付着する。7は口径14.1cm、頸部の屈曲は内外面とも明確な「く」字口縁である。胴部は最大径16.1cmを中位に持つ球形のものである。全体的につくりは丁寧といえ、歪みもない。調整は口縁部ヨコナデ、胴部は外面ハケ・内面へラケズリを行う。外面に煤が付着している。8は口径16cm、頸部で一度垂直に立ち上がってさらに屈曲して直線的に伸びる「く」字口縁で、立ち上がる部分のみ厚手となり、端部は先細におさめる。調整は口縁部ヨコナデ、胴部は外面ハケ・内面へラケズリである。頸部は外面のみナデを行う。9は口縁端部に強いヨコナデを行い先端がわずかに立ち上がる感じに仕上げる「く」字口縁で、口径15cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、頸部以下は外面はハケで1条2mm以上の太い原体を用い、内面はへラケズリを行う。全体的に薄手のつくりである。口縁部外面のみ煤が付着する。10は口径14.2cm、胴部最大径は中位よりやや上にあり16.4cm、底部を欠くので器高は推定で16cmの小型品である。「く」字口縁は頸部の屈曲が明確でなく、端部は強くナデて中凹みの斜めの面を取る、2と同じタイプであるが、2より短い感じで屈曲も明確でない。頸部の屈曲部分とその直下に継ぎ目が観察できる。調整は口縁部から頸部は外面ヨコナデ・内面ヨコハケ、胴部は外面ハケ・内面ナデで底部近くなどに部分的にへラケズリを用いる。全体的に歪んでおり、雑なつ



第74図　北出遺跡５区２トレンチ出土遺物実測図３（S＝1/3）

くりと言える。胴部外面に煤、内面に炭化物が付着する。11は有段口縁を呈し、口径17.8cmを測る。口縁部は内面ではほぼ無段で、端部は先細りになる。全体的に鋭さに欠け、頸部の屈曲も明確でない。11の有段口縁は「く」字口縁に粘土紐を貼って段をつくり出す手法を取るもので、比較的貼った量が多いのでやや厚手である。調整はヨコナデである。12は口径16.7cm、有段口縁を呈するが、やはり粘土紐で段をつくり出すタイプである。段形成前の原型は5・6タイプのややそり返る「く」字口縁であろう。調整は口縁部ナデ、頸部以下は外面ハケ・内面ヘラケズリを行う。全体的にやや薄手のつくりである。外面には煤が付着する。

壺形土器（13～18）

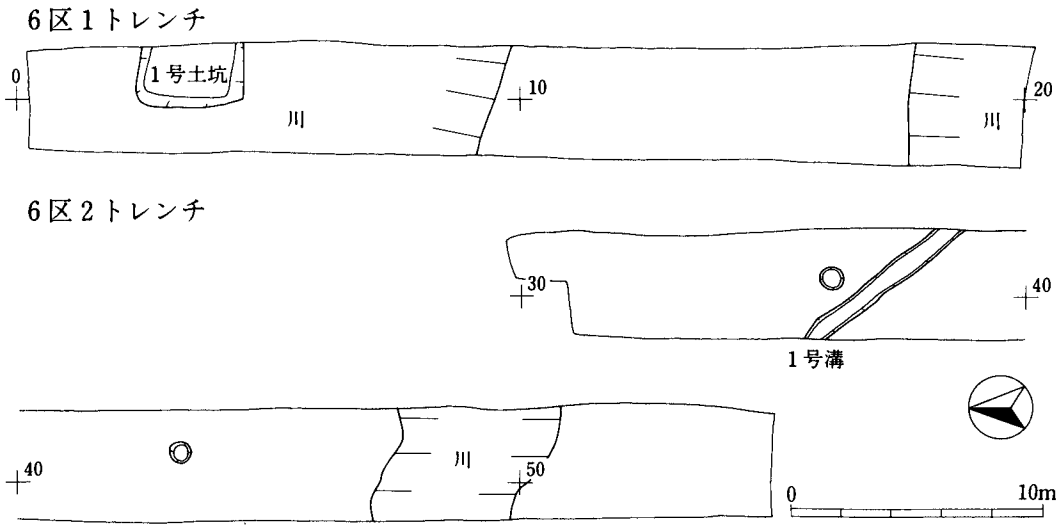
13は口径13.6cm、最大径は胴部中位で23.1cm、器高25.4cmを測り、ほぼ完形品である。頸部で立ち上がり外反する口縁部は端をなでて斜めに面を取る。球形の胴部には角の取れた平底が付き、自立はできない。頸部以下は2～2.5cm毎に継ぎ目が走り、つくりは雑な感じである。口縁部の調整はヨコナデで、外面に指圧痕を残す。頸部以下の調整は外面に粗いハケ、内面は上から継ぎ目ごとに指圧痕・ヨコハケ、以下はナデである。14は口径11.5cmを測る小型壺であろう。強いヨコナデか粘土紐貼り付けにより有段状とする口縁部であり、口径のわりに長く直線的に伸び、端部は先細りとなる。調整は摩滅して不明である。15は口径14cmを測る有段口縁であるが、内面では段が不明確である。短い口縁部の端部をきれいに先細らせているため、断面楔形を呈する。16は口径17cmを測り、直線的に広がる口縁帯に擬凹線文を7条施す有段口縁である。端部は自然な感じでおさめる。垂直に立ち上がる頸部から一応壺形土器としたが、口縁形態や法量から甕形土器であってもおかしくはない。17は胴部以下のみが残る小型壺で、現状で最大径11.2cmを測り、底部は丸底である。調整は外面はハケで底部近くのみヘラケズリを行い、内面は摩滅して不明である。18は底部、ほとんど丸底に近い平底で接地面は径2cmに満たない。大きく張り出す胴部が付くものと考えられ、12と同一個体の可能性がある。

高坏形土器（19・20）

19は坏部である。脚部の付け根からわずかに内湾しながら大きく広がっており、口径は24.6cmを測る。成形時に底を粘土で栓をして塞いでいることが観察できる。調整はヘラミガキであるが、外面の一部に一次調整時のハケを残す。20は径17.8cmを測る脚部で、坏部は底だけが残る。脚上半ではゆるやかに、下半で大きく反り返って開いており、端部は垂直に面を取る。孔は三方に持つもので、焼成前穿孔だがきれいに処理されており、粘土の盛り上がりはない。調整は外面の上半タテヘラミガキ・下半ヨコヘラミガキ、内面の上半ヨコヘラケズリ・下半ヨコハケを行っている。19・20は同一個体ではないが、胎土や坏脚の付け根の形状が類似することから、同じタイプの高坏の坏部と脚部なのであろう。

器台形土器（21・22）

21は小型器台であり、脚部端を欠損する。器受部は付け根から直線的に伸び、端をなでて垂直に面を取るもので、口径9cmを測る。脚部に上下二段の孔をやや軸をずらして五方に持つ。調整は器受部は内外面ともヨコヘラミガキ、脚部は外面タテヘラミガキ・内面は上端に絞り痕を残しその下はハケである。22は器受部径14.3cm、脚部径13.2cm、器高11.3cmを測る。器受部は付け



第75図　北出遺跡6区遺構実測図（S＝1/60）

根から直線的に大きく広がり、端部に上下方向に伸びる幅広の口縁帯が付く。口縁帯には棒状浮文が2本1組で6方に縦に貼り付けられ、さらにその上をハケ状具で2～3か所刻んでいる。脚部は孔を4方に持ち、2段階に屈曲して広がる直線的なものである。成形の面では、口縁帯が一度端部を上方に拡張してから垂下帯を貼り足したものであること、重厚なつくりの器受部と脚部上半に対して脚部下半はかなり薄く仕上げられていることに注意したい。調整は器受部はヘラミガキ、口縁帯ヨコナデ、脚部は外面ヘラミガキ・内面ハケのちナデを行っている。

3　6区

5区西端で北側に曲がる排水路予定部分を幅2m、延長約55mにわたり調査した。第75図のように、1、2トレンチに細分している。各トレンチ主軸線は排水路主軸線に一致する。標高は水田面で18.5～18.8mを測り、ゆるやかに北側に傾斜する。基本土層層序は上層より耕土、灰褐～明黄灰色砂質土、地山（黄灰色砂質土）となり、地山面まで20～30cmの深さを測る。また調査区全域にわたり砂礫土層が認められ、流れを変えながら西方向に流れる河川が存在したと考えられる。遺構はあまり多くなく、遺物も包含層より弥生土器、中世土師器が少量出土したにとどまる。

1トレンチでは土坑1基を検出した。1号土坑は長軸210cm、深さ約50cmを測る。覆土は黄灰褐色シルトである。出土遺物なし。また10mより以南および18m以北で河川跡を確認している。

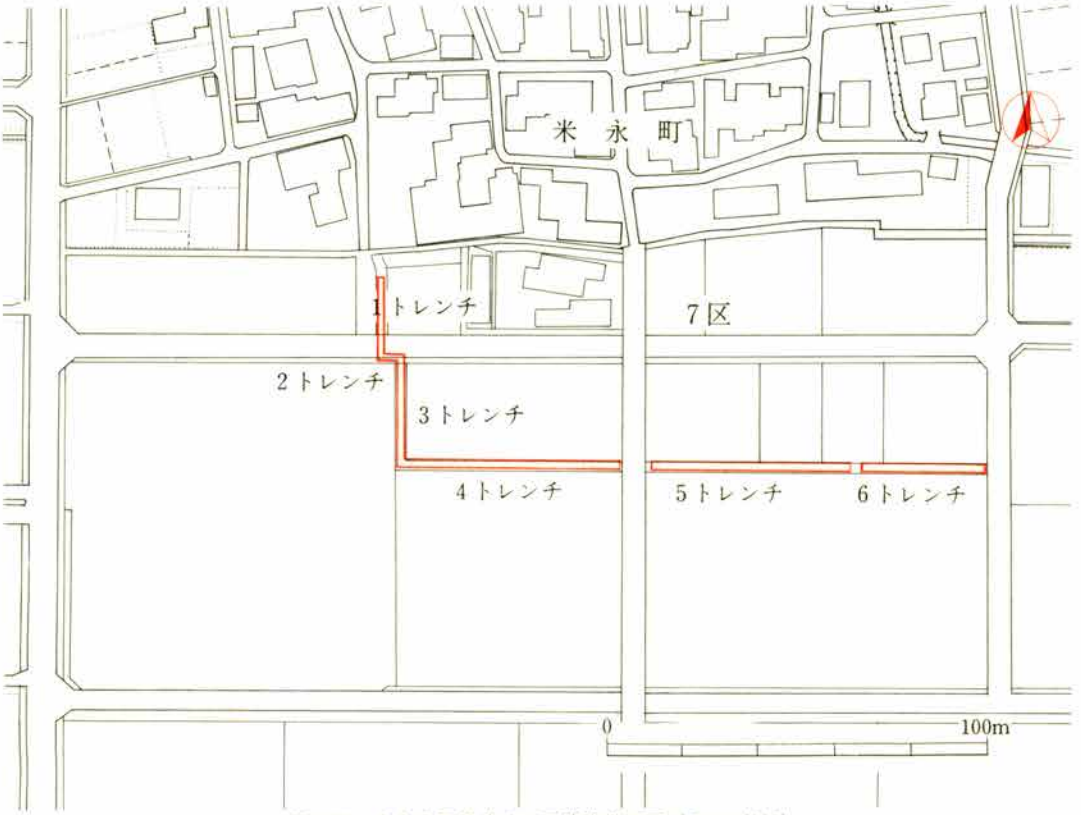
2トレンチでは溝1条、ピット2基を検出した。1号溝は幅約40cm、深さ15cmを測る。覆土は灰色砂の単層である。出土遺物なし。また19～22mにかけて河川跡が確認した。

第3節　米永古屋敷遺跡　遺構

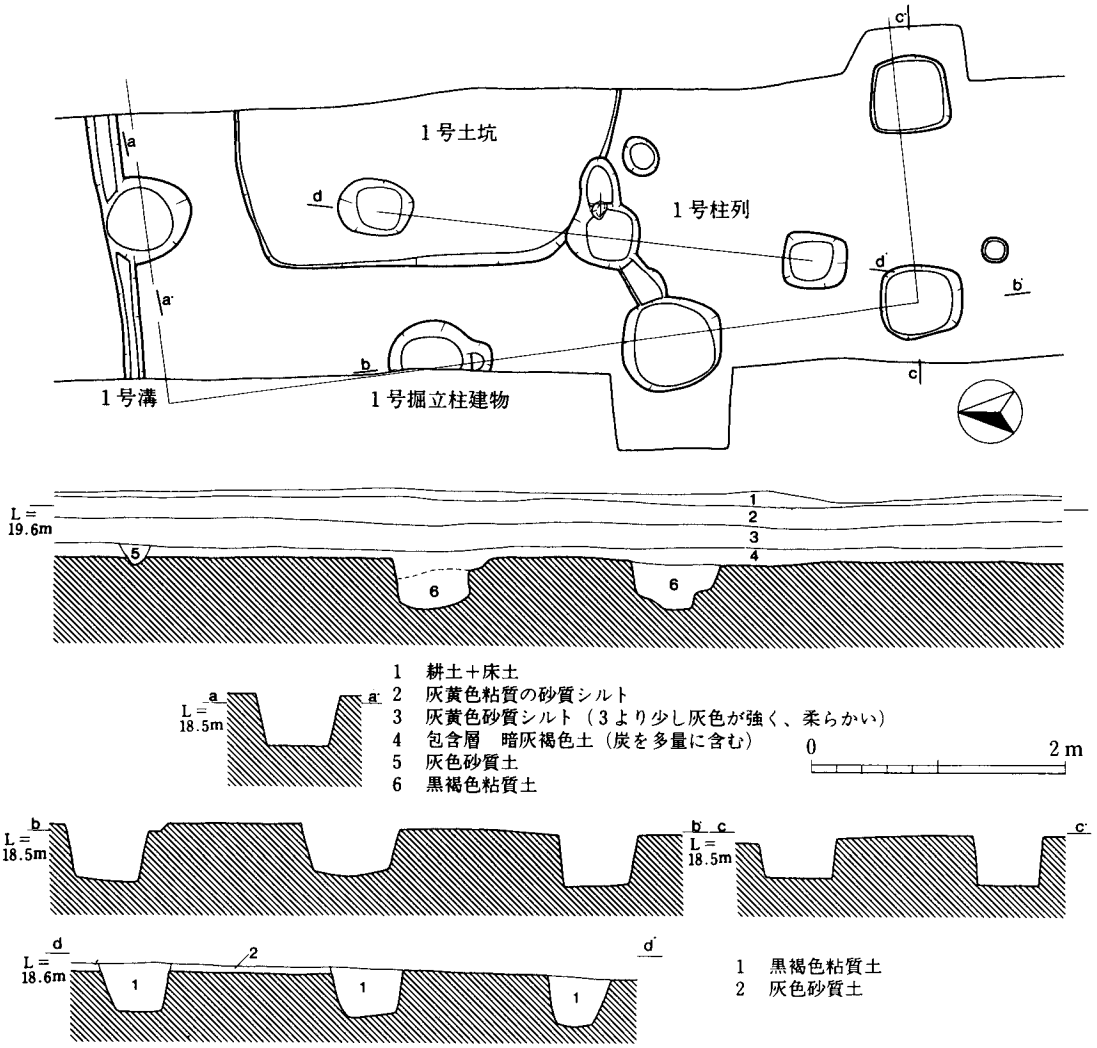
1　調査概要

米永の集落南側の排水路予定部分を幅２m、延長約200mにわたり調査を実施した。第76図のとおり調査区（７区）を農道や排水路の折れる箇所で１～６トレンチに細分した。いずれのトレンチの主軸線も排水路主軸線と一致する。１～４トレンチは米永の集落中程から南側にのびる農道の西側に、また５、６トレンチは東側に位置する。１～４トレンチの基点は２トレンチと３トレンチの間、排水路主軸線が折れる地点に設定している。基点より西側が２トレンチとなり、排水路主軸線上９.10m西側にいった地点で北に折れ、１トレンチとなる。１トレンチは長さ約22mを測る。また、３トレンチは基点より南側で、排水路主軸線上27.08mの地点で東に折れ、４トレンチとなる。この３、４トレンチの境界の杭から南側の農道西側肩部まで58.59mを測る。５、６トレンチの主軸線は同一で、基点を農道東側肩部より3.72m東側に設定し、５トレンチは長さ約51m、６トレンチは約31mを測る。

標高は現水田面で19.4～20.0mでゆるやかに西側に傾斜する。また、基本土層層序は、上層より耕土、床土、灰黄色砂質シルト、包含層（暗灰褐色土）、地山（黄褐色砂質土）となり、遺構面までは50～100cmの深さをもつ。



第76図　米永古屋敷遺跡７区遺構実測図（S＝1/200）



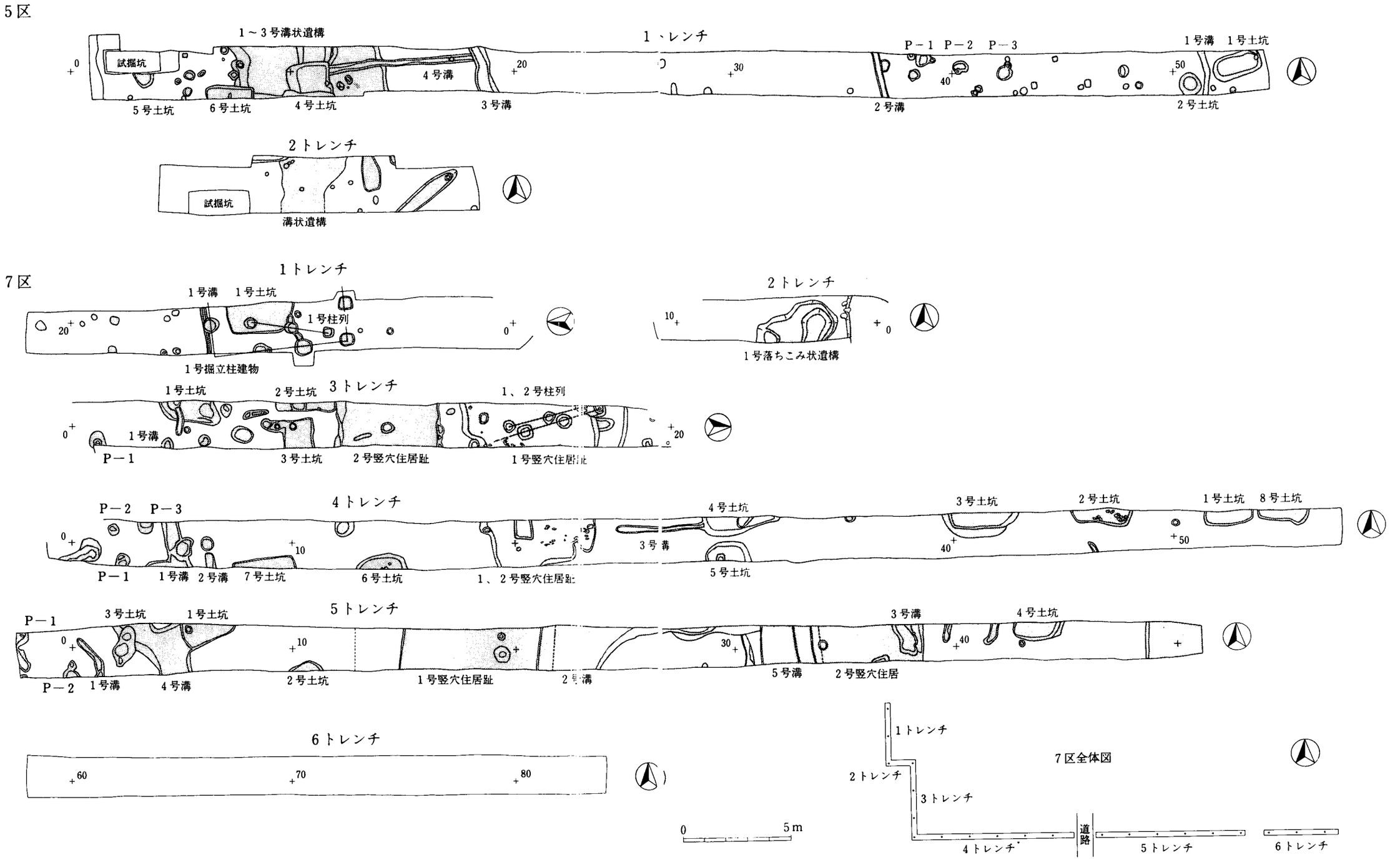
第77図　7区1トレンチ遺構実測図（S＝1/60）

調査により8世紀を相前後する時期の良好な集落遺跡を検出した。遺構としては掘立柱建物1棟、掘立柱建物の柱穴の可能性をもつ柱列3列、竪穴住居趾5棟、土坑15基、溝10条、落ちこみ状遺構1基、ピット多数を検出し、遺跡の中心部にあたると思われる。また、配置からいえば、1～5トレンチ全域で遺構が検出され、6トレンチには遺構は存在しない。遺跡範囲の東端は5、6トレンチの間にあるものと考えられる。遺物としては多数の須恵器、土師器の他、製塩土器、椀形滓、勾玉などが出土している。以下、各トレンチごとに遺構の説明を加えたい。遺構名は各トレンチごとに付している。

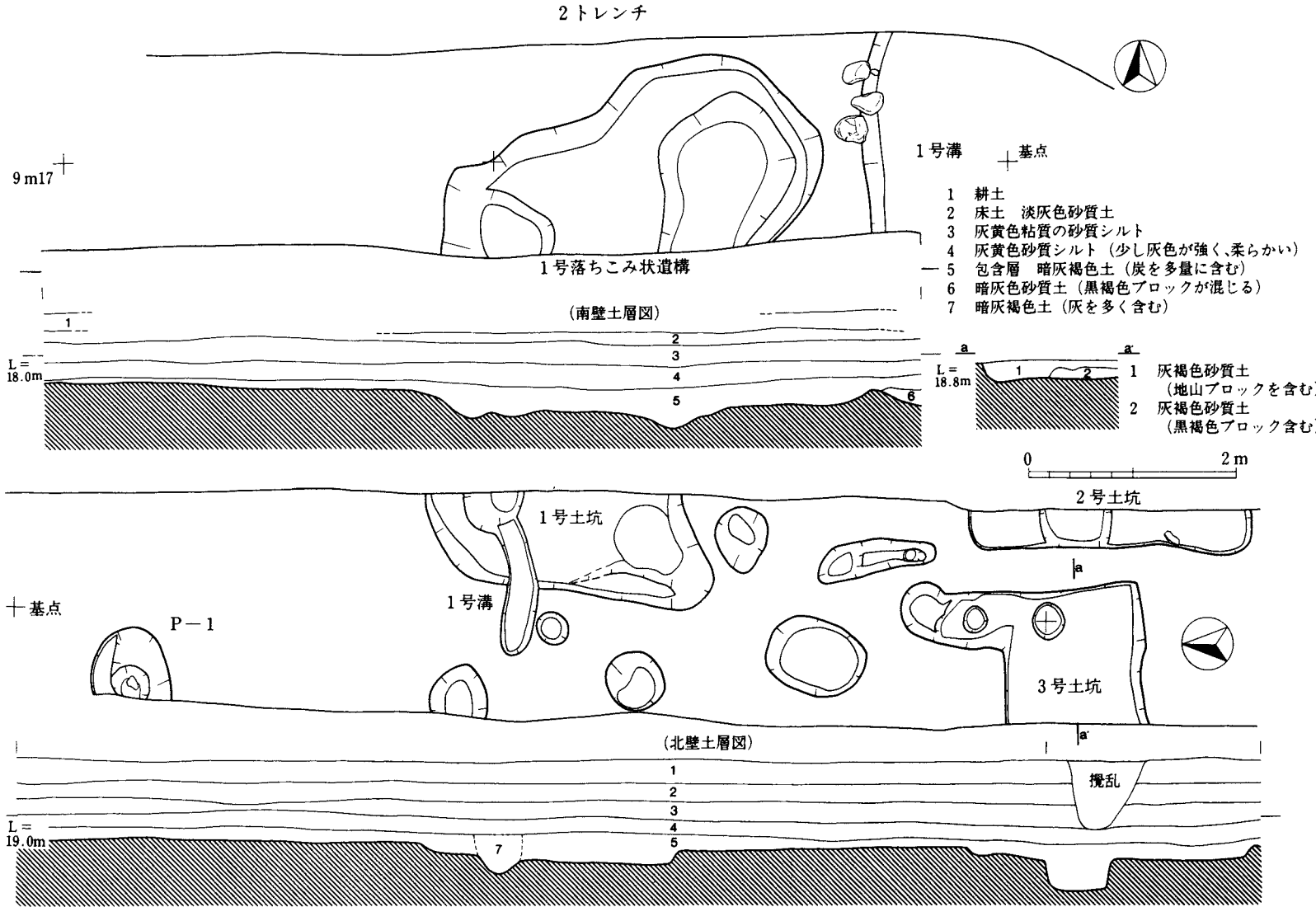
2　1トレンチ　（第78図）

掘立柱建物1棟、柱列1列、土坑1基、溝1条、ピット多数を検出した。

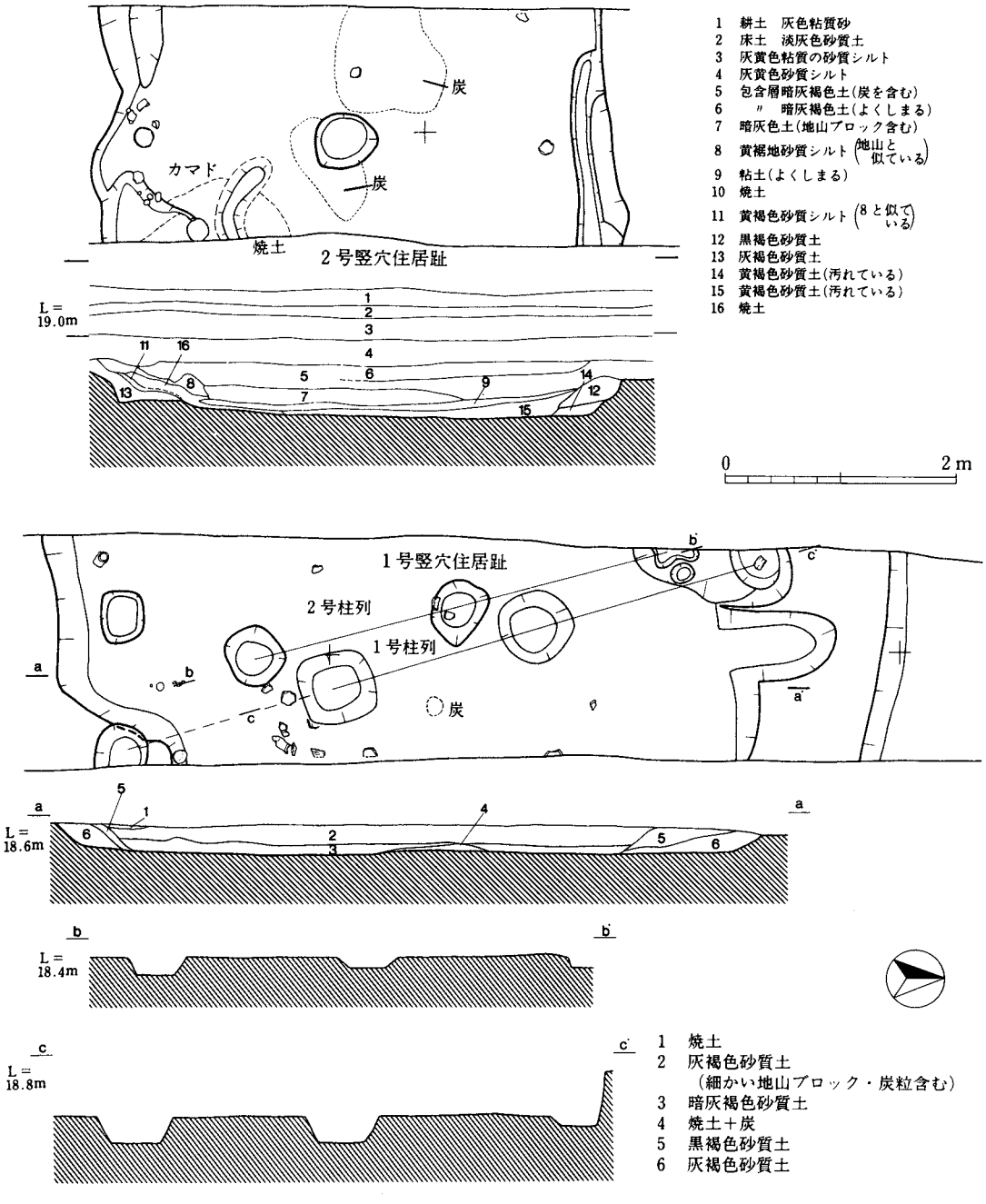
1号掘立柱建物　3間(620cm)×1間以上の掘立柱建物に復元した。主軸はN—6.5—Wで東側に



第78図　北出遺跡・米[illegible]古屋敷遺跡遺構配置図（S＝1/200）



第79図　米永古屋敷遺跡7区2・3トレンチ遺構実測図（S＝1/60）



第80図　米永古屋敷遺跡７区３トレンチ遺構実測図（S＝1/60）

のびると考えられる。柱筋、柱間寸法ともに揃っており、西側柱列で約200cm、南側柱列で約170cmを測る。柱穴掘方は略方形を呈し、一辺60～80cm、深さ約40cmを測る。覆土は黒褐色粘質土の単層である。

１号柱列　掘立柱建物の柱穴となる可能性をもつ。主軸はN－８－Eで１号掘立柱建物と大きくずれ、規模も若干小さい。２間分の柱穴が検出され、柱間寸法は170～180cmを測る。柱穴は略方

形で長軸50～60cm、短軸約40cm、深さ約40cmを測る。1号土坑を切っており、覆土は黒褐色粘質土である。

1号土坑　やや崩れた方形を呈し、東側に伸びる。南北方向で最大幅304cm、深さ8cmを測る。床面は平坦であり、覆土は灰色砂質土。

1号溝　断面図より、他の遺構の包含層（暗灰褐色砂質土）を切って掘られており、時期が下るものと考えられる。東西方向に走り、幅16～24cm、深さは東端で13cm、西端で4cmを測る。覆土は灰色粘質土である。

3　2トレンチ　（第79図）

溝1条、落ちこみ状遺構1基を検出した。

1号溝　トレンチ西端、3トレンチとの境の基点付近で溝1条を検出した。調査担当者は溝との見解を示しているが、南北方向170cm以上、東西方向120cm以上、深さ12～24cm程度の規模をもつ竪穴住居趾の可能性をもつ。西側壁のたち上がった箇所に30cm前後の円石が3個確認されているが、意味不明。覆土は、黒褐色ブロックの混じる暗灰色砂質土である。床面より須恵器甕口縁部が出土した他、覆土中より多くの須恵器、土師器、製塩土器が出土している。

1号落ちこみ状遺構　平面、断面のプランとも凹凸のある不整形の遺構である。風倒木痕の可能性をもつ。最大幅368cm、最大深40cmを測り、中央部付近で一段下がる。覆土は包含層と類似した炭を多量に含む暗灰褐色土であり、覆土上層より遺物が出土している。

4　3トレンチ　（第79・80図）

遺跡の中心部に近い部分と思われ、柱列2列、竪穴住居趾2棟、土坑3基、溝1条などを検出した。注目すべき点としては1号竪穴住居趾のカマド付近より椀形滓が出土し、精錬鍛冶作業がおこなわれた工房的性格をもつ竪穴住居趾の可能性をもつ。また、包含層より円形の容器に入っていたと思われる漆や、底部に漆の付着した平瓶も出土しており、漆についても何らかの作業がおこなわれている。本遺跡の性格を考えるうえで大変興味深い。

柱列

1号柱列　土層断面より1号竪穴居趾および2号柱列を切って掘りこまれている。柱穴の規模から掘立柱建物の可能性が高い。主軸はN―17.5―Wである。3間分の柱穴が検出され、柱間寸法は約190cmを測る。柱穴は略方形ないし円形を呈し、径約60cm、深さ約50cmを測る。覆土は1～3cm大の黒褐色砂質土や地山質土が混じる灰色シルト質砂である。

2号柱列　土層断面より1号竪穴住居趾より後、1号柱列より前に掘られている。掘立柱建物の柱穴の可能性をもつ。主軸はN―15.5―Eである。2間分の柱穴が検出され、柱間寸法は1号柱列と同じく約190cmを測る。柱穴はやや崩れた円形を呈し、径約50cmを測る。また深さは断面で約60cmを測る。覆土は暗灰色砂質土である。

竪穴住居趾

1号竪穴住居趾　調査区に直交して竪穴住居趾の中央部付近を検出した。南東側の壁は屈曲して

いるが、方形を呈すると思われる。東西方向で618cm、深さは残りのよい西壁で約40cmを測る。また北壁中央部付近に幅約60cm、長さ約100cmのカマドがついている。なおカマドの壁の検出はうまくいかず、図化していない。床面の数ケ所で炭化物が薄く堆積し、南東部壁近くで焼土を確認している。覆土は壁側よりまず灰褐色砂質土、黒褐色砂質が堆積、部分的に薄く焼土が入ったのち暗灰褐色砂質土、細かい地山土をブロック状に含む灰褐色土が堆積している。また、その後、1、2号柱列の時期と思われる焼土が確認されている。遺物は床面および覆土中から須恵器、土師器が多数出土している他に、前述のとおりカマド付近より椀形滓が採取されている。ただし、詳細な出土地点、レベルは不明である。

2号竪穴住居趾　1号竪穴住居趾の南側に近接して検出された。土層断面の観察より2時期の竪穴住居趾が重復していると考えられ、最初の時期を2－A号竪穴住居趾、のち少し規模を縮めてつくられた竪穴住居趾を2－B号竪穴住居趾とする。検出時は、この重複が明確に判らず、図面および遺物は両者が混ざったものとなっている。2－A号竪穴住居趾は方形を呈すると思われ、南西方向で幅420～440cm、深さ30cm前後を測る。壁のたちあがりはしっかりと残っており、北壁に幅16～20cm、深さ9cm前後の周溝がめぐる。床面の数ケ所で炭化物が薄く堆積している。また中央部のピットは竪穴住居趾に付随するかは不明である。2－B号竪穴住居趾は1号竪穴住居趾を壁部で黒褐色砂質土、灰褐色砂質土、黄褐色砂質土で、また床面を黄褐色砂質土で埋めた後、床面に粘土を貼り固めてつくっている。南東方向で幅約400cm、深さ約20cmを測る。調査区南東端でカマドの一部を検出していることから、東壁に近い箇所を検出したと考えられる。カマドの壁は残存部で幅約10cm、高さ24cmを測る。またカマド付近の床面に炭化物が堆積している。カマドの南側で径18cm、深さ約10cmのピットおよび4～8cmの円石を検出したが、用途は不明である。覆土は暗灰色土で埋められた後、暗灰褐色土が自然堆積している。遺物は須恵器、土師器が多数出土している。

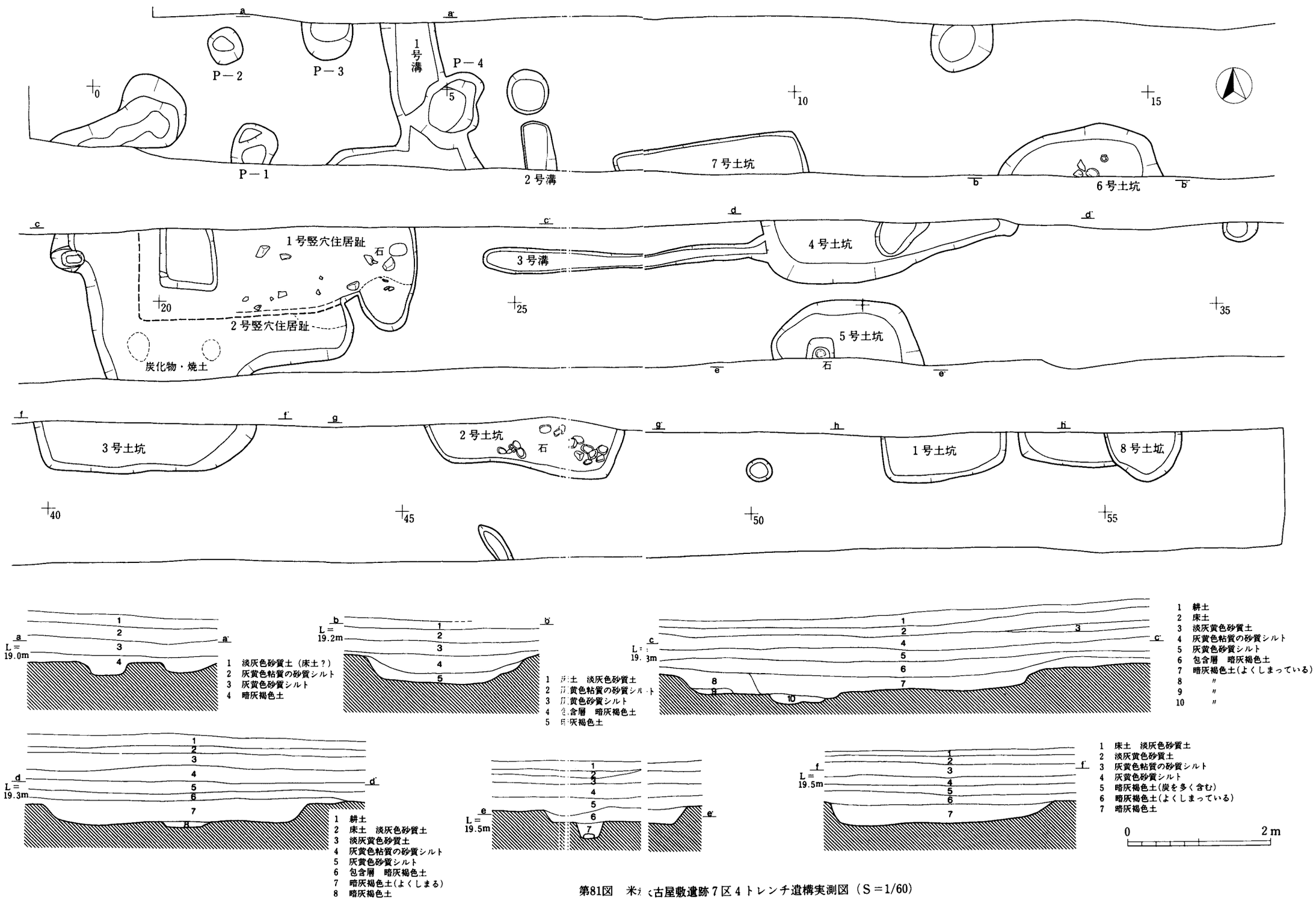
土坑・溝

1号土坑　不整形な平面プランをもつ。北東側はやや張り出し気味で、底面は一段低くなる。南北方向で最大幅250cm、深さ12cm、一段低くなる箇所で深さ24cmを測る。覆土は包含層と似た暗灰褐色土で炭を多く含む。覆土中より遺物が出土している。

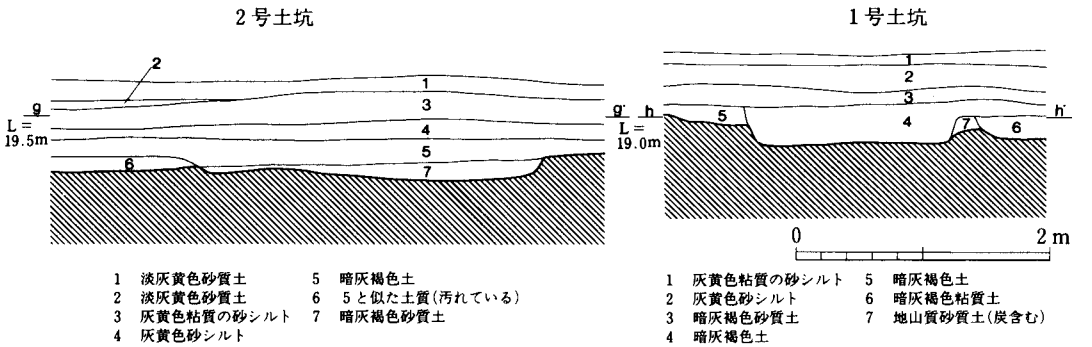
2号土坑　2号竪穴住居趾の南側に近接し、方形を呈すると思われ、さらに中央部付近で略方形に掘り込まれる。南北方向で最大幅272cm、中央部で、深さ約40cmを測る。覆土は包含層と似た暗灰褐色土で炭を多く含む。覆土中より土師器鍋が出土している。

3号土坑　方形を呈し、南側に溝状に張り出す。南北方向で最大幅132cm、深さ18cm、また溝状の張り出しは長さ108cm、深さ36cmを測る。覆土は灰褐色土でブロック状に他の土が入っている。

1号溝　包含層が堆積した後に掘られており、時期は下ると考えられる。東西方向に走り、西端でピット状に1段深くなる。幅24～30cm、深さ13cmを測る。覆土は暗灰褐色土で炭の含みが多い。



第81図　米ヵ古屋敷遺跡7区4トレンチ遺構実測図（S＝1/60）



第82図　米永古屋敷遺跡7区4トレンチ土層実測図（S＝1/60）

5　4トレンチ　（第81・82図）

調査区西側を中心にして遺構が存在する。竪穴住居趾2棟、土坑8基、溝3条等を検出している。

竪穴住居趾

1、2号竪穴住居趾　遺構検出時は不明確だったが、同一レベルで2棟の竪穴住居趾が重複していることが判明した。調査区北側を1号竪穴住居趾、南側を2号竪穴住居趾とした。層位的に1号竪穴住居趾が新しいと考えられる。

1号竪穴住居趾は方形を呈すると思われ、東西方向で約390cm、深さ約30cmを測る。床面東側が方形に一段低くなる。また住居趾北西端が張り出し、床面で焼土が検出されていることから、カマドが築かれていた可能性が高い。張り出し部分は幅76cm、長さ54cmを測る。張り出し部分の前方の床面を中心に3区2号竪穴住居趾と同様に20～30cm大の円石が認められる。なお、焼土面中より土師器が出土している。覆土はよくしまった暗灰褐色土である。

2号竪穴住居趾は主軸をやや西にふって重複している。南側壁が屈曲しているが、平面プランは方形を呈するものと考えられる。東西方向で364cm、深さ約20cmを測る。床面の数ケ所に焼土が認められる。覆土は暗灰褐色土。遺物については先述の理由により、混在している。

土坑

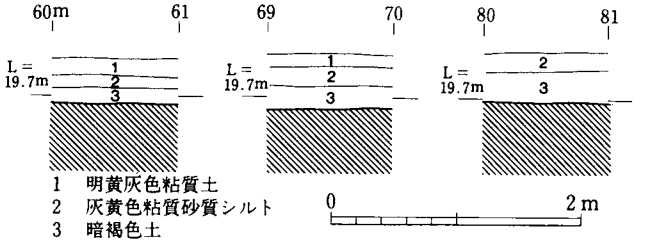
1号土坑　方形を呈すると思われ、東西方向で幅174cm、深さ約20cmを測る。覆土は暗灰褐色土である。

2号土坑　浅く不整形な平面プランをもち、北壁断面で幅284cm、深さ7～10cmを測る。床面で10～15cm大の円石が多く検出された。覆土は暗灰褐色砂質土。二次焼成を受けた円面硯が出土している。

3号土坑　北壁断面で幅316cm、深さ約30cmを測る。覆土は暗灰褐色土。

4号土坑　北壁断面で幅360cm、深さ20～28cmを測る。中央部でやや深くなる。覆土は暗灰褐色土。

5号土坑　4号土坑南側に位置する。やや崩れた円形を呈すると思われ、東西方向で幅212cm、深さ27cmを測る。中央部で略方形を呈する柱穴状のピットが認められ、柱穴底面に15cm大の円石



第83図　7区6トレンチ北壁土層実測図（S＝1/60）

が置かれている。ピットは40×30cm以上、深さ14cmを測る。覆土は暗灰褐色土である。

6号土坑　南壁断面で幅232cm、深さ37cmを測る。覆土は暗灰褐色土で下ほどよくしまっている。10～20cm大の円石を若干含む。

7号土坑　方形を呈すると思われ、南壁断面で幅284cm、深さ9cmを測る。覆土は暗灰褐色土である。

8号土坑　やや崩れた円形を呈すると思われ、東西方向で幅106cm、深さ13cmを測る。覆土は暗灰褐色土。

溝

1号溝　やや西にふれながら南北方向に走る。北側で幅を拡げており、他の遺構と切りあっていると考えられる。南端で幅220cm、深さ14cm、北端で幅78cm、深さ10cmを測る。覆土は暗灰褐色土である。

2号溝　1号溝の東側にほぼ平行して走る浅い溝である。幅約40cm、深さ約5cmを測る。覆土は暗灰褐色土である。

3号溝　東西方向に屈曲して走り、4号土坑と切りあっている。幅22～36cm。深さ10～17cmを測る。覆土は暗灰褐色土である。

6　5トレンチ　（第84図）

竪穴住居趾2棟、土坑4基、溝5条などの遺構を検出した。1～4トレンチで検出された遺構群より後出する遺構を含む。例えば3、5号溝が包含層である暗灰褐色土をベース面とし掘られ、また4号土坑、2号溝は耕土直下まで立ち上がり、さらに時期が下ると思われる。

竪穴住居趾

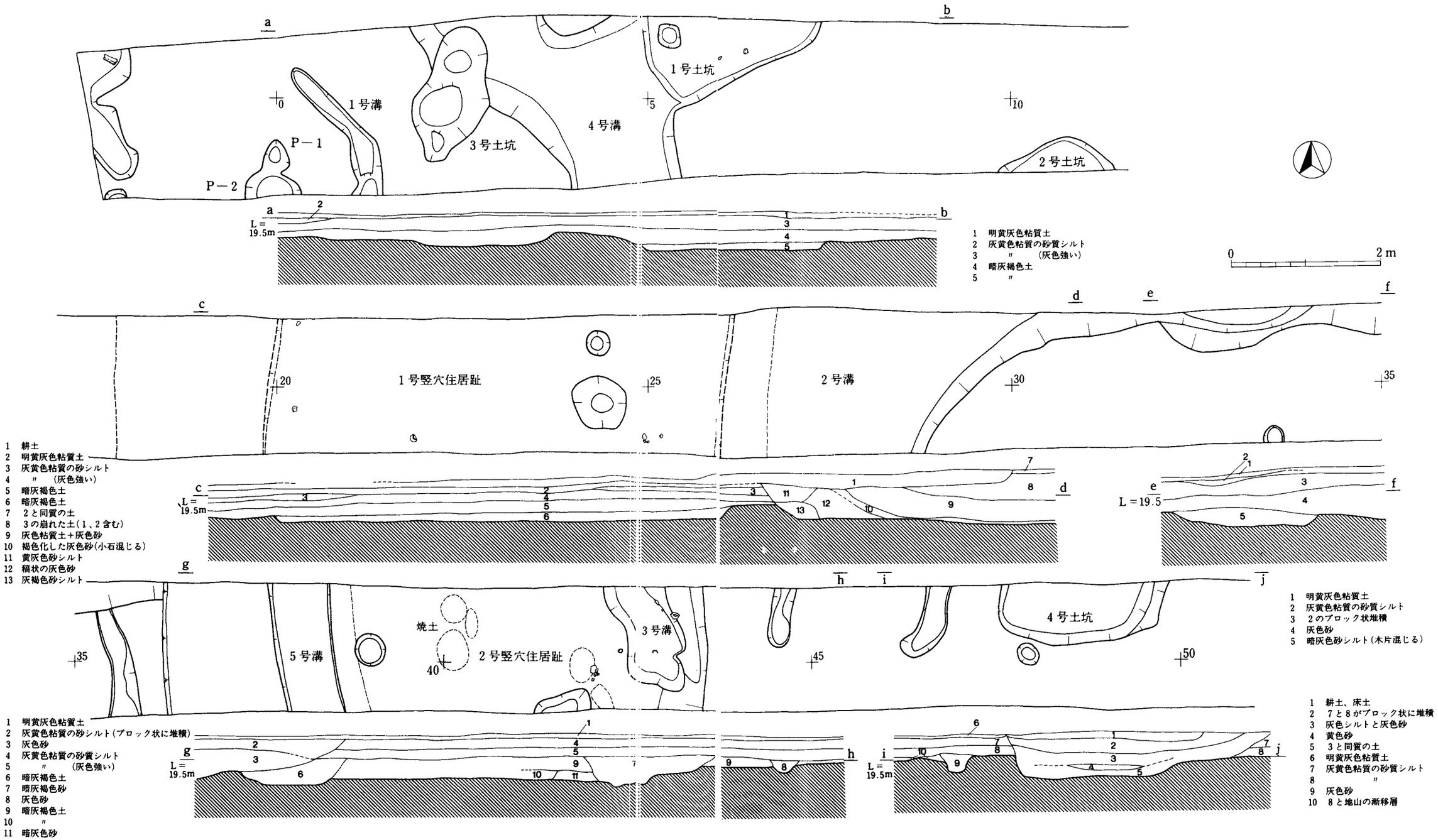
1号竪穴住居趾　調査区中央付近で、不明瞭ながら方形を呈すると思われる竪穴住居趾を検出した。東西方向で幅約620cm、深さ約20cmを測る。覆土は包含層と似た暗灰褐色土である。床面、覆土中より遺物が出土している。

2号竪穴住居趾　1号竪穴住居趾の東側にほぼ平行して存在する。東西方向の両壁を3、5号溝にそれぞれ切られる。方形の平面プランを呈すると思われ、東西方向で約460cm、深さ約20cmを測る。床面の数ケ所に焼土が認められるが、カマドは検出されていない。覆土は包含層と似た暗灰褐色土である。

土坑

1号土坑　4号溝の一段下った部分の可能性をもつ。略方形を呈すると思われ、最大幅152cm、深さ17cmを測る。覆土は暗灰褐色土。

2号土坑　規模不明。深さは12～15cmを測る。覆土は暗灰褐色土。



第84図　米永古墳遺跡7区5 トレンチ遺構実測図（S＝1/60）

3号土坑　4号溝を切っている。平断面とも不整形なプランをもつ。長軸188cm、短軸94cm、最大深さ約40cmを測る。覆土は暗灰褐色土。

4号土坑　肩部が耕土直下までたち上がり、時期は下るものと思われる。方形を呈し、調査区北壁で幅228cm、深さ約60cmを測る。覆土は灰色のシルトと砂が交互に堆積し、溝の可能性をもつ。

溝

1号溝　幅26cm、深さ15～20cmを測る。覆土は暗灰褐色土。

2号溝　4号土坑と同じく耕土直下までたち上がる中世以降の溝である。北側で幅を拡げながら東側に流れを変える。南壁断面で幅216cm、深さ44cmを測る。覆土は川の流れによる砂が堆積したのち埋められたようだ。第83図中段の土層10より15世紀末～16世紀前半の瀬戸おろし皿が出土している。

3号溝　2号竪穴住居趾の東端と重複している。5号溝と同様に包含層をベース面とし、掘られている。北壁断面で幅176cm、深さ42cmを測る。底面は凹凸が激しい。覆土は暗灰褐色砂質土である。

4号溝　二叉に分かれる浅い溝である。幅150～160cm、深さ8～13cmを測る。覆土は包含層と似た暗灰褐色土である。

5号溝　2号竪穴住居趾の西端と重複し、包含層をベース面として掘られている。規模不明。覆土は暗灰褐色砂質土である。

7　6トレンチ　（第83図）

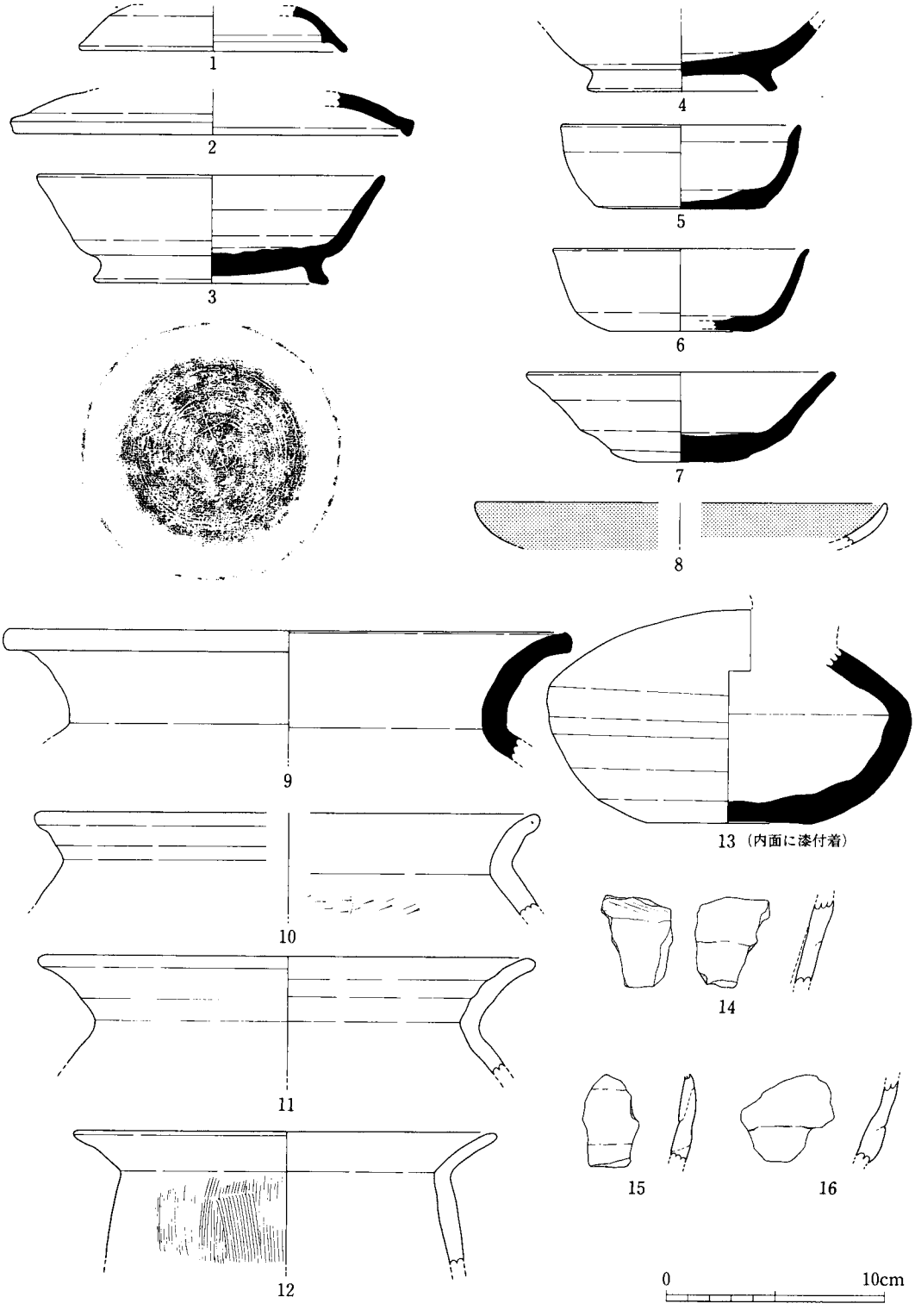
1～5トレンチまで続いた遺構は検出されず、5トレンチとの間に本遺跡の東端が存在すると考えられる。基本土層層序は上層より耕土、床土、明黄灰色粘質土、灰黄色粘質砂質シルト、包含層（暗褐色土）、地山となる。なお、調査時は耕土、床土が取り除かれている。

第4節　米永古屋敷遺跡　遺物

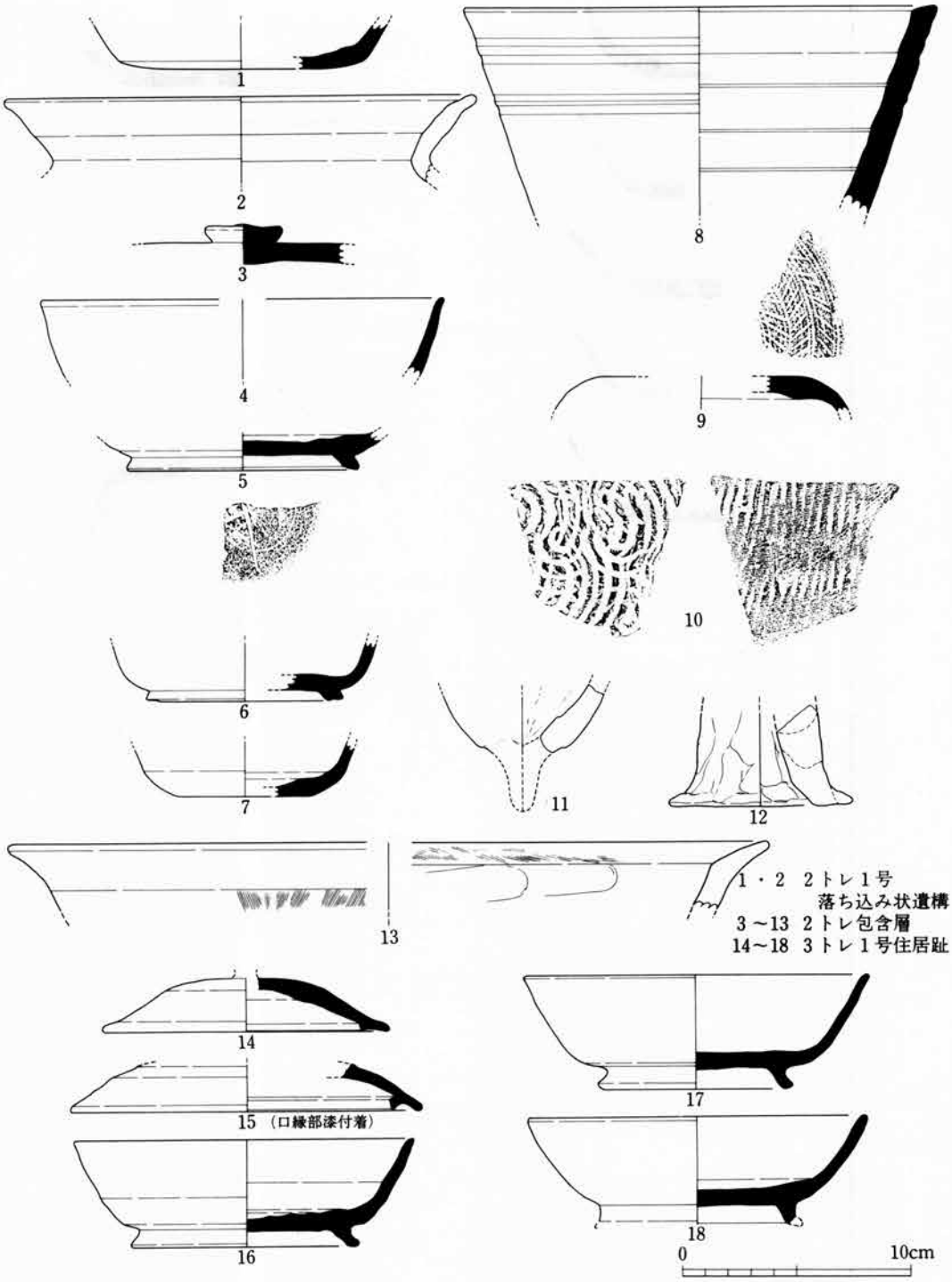
1　7区2トレンチ

1号溝（第85図）

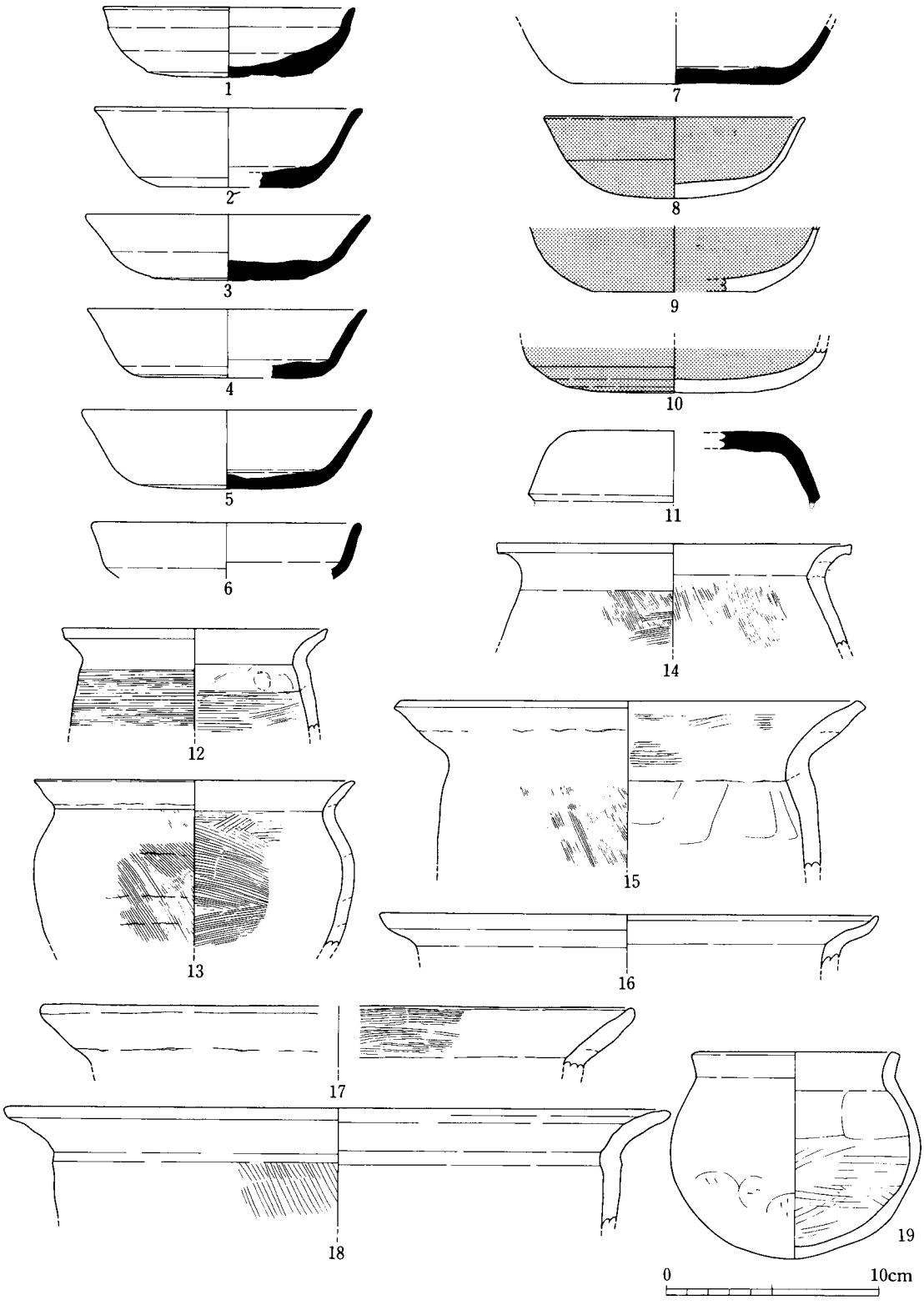
1は須恵器杯蓋（以下、特にことわらない限り須恵器とする）で内面返しはかなり退化している。2も杯蓋である。口径18.0cmを測り、口縁端部は断面三角形を呈する。3の底部は下がり気味で、体部は直線的に外側に開く。底部外面は回転ケズリ調整が施されている。また底部外面にヘラ記号「×」が認められる。4も有台杯で、体部はゆるやかに立ち上がる。5～7は無台杯・椀類である。5は口径11.0cmを測る。箱形を呈し、体部は内湾しながら立ち上がる。底部外面に若干のナデが施されている。6は薄手で、口縁部を外側につまみ上げる。7の体部は大きく外側に開く。また切り離しの際の掻き取りが不十分で、円盤状の底部を呈する。8はロクロ技法を用いた赤彩土師器の椀である。扁平で丸味を持った器形と思われる。9は甕で口径25.6cmを測る。



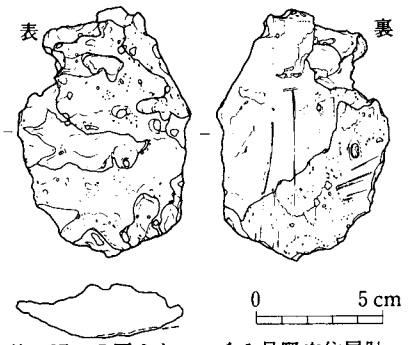
第85図　米永古屋敷遺跡７区２トレンチ１号溝出土遺物実測図（S＝1/3）



第86図　米永古屋敷遺跡7区2・3トレンチ出土遺物実測図（S＝1/3）



第87図　米永古屋敷遺跡７区３トレンチ１号竪穴住居趾出土遺物実測図（S＝1/3）



第88図　7区3トレンチ1号竪穴住居趾
カマド付近出土椀形滓（S＝1/3）

口縁端部の面取りはしっかりしている。10～12は土師器甕である。10、11は回転力を利用し成形[3]されている。10の胴部内面にケズリ調整が認められる。11は赤燈色を呈し、口径22.0cm を測る。胴部はそれ程張らないと思われる。12は長胴タイプで胴部内外面ともタテハケを加える。13は平瓶で体部下半に回転ケズリ、底部外面に手持ちケズリが施されている。また底部内面に若干量ではあるが茶褐色の漆が付着している。14～16は深鉢形の製塩土器である。いずれも輪積み痕が残り、15は口縁部に近い部分と思われる。

1号落ち込み状遺構（第86図）

いずれも覆土中から出土している。1は平底形を呈する無台杯で淡灰色を呈する。2は口径20.5cm を測る土師器甕、色調は明茶褐色である。成形には回転力を利用しており、ロクロ目が残る。

包含層（第86図）

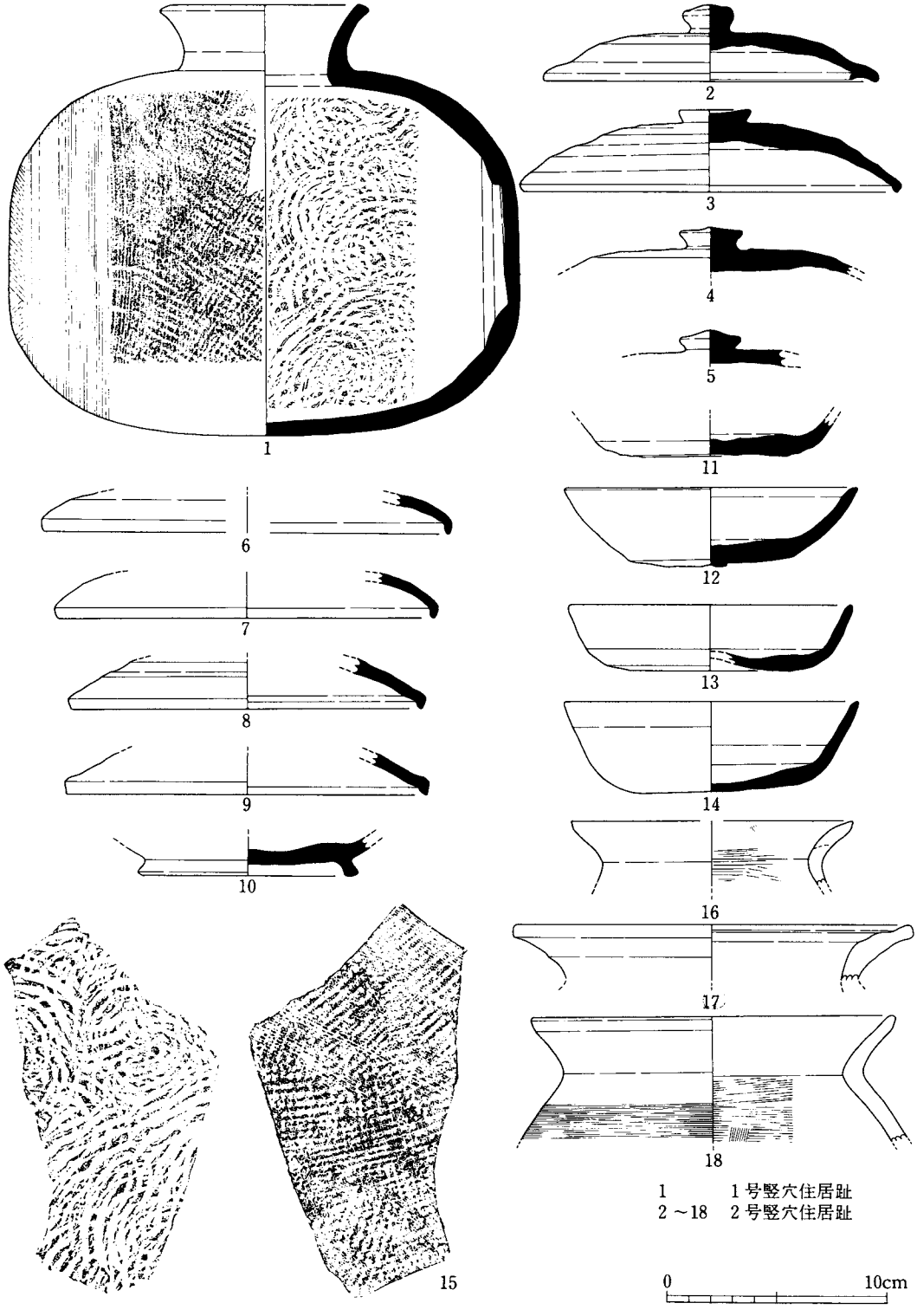
3は杯蓋で、やや扁平な鈕をつける。4～6は有台杯である。5、6は外側にふんばる台部をつける。5の底部外面にヘラ記号「×」が認められる。6は腰部が張っている。7は無台杯で底部外面にナデ調整が加えられている。8は鉢で口径20.6cm を測る。口縁部内端は使用のため磨耗している。9は瓶類の肩部である。カキメ調整の後、稜杉状の刺突を交互に施す。10は甕胴部である。内面に花塚氏分類同心円文[4]b－1類が認められる。11、12は製塩土器である。11は尖底タイプで底部付近と思われ、赤橙色を呈する。12は若狭地方に一般に見られる中空の支脚で背は高くならないと思われる。接地面外端を指押さえにより成形している。13は深鉢形の土師器鍋で口縁部は直線的に外に開く。胴部外面に細かいタテハケが認められる。

2　7区3トレンチ

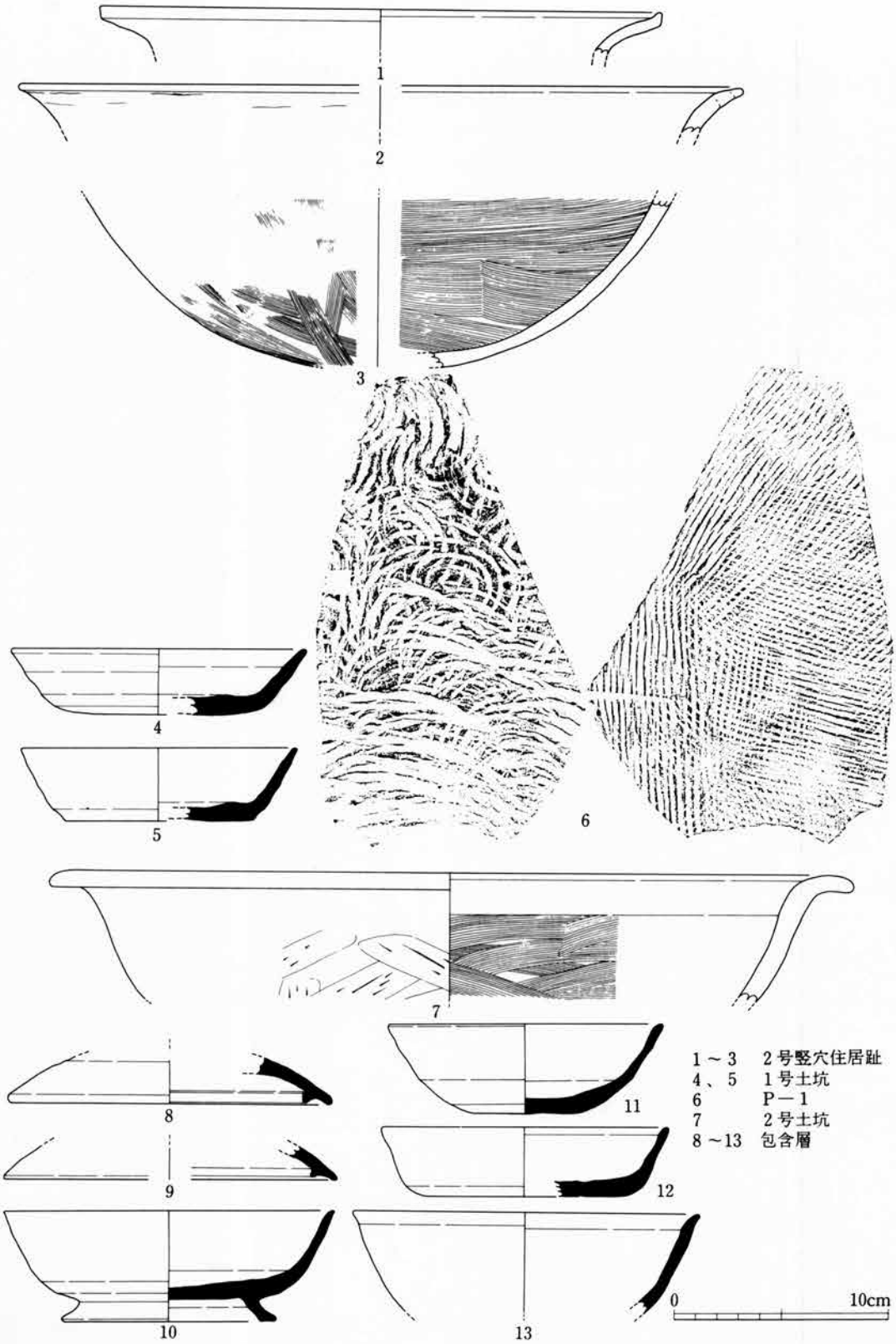
1号竪穴住居趾（第86図～89図）

実測遺物は覆土、床面の両者を含んでいる。第86図14、15は杯蓋である。14は口径12.6cm を測る。内面返りはかなり退化している。15は口径15.0cm を測り、内面返りの面取りはしっかりとしている。また内面返りの端部に漆状付着物が認められる。16～18は有台杯であり、口径15.0cm 前後を測る。外展する台部をつける。16は底部外面に回転ケズリ調整が施されている。また底部内面は使用による磨耗が著しい。17の底部外面はヘラ切り後未調整に近い。全体に二次加熱を受けている。18は内湾しながら立ち上がり、端部を丸くおさめる。微砂粒を多く含む。

第87図1は無台椀で体部内湾し口縁部やや外反する。微砂粒が浮き出し、ザラッとした質感を持つ。第87図2～7は無台杯であり、底部外面は若干のナデを加えるにとどまる。2は深身で、口縁端部は外反する。体下部に幅約1cm の回転ケズリ調整が施されている。3、4は扁平な印象を受ける。3は体部中程で屈曲し、粘土質の胎土である。4は箱形に近く、体下部外面に回転ケズリが加えられている。また伏せた状態で焼成されており、外面全体に降灰が認められる。5は



第89図　米永古屋敷遺跡7区3トレンチ1、2号竪穴住居趾出土遺物実測図（S＝1/3）



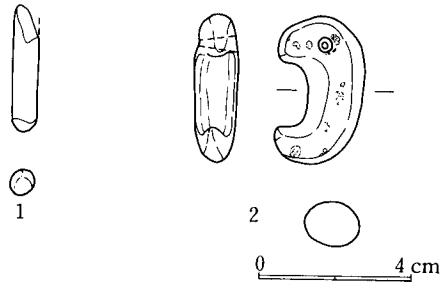
第90図　米永古屋敷遺跡7区3トレンチ出土遺物実測図（S＝1/3）

深身の印象を受ける。体部は直線的にのびる。また二次加熱を受けており淡黄灰色を呈する。8～10は赤彩土師器杯椀である。杯8は口径12.3cmを測る。外面体下部より底部にかけて手持ちケズリ調整が施されている。また内面には暗文らしきものが認められる。椀9の体部内面はミガキ調整、体部外面はケズリ調整のちミガキ調整が施されている。椀10は外面に回転ケズリ調整が認められる。11は薬壺蓋で口縁端部を下方に引き出している。12～19は土師器甕類で、12、18および14～18の口縁部は回転力を利用し成形されている。また胴部はそれ程張らず、内外面ともハケ調整を施すものが多い。12、14、15の口縁端部はナデにより面を作るのに対し、16、17は上方につまみ上げる。12～14の内面頸部より上にコゲツキバンドが認められる。19は球形を呈する胴部に、短く直立気味の口縁がつく。体部内面は粗いハケ調整の後、上半部に板状工具による横方向のナデつけをおこなっている。第89図1は横瓶。最大幅23.0cmを測り、胴部はそれ程丸味を有しない。

第88図1はカマド付近から出土した椀形滓である。長軸約10.3cm、短軸約5.5cm、最大厚約2.4cm、重量約128.3gを測る。また、底部に青灰色で最大厚約4mmを測る精錬の容器の一部と考えられる焼けた粘土が付着している。県内では最古の部類に属すると思われる。なお、椀形滓は砂鉄、鉱石などを製錬して出きた鉄塊をさらに純度を高めるため、精錬する過程で生じるものといわれる。

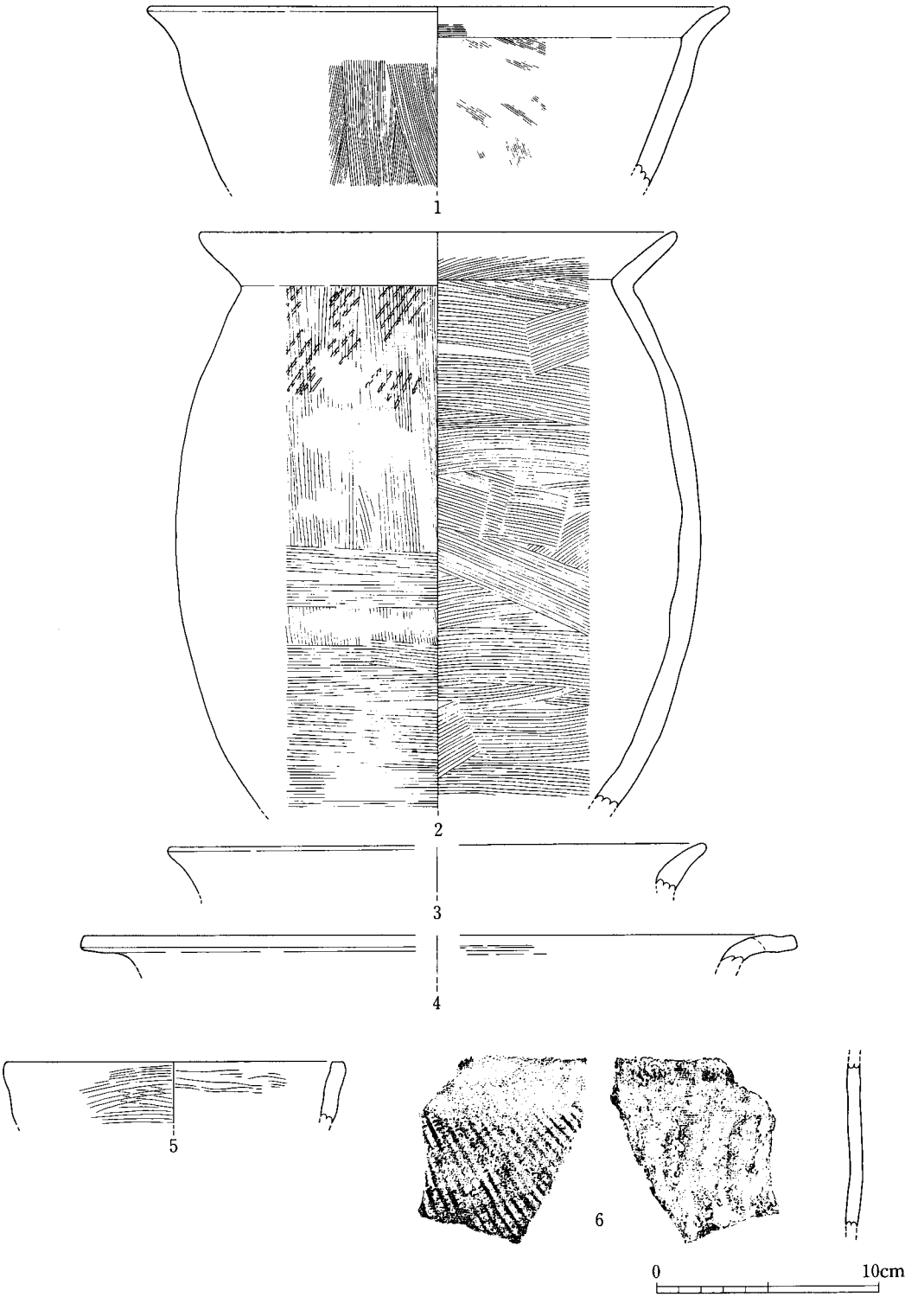
2号竪穴住居趾（第89図～90図）

実測遺物は覆土、床面の両者を含んでいる。第89図2～9は杯蓋であり、2～5の天井部内面には使用による磨耗が認められる。2は口径15.0cmを測り、背の高い鈕をつける。3は山笠形を呈し、口縁端部を小さくつくる。また降灰から北野氏分類I類重ね焼き[5]と推定される。6、7の口縁端部は長くのびるのに対し、8、9は断面三角形を呈する。有台杯10は底部外面に回転ケズリ調整を施した後、外にふんばる台部をつける。12～14は無台杯である。12は比較的厚手で、内湾しながら立ち上がる。13は扁平で口径12.7cm、器高3.0cmを測る。底部外面に丁寧な回転ケズリ調整が施されている。金属器を模倣した可能性を持つ。14は口径13.3cm、器高4.2cmを測り、身の深い印象を受ける。底部外面にヘラ切り痕を消すための指押さえ痕が顕著に残る。口縁内面に幅約2cmのコゲツキバンドが残ること、二次加熱を受けて全体が黄褐色に酸化されていることから、最終段階で液体を入れ煮沸に用いたと思われる。15は甕胴部で外面に格子状叩きとカキメ調整が、内面には内堀氏分類同心円文C類叩きが認められる。16～18は回転力を利用した土師器甕である。17の口縁端部を平坦に仕上げるのに対して、18は上方につまみあげる。また18の胴部にカキメ調整が施されている。第90図1は土師器甕で口径26.4cmを測る。回転力を利用し口縁端部を上方につまみ上げる。2、3は土師器鍋である。3は内外面ともハケ調整が施されている。また、胎土中に海綿骨片が含まれている。

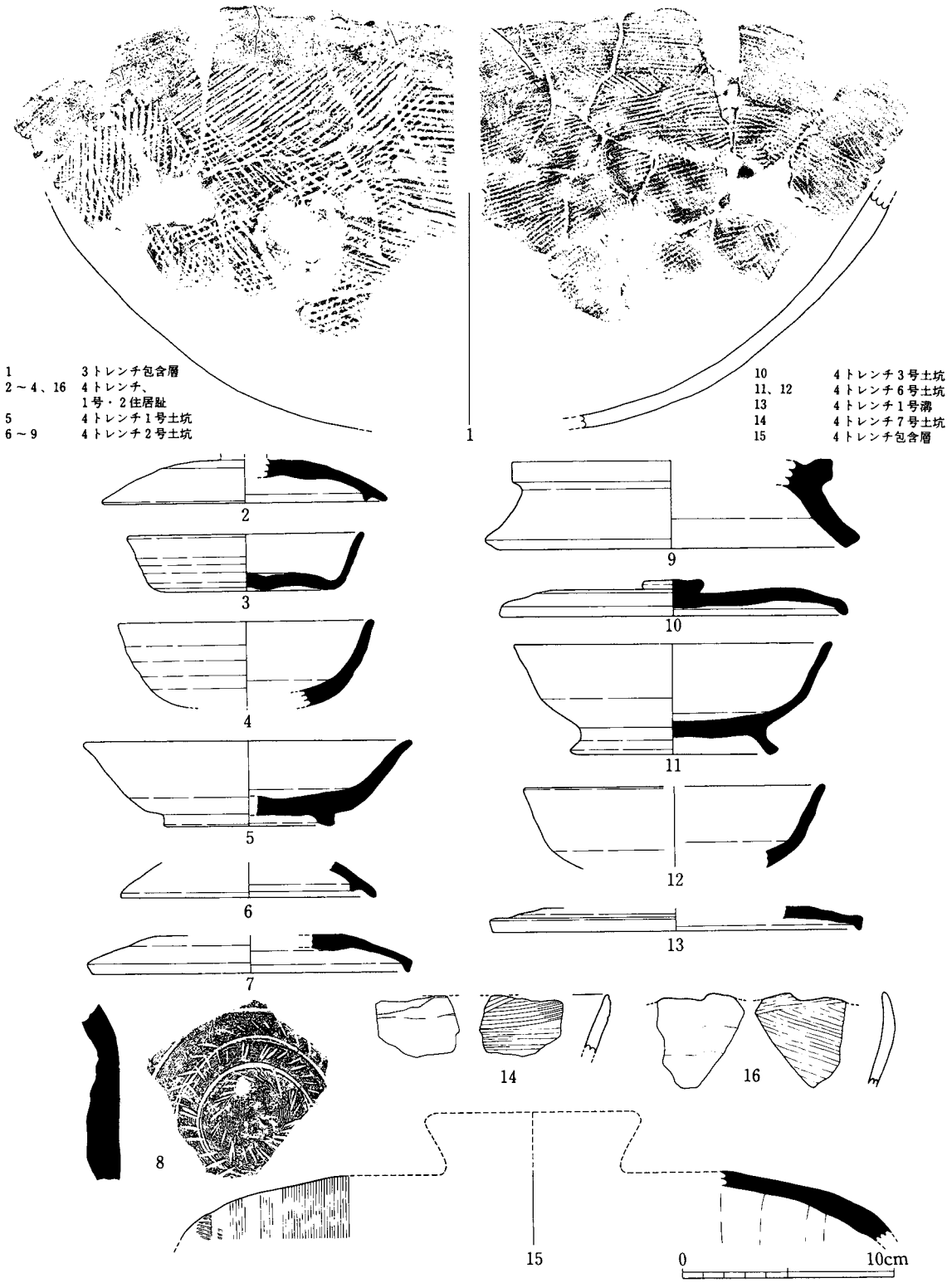


第91図　米永古屋敷遺跡7区3トレンチ包含層出土遺物実測図（S＝1/2）

1号土坑（第90図）



第92図　米永古屋敷遺跡７区３トレンチ包含層出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）



第93図　米永古屋敷遺跡7区3、4トレンチ出土遺物実測図

4、5は無台杯で、ともに覆土中より出土している。口径約14cmを測り、体部は直線的に開く。5は平底を呈し、内面全体に黒灰色の降灰が認められ、焼成時重ね焼きの一番上に積み上げられたものと思われる。

P－1（第90図）

6は甕胴部片で、内面に花塚氏分類同心円文b－1類が認められる。

2号土坑（第90図）

7は土師器鍋で口縁部は大きく外反する。胴部内面には細かいハケ調整が、外面にはケズリ調整が施されている。

包含層（第90図～93図）

第90図8、9は杯蓋。8は口径15.3cmを測り、面取りのしっかりとした内面返りをつけるのに対し、9はかなり退化している。10は有台杯である。底部外面に回転ケズリ調整を施した後、厚手の外展する台部をつける。13は口縁端部をやや外反させる。椀と考えられる。11、12は無台杯である。11は深身で丸底であるのに対して、12は扁平な平底である。11は切り離し後底部外面に若干のナデを施し、体部外面下部に回転ケズリ調整を加える。第91図1は近・現代の石墨と思われる。直径約6㎜を測る。2は、メノウ製の勾玉である。長さ3.9㎝、重さ12.9㎝を測り、形態から6世紀後半以降のものと考えられる。穿口時に反対側の器面に剝離痕を生じている。

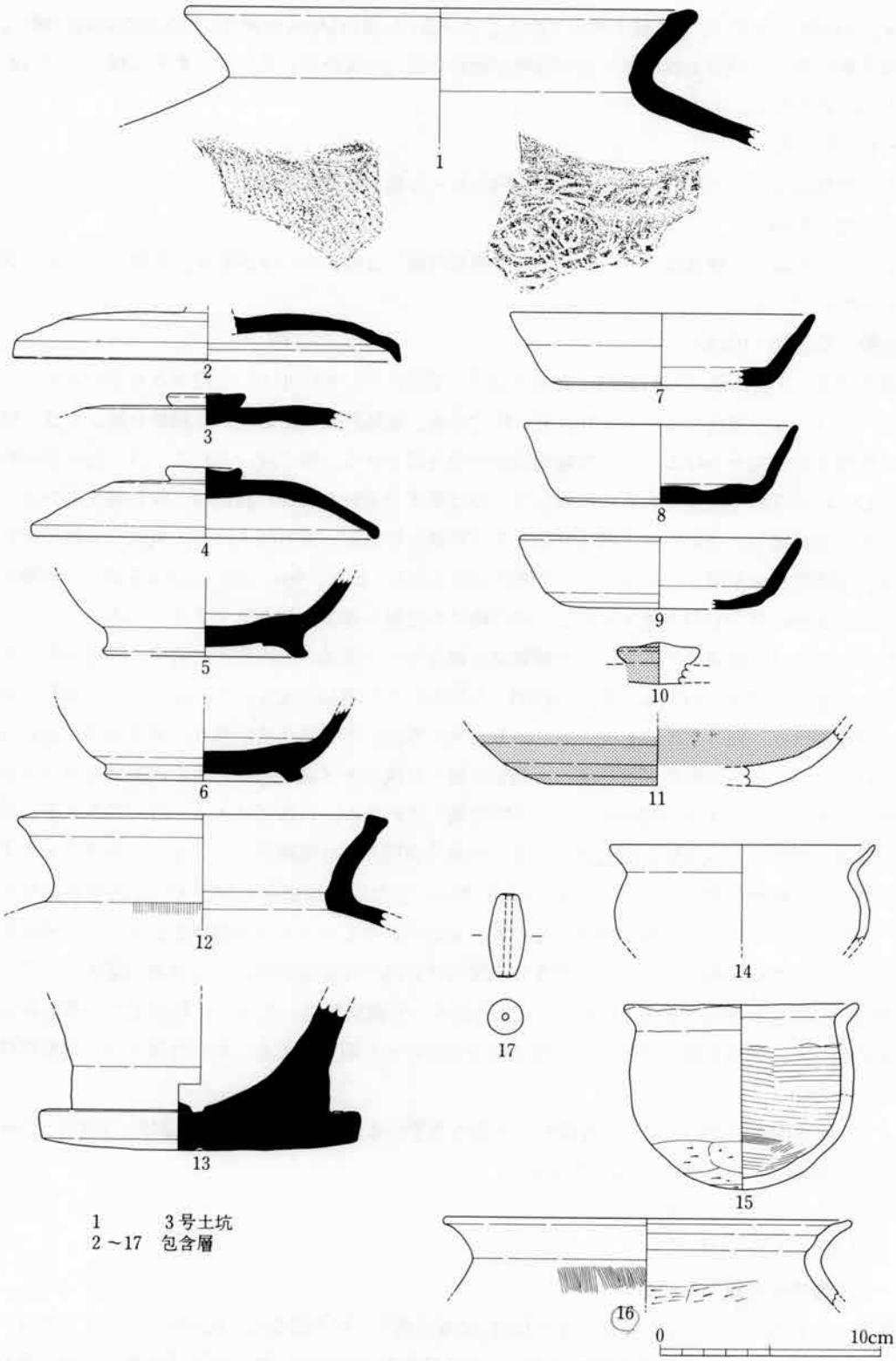
第92図1～3は土師器甕である。1は深鉢型で細片からの復元のため傾きに若干の不安があるものの、胴部はしぼんでいくようだ。内外面とも細かいハケ調整が施されている。2は長胴形を呈し、口縁部は外に開き、端部を丸くおさめる。胴上外面に平行叩き痕が残り、須恵器系技法が採用されている。また胴部外面はタテハケ調整を施した後カキメ調整を加える。内面にはヨコハケ調整が認められる。4は口径が大きく、土師器鍋と思われる。口縁部は大きく外に開き水平に近い。端部をナデにより平坦に仕上げる。5は煮沸に使用された痕跡を持つことから非ロクロの土師器甕に近い器種と思われる。口径15.4cmを測る。また口縁端部を指押さえにより平坦につくる。内外面ともヨコハケ調整が施されている。6はいわゆるロクロ土師器甕である。胴部外面に擬格子状叩き痕が認められる。第93図1は土師器鍋底部で外面は加熱による剝離が認められる。内面は同心円文叩き痕を幅約2cmの7条1単位のハケ調整で消したのち、胴部上半を少し細かい単位のカキメ調整を加えている。外面は粗い単位のハケ調整である。都合3種のハケ調整原体の使用が想定できる。

また、写真図版31で示したような漆片が採取されている。最大厚約1.0cmを測り、直径約21cmの平底の容器に入れられていたと思われる。

3　7区4トレンチ

1・2号竪穴住居趾（第93図）

覆土中から出土している。坏蓋2は口径13.4cmを測り、天井部内面に使用痕が残る。3は無台杯である。口径11.1cm、器高2.7cmを測る。薄手で箱形を呈する。無台椀4は深身で二次加熱を受けている。16は製塩土器口縁部で、平底と思われる。色調は赤橙色。外面に輪積み痕が残り、



1　　3号土坑
2～17　包含層

第94図　米永古屋敷遺跡7区4トレンチ出土遺物実測図（S＝1/3）

はヨコハケが認められる。

1号土坑（第93図）

5は覆土中から出土した有台杯である。口径15.7cm、台径8.1cmを測り、扁平な印象を受ける。底部外面は未調整に近く、断面方形の低い台部をつける。

2号土坑（第93図）

いずれも覆土中から出土している。6、7は杯蓋である。6は口径12.2cmを測る。7の口縁端部は断面三角形を呈し、天井部内面は使用による磨耗が認められる。8は提瓶胴部と思われる。9は円面硯である。淡黄灰色で二次加熱を受けている。各部の面取りはきちんとし、装飾のない断面方形の外展する台部をつける。他にあまり類例をみない形態である。

3号土坑（第93図～94図）

第93図10は扁平な杯蓋で口径16.3cmを測る。口縁端部を大きく下方に引き出している。第94図1は甕である。口縁端部はやや肥厚となり、内傾し面を取る。

6号土坑（第93図）

11、12とも有台杯で覆土中から出土している。11は口径15.2cmを測る薄手の製品である。底部外面は回転ケズリ調整が施される。体部下半で屈曲し、外にふんばる細身の台部をつける。

1号溝（第93図）

13は扁平な杯蓋で覆土中より出土している。口縁端部の面取りは鋭く断面三角形を呈する。

7号土坑（第93図）

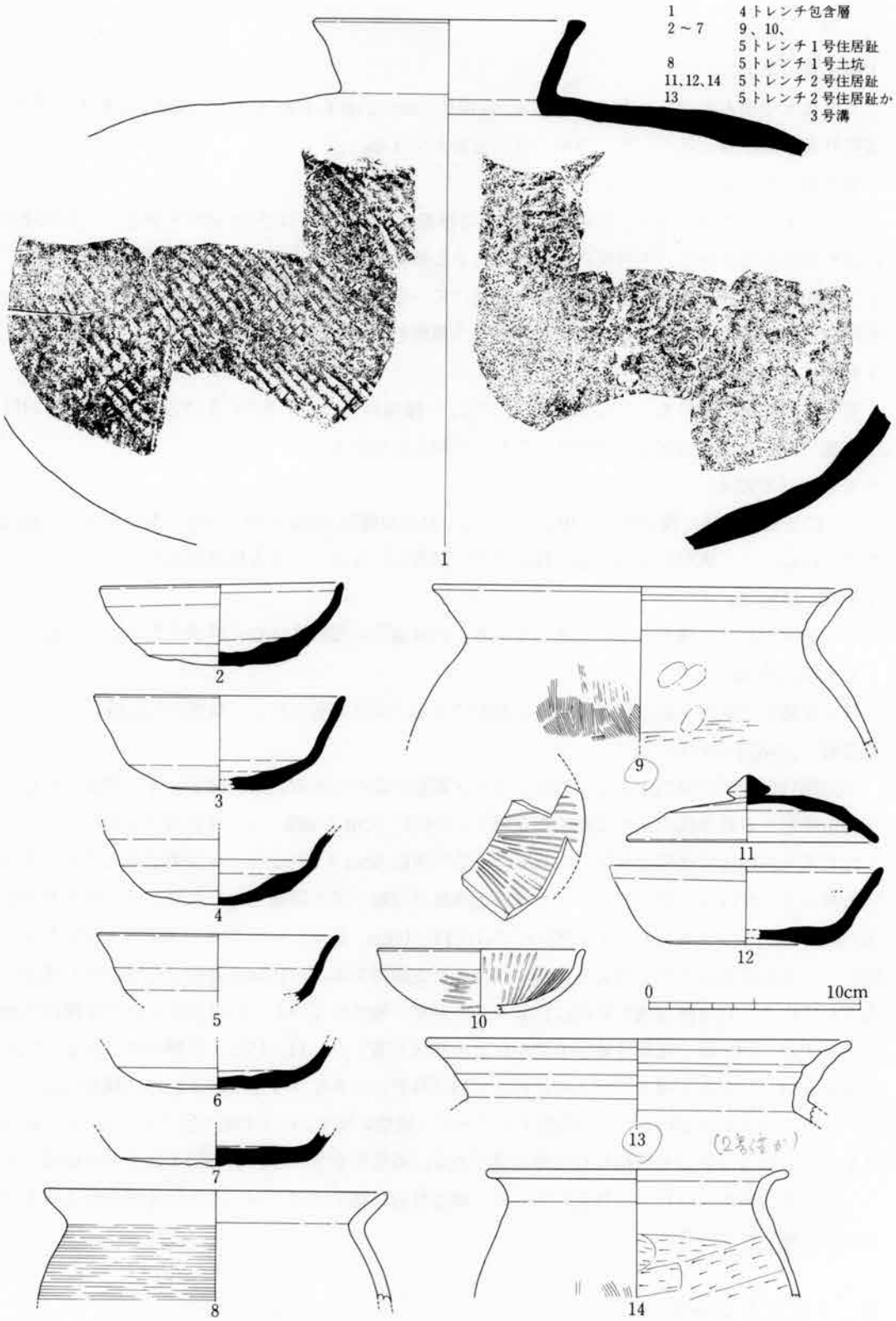
14は深鉢形の製塩土器で口縁部に近い部分である。淡灰黄色を呈し、輪積み痕が残る。

包含層（第93図～95図）

第93図15は横瓶の胴部である。外面にカキメ調整が認められる。第94図2～4は杯蓋である。2は山笠形で口縁端部を下方に鋭く折り返す。口径17.6cmを測る。3、4は扁平な鈕をつけ、いずれも天井部内面に使用痕が認められる。4で口径15.6cmを測る。5、6は有台杯である。5は特徴のある不格好な台部をつける。6は底部外面に回転ケズリ調整を施した後、低く外展する断面方形の台部をつける。7～9は無台杯で口径13～14cm、器高3.5cm前後を測る。体部はあまり開かず、底部外面はナデを加える。10、11は赤彩土師器である。10は杯蓋鈕で内外面とも赤彩が施されている。11は無台椀で外面に回転ケズリ調整が施されている。12は横瓶で口縁端部は内側に肥大する。13は鉢で底部外面とも使用による磨滅が著しい。14、15は土師器小甕である。14の口縁部が内湾しながら細くのびるのに対して15は外側に小さく折り返す。また15の胴部内面上半にコゲツキバンドが認められる。胴部下半にケズリ調整を施す。17は土錘で長さ3.7cm、重さ10.3gを測る。16は回転力を利用した土師器甕である。赤橙色を呈する。第95図1は大形の横瓶である。口縁部の面取りはしっかりとしている。胴部外面に格子状叩きが、内面には同心円文叩きがそれぞれ施されている。

4　7区5トレンチ

1号住居趾（第95図）



第95図　米永古屋敷遺跡7区4・5トレンチ出土遺物実測図（S＝1/3）

出土遺物は覆土中、床面の両者を含む。2～7は無台杯椀類で、7を除き深身である。いずれも底部外面に若干のナデ調整が加えられている。2は口径11.4cm、器高4.1cm、3で口径11.8cm、器高4.5cmを測る。4は体下部外面を回転ケズリで成形している。6の色調は淡黄灰色である。7は底径が大きく、体部もあまり外反しないと思われる。9は土師器甕で回転力を利用し口縁部の成形をおこなっている。胴部外面は細かいタテハケが、内面はケズリが加えられている。10は土師器椀で口径9.8cm、器高3.0cmを測る。外面体部下半に手持ちケズリが施されており、内面には放射状の暗文が認められる。

2号住居趾（第95図）

出土遺物は覆土中、床面の両者を含む。11は杯蓋で背の高い宝珠形の鈕をつける。内面返りはかなり退化しており、天井部内面に使用痕が認められる。12は無台杯で身の深い印象を受ける。胎土は粘土質のキメの細かい質感を持つ。14は土師器甕で胴部外面はタテハケ調整、内面はケズリ調整が施されている。13は2号住居趾と3号溝の切りあい部分から出土しており、便宜上ここで説明を加える。土師器甕で回転力を利用して成形がおこなわれている。赤橙色を呈し、口径20.0cmを測る。

1号土坑（第95図～96図）

第95図8は覆土中から出土した土師器甕である。口径16.0cmを測る。回転力を利用し、体部外面にカキメ調整が施されている。第96図1、2は有台杯である。台径は1で8.4cm、2で11.0cmを測る。1の底部外面は若干のナデ調整が、2は回転ケズリ調整が施されている。3～5は無台杯である。いずれも腰が張る印象を受ける。3で口径12.2cm、器高4.0cmを測る。4、5は体下部外面に幅約1cmの回転ケズリが認められる。5は石英、長石の含みが他の遺物より多い。6、7は赤彩土師器である。6は杯蓋の鈕で直径4.0cmを測る。7は有台杯の可能性があり、口径14.2cmを測る。口縁部内面に1条の沈線状の凹みが認められる。8、9は土師器甕である。8は赤橙色の色調を持ち、胴部外面に細かいハケ調整が施されている。9は回転力を利用している。口縁部内面にカキメ調整が見られ、口縁端部は上方につまみ上げている。

2号土坑（第96図）

覆土中から出土している。10は杯蓋、11は無台椀である。12は有台杯と思われ、口径12.8cmを測る。14は高杯の脚部と思われる。15、16は回転力を利用し成形された土師器甕である。15は小片のため傾きに不安を残す。

P—1（第96図）

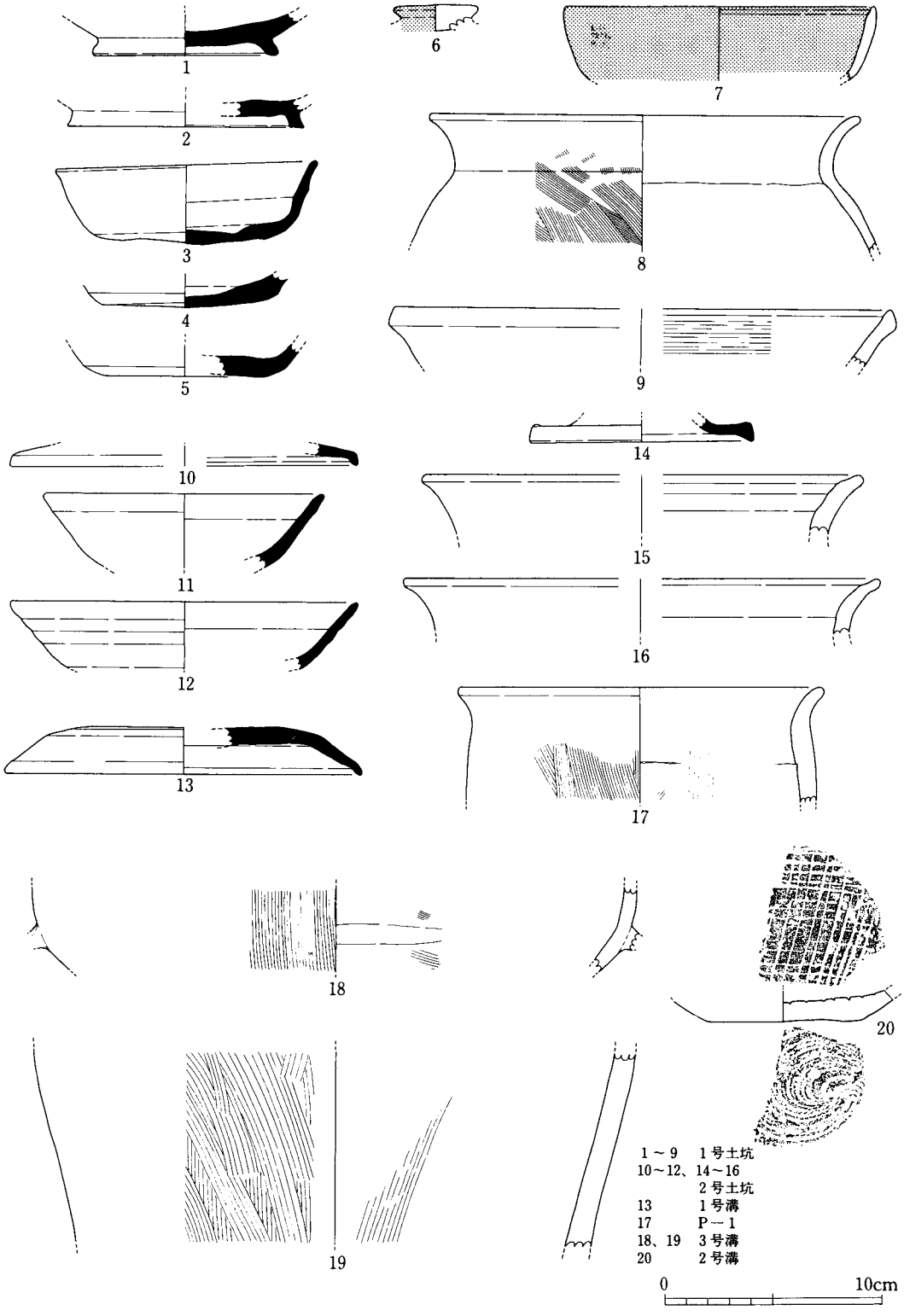
17は土師器甕で胴部は膨らまない。胴部内外面ともタテハケ調整が施されているが、その原体は異なる。

1号溝（第96図）

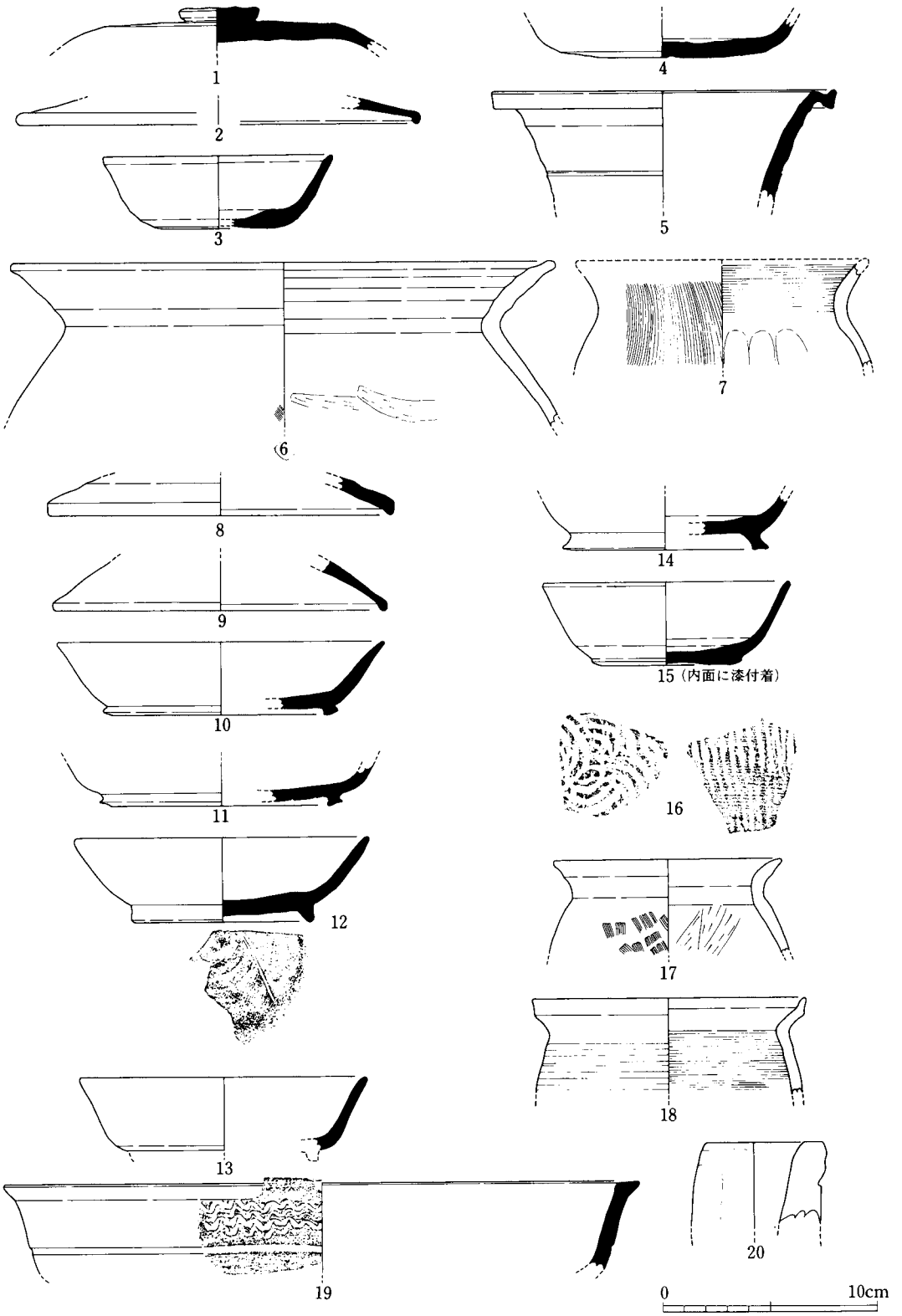
13は杯蓋で口径16.5cmを測る。盤をひっくり返したような形態で口縁端部の屈曲は不明瞭である。天井部内面は使用により磨耗している。

2号溝（第96図）

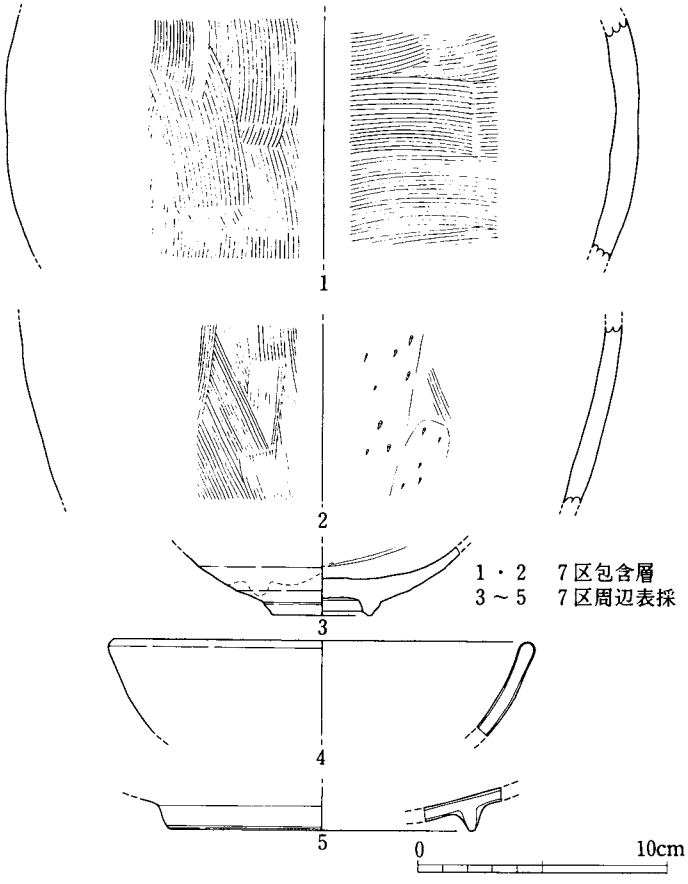
20は瀬戸のおろし皿で15世紀末～16世紀前半に位置づけられる。底部内面は使用によりかなり



第96図　米永古屋敷遺跡7区5トレンチ出土遺物実測図（S＝1/3）



第97図　米永古屋敷遺跡７区包含層出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）



第98図　7区包含層他出土遺物実測図（S＝1/3）

磨耗している。

3号溝（第96図）

18は土師器鍋胴部把手付近と思われ、内面にヨコハケ調整、外面にタテハケ調整が認められる。19は厚手の土師器甕胴部でタテハケ調整が施されている。

7区包含層（第97～98図）

1、2は杯蓋である。1は大きい扁平な鈕をつけ、天井部内面に使用痕が認められる。降灰から中心線を一致させ有台杯を逆位で上に重ね、焼成したようだ。2の口縁端部は小さくおさめてある。3、4は無台杯である。3は口径10.7cm、器高3.5cmを測り、体部は直線的にのびる。4は平底形を呈し底部外面にナデが加えられている。5は広口の瓶と思われ口径16.0cmを測る。口縁端部は1度折り曲げた後上方につまみ上げている。外面に1条の沈線がめぐる。6、7は土師器甕である。6は赤橙色を呈し、口径25.0cmを測る。回転力を利用し成形がおこなわれている。7の外面はタテハケ調整、内面口縁部にはカキメ調整が、また内面胴部にはケズリ調整が施されている。

8、9は杯蓋である。8は肉厚で口縁端部は小さく折り返すのみで目立たない。9は背が高く、口縁端部を丸くおさめる。10～14は有台杯である。10は口径15.2cm、器高3.5cmを測り、扁平な印象を受ける。体部は大きく外側に開き、台部はやや外展して外側につく。底部外面に回転ケズリ調整が施されている。11はつぶれた台部がつく。12は底部内面にヘラ記号「/」が認められる。14の台部は外側にふんばっている。15は無台杯である。口径11.6cm、器高4.0cmを図る。内面の底部一面に漆が付着している。16は甕胴部で外面に平行叩きとカキメ調整が、内面に花塚氏分類同心円文C類叩きが認められる。17は回転力を利用した土師器甕である。口径10.5cmを測り、胴部外面に細かいハケ調整、内面にケズリ調整が施されている。18は土師器ロクロ甕で口縁端部を上につまみ上げている。胴部内外面ともカキメ調整が施されている。19は口径30cmを測る大型の盤と思われる。口縁部外面を横方向に引き出す。外面に3条の波状文と1条の沈線が施されている。20は製塩土器の支脚である。上下が不明だが、残存部分で直径6.4cmを測る。また、端部をヘラ状工具で平坦に仕上げている。

第98図１、２は土師器甕胴部であり。１は外面タテハケ調整、内面ヨコハケ調整が施されている。２は外面タテハケ調整、内面ケズリ調整が施されている。

７区周辺採取遺物　（第98図）

３は伊万里染付碗で、底部内面に径5.1cmのカキトリ痕が残る。17世紀後半に位置づけられよう。４、５は青磁碗である。オリーブ灰色を呈する。４で口径16.5cm、５で台径12.0cmを測る。

第５節　小　　結

本遺跡の存続時期は第７章第２節で後述するが７世紀末を中心とし、８世紀前半代までと考えられる。遺構と遺物の対応関係は不明確な面を残すものの、竪穴住居趾をはじめとする大半の遺構を７世紀末を中心とする時期に、また掘立柱建物を８世紀前半代に位置づけられる。すなわち、本遺跡は従来まで集落の存続していない地区に律令的な色彩を強くもつ遺物群（赤彩土師器、椀形滓、漆付着土器、製塩土器）を伴って、７世紀末を中心とする時期に成立、短期間のうちに竪穴住居は廃絶、掘立柱建物に転換し、８世紀前半代のうちに放棄された集落遺跡と考えられる。

集落に関しては南久和氏の論考[(6)]があり、その中で集落を計画村落、一般村落、中核村落等に分類している。本調査範囲が限られており、詳細な検討はできないものの、自生的な一般集落ではないとの予想をしている。その理由としては先述したように①律令的な色彩を強くもつ遺物群、②集落が短期間のうちに廃絶すること等がある。本遺跡の成立・存続には何かしらの公権力の存在を想定できよう。また、本遺跡が成立した時期、近接して法仏遺跡も成立する。法仏遺跡は本遺跡が廃絶して後も平安時代まで存続し、その規模も中核集落にふさわしいと考えられる。本遺跡の成立・廃絶は中核的な集落としての法仏遺跡との有機的関連の中で位置づけられよう。当地域における集落相互のあり方は今後の大きな課題のひとつといえる。

註

（１）　ここで述べる米永古屋敷遺跡は従来米永古屋敷遺跡（県No.1128）、高山遺跡（県No.1127）とされていたものである。両者は同一の性格をもつ遺跡であることが明らかとなり、これからは米永古屋敷遺跡に代表させたい。

（２）　藤田邦雄「中世土師器素描―加賀地方の土師器を中心として」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会々誌第32号1989　石川考古学研究会

（３）　本遺跡出土土師器甕はバラエティーに富む。大部分がいわゆる〝非ロクロ〟により成形・調整が行われている。現段階では他の遺跡も含め〝非ロクロ〟土師器は整合的に整理されておらず、回転力の利用についても一定の見解が与えられていない。そこでここでは非ロクロ甕のうち、在来の器形・成形ではあるが何らかの形で須恵器技法に近い回転力を利用した痕跡が顕著な個体について「回転力利用」という語句で示すことにした。すなわち、ロクロ甕、回転力を利用した甕、非ロクロ甕と分けて記述する。

（４）　花塚信雄「河北郡高松町若緑地内新発見の窯跡について」『石川考古学研究会々誌』第27号1984　石川考古学研究会。

（５）　北野博司他『辰口西部遺跡群Ⅰ』1988　石川県立埋蔵文化財センター。

（６）　南久和『金沢市八日市サカイマツ遺跡』1990　金沢市教育委員会他

第７章　まとめにかえて

第１節　北出遺跡の古墳時代初頭の土器について

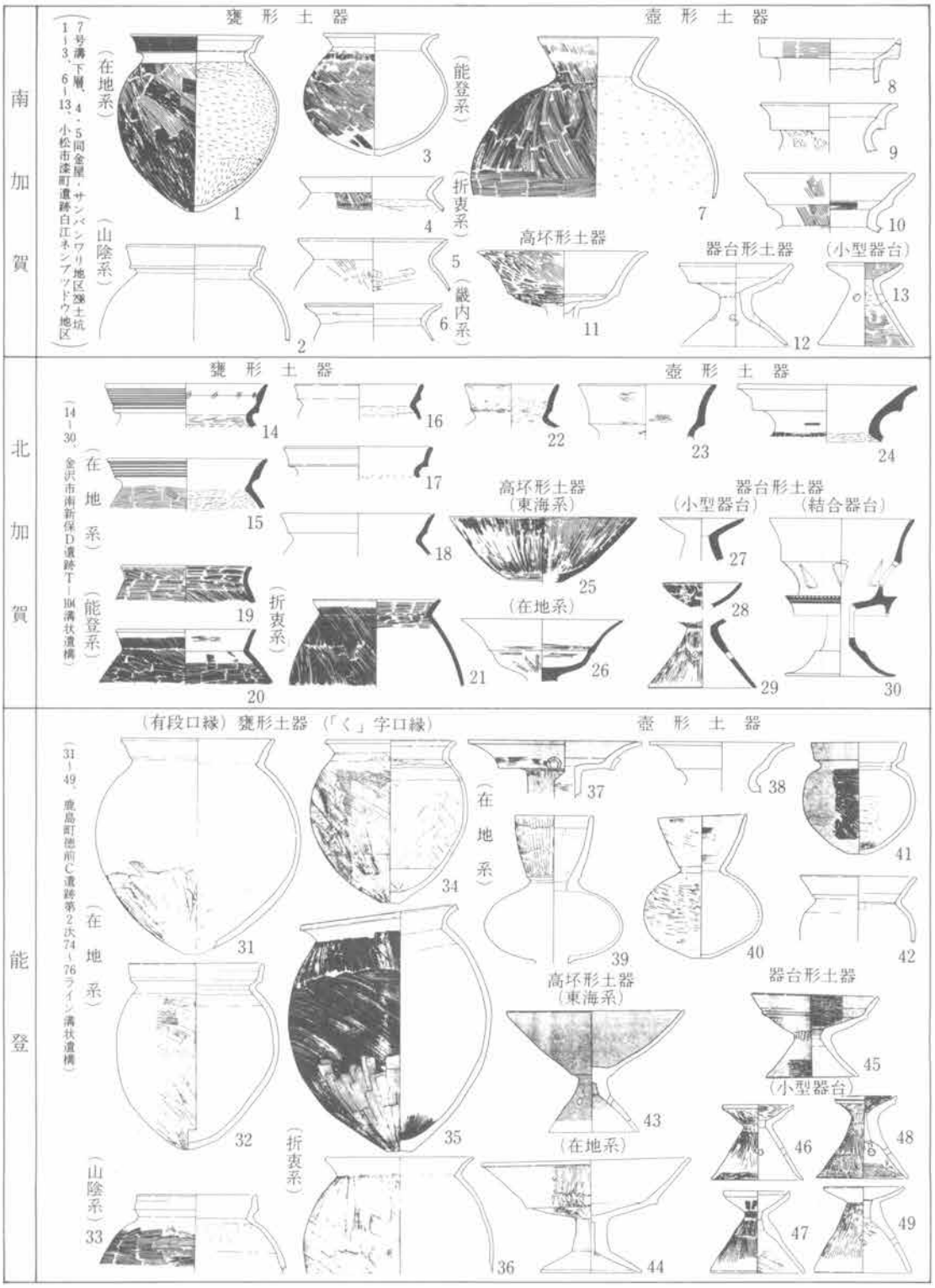
この調査区ではあまり明確な遺構は検出できず、遺跡の実体像に迫ることは現状ではかなり難しいであろう。ただし、溝状遺構周辺より出土した土器群は、遺存良好で完形に近いものが多く、また時期的にもかなりまとまっているものと推定される。本節ではその土器群を検討し、北出遺跡の時期的位置付け・地域的位置付けについて考察を加えてまとめにかえたいと思う。

(1)　器種組成

まず、器種毎に特徴をまとめていきたい。甕形土器は個体数がきわめて多く形態差も大きいので明確な分類が可能である。前項で述べた通り大きくは「く」字口縁と有段口縁に分かれるが、前者についてはさらに３タイプに分類できる。まず、２・10の小型甕が切り離せる。内外面に継目を残す雑なつくり、内外面とも比較的ハケを多用する器面調整、口縁端部の面取りが特徴である。次に３～６の中型甕が分離する。あまり加工を加えない自然な感じの口縁部、明確な屈曲の頸部、球形に近い胴部といった器型が特徴である。内面にハケ調整を残すものが多い傾向がある。そして残った７～９は全体的に薄手のつくりと内面ヘラケズリの徹底が特徴である。この２つの特徴は相関するものであろう。８・９に限って口縁先端を細く加工する点が注目できる。２・10は田嶋明人氏の土器分類[1]の甕Ｆ類に、３～６は同Ｇ類に、７～９は同Ｈ類に相当しよう。同報告書によればＦ類「能登･越中･越後に多く分布する甕形土器に類似するもの」であり、「能登型甕」と呼称されてきたものにあたる。口縁端に面を取るものは漆５・６群併行[2]まで存続する。Ｇ類「他地域の影響を受けているがその特徴が曖昧でより折衷的な形態を取るもの」となり、漆５～９群に併行して存在する。Ｈ類「畿内系ないし外来の土器の影響が認められるもの」であり、北出遺跡の例は庄内式の影響が強いものとみて漆５・６群併行としたい。有段口縁を呈するものは、１の大型甕と11・12の中型甕があるが、その形態は「く」字口縁に祖型を求め得るほどに崩れており、典型的なものではない。また、１は頸部無ハケ・外面肩部ヨコハケの調整が月影式の有段口縁甕に見られない要素であり、むしろ山陰地方の影響が考えられる。甕形土器の主流は数量的にも形態的にも「く」字口縁甕と言えそうである。

壺形土器は13のような雑なつくりで口縁端部に面を取るものと、14～16の有段口縁を呈するものがある。13は類例は多くないが、成形・調整・形態から甕の２・10と同一の系譜にあることが明らかである。有段口縁の壺は遺存が悪くてはっきりしない。16は壺か甕かはっきりしないが、擬凹線文を施す土器は出土土器中でこの１点のみであり、その少なさは特筆しておきたい。

高坏形土器は19・20の２点のみだが、どちらも東海系土器とみてよかろう。北陸において東海系高坏は小型高坏を除いては月影式直後（漆５・６群併行）から出現する。すなわち東海地方では元屋敷式併行以降にあたろう。坏部脚部の径・広がりは大きくなり、全体に低平な感じになる



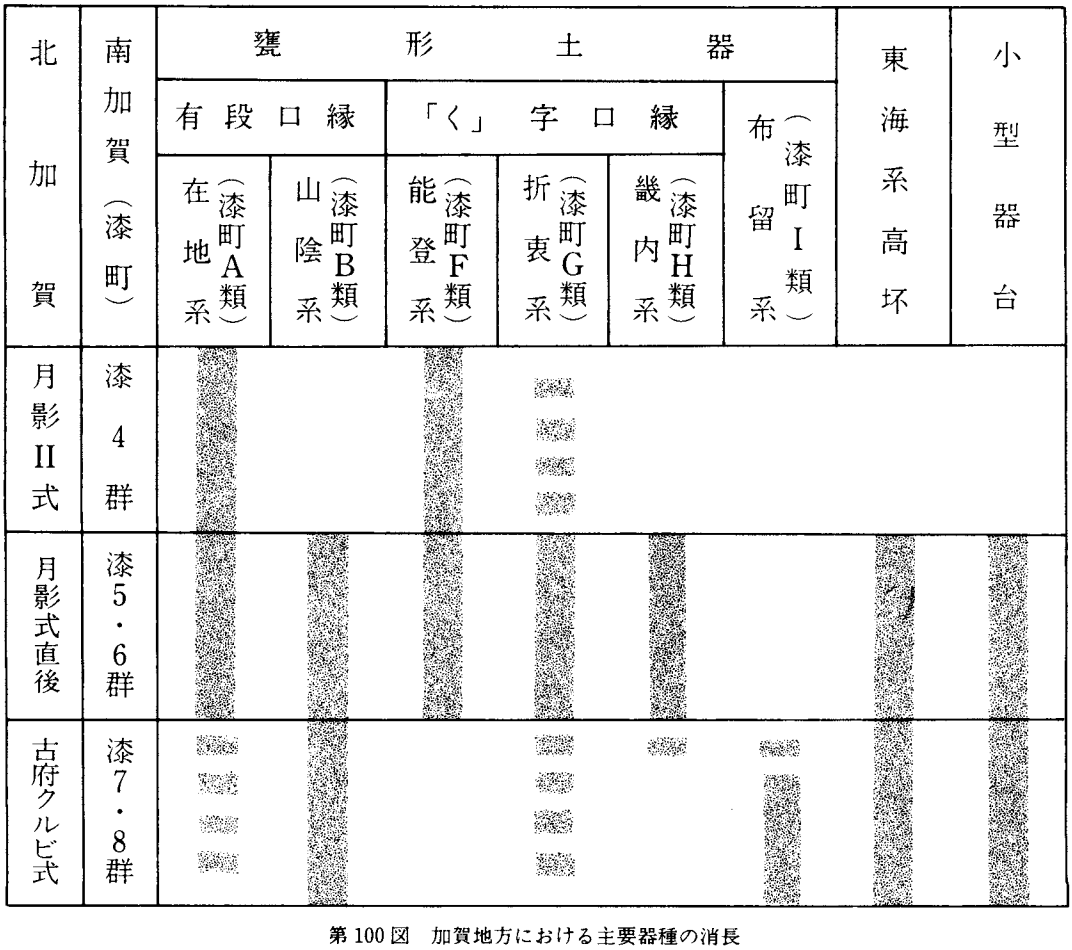
第99図　各地の伴行土器群（S＝1／8）

と予想される器型からは元屋敷式の新しい要素に比定することもできる。だが、在地化の過程で変質したとも考えられるのでこの土器だけで明言は避けたい。

器台形土器は小型器台21と中型とも言うべき22がある。21は古墳時代前期の指標器種の一つである小型器台を模倣したものであり、月影式直後（漆5・6群併行）から出現する外来系土器の一つである。21のように器受部端を面取りするものはこのなかでも比較的古いタイプに多いようである。22の器受部は東海地方のパレススタイル壺の口縁部ときわめて類似した装飾と器型を有する。そして脚部は一度屈曲して外反する類例の少ない[3]器型である。つまり22は1個体の土器で上半と下半が別々の系譜に属する可能性が高いわけで、一種の折衷型と言うことができよう。

(2) 編年的位置付け

以上をまとめると、甕は「く」字口縁主体で少量の有段口縁無文甕、壺は能登甕に連なるものと有段口縁、高坏は東海系、器台は小型器台と折衷器台で、北出遺跡出土土器群の組成をなすということになる。全器種を通じて東海をはじめとする他地方からの影響が看取されることが大きな特徴と言える。これらの器種の加賀地方における存続時期の上下限を押さえると、月影式直後（漆5・6群併行）～高畠式（漆9・10群併行）[4]の幅の中で捉えられる。土器群の出土状態を考慮するとある程度の一括性・同時期性を持つとみることができるので、布留系甕・山陰系壺甕の



第100図　加賀地方における主要器種の消長

欠如から古府クルビ式以降の時期は妥当ではないし、能登型を含む多くの「く」字口縁甕・古式の小型器台・庄内系甕・東海系高坏の存在から月影式直後（漆５・6群併行）に位置付けられると考えたい。

(3) 小考

さて、田嶋明人氏は月影式直後期に南加賀で併行する漆５・６群土器について、「４群土器に見られた地域性の変質・解体期であり、８群に集約される外来系土器の組成の胎胚期が５群で定着期が６群である[5]」という理解をあらわしている。この理解に基づくならば、在地色が薄く外来色が濃いこの土器群は漆６群併行となる。だが、結論を急ぐ前に「漆５・６群」の加賀で持ちうる普遍性と、漆５・６群区分の妥当性について考えてみたい。

北陸東部（能登・越中・越後）で漆５・６群に対応する資料としては、能登の鹿島町徳前Ｃ遺跡74～76ライン溝状遺構、越中の立山町辻遺跡土器ダマリの出土土器群が代表的である。その特徴としては、擬凹線文を持つ土器がきわめて少ないこと（月影式以来の様相差でもある）、「く」字口縁甕が有段口縁甕に対して量的に突出すること、外来系要素が甕に少ないのと対照的に壺・高坏・器台に多いこと、などが挙げられる。これらの特徴は漆５・６群土器と比較した場合、ことごとく対照的であり、そのまま北陸東西の様相差として認められよう。ゆえに、北陸東西で２大土器圏が存在することはほぼ疑いないところであるが、その二元論はどこまで普遍的であろうか。例えば北出遺跡出土土器群は、甕形土器が完全に「く」字主体なこと、擬凹線文がほぼ皆無なこと、外来系甕の存在が明確なことなどの点で北陸西部圏を逸脱するものである。また、松任市一塚イチノツカ遺跡や野々市町押野タチナカ遺跡では、有段口縁甕で無文のものが擬凹線文を持つものを量的に凌駕する土器群の存在が報告されている。断片的な資料であるが、これらの様相の帰属するところが時期差なのか遺跡差・遺構差なのかの結論を出すことは難しかろう。その一方で、金沢市松寺遺跡Ａ１号溝や南新保Ｄ遺跡Ｔ―104の出土土器群は漆５・６群に近い様相を示している。私見であるが、北加賀・南加賀間でもある程度の様相差は存在するのであり、さらに北加賀内でもより小地域に別々の土器様式の設定が可能なのではないかと考えている。ただし、それが「地域性の変質・解体」の一側面として捉えられるのかどうかという問題については保留したい。

また、漆５・６群の区分について、外来系土器の「胎胚期」と「定着期」として捉えられる土器群は、漆町遺跡以外では現在まで確認されていない。漆町遺跡でも、外来系と在来系の量比にその多くを頼った感があり、それに若干の土器の形態変化を加えて分離がなされたように思える。前述した時期差・遺跡差・遺構差の検討がなされず、セット関係の変化が言及されなかったことが田嶋氏の土器編年では唯一惜しまれる。こうした問題点から、５群と６群は区分して扱うべきではなく、一括して、外来系土器の登場期＝祭祀の変化期＝古墳時代への転換が始まる可能性が高い時期、とみておくのが北加賀においては無難ではなかろうか。

(4) まとめ

北出遺跡出土土器群は、少量で断片的ではあるが、月影式直後の時期を考える上で、重要な資料であると思う。それは、資料の少なさと偏りもあって北陸西部＝漆５・６群土器と一様にイメー

ジされがちな時期に新たな視点を加えることを可能にするものであり、容易に理解できない弥生時代末～古墳時代初頭の複雑な社会状況を解明する手掛かりとなろう。こうした類例の増加に加え、胎土などから土器の生産や移動がある程度類推されてくれば、該期の様相をより整理して検討することが可能になるものと思う。

註

(1) 田嶋1986 による。

(2) 田嶋1986 による。該期の加賀地方内での様相差は一つの土器様式で表現しがたいほどに顕著なため、北加賀を月影式直後、南加賀を漆5・6群と分けて表記する。同氏がかって提唱した「白江式」は混同を避けるためここでは用いないことにする。

(3) 田嶋1986 での土器分類の高坏C類の形態と似るものである。

(4) 田嶋1986 および『シンポジウム「月影式」土器について』報告編 での編年を用いる。以下も同じ。

(5) 田嶋1986 による

参考文献

石川考古学研究会 『シンポジウム「月影式」土器について』報告編 1986

小田木治太郎 「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学 II』(『石川考古学研究会々誌』第32号) 1989 石川考古学研究会

田嶋明人 『漆町遺跡 I』1986 石川県立埋蔵文化財センター

出越茂和 『金沢市松寺遺跡』1981 金沢市教育委員会

出越茂和 『金沢市南新保D遺跡』1985 金沢市教育委員会

森秀典他 『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』1987 立山町教育委員会

湯尻修平・米沢義光 『鹿島町徳前C遺跡 (II・III)』1986 石川県立埋蔵文化財センター

米沢義光他 『松任市一塚イチノツカ遺跡』1990 石川県立埋蔵文化センター

第2節　米永古屋敷遺跡の土器組成

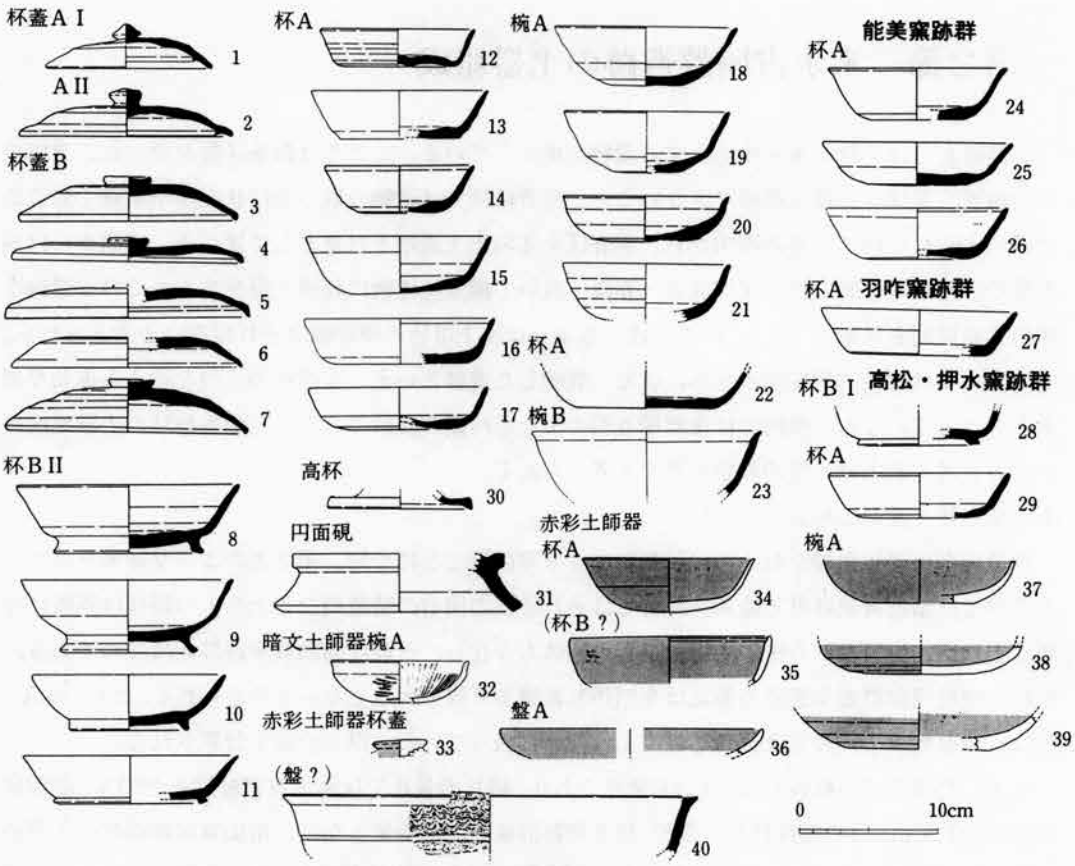
本遺跡からは7世紀末を中心とする遺物が出土している。ここでは調査区幅が限られ、遺構単位の組成、量比が正確に把握できないこと、報告段階では遺物の取り上げ状況が不明確で層位的に押さえられないこと等の理由から、調査区全体の出土遺物と対象として述べる。遺構からは第6章でみたように竪穴住居趾が成立・存続、次いで掘立柱建物に転換・廃絶するまでの本遺跡全体の存続期間を対象とするが、以下で述べるように出土遺物の時期幅はそれ程ないと考えられる。その意味では比較的短期間のうちに成立・廃絶した遺跡といえ、本遺跡の性格を考える重要な要素ともなろう。なお、県内ではまだ調査例の少ない時期の資料であり、北加賀地域の土器組成のあり方を考える上で一定の役割を果すと考えられる。

(1)　須恵器・赤彩土師器他

本遺跡出土の須恵器を胎土の肉眼観察により窯跡群ごとに分類、第2表のような結果を得た。その中で、南加賀窯跡群と能美窯跡群ではそれぞれの固有の特徴的な胎土をもつ個体は明瞭に分類できたが、少量ながら中間的特徴をもつ個体も存在し[(1)]、それは南加賀窯跡群産に含めてある。それ故能美窯跡群産須恵器の量比は今回得た数値より幾分大きくなると考えられる。また、杯A・Bは口縁部等の小破片では分類しにくく、同一に扱っている[(2)]。以上の点を留意されたい。

出土した須恵器の総破片数は1,900余点であり、破片の量比では南加賀窯跡群産が93%、能美窯跡群産が2.5%、羽咋窯跡群産、高松・押水窯跡群産がごく少量となり、南加賀窯跡群産が圧倒的に多い。本遺跡に主体的に供給をおこなった窯跡群は南加賀窯跡群であり、少量ながら能美窯跡群がその補完をしていたと考えられる。南加賀窯跡群産はあらゆる器種で絶対的な主体をなし、特に杯蓋Aではその全量を占める。能美窯跡群は杯A、甕類のみ確認された。羽咋窯跡群産としたものは8世紀以降の所産と考えられる杯Aのみである。高松・押水窯跡群では7世紀後半代と思われる瓶類が少量確認されているものの、供膳器は8世紀以降の形態を示す。同地域に供膳器を含めた定量的な供給が実現するのは8世紀前半代以降と考えられる。以上、まとめると同地域には7世紀代は南加賀窯跡群主体、能美窯跡群補完の供給が、8世紀代に入ると高松・押水窯跡群も定量の供給を始めるという図式が想定される。

次に南加賀窯跡群産と考えられる須恵器供膳器を中心に分類をおこなう（第101図）。須恵器供膳具は有蓋杯A、B、無蓋杯A、椀Aより構成され、ごく少量高杯が確認されている。杯蓋A、Bのうち杯蓋Aは破片数で15%、口縁部計測法で28%を占める。口径から3法量存在し[(3)]、それぞれ口径11.5～13.0cm、15.0～15.5cm、18cm前後を測る。いずれも内面返りが退化し、鈕の形態もやや崩れた印象を受ける。うち1点のみ天井部内面に使用による磨耗が認められる。坏蓋Bは破片数、口縁部計測ともに杯蓋Aより多く、口径16～18cmの1法量のみである。全体に背が低い中で、7のみ山笠状に開き背が高い。天井部1/2～2/3程度に回転ケズリ調整を施す。鈕は扁平でボタン状に近くなる。口縁端部はバライティーをもつが、5のように長くのびるタイプは少ない。天井部内面の使用痕は実測した12個体中、10個体に確認され、杯蓋Bに食物を盛る使用形態が普



第101図　米永古屋敷遺跡の食膳具組成

第２表　米永古屋敷遺跡産地別分類

器　　種	窯　群　跡	破　片　数	器種ごとの量比（%）	口縁部計測
杯　蓋　A	南加賀	32	100	3.389
杯　蓋　B	南加賀	117	99.4	8.528
	高松・押水	1	0.6	0.167
杯 A ・ B	南加賀	767	94.5	19.028
	能美	25	3	1.278
	羽咋	2	0.3	0.25
	高松・押水	18	2.2	0.722
甕　　類	南加賀	582	94.3	1.25
	能美	25	4.1	0.556
	高松・押水	1	0.2	0
	不明	9	1.4	0
瓶　　類	南加賀	127	98.5	1.139
	高松・押水	2	1.5	0
そ　の　他	南加賀	139	70.6	0.056
	不明	58	29.4	0
暗文土師器		5		0.111
赤彩土師器		113		1.583
会　　計		2,023		

遍的に認められる。[4] 坏Bは口径15～16cmを測り、坏蓋AIII、Bと対応する。形態から4タイプに分類できる。8は深身で台部は長く外展する台部が外側につく。体部は直線的にのびる。底部外面は回転ヘラケズリ調整。9は深身で体部中程で折れ、稜をなす点を除けば8に準ずる。3点中1点は回転ヘラケズリ調整を施さない。10はやや扁平で体部は丸味をもちながら外側に開く。やや長めで断面方形に近い台部が外側に外展気味につく。底部外面はナデ調整が大半である。11は底径が大きく、扁平である。断面方形の短い台部が外展気味につく。底部外面はナデ調整を施すのみである。量比的に少ない。

杯Aはバライティーに富み、7タイプに分類できる。12は箱形で古い形態をとり、全て有蓋である。口径11cm前後を測り、口縁部やや外反する。底部外面はナデ調整。13は平底で底部と体部の境が明瞭であるものを集めた。口径12cm前後を測り、底部外面はナデ調整を施す。重ね焼き痕から有蓋、無蓋の両者が存在する。なお、第85図5もこのタイプに含めたが体部内湾し、他のタイプとすることもできる。14、15は形態的に類似する。身が深く、平底で体部と底部の境は丸味をもつ。体部は直線的にのびる。底部外面は全てナデ調整。14で口径11～12cm、15で口径13～14cmを測る。重ね焼きは不明。16は扁平で新しい様相を呈する。3個体確認され、口径13～14cm、器高3～4cmを測る。杯のみの重ね焼きと考えられる。17は16に形態的に類似し、体部下半に丁寧な回転ヘラケズリ調整を施す。1点のみ確認され、口径約13cm、器高約3cmを測る。有蓋。22は全形は不明だが、底径から1タイプに分類した。次に椀Aは4タイプに分類できる。18は深身で底径が小さく、体部は内湾する。内面の体部と底部の境は円滑に仕上げる。底部外面は粗いナデ調整を施す。重ね焼き不明。19は1点のみ確認された。深身で体部中程で折れ稜をなす。坏Bのうち9のタイプと一脈通じるものがある。底部外面はナデ調整。有蓋と考えられる。20は体部内湾し、口縁部がやや外反する。口径11～12cmを測る。21は全形は不明だが、体部丸味をもち深身と考えられる。20とともに重ね焼きは不明。

椀Bは2個体のみ確認された（23）。口径約16cmを測り、口縁部やや外反する。有蓋と考えられる。台部の有無は不明。

他の器種としては高杯脚部が1個体、円面硯1個体が確認された。また40は甕口縁部に類似するが、破片下部が内屈し、盤となる可能性をもつ。

次に他の窯跡群産と考えられる供膳具について述べたい。能美窯跡群産は杯A（24～26）のみであり、全個体をあげた。24は深身で口縁部やや外反する。口径12.7cmを測る。25は扁平な印象を受け、体部は外反しながら外側に開く。26は体部直線的に開く。羽咋窯跡群産も杯Aのみである。扁平で平底を呈し、体部は直線的にのびる。口径14～15cmを測る。高松・押水窯跡群産は杯蓋（第93図13）、杯BI（28）や杯A（29）が確認された。杯蓋は扁平で口縁端部を下方につまみだす。杯BIは低い台部が外展し、体部は外側に開かないようだ。杯Aは平底を呈し、扁平な印象を受ける。羽咋窯跡群産杯Aとともに、南加賀窯跡群杯A中16のタイプに類似した形態をとる。

土師器供膳器は暗文の入った椀Aが1個体確認されている（32）。口径約10cmを測る精品である。赤彩土師器は破片数で113点を数え、供膳器全体の中で一定の割合を占める。須恵器杯Aを模したような杯A（34）、有蓋の可能性をもつ杯B？（35）、底部～体部下半まで回転ケズリ調整を

施した椀A（37～39）、扁平な盤A（36）に分類できる。他に比較できる資料が少なく、それ以上のことは省略したい。

以上のことから、出土遺物の特徴として①坏蓋Aの内面返りが退化し、鈕もやや崩れていること、②坏蓋A、Bの量比が破片数で約1：6、口縁部計測法で3：7となり、杯蓋Bが主体を占めること。③杯Bが深身で、長くのびる台部が外展してつくこと、④杯類に有蓋、無蓋が供伴し、椀形態も定量存在すること、④土師器供膳形態が定量認められること等があげられる。出土須恵器の大半を占める南加賀窯跡群の中では田嶋氏編年（以下略する）II_2期戸津六字ケ丘4号窯およびII_3期桃の木山1号窯I次床との対比が可能である。戸津六字ケ丘4号窯では杯蓋Aが主体で、杯Aもより古い様相を示すことから、本遺跡出土須恵器が新しい様相を呈する。また、桃の木山I次床とは杯蓋Bの7のタイプと形態的に類似するものの、全体としては桃の木山1号窯I次床に杯蓋Aが存在しないことや③の特徴から本遺跡出土須恵器がより古い様相を示す。すなわち、本遺跡出土須恵器は戸津六字ケ丘4号窯と桃の木山1号窯との間の過渡的な様相を示し、全体としてはII_2期に位置づけるのが妥当と考えられる。本遺跡からは少量しか出土しないものの、能美窯跡群中、II_2期に位置づけられる湯屋B－1号窯出土遺物と本遺跡出土遺物の形態が類似することもその傍証となろう。(5)

ただし、16や羽咋、高松・押水両窯跡群産杯A（29）はII_2期より新しい様相を示す一群であり、II_3期～III期前半の幅の中で考えられる。すなわち、竪穴住居趾の存続時期の大半がII_2期に位置づけられ、掘立柱建物に転換し、長くみてもIII期前半のうちに廃絶したといえよう。(6)

(2) 土師器甕・鍋類

本遺跡で煮沸具として使用された土師器甕・鍋類の出土は多数におよび、パンケース箱（59×37×13cm）6箱を数える。土師器甕は形態・調整等から、A類（古墳時代以来の形態・調整等をもつもの）、B類（須恵器技法を一部採用し、何らかの形で回転力を利用しているもの）、C類（ロクロによる成形・調整をおこなうもの）に分類できる。B類はA類とC類の折中的なものといえよう。

A類は口径から10～12cm、15cm前後、20cm前後に分けられ、また形態から球胴タイプ、長胴タイプ、深鉢タイプに分けられる。また調整は外面タテハケ、内面ヨコハケもしくはケズリを多様する。B類は口径から15cm前後、20cm前後、25cm前後に分けられ、A類より口径が大きい。調整等から①口縁部の成形に強い回転力を利用しヒダ状を呈するもの、②胴部等の調整にカキメを採用するもの、③口縁端部を平坦または上方につまみ上げるものに大別できる。なお、①類は胎土に砂粒を多く含み、赤橙色に固く焼き上げる特徴を有する。次にC類は量的に少ないが、口径13cm前後に限られ、口縁端部を面取りし、胴部上半にカキメを加える。1点のみ外面平行叩きによるものもある。

鍋類はA類が大半を占め、若干量B類が存在する。

北野氏等の研究(7)により、7世紀代の土師器甕は7世紀中頃に従来からのものに、何らかの須恵器技法を採用したロクロ甕が加わり、8世紀第1四半期にいわゆる「北陸型」ロクロ甕が登場することが明らかとなっている。また、須恵器工人の手によると考えられる定型化したロクロ土師

器の普及、定着には一定の時間的経過を必要とし、在地の土師器生産と須恵器工人による土師器生産が併存する状況が約1世紀にわたり続いている。その中で本遺跡出土遺物はA～C類でみるとおり、在来のものと須恵器技法を採用したものに加え、少数であるが定型化した北陸型ロクロ甕が存在する。この様相は松任平野では一般化できると思われ、同時期の北安田北遺跡や上二口A遺跡でも同様な様相を示す。須恵器技法の採用が田嶋氏が指摘[8]しているように「窯跡を軸として面的に広がるあり方ではなく、ブロック的分布」と示すとするなら、窯跡の存在しない松任平野で一早くその状況があらわれたようだ。同時期の小松市漆町遺跡サンバワリ地区を対比すればより明らかとなる。その理由としては、明言できないものの須恵器技法の採用のされ方が一様でなく[9]、バラエティーに富むことから、食器の須恵器化現象の進む中で土師器工人の一種の「須恵器技法へのあこがれ」から自然発生的に出てきたと場合もある予想することも可能であろう。今後、土師器の胎土分類による土師器集団の分類および採用の過程を通して少しでも検討できればと思っている。

註

(1) 能美窯跡群湯屋窯出土遺物を実現したところ、南加賀窯跡群の特徴と類以する胎土も定量存在する。胎土の肉眼観察による分類の1つの限界点といえ、今後蛍光X線分析等による補完が必要である。

(2) 分類時の感触からは坏Aが坏Bより、かなり多い量比を占める。

(3) 図化しなかったが口径約18cmの杯蓋AIIIが2破片確認されている。

(4) 『宿東山遺跡』(石川県立埋蔵文化財センター　1987)の中で、木立雅朗氏は須恵器杯蓋を身に転用せざるを得ないような須恵器食膳器の不足現象を把え、当該期の普遍的現象である可能性を指摘している。本遺跡出土須恵器の使用実態もその範中に入る現象といえる。しかし本遺跡では杯・椀Aが定量存在し、また杯蓋Aには使用痕がほとんど見られない。このことから北陸地域では当期の宮都の食器の構成を指向しながらも、須恵器＝食器という機能分化を果したが故に、本来土師器盤皿類で構成されるべき特定の器種の欠落がその不足により、いわゆる「一般集落」などで生じた可能性も指摘できよう。そして、須恵器窯で盤類が定量生産されるIII期までの期間、杯蓋Bを転用し、欠落する盤皿として使用する形態が普遍的に存在した可能性が考えられる。あくまで見通しではあるが、杯蓋Bの身への転用は食器の不足化現象を示すのみならず食器の須恵器化を果し、土師器食器が不足する生産体制を指向した北陸地域と畿内の食器構成の矛盾を解消する使用方法である可能性をもつと思われる。III期以降の杯蓋の使用実態やII期の法量分化の比較等の今後の検証が必要である。

(5) ただし、杯蓋A、Bの量比から本遺跡出土須恵器のほうが後出的な様相を示すと考えられる。

(6) 同時期の集落遺跡としては金沢市八日市B遺跡1号竪穴住居趾、小松市佐々木ノテウラ遺跡、松任市法仏遺跡、末松遺跡などが存在する。いずれの遺跡と対比しても赤彩土師器の量比が少なくなく、本遺跡3トレンチ1号住居趾にみるように赤彩土師器が確実に組成の一部を占めていたことは確実である。出土須恵器の大半を占めるII_2期は赤彩土師器の出現期とされ、本遺跡を単なる一般集落ではなく、律令的要素の強い集落遺跡と考える一つの傍証と考えている。

(7) 北野博司『佐々木ノテウラ遺跡』1986　石川県立埋蔵文化財センター

(8) 田嶋明人他「加賀・能登における古代手工業生産の様相」『北陸の古代手工業生産』1989　北陸古代手工業生産史研究会

(9) 土師器甕B類中①類は胎土、技法等に固有性をもち、松任平野の当期の集落遺跡から出土している。須恵器技法を採用した一つの生産集団であると考えられる。

調査区遠景

水路1調査区東側調査状況

図版2　宮丸遺跡その2

水路Ⅰ調査区下層完掘状況（東から）

水路Ⅰ調査区完掘状況（西から）

水路II調査区上層調査状況（西から）

水路II調査区下層調査状況（西から）

図版4　宮丸遺跡その4

道路調査区全景（南から）

道路調査区建物（東から）

2号竪穴

1号竪穴

1号竪穴と埋納ピット

埋納ピット遺物出土状況

埋納ピット遺物出土状況

埋納ピット銭出土状況

図版6　宮丸遺跡その6

17－3

17－1

19－14

13－9

19－13

18

13－10

14－14

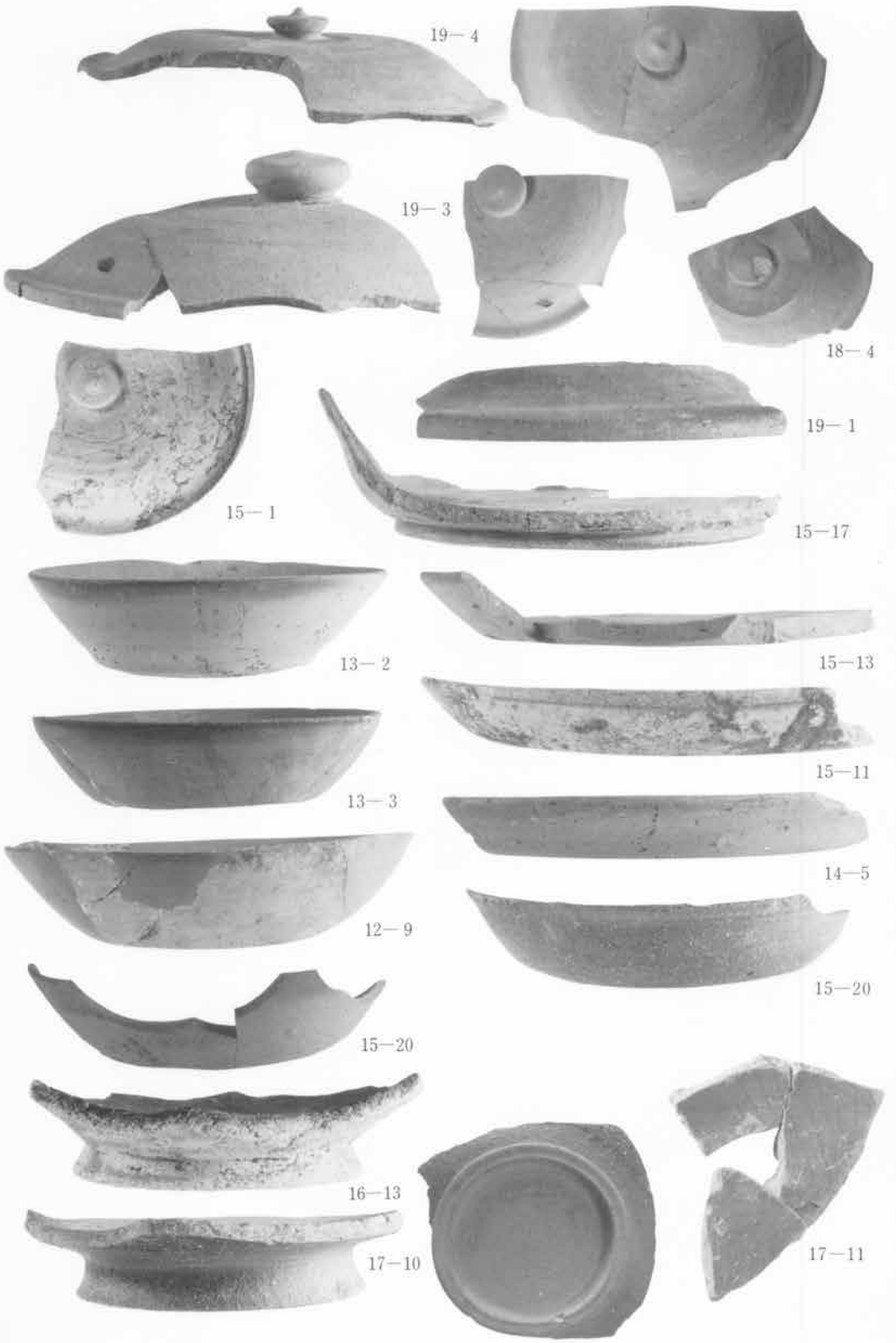
13－8

13－6

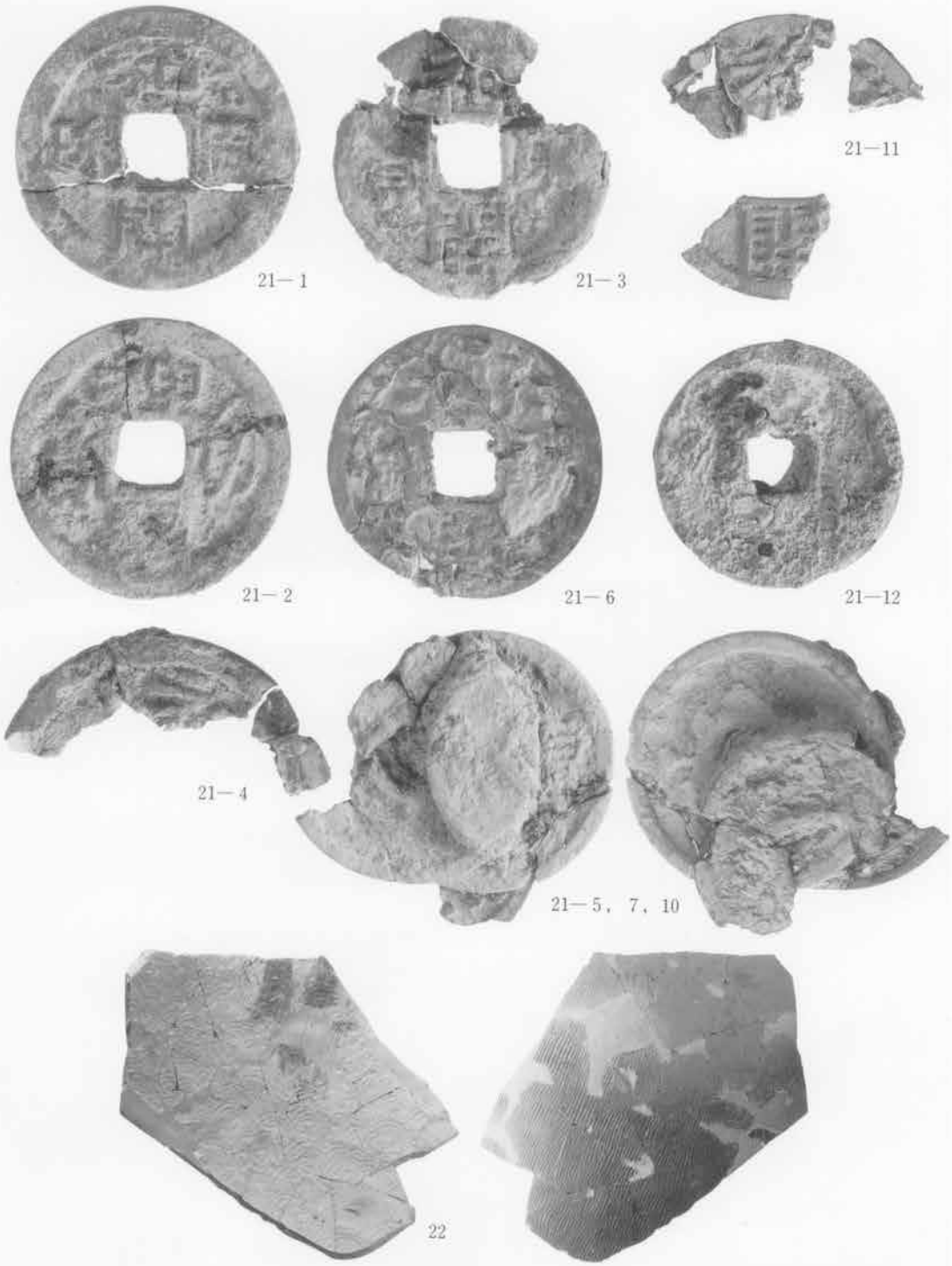
12－14

（縮尺不同）

図版7　宮丸遺跡その7



（縮尺不同）



埋納ピット出土銭貨須恵器

1トレンチ（西から）

1トレンチ（30m以西）

2トレンチ（115m以西）

図版9　村井北遺跡その1

図版10　村井北遺跡その2

4トレンチ（西から）

5トレンチ（西から）

2トレンチ（西から）

3トレンチ（東から）

作業状況（表土除去）

2トレンチ5号土坑

作業状況（振込・清掃）

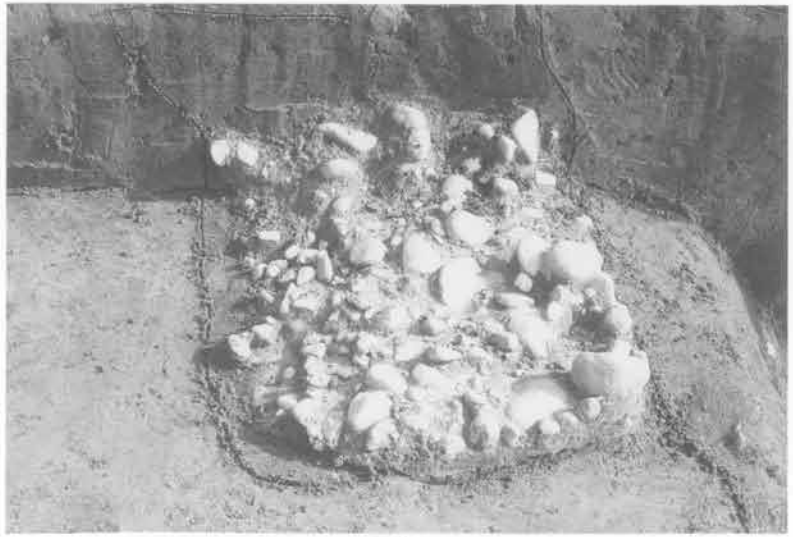
2トレンチ3号土坑

図版11　村井北遺跡その3

図版12　村井北遺跡その4

2トレンチ東端部

試掘トレンチ2



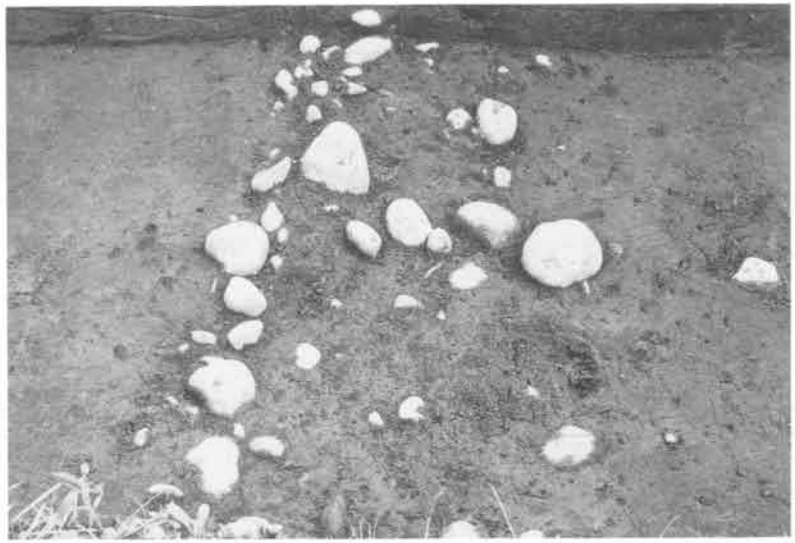
礫群2

礫群3

試掘トレンチ4水輪検出状況

2トレンチ11号溝石臼(33)出土状況

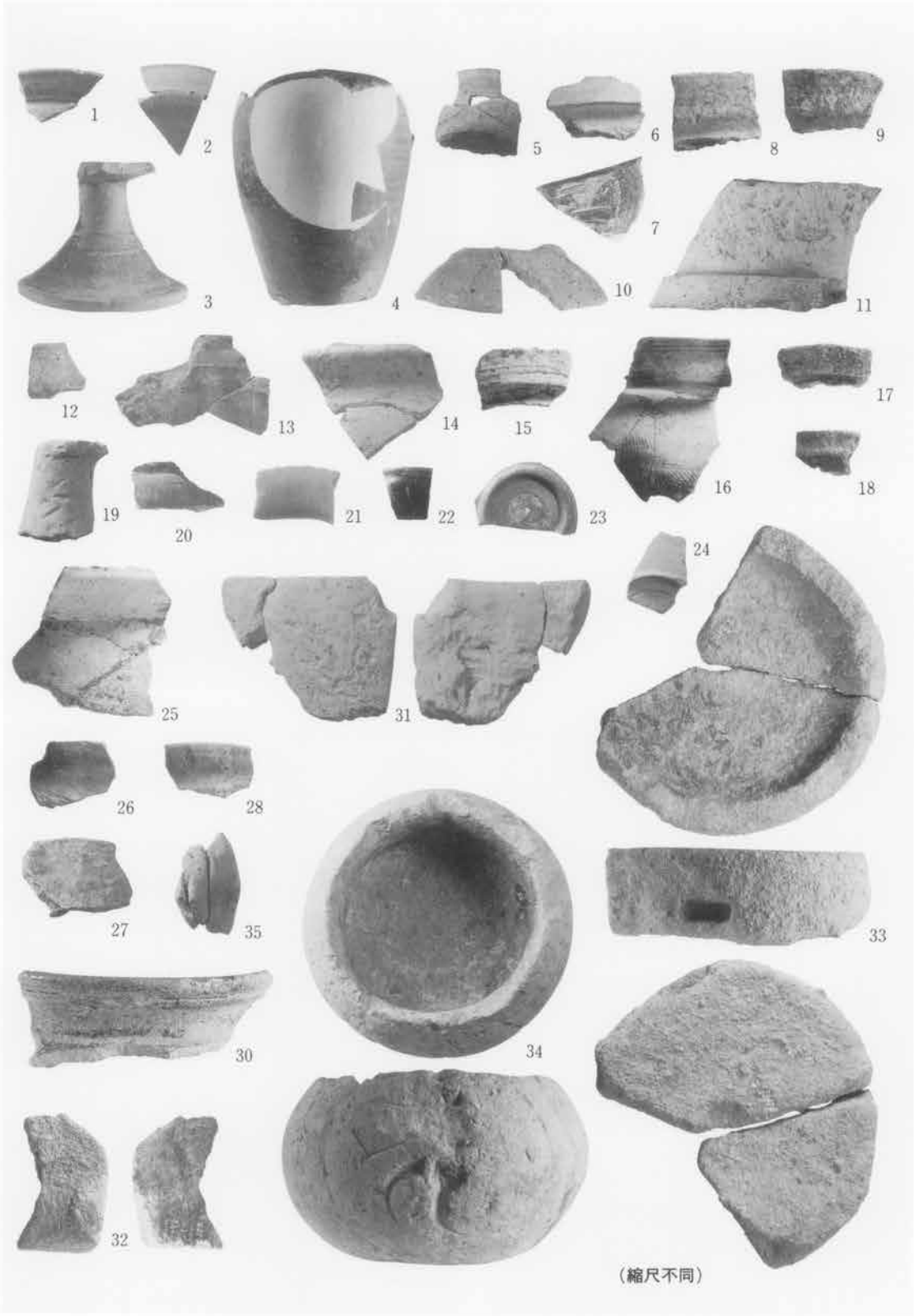
1トレンチ9号溝遺物出土状況



3トレンチ遺構検出状況

図版13　村井北遺跡その5

図版14　村井北遺跡その6



1区全体図（北から）

2区遺構検出状況（南から）

図版16　村井キヒダ遺跡その2

2区全体図（北から）

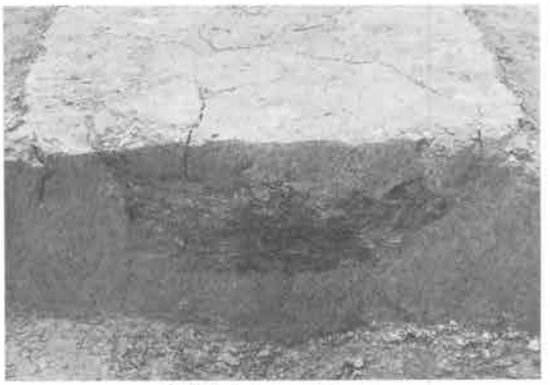
1区1号土坑（東から）

2区遺構検出状況（東から）

2区作業風景

2区1号土坑（南から）

2区2号土坑（南から）


2区7号土坑（北から）

2区8号土坑（北から）

2区9号土坑（東から）

2区1号石組状遺構（北から）

3区表土掘削状況

図版18　村井キヒダ遺跡その4

3区全体図（南から）

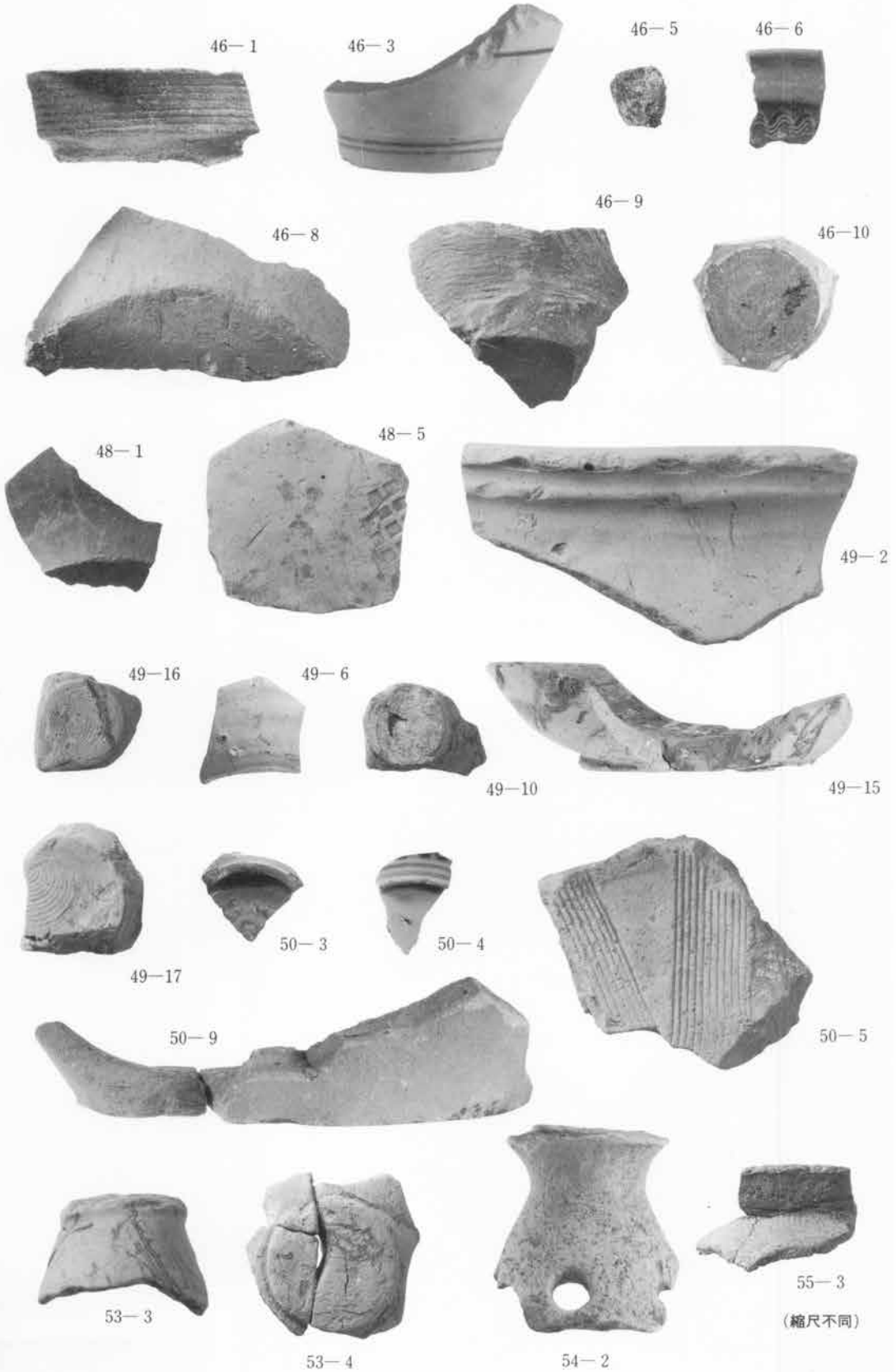
3区4号土坑（南から）

3区5号土坑（西から）

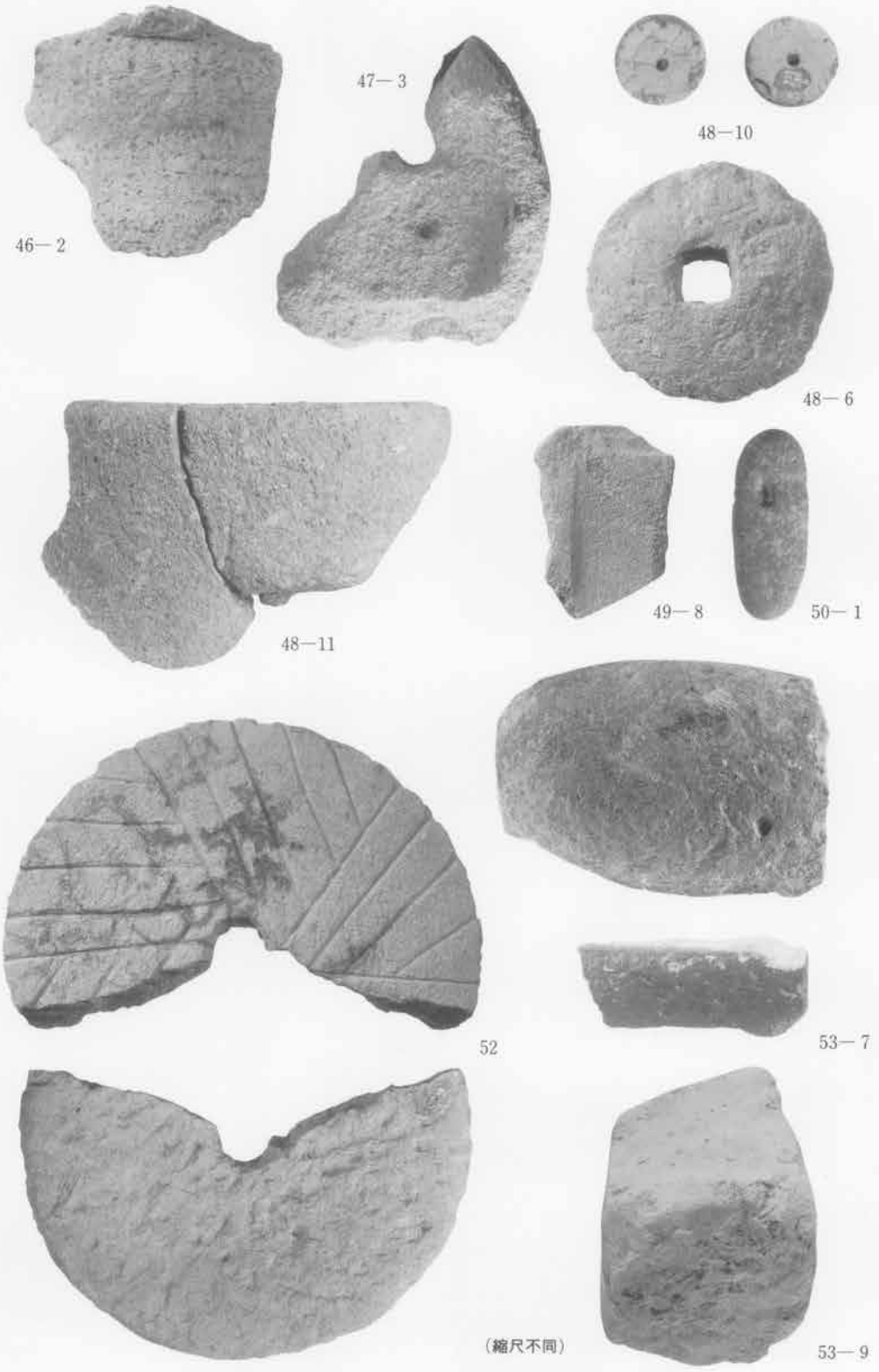
3区2号溝（南から）

8区1号溝（西から）

図版19　村井キヒダ遺跡その5



図版20　村井キヒダ遺跡その6



1～5区遠景（北から）

1区1トレンチ（東から）

1区2トレンチ（西から）

1区3トレンチ（東から）

2区トレンチ（東から）

3区トレンチ（東から）

図版22　北出遺跡その2

4区1トレンチ（北から）

4区2トレンチ（東から）

5区1トレンチ作業風景（西から）

同左　上面遺構検出状況（西から）

同上下面遺構完掘状況（東から）

同左　（東から）

5区2トレンチ
（東から）

同上（西から）

同上
溝状遺構周辺
（西から）

図版24　北出遺跡その4・米永古屋敷遺跡その1

北出遺跡

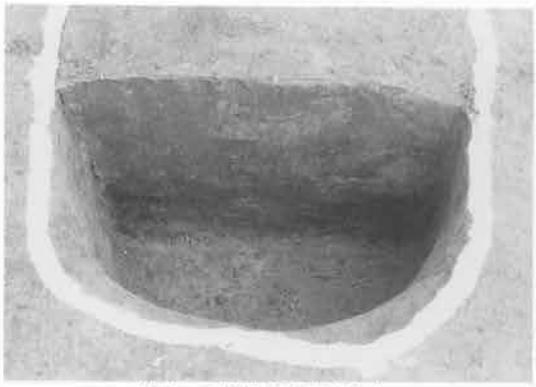
6区1トレンチ（南から）

6区2トレンチ（北から）

米永古屋敷遺跡

7区1トレンチ（南から）

同左　（北から）



同上　1号掘立柱建物柱穴
（南から）

7区2トレンチ（東から）

7区3トレンチ
（北から）

7区3トレンチ
1号竪穴住居趾
掘り下げ状況（北から）

7区3トレンチ
1，2号竪穴住居趾
（北から）

図版26　米永古屋敷遺跡その3

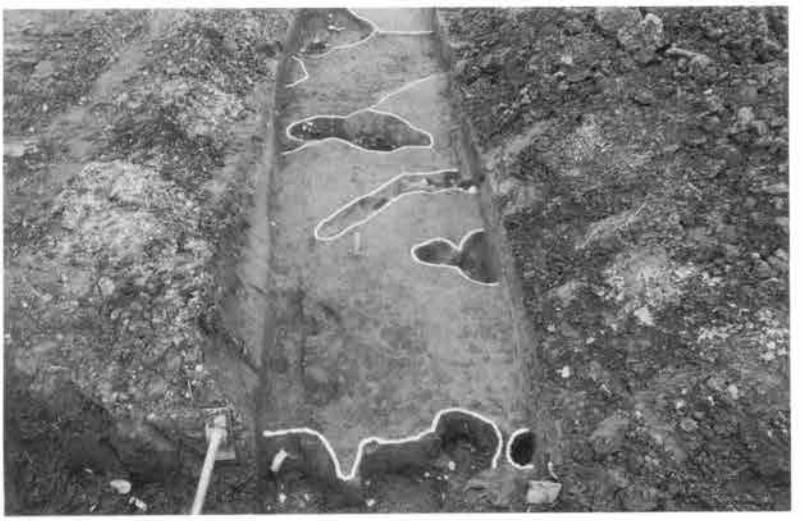
7区4トレンチ
（西から）

同　上
（東から）

同　上
1・2号竪穴住居趾付近
（西から）

7区4トレンチ
1～3号土坑（東から）

7区5トレンチ
（西から）

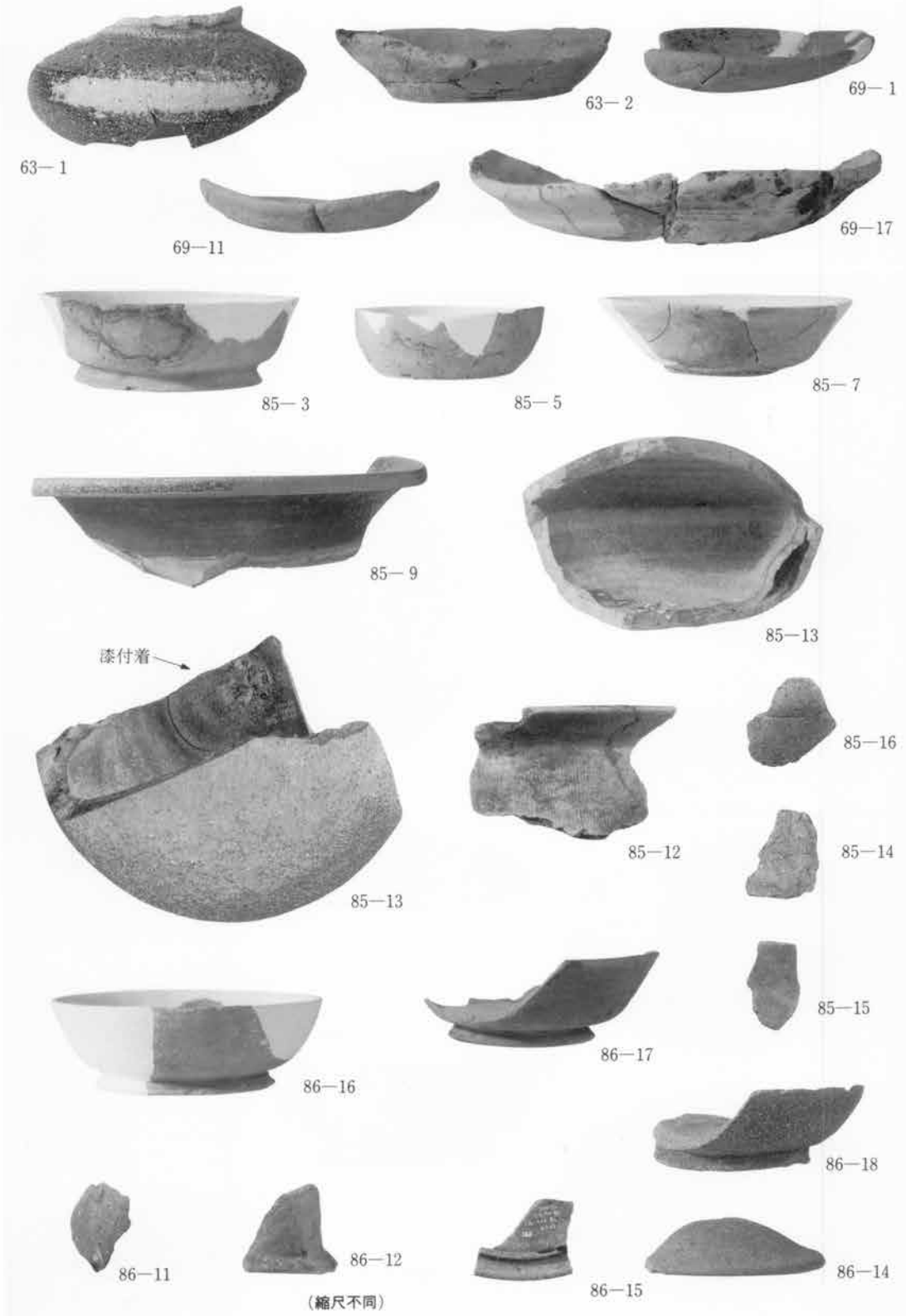


同　上
1、3号土坑付近（西から）

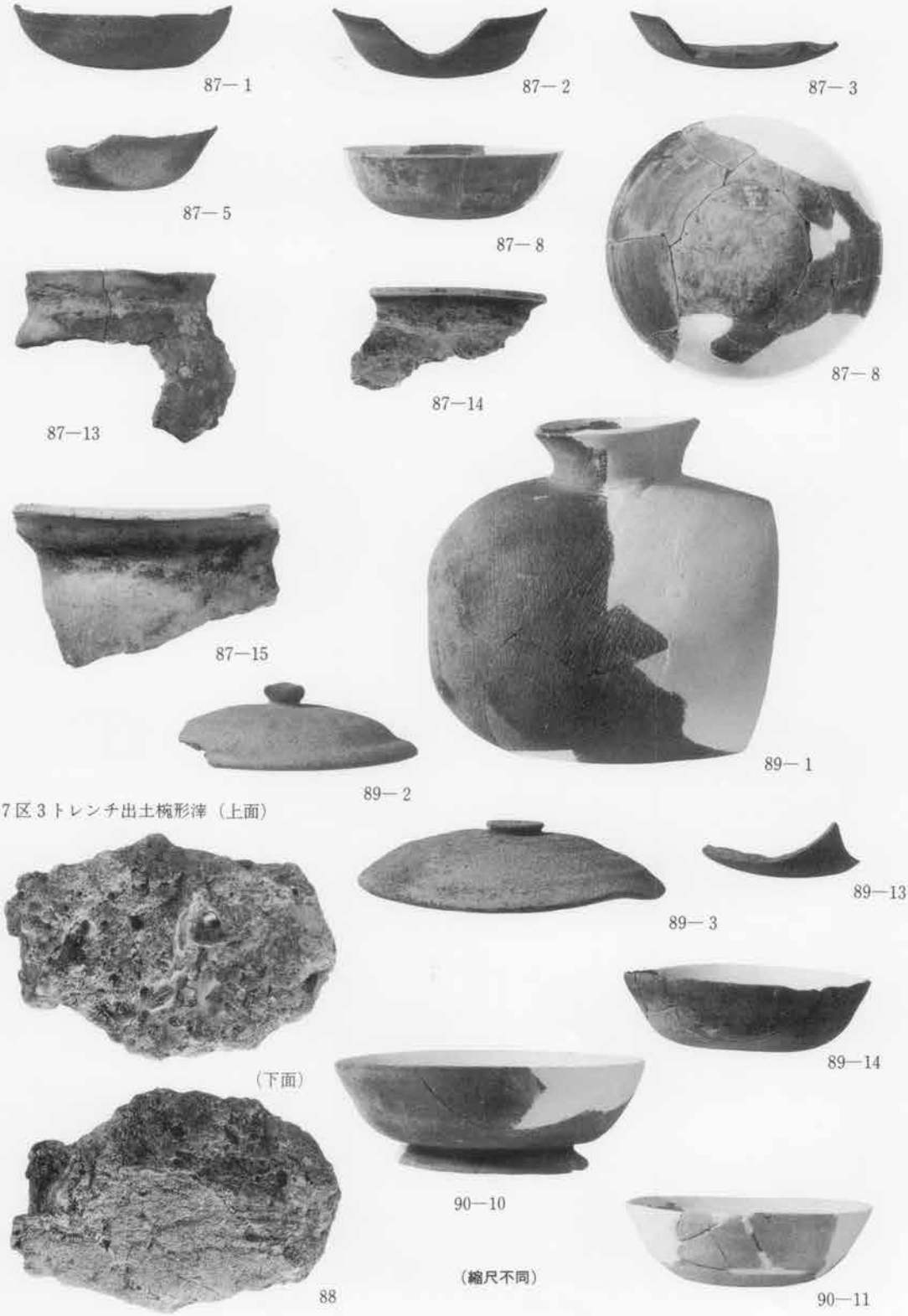
図版28　北出遺跡その5

（縮尺不同）

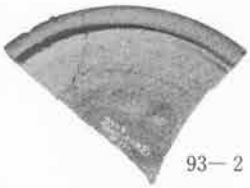
図版29　北出遺跡その6・米永古屋敷遺跡その5



（縮尺不同）


87－1
87－2
87－3
87－5
87－8
87－8
87－13
87－14
87－15
89－1
89－2
7区3トレンチ出土椀形滓（上面）
89－3
89－13
（下面）
89－14
90－10
88
（縮尺不同）
90－11

90—12


93—2

93—3

92—2

93—5

93—9

93—16

93—10

7区3トレンチ出土漆

94—1

94—4

93—8

94—10

94—8

94—13

94—14

93—14

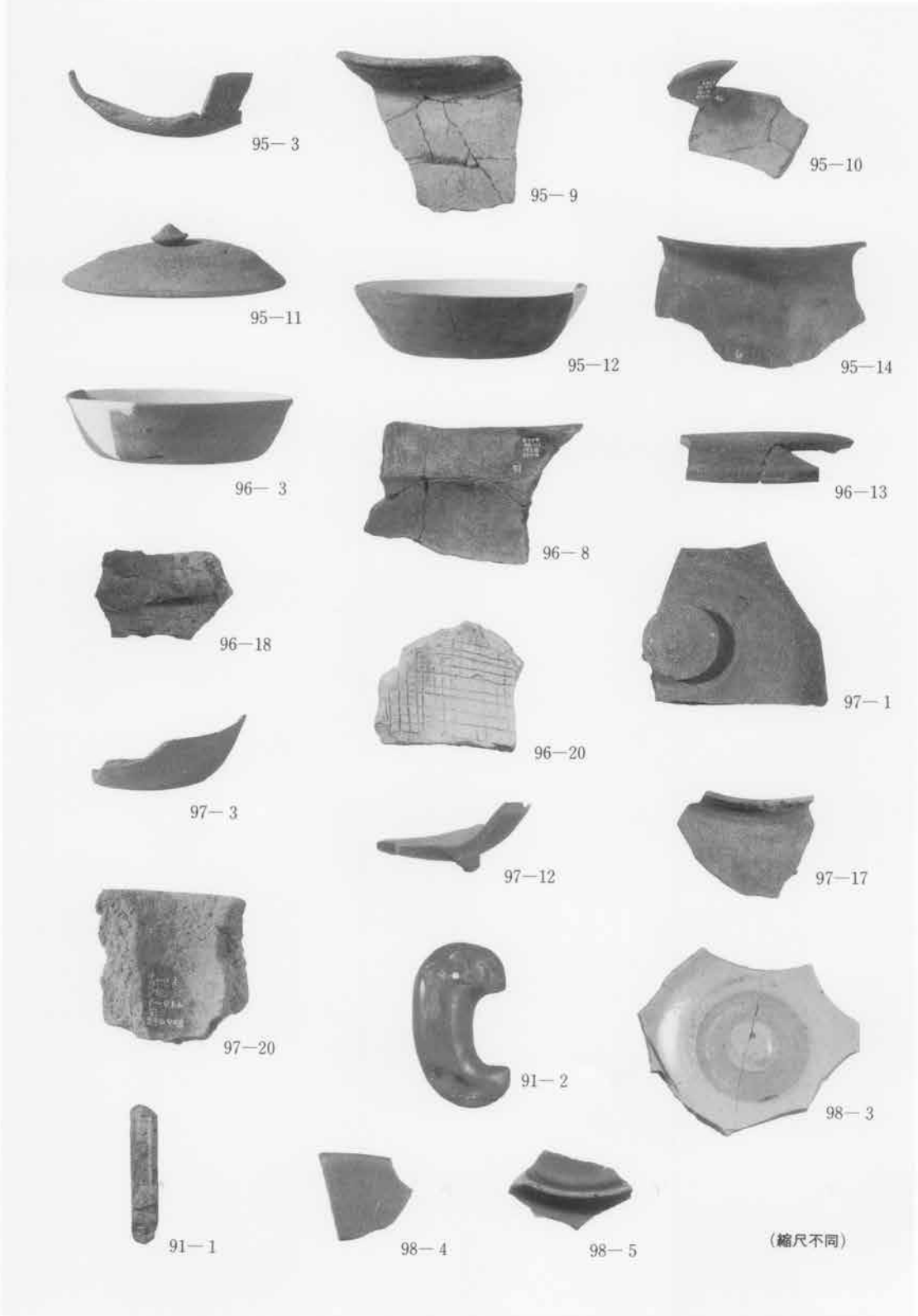
94—15

94—17

95—2

（縮尺不同）

図版32　米永古屋敷遺跡その8



宮丸遺跡・村井北遺跡・北出遺跡
村井キヒダ遺跡・米永古屋敷遺跡

平成3年3月20日　印刷
平成3年3月31日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印　　刷　株式会社　橋本確文堂
石川県金沢市大手町2－35